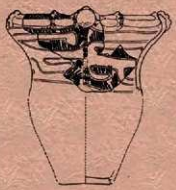
三重県埋蔵文化財調査報告　87－3

近畿自動車道（久居～勢和）

埋蔵文化財発掘調査報告

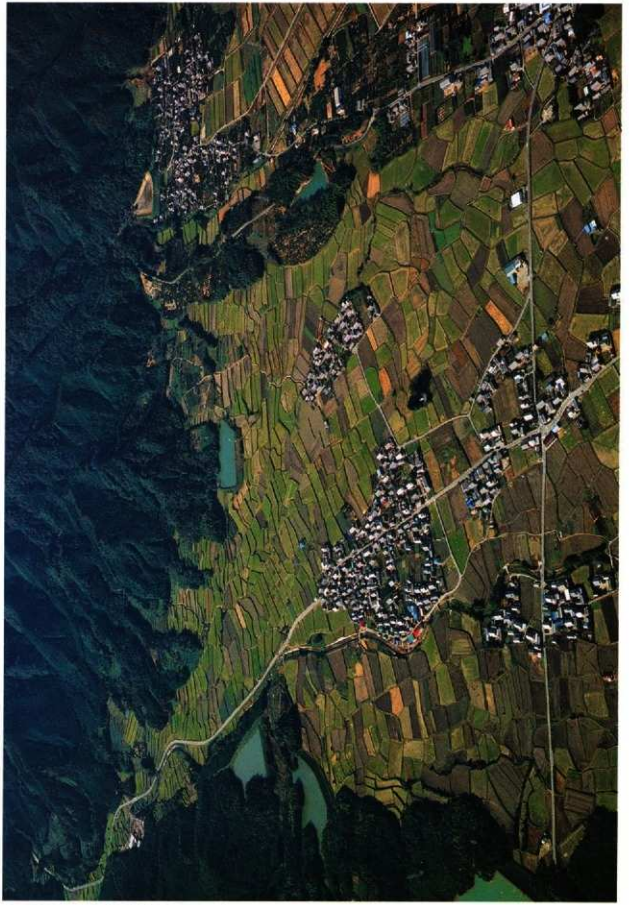
第 2 分 冊　1

新　田　遺　跡　　平　田　遺　跡
薮ノ下遺跡　　山　見　遺　跡
榎　長　遺　跡　　さんざい林遺跡



1990・3

三 重 県 教 育 委 員 会
三重県埋蔵文化財センター



藪ノ下遺跡～横長遺跡遠景（東上空から）

薮ノ下遺跡全景（南上空から）

榎長遺跡全景（北上空から）

薮ノ下遺跡出土縄文土器

榎長遺跡出土墨書土器

序

近畿自動車道関・伊勢線第８次区間（久居～勢和）建設予定地内にかかる現地発掘調査は昭和59年度から開始し、同63年度上半期に終了いたしました。遺跡の所在地は北から久居市、一志町、嬉野町、松阪市、多気町、勢和村の２市３町１村の行政区域にまたがります。遺跡件数にして計41遺跡、面積にして約15万㎡が試掘調査、あるいは本調査の対象となったわけです。

遺跡の種類としては、集落跡、墓跡、生産跡等多岐にわたり、また時代的にも旧石器時代から中近世（鎌倉・室町・江戸時代）に至るまでの各種各様の遺跡が発掘調査されました。その成果の一端は年度毎に刊行してきました発掘調査概報に紹介してきたところでありますが、63年度からは現地調査と並行して本格的な整理・報告書作成業務も開始してきました。そして、平成元年度には59・60年度に発掘調査した櫛田川流域に所在する花ノ木遺跡、牧瓦窯跡群など10遺跡の報告書（第１分冊）を刊行いたしました。

さて、今回は昭和60・61年度に発掘調査を実施した14遺跡の報告であります。そして、これらの遺跡はすべて松阪市内に所在し、その西部山麓部、あるいは裾野に立地しているものを集めました。また、時代的には縄文時代の土器を多量に出土した薮ノ下遺跡が資料的に注目され、古墳時代としては後期古墳群としての垣内田・天神山・平林古墳群が地域の古墳社会の展開を示す一資料として興味深い調査といえましょう。また、丘陵尾根全体をおおうように造営された横尾墳墓群は特に中世墓の在り方とその背景社会を解明しうるものとして、全国的にも脚光をあびたところであります。

いずれにいたしましても、ここに報告する各遺跡は各地域の歴史と文化を如実に物語る生き証人ともいえ、埋蔵文化財発掘という行為にかわる代償として公開という大きな使命と責務を負うものと考えています。

なお、調査・整理にあたっては多方面の方々から暖かいご援助なりご教示等をいただきました。いちいちお名前は記しませんが文末ながらここに深堪の謝意を表します。

平成２年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　中　林　昭　一

例　　言

1.　本書は三重県教育委員会が、日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した、近畿自動車道関・伊勢線第８次区間（久居～勢和）建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査のうち、昭和60年度および61年度に実施した松阪市西郊に所在する14遺跡についての発掘調査報告書（第２分冊）である。この第２分冊はさらに４冊に分冊され、本書は新田（しもた）遺跡ほか６遺跡が所収される第２分冊１である。

2.　調査にかかる費用は、日本道路公団の全額負担による。

3.　調査は三重県教育委員会が主体となり、同事務局文化課が担当した。また、報告書作成は三重県埋蔵文化財センターが担当した。

なお、報告書作成にあたっては、谷久保美知代、近藤豊美、大西友子、野崎栄子、脇葉輝美、孝久由希子、栄野妙子、山分孝子、吉村道子、白石みよ子、反町愛子、竹内由美、林かおり、田中智子の協力を得た。

4.　本書作成にかかる遺物整理および報文執筆について、下記の方々から指導、助言を賜わった。また磯部克、青木哲哉の両氏からは玉稿も賜わった。記して謝意を表する。（順不同、敬称略）

泉　　拓　良（奈良大学助教授）
玉　田　芳　英（奈良国立文化財研究所文部技官）
奥　　義　次（度会町教育委員会森添遺跡調査員）
磯　部　　克（三重県立津西高等学校教諭）
千　葉　　豊（京都大学埋蔵文化財研究センター助手）
青　木　哲　哉（立命館大学講師）

5.　本書の執筆分担は目次欄に記した。基本的には調査を担当した者が執筆したが、事情により、できなかった遺跡もある。それぞれ文末にも執筆者名を記した。遺物写真の撮影は田村が担当した。

6.　本書掲載の６遺跡については、すでに刊行済の『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』(1986)、『同Ⅲ』(1987)において調査概要を公表したが、それらと本書で記述に若干の相違があるが、本書をもって最終的な報告とする。

7.　本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8.　本書に使用した遺構表示記号は下記のとおりである。また遺構実測図作成にあたっては、日本道路公団の工事用杭（主として道路中心杭）を用い、調査担当者が測量を行い、国土座標を算出した。調査対象地域は第Ⅵ系に属する。方位の表示は座標北を用い、標高は道路公団工事用中心杭を基準とした。

ＳＢ	竪穴住居、掘立柱建物	ＳＤ	溝	ＳＸ	墓、その他性格不明遺構
ＳＫ	土坑	ＳＦ	焼土	ＳＡ	柵、塀	Ｐ	ピット

9.　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

序
例　　言
目　　次
図版目次
挿図目次
表　目　次

Ⅰ．前　　言
1．調査の経過 ……（田村　陽一）… 1
2．調査および整理の方法 ……（　〃　）… 1
3．調査の体制 ……（　〃　）… 1

Ⅱ．位置と環境 ……（田村　陽一）… 7

Ⅲ．調査報告
1．新田遺跡 ……（田村　陽一）… 13
2．薮ノ下遺跡 ……（　〃　）… 47
3．榎長遺跡 ……（河北　秀実）… 163
4．第一次調査遺跡 ……（田村　陽一）… 199

（付　　篇）
1．畑坂川・岩内川流域平野の地形環境 ……（青木　哲哉）… 207
2．松阪市西郊の地質と岩石 ……（磯部　　克）… 213

図 版 目 次

新 田 遺 跡

PL. 1 遺跡全景…… 31
〃 …… 31
PL. 2 遺跡遠景…… 32
調査前近景…… 32
PL. 3 調査後全景…… 33
〃 …… 33
PL. 4 SB1…… 34
SB1 カマド…… 34
PL. 5 SB2…… 35
PL. 6 SK5～7…… 36
SK4…… 36
PL. 7 SK5…… 37
SK6…… 37
PL. 8 出土遺物…… 38
PL. 9 〃 …… 39
PL. 10 〃 …… 40
PL. 11 〃 …… 41
PL. 12 〃 …… 42
PL. 13 出土縄文土器…… 43
PL. 14 〃 …… 44
PL. 15 〃 …… 45
PL. 16 出土石器…… 46
出土土器…… 46

藪 ノ 下 遺 跡

PL. 1 遺跡遠景…… 121
PL. 2 調査前近景…… 122
第1次調査トレンチ…… 122
PL. 3 調査後全景…… 123
調査風景…… 123
PL. 4 SK1…… 124
PL. 5 土器（223）出土状況 …… 125
土器（239）出土状況 …… 125
PL. 6 土器（94）出土状況…… 126
E区南壁断面…… 126
PL. 7 D区各壁面断面…… 127
PL. 8 SB2～4…… 128
PL. 9 SB5…… 129
SK6…… 129
PL. 10 SK7…… 130
D区上層遺構全景…… 130
PL. 11 D区上層遺構全景…… 131
調査風景…… 131
PL. 12 出土遺物（縄文土器）…… 132
PL. 13 〃 …… 133
PL. 14 〃 …… 134
PL. 15 〃 …… 135
PL. 16 〃 …… 136
PL. 17 〃 …… 137
PL. 18 〃 …… 138
PL. 19 〃 …… 139
PL. 20 〃 …… 140
PL. 21 〃 …… 141
PL. 22 〃 …… 142
PL. 23 〃 …… 143
PL. 24 〃 …… 144
PL. 25 〃 …… 145
PL. 26 〃 …… 146
PL. 27 〃 …… 147
PL. 28 〃 …… 148
PL. 29 〃 …… 149
PL. 30 〃 …… 150
PL. 31 〃 …… 151
PL. 32 〃 …… 152
PL. 33 〃 …… 153
PL. 34 〃 …… 154
PL. 35 〃 …… 155
PL. 36 〃 …… 156
PL. 37 〃 （弥生土器）…… 157
PL. 38 〃 （歴史時代）…… 158
PL. 39 〃 …… 159
PL. 40 〃 …… 160
PL. 41 〃 …… 161
PL. 42 〃 …… 162

榎 長 遺 跡

PL. 1 調査前遠景…… 181

調査前近景…… 181
PL. 2 発掘区全景…… 182
発掘区南西部…… 182
PL. 3 住居跡群…… 183
SB13～18…… 183
PL. 4 SB13・14・17…… 184
SB15・16・18・20・28…… 184
PL. 5 SB15・16・18・20・28…… 185
SB18～20・22～24・26～28…… 185
PL. 6 SB20・27…… 186
SB27・22・24…… 186
PL. 7 SB22～24・31…… 187
SB17…… 187
PL. 8 SB15…… 188
PL. 9 SB16…… 189
PL. 10 SB18…… 190
SB20…… 190
PL. 11 SB26…… 191
SB28…… 191
PL. 12 SB29…… 192
SK10…… 192
PL. 13 出土遺物…… 193
PL. 14 〃 …… 194
PL. 15 〃 …… 195
PL. 16 〃 …… 196

平田遺跡

PL. 1 遺跡遠景…… 200
遺跡近景…… 200

さんざい林遺跡

PL. 1 遺跡遠景…… 203
PL. 2 遺跡近景…… 204
調査風景…… 204

挿図目次

第1図 遺跡位置図…… 3
第2図 本書所収遺跡位置図…… 4
第3図 遺跡分布図…… 9

新田遺跡

第4図 遺跡地形図…… 13
第5図 発掘区位置図…… 14
第6図 発掘区地区割図…… 14
第7図 A地区遺構平面図…… 15
第8図 B地区遺構平面図…… 16
第9図 SB1実測図、出土遺物実測図…… 17
第10図 SB2実測図、出土遺物実測図…… 18
第11図 SK4、SK5実測図…… 19
第12図 SK6実測図、SK3、
SF8～10出土遺物実測図…… 20
第13図 縄文土器実測図・拓影…… 23
第14図 縄文土器実測図・拓影…… 25
第15図 縄文土器実測図・拓影…… 26
第16図 石器実測図…… 27
第17図 包含層出土遺物実測図…… 27
第18図 包含層出土遺物実測図…… 28

藪ノ下遺跡

第19図 遺跡地形図…… 47
第20図 発掘区位置図…… 48
第21図 発掘区地区割図…… 49
第22図 発掘区土層断面図…… 50
第23図 SK1実測図、出土遺物拓影…… 51
第24図 縄文時代遺構平面図…… 52
第25図 縄文土器拓影1…… 53
第26図 縄文土器（早期末）実測図…… 54
第27図 縄文土器拓影2…… 55
第28図 縄文土器拓影3…… 56
第29図 縄文土器拓影4…… 57
第30図 縄文土器（中期末）実測図…… 58
第31図 縄文土器拓影5…… 59
第32図 縄文土器161～171復元図…… 60
第33図 縄文土器拓影6…… 61
第34図 縄文土器拓影7…… 63
第35図 縄文土器拓影8…… 64
第36図 縄文土器拓影9…… 66
第37図 縄文土器拓影10…… 67
第38図 縄文土器拓影11…… 68
第39図 縄文土器拓影12…… 69
第40図 縄文土器拓影13…… 70
第41図 縄文土器拓影14…… 71

第42図　縄文土器拓影15…… 72
第43図　縄文土器拓影16…… 73
第44図　縄文土器拓影17…… 74
第45図　縄文土器拓影18…… 75
第46図　縄文土器拓影19…… 76
第47図　縄文土器拓影20…… 77
第48図　縄文土器拓影21…… 78
第49図　縄文土器拓影22…… 79
第50図　縄文土器拓影23…… 80
第51図　縄文土器拓影24…… 81
第52図　縄文土器拓影25…… 82
第53図　縄文土器拓影26…… 83
第54図　縄文土器拓影27…… 84
第55図　縄文土器実測図・拓影28…… 86
第56図　縄文土器実測図…… 87
第57図　縄文土器実測図…… 88
第58図　石鏃実測図…… 89
第59図　弥生土器実測図・拓影…… 90
第60図　歴史時代遺構実測図…… 92
第61図　ＳＢ２～５実測図…… 93
第62図　Ｄ地区遺構実測図…… 94
第63図　歴史時代遺物実測図…… 95
第64図　石製品実測図…… 96

榎　長　遺　跡

第65図　遺跡地形図…… 163
第66図　発掘区位置図…… 164
第67図　遺構平面図……165～166
第68図　主要遺構断面図…… 168
第69図　主要遺構実測図……169～170
第70図　出土遺物実測図…… 173
第71図　出土遺物実測図…… 174
第72図　出土遺物実測図・拓影…… 175
第73図　出土遺物実測図…… 177
第74図　出土遺物実測図…… 178

平　田　遺　跡

第75図　遺跡地形図…… 199
第76図　発掘区位置図…… 199

さんざい林遺跡

第77図　遺跡地形図…… 201
第78図　発掘区位置図…… 202
第79図　出土遺物実測図…… 202

表　目　次

第１表　遺構実測図、遺物実測図
　　整理番号一覧表…… 1
第２表　発掘調査遺跡一覧……5～6

新　田　遺　跡

第３表　包含層出土歴史時代遺物観察表…… 29

藪　ノ　下　遺　跡

第４表　出土遺物観察表１…… 100
第５表　〃　２…… 101
第６表　〃　３…… 102
第７表　〃　４…… 103
第８表　〃　５…… 104
第９表　〃　６…… 105
第10表　〃　７…… 106
第11表　〃　８…… 107
第12表　〃　９…… 108
第13表　〃　10…… 109
第14表　〃　11…… 110
第15表　〃　12…… 111
第16表　〃　13…… 112
第17表　〃　14…… 113
第18表　〃　15…… 114
第19表　〃　16…… 115
第20表　〃　17…… 116
第21表　〃　18…… 117
第22表　〃　19(弥生土器)…… 118
第23表　〃　20(歴史時代遺物)…… 119

榎　長　遺　跡

第24表　竪穴住居、掘立柱建物、柵列一覧…… 168
第25表　出土遺物整理番号対照表…… 180

Ⅰ．前　　言

1．調査の経過

昭和60年度および61年度の発掘調査は、主として松阪市内とくに市街地西方の丘陵地帯が中心となった。

60年度には櫛田川流域の牧瓦窯跡群、釈尊寺遺跡、上ノ広遺跡（第１分冊で報告済）の調査と、平田遺跡、山見遺跡、さんざい林遺跡の第１次調査、および新田遺跡、垣内田遺跡、復長遺跡、横尾墳墓群の本調査などを実施した。なかでも横尾墳墓群の調査は当初の段階では横穴式石室墳１基のみが対象とされていたものが、結果的には全国的な注目を集める大中世墓群の調査となった。

翌61年度には、多気町で残った牧７号窯と鍛形中世墓群（ともに第１分冊で報告済）の調査、そして、垣内田遺跡、藪ノ下遺跡、天神山古墳群、平林古墳群、坂東古墳、谷遺跡、構垣外遺跡、大河内城堀切の調査を実施し、多くの成果を収めた。

調査にあたっては日本道路公団松阪工事事務所をはじめ、県土木部近畿道対策室、地元の松阪市、多気町の各関係機関、地元自治会など各位より惜しみない援助を受けた。また現地発掘調査にあたっては三重県住宅供給公社よりひとかたならぬ力添えがあった。ともに記して心より感謝申し上げる。

2．調査および整理の方法

現地調査の方法については第一分冊を参照されたい。また資料整理も第一分冊に示した方法により実施したのでここでは略するが、各遺跡の遺構実測図と遺物実測図およびピックアップ遺物には第１表のように６ケタの番号を与えて整理した。

3．調査の体制

調査は三重県教育委員会が主体となり、同事務局文化課が担当した。

以下は昭和60・61年度の調査体制である。

昭和60年度

文化財第２係長	伊藤久嗣	総括
技　　師	吉水康夫	調整・協議、垣内田遺跡
主　　事	田阪　仁	横尾墳墓群
〃	田中喜久雄	牧瓦窯跡群

遺跡番号	遺跡名	遺構実測図	遺物実測図
15	平田	―――	―――
16	山見	―――	16－0001～0002
17	新田	17－0001～0014	17－0001～0315
19	藪ノ下	19－0001～0034	19－0001～0876
20	復長	20－0001～0053	20－0001～0233
23	さんざい林	―――	23－0001

第１表　遺構実測図、遺物実測図整理番号一覧表

主　　事	田村陽一	上ノ広遺跡ほか
〃	河北秀実	榎長遺跡ほか
〃	宮田勝功	横尾墳墓群
技　　師	野原宏司	新田遺跡ほか
臨時調査員	青木尚根	
〃	御村充生	
〃	沼田　茂	
室内整理員	谷久保美知代	
〃	近藤豊美	
〃	大西友子	
〃	野崎栄子	
調査補助員	伊藤裕偉（関西大学）	
〃	岩崎　靖（松阪大学）	
〃	田村　充（奈良大学）	
〃	半沢幹雄（　〃　）	
〃	出口正文（京都産業大学）	
〃	吉岡貴志（皇学館大学）	
〃	中瀬恵美（県立相可高校）	
〃	中瀬克之（　〃　）	

昭和61年度

文化財第２係長	伊藤久嗣	総括
技　　師	新田　洋	調整・協議、天神山古墳群ほか
主　　事	田中喜久雄	横尾墳墓群
〃	田村陽一	薮ノ下遺跡
〃	河北秀実	平林古墳群
〃	宮田勝功	大河内城堀切ほか
技　　師	野原宏司	嵜谷遺跡ほか
主　　事	野田修久	嵜谷遺跡ほか
臨時調査員	青木尚根	
〃	谷　伸治	
室内整理員	谷久保美知代	
〃	近藤豊美	
〃	大西友子	
〃	野崎栄子	
〃	山本紀子	

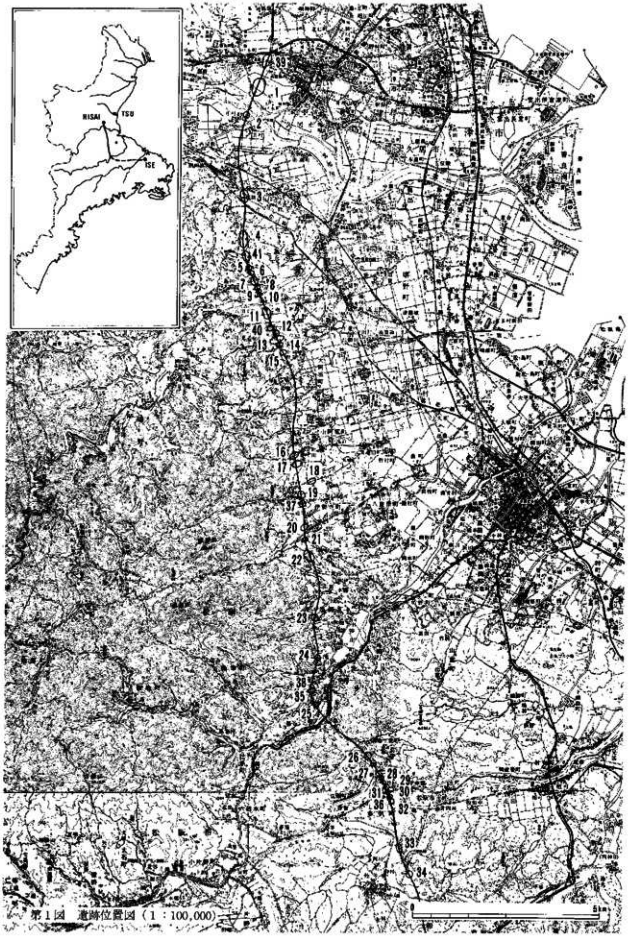
調査指導（昭和60・61年度、順不同、敬称略）

西村　康（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター発掘技術研究室長）
服部貞蔵（三重大学名誉教授）
広岡公夫（富山大学教授）
八賀　晋（三重大学教授）
水野正好（奈良大学教授）
森　郁夫（京都国立博物館考古室長）
藤沢一夫（四天王寺国際仏教大学名誉教授）
山中一郎（京都大学助教授）
泉　拓良（奈良大学助教授）
奥　義次（県立宇治山田高校教諭）
植野浩三（奈良大学助手）

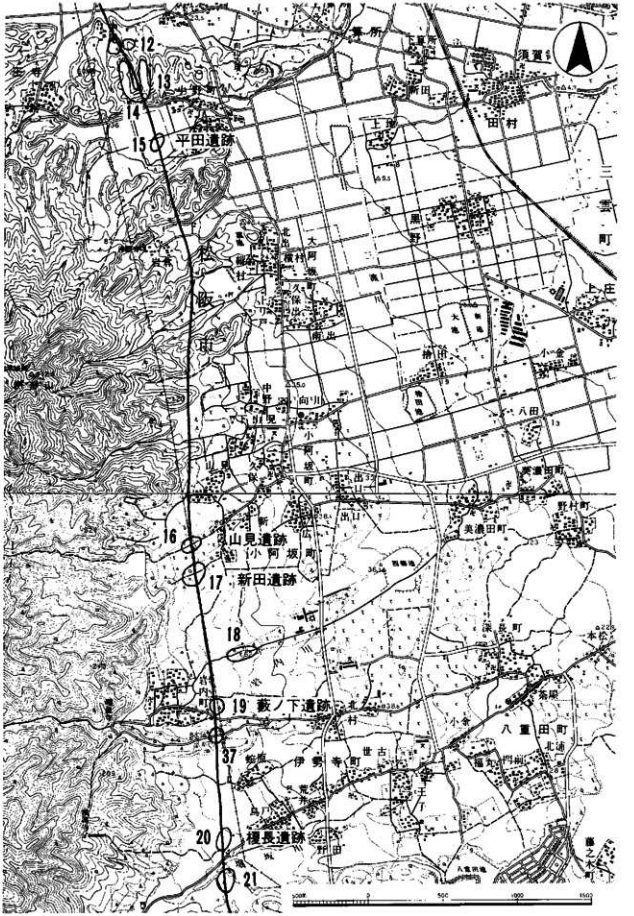
発掘調査土木工事部門担当

三重県住宅供給公社
堀内信吾
浜口安光
中田辰実
田中和美
下地　茂

（田村　陽一）



第1図　遺跡位置図（1：100,000）



第2図　本書所収遺跡位置図（1：25,000）

番号	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)		調査期間(元号は昭和)	担当者	概要
1	小戸木遺跡	久留市小戸木町	192 240	計 432	62. 3. 3～ 3. 5 62. 9.20～ 9.24	宮田 勝弥 木許 守 〃 (〃)	遺構・遺物なし(試掘)
2	庄村遺跡	一志町庄村		304	62. 9.14～ 9.20	新田 洋	遺構なし・遺物散乱(試掘)
3	島津本(八反田)遺跡	一志町小山、新沢田	8,900 2,640	11,540	62. 9.24～63. 3. 7 63. 5.16～ 7.27	宮田 勝弥 小坂 寛広 河北 秀実	弥生中期方形周溝墓など検出 角島時代の井戸検出
4	西野(天花寺)古墳群	嬉野町天花寺		3,400	62.11. 9～11.31 63. 5.16～ 9.28	新田 洋 新田 洋 山崎 恒成	(山林伐開) 石室・草墳石片出土、前期の古墳1基
5	幾野(口山田)古墳	嬉野町島田		2,010	62.7.11～ 9.30	山下 孫泰	古墳は墳要を伐による盛土と判明、石棺当日(試掘)
6	幾野(口山田)遺跡	嬉野町島田		3,500	62. 5.11～ 8.24	宮田 勝弥 新田 洋	弥生時代の住居跡など検出
7	天保(天保B)遺跡A・B区	嬉野町島田		7,200	62. 5. 7～ 9. 4	田村 陽一	平安時代の竪穴住居など検出
8	天保(一志西部)遺跡 C区	嬉野町島田		5,000	62. 5.18～ 6.30	増田 安生	奈良～平安時代の竪穴住居など検出
9	天保(天保館跡)遺跡 D区	嬉野町島田		3,800	62. 7. 1～ 8.12	増田 安生	〃
10	天保古墳群 (舟、天保遺跡E区)	嬉野町島田		5,390	62. 8. 5～63. 7.12	田村 陽一 野田 修久	7世紀中ごろの横穴石室墳など
11	制之内遺跡 A区	嬉野町制之内	1,450	14,250	62. 2.23～ 3.13	新田 洋	(個別部分の調査)
	A区	〃	2,200		62. 5. 6～ 7.16	河北 秀実	古墳～平安時代の竪穴遺跡など検出
	B区	〃	2,200		62. 7.23～10. 1	河北 秀実	古墳～平安時代の溝など検出
	C区	嬉野町乗王寺	5,400		62. 9. 1～63. 3.19	増田 安生	弥生後期竪穴、平安の掘立など検出
	D区	〃	700		62.10.25～11.20	木許 守	古式土師器出土、ヤナ状遺構検出
	C区下層	〃	1,900		63. 5.18～ 8.13	田村 陽一	縄文中・後・晩期の土器多数出土
			400		62. 5.20、6.29～ 7.22	河北 秀実	(調査区南端、北端部の試掘)
12	中尾遺跡	嬉野町乗王寺	93 507	600	62. 3. 4 62. 5. 6～ 6. 5	河北 秀実 河北 秀実	(試掘) 掘立柱建物3棟検出
13	ビハノ谷古墳群	嬉野町乗工寺	1,000 12,000	13,000	62. 3. 2～ 3.30 62. 5.19～ 8.12	野原 宏司 野田 修久 木許 守	(山林伐開、表土盛土) 古式土師器出土、後期古墳1基
14	女牛谷古墳群	松阪市小野町 嬉野町乗王寺	4,031 3,140	7,171	61.12.15～62. 2.21 62. 5. 7～ 7.11	野原 宏司 木許 守 野田 修久 山下 孫泰	(山林伐開、第1次調査) 古式土師器出土 後期古墳4基
15	平田遺跡	松阪市小野町		228	61. 2.18～ 2.24	田村 陽一	遺構なし、遺物微量(試掘)
16	山足(下山見)遺跡	松阪市小阿坂町		224	60.11.12～11.20	野原 宏司	遺構なし、遺物微量(試掘)
17	新田遺跡	松阪市小阿坂町	288 4,400	4,688	60.11.15～11.25 60.12.27～61. 3.25	野原 宏司 野原 宏司	(試掘) 縄文後期土器出土
18	垣内田遺跡 (垣内田古墳群)	松阪岩内町	428 5,500 600	6,528	60.11.26～12.12 60.12.27～61. 3.25 61. 6.30～ 7.30	野原 宏司 吉水 康夫 野田 修久	(試掘) 横穴式石室墳を主体とする古墳群
19	板ノ下(岡崎古墳群)遺跡	松阪市岩内町	1,100 1,400	2,500	61. 3. 1～ 3.25 61. 6.30～10. 3	田村 陽一 田村 陽一	(試掘) 良好な資料となる縄文後期土器多数出土
20	櫻長遺跡	松阪市伊勢寺町	304 2,404	2,708	60.10.18～10.24 60.11.26～61. 3.18	田村 陽一 河北 秀実	(試掘) 奈良～平安時代の竪穴住居検出

第2表　発掘調査遺跡一覧（太ゴッチクは本書所収遺跡）

番号	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)		調査期間(元号は昭和)	担当者	概要
21	平林古墳群	松阪市伊勢寺町		計 4,021	61. 6. 9～10. 3	新田 洋 河北 秀実	心室を主体とする古墳群
22	横尾（西野）須恵器群	松阪市伊勢寺町、岡山町	5,500 2,500	8,000	60. 7. 1～61. 2. 27 61. 5.31～12. 5	田坂 仁 河田 勝功 田中喜久雄 宮田 勝功	心室を主体とする古墳群 500基に及ぶ中世墓群 後期小型円墳（横穴式石室）2基 後期小型方墳（木棺）2基
23	さんざいい林遺跡	松阪市西野町		176	60.10.25～10.26	田村 陽一	（試掘）
24	妙楽（大河内5号）古墳	松阪市笠川町		180	61. 7.23～ 8.19	野田 修久	中世土器片散布。古墳にあらず（試掘）
25	大河内城堀切	松阪市大河内町		600	62. 1. 5～ 2.25	宮田 勝功	中世北畠氏の平山城大河内城の堀切
26	上ノ広（森下松西方）遺跡	松阪市広瀬町	224 1,136	1,360	60. 3.22～60. 3.31 60. 7. 1～60.10.14	上村 安生 田坂 仁 宮田 勝功 田村 陽一 野原 宏司	（試掘） 先土器末～縄文時代の石器多数出土
27	大草屋（大草瑞南方）遺跡	松阪市広瀬町		114	60.10.28～60.10.31	田村 陽一	遺構、遺物散漫（試掘）
28	花ノ木（山崎）遺跡	多気町牧	52 5,800	5,852	59.12.10 60. 1.28～60. 3.26	田村 陽一 杉谷 政樹 羽村 陽一 杉谷 政樹	（試掘） 弥生時代中期竪穴住居、方形周溝墓など検出
29	浅間山北遺跡	多気町牧	44 1,000	1,044	59.12.10 60. 1.28～60. 2.23	森見 宗雄 田村 陽一 田坂 仁	（試掘） 土師器細片、天目茶碗片出土
30	浅間山南遺跡	多気町牧		470	60. 3.25～60. 3.31	西藤 信幸 田村 陽一	遺構なし。遺物散漫（弥生前期土器）（試掘）
31	牧瓦窯群　1・2・3号窯 4・5・6・8号窯 7号窯	多気町牧 多気町・飯形 多気町・飯形	960 200	1,160	60. 7. 1～60.10.31 60.11.30～61. 3.25 61. 6. 9～61. 8.15	田中喜久雄 河北 秀実 田中喜久雄 野原 宏司	奈良時代の瓦専用窯 1号……平窯 2～8号…登窯
32	釈尊寺（中牧）遺跡	多気町飯形	144 1,000	1,144	60.11. 1～60.11.12 60.12. 5～61. 2.28	田村 陽一 田村 陽一	（試掘） 掘立柱建物検出、中世土器出土
33	下村A遺跡	勢和村丹生	88 7,500	7,588	59.12. 6～12. 8 60. 1.28～ 3.28	増田 安生 杉谷 政樹 吉本 康夫 岡藤 信幸 上村 安生	（試掘） 石器・石鏃・山茶碗・瓦器片等出土
34	下村B遺跡	勢和村丹生		44	59.12. 8～12. 9	増田 安生 杉谷 政樹	遺構・遺物なし（試掘）
35	峯谷遺跡	松阪市矢津町	740 4,700	5,440	61. 2.27～ 3.25 61. 8.20～62. 3.18	田坂 仁 野原 宏司 野田 修久	（試掘） 古墳等など検出。寺（養勝寺）跡の伝承に裏づけ。
36	飯形（牧）中世墓群	多気町飯形		520	61. 7. 1～ 9. 6	野原 宏司	石室の中世墓13基検出
37	天神山古墳群	松阪市伊勢寺町、岡内町		1,750	61. 9.20～11. 4	新田 洋	横穴式石室墳主体の古墳群
38	樋垣外遺跡	松阪市矢津町		1,676	61. 9. 1～10.18	野原 宏司 野田 修久	鎌倉時代の掘立柱建物など検出
39	久保屋敷（戸木）遺跡	久居市戸木町		12,000	62. 9. 1～63. 3.31	山下 雅春 田中喜久雄	中世後半掘立柱建物、井戸、上師決定構造など検出
40	ビハノ谷遺跡	嬉野町薬王寺		1,600	63. 4.11～ 5.11	小坂 宜示	古墳時代竪穴住居、鎌倉時代掘立柱建物検出
41	西野遺跡 北広遺跡	嬉野町天花寺 嬉野町天花寺		2,473	63. 7.12～ 8. 3	野田 修久	古式土師器片出土（試掘） サヌカイト製尖頭器片出土（試掘）

※調査総面積は151，715㎡、ただし本調査面積に試掘面積が重複する遺跡あり。

II. 位置と環境

近世城下町として成立した松阪(坂)は、三重県のほぼ中央部に位置し、人口約11万人を擁する南勢地方の中核都市として、近年とみに都市機能を充実させてきている。

北から鈴鹿、布引、高見、三峰などと呼ばれる山地、山脈に源を発した諸河川は伊勢湾に注ぎ、西岸に南北に連続的につながる肥沃な沖積平野を形成した。この南北に細長く広がる伊勢平野は、松阪市域において幅約7kmを有し、優秀な穀倉地帯となっている。

標高約38mの独立丘陵に築かれた松阪城跡に立って西方を望むと、標高約600～800mの山々が南北に連なり、その山麓になだらかな傾斜の丘陵地や扇状地が広がっているのがわかる。

堀坂山(757.4m)や観音岳(605.9m)などの花崗閃緑岩や黒雲母花崗岩から成る一志山塊から伊勢平野に流れ出た堀坂川、岩内川、三渡川の三川は、急速に侵食、運搬力を弱める一方、河道も自由に変えることができるようになり、おもに北東方向へ乱流を繰り返しながら多量の土砂を堆積させた。このようにして広大な複合扇状地が形成されたが、現在では開析が進み河道は固定している。

この複合扇状地は南北約4.5km、東西約3.7kmほどの広がりを有する。なかでも堀坂川の形成した扇状地は最大の規模を有し、およそ21‰の緩傾斜地が広がっている。現在は水田、桑畑、普通畑として広く利用されている。

ところで、この扇状地地域は古くから開発が進んでいたと考えられる。先史時代から古代にいたる遺跡の分布だけをみても、この地域の先進性は想像に難くない。近年は本報告書の調査原因ともなった近畿自動車道の建設や、大規模な圃場整備事業の進展、大型住宅団地の開発など、各種開発の波が急激に押し寄せ、当地域はまさに発掘ラッシュであった。

以下にその成果も含めて、遺跡分布の面から歴史的環境について概観してみたい。

旧石器時代

県内ではナイフ形石器以前の時期の遺跡は、現在のところ確認されていない。ナイフ形石器の時期になると、県内で、97カ所の遺跡の分布が知られている。当地域の周辺では長庄野遺跡(1)、上出遺跡(2)で採集されているほか、せぎ遺跡(3)に類似例がある。これらの遺跡での出土量はごくわずかで、移動生活の過程で営まれたキャンプサイト的な性格のものであろう。

続く細石刃文化の遺跡は県内でも激減し、当地域周辺でも未確認である。このような状況から扇状地地域でも空白の状態であったが、本報告(第2分冊2)で報告されるように、垣内田遺跡(4)において木葉形尖頭器や縦長剝片が出土したことが特筆されよう。西方の一志山塊から東へ派生する低丘陵の南斜面で一定の生活が営まれたものであろう。

その他、さんざい林遺跡(5)でも、末期から縄文時代初頭の頃と思われるようなサヌカイト製の大型搔器が出土している。

また終末期から縄文時代初頭にかけての標式石器に有舌尖頭器がある。県内85カ所の出土が知られているが、当扇状地地域では未確認、周辺地域では塚本遺跡(6)、焼野遺跡(7)で出土している。

縄文時代

気候の温暖化にともない、現在の日本列島の動物相や植生がほぼできあがるのが縄文時代である。土器や弓矢が発明され、生活は飛躍的に安定化する。次第に定住化が始まり、前期になると定住集落も成立してくる。狩猟、採集に加えて漁労もこの時期から生業の重要な一部となった。

この時代の様相も、県内においてはあまりよくわかっていない。しかし最近の発掘調査で縄文時代の遺構・遺物も検出されるケースが増加してきており、徐々にではあるが縄文時代相が解明されつつある。

当地域においても同様で、伊勢寺遺跡(8)、新田遺跡(9)、横尾墳墓群(10)で早期の押型文土器片が微量出土している。早期末～前期初頭の条痕文土器も殿ノ下遺跡(11)、新田遺跡(9)で出

土している。その他、出土石器の傾向から早期～前期頃と考えられるのに平林遺跡（12）がある。

前期の遺跡には新田町遺跡（13）がある。この遺跡は阪内川右岸の段高地（自然堤防）に立地している。標高は約17mで、沖積平野面との比高は１mに満たない。また近くの笠松遺跡（14）や池田遺跡（15）、貝造遺跡（16）も同様な地形に立地しており、前期から中期にかけて、この地域で縄文人が低地に進出したことを示している。

扇状地地域では藪ノ下遺跡（11）で微量出土した以外には確認されていない。

中期前半の遺物を出土する遺跡は少ないが、藪ノ下遺跡（11）、新田遺跡（９）で若干の遺物が出土したほか、迫上遺跡（17）で里木Ⅱ式期の円形竪穴住居跡１棟が検出された。

中期後半とくに末期になると少量の土器片を出土する遺跡が多く出現する。堀坂川の扇状地扇頂付近の榎長遺跡（18）、鳥戸遺跡（19）や扇央部の伊勢寺遺跡（８）、扇端部の堂之後遺跡（20）で中期末～後期初頭の土器が出土しており、この時期には扇状地一帯が縄文人の活動の場となっていたことを物語っている。このほか藪ノ下遺跡（11）、新田遺跡（９）、分れ谷遺跡（21）などで出土例がある。

後期の遺跡では初頭の中津式土器が多量に出土した藪ノ下遺跡（11）が特筆される。この遺跡は岩内川の扇状地扇頂部に立地し、早期末から縄文時代のほぼ全期間を通じて断続的に生活が営まれた遺跡として重要である。その内容については本報告にて明らかにする。そして若干の空白期間を経て後期中頃まで新田遺跡（９）が盛期を迎える。これも本報告で明らかにする。

その他、堂之後遺跡（20）でも後期の土器がまとまって出土している。

晩期の遺跡は現在のところ良好な遺跡は確認されていない。藪ノ下遺跡（11）、新田遺跡（９）、垣内田遺跡（４）、杉垣内遺跡（22）、曲遺跡（23）などに微量の出土例がある。

弥生時代

大陸から伝来した稲作農耕が、旧石器時代より営々と続いてきた狩猟、採集経済にとって変ろうとする大変革の時期である。当地域の弥生時代相も前代の縄文時代と同様に、よく判っていないのが実情である。

遠賀川式土器に象徴される前期の段階の遺跡も、今のところ拠点的な集落は確認されていないが、該期の遺跡として上出遺跡（２）、分れ谷遺跡（21）、那智山遺跡（24）、御殿山遺跡（25）などがある。阪内川と金剛川とに挟まれた小丘陵や開析谷が複雑に入り組む地域に分布がみられ、沖積地を見おろす低い台地上に小規模な集落が営まれ、稲作が開始されたものと考えられる。

扇状地地域では扇端部の曲遺跡（23）でわずかの土器が、また扇頂部の藪ノ下遺跡（11）でも微量の前期、中期の土器が出土しており、水利の便の良好な地域で小規模な集落が立地していたものと考えられる。

中期前半には分れ谷遺跡（21）、上出遺跡（２）、川井町遺跡（26）、鍋屋分遺跡（27）などがある。中期中葉から後半になると扇状地端部の湧水地付近にも集落が立地するようになる。堂ノ後遺跡（20）、田高田遺跡（28）、城垣外遺跡（29）などである。これ以降、この地域は急速に開発されていったと考えられる。中期としてはその他に蛸遺跡（30）、中世古遺跡（31）、蒲草崎遺跡（32）などがある。

後期になると遺跡数も増加し、立地や分布範囲も広がりをみせる。川井町遺跡（26）、内五曲遺跡（33）、松阪城跡（34）、草山遺跡（35）など近距離に大規模な遺跡が分布し、稲作を基盤とした安定した集落が営まれたことを示している。この頃にはすでに可耕地が扇状地扇端部付近まで、ほとんど連続していたものと考えられ、高い生産力をもつ地域であったと考えられる。これがために次の古墳時代の当地域の発展へとつながるのである。

また、沖積平野面との比高50mの丘陵頂部平坦部に立地する川原表遺跡（36）は、いわゆる高地性集落ともからみ注目される。

古墳時代

第２分冊２に詳述されるのでここでは概略を述べるにとどめる。

当地域は南勢地方において、一志郡嬉野町の中村川流域、多気郡多気町から明和町の櫛田川右岸地域とともに、ひとつの大きな古墳地帯を形成している。

第3図　遺跡分布図（1：50,000）

当地域および周辺での古墳の築造は前Ⅱ期[②]（4世紀後半）に始まる。松阪市北部の嬉野町との境界に、全長75mの前方後方墳である向山古墳（37）が造られるのである。そして、北から小野町（向山古墳など）、八重田町（八重田1・8号墳など）、清生・垣鼻町（茶臼山古墳など）、下村・上川町（坊山1号墳、高田2号墳など）の丘陵地や段丘面に首長墓クラスの古墳が造られ、四つの有力集団の存在が推定できる。

前Ⅲ期（5世紀前半）になると阪内川流域の花岡地区に、全長95mで伊勢国最大の前方後円墳である宝塚1号墳（38）が築造され、つづく前Ⅳ期（5世紀後半）にも隣接して2号墳（39）が、また阪内川を隔てた岡本町の丘陵端部に高地蔵1号墳（40）が築造され、他の地区を圧倒する。すなわち、前Ⅱ期にみられた四つの有力集団が、宝塚1号墳（38）の被葬者を中心とするひとつの勢力に統一され、南勢地方に大きな支配権が確立されたことを物語っているのである。

前Ⅳ期には宝塚2号墳（39）のように大規模な古墳が築造される一方で、八重田町から岡本町にかけての丘陵一帯に、小規模な古墳が数多く築造されるようになる。八重田古墳群（41）、常光坊谷古墳群（42）、狐谷古墳（43）、弥三郎新畑A号墳（44）などがある。

後Ⅰ期（6世紀前半）以降、大規模な古墳の築造は行われなくなり、かわって横穴式石室を採用し、日常の身の回りの品を副葬するような小規模な古墳が多数造られるようになる。それらはしばしば丘陵の尾根上などに群集して造られる。当地域では後Ⅱ期（6世紀後半）のものがほとんどである。北から垣内田古墳群（45）、瑞厳寺古墳群（46）、上文珠古墳群（48）、平林古墳群（49）、五輪山古墳群（50）、横尾古墳群（51）、一越古墳群（52）、川原妻古墳群（53）などがある。

このような膨大な数の古墳の築造を支えた集団の居住した集落跡はどうであろうか。残念なことに現在のところよく判ってはいない。前期では最近の試掘調査で良好な遺物の出土した人足遺跡（54）は注目すべきものである。近くの阿形遺跡（55）とともに、前期古墳と関連する遺跡であろう。しかし、その他の地域では古墳時代に属する遺構や遺物は散発的に検出されるものの、まとまったものは未だ発見されず、今後の調査に待たねばならない。

歴史時代

飛鳥、奈良時代以降の遺跡には集落跡、生産跡、寺院跡、官衙跡、中世墓跡、城館跡などさまざまなものがある。また、この他に条里制遺構や古道跡などもあり多様である。

ここではいちいち各時代の各種遺跡についてとりあげないが、発掘調査が実施された主な遺跡をあげておく。

広大な面積に広がる伊勢寺遺跡（8）は一部分が調査され、多くの遺構、遺物が検出された。扇頂部に近い榎長遺跡（18）、鳥戸遺跡（19）や扇端部の杉垣内遺跡（22）、前神遺跡（56）でも奈良～平安時代の遺構、遺物が検出されている。

寺院跡には一部調査された伊勢寺廃寺（57）や丹生寺廃寺（58）がある。

中世の遺跡は、地表面の遺物散布でみるかぎり多くの遺跡の所在が知られるが、その内容が明らかにされた遺跡は少ない。調査が行われた遺跡としては、薮ノ下遺跡（11）、上相田遺跡（59）、向王寺遺跡（60）などがある。また大規模な中世墓群として注目された横尾墳墓群（10）も榎長遺跡の南方約500mの丘陵上に位置している。

以上概観してきたように、伊勢寺および岩内扇状地は遺跡分布のみをみても、多数の遺跡の立地が知られ、古代において重要な地域であったことが理解されよう。

（田村　陽一）

〔註、参考文献〕

① 以下の内容については松阪市史編さん委員会『松阪市史第二巻　史料編　考古』松阪市1978による。
② 度会町教育委員会　奥　義次氏のご教示による。
③ 註②に同じ。
④ 古墳時代の時期区分には諸説あるが、ここでは『松阪市史』第二巻の内容を引用したので、その区分にしたがった。

Ⅲ. 調　査　報　告

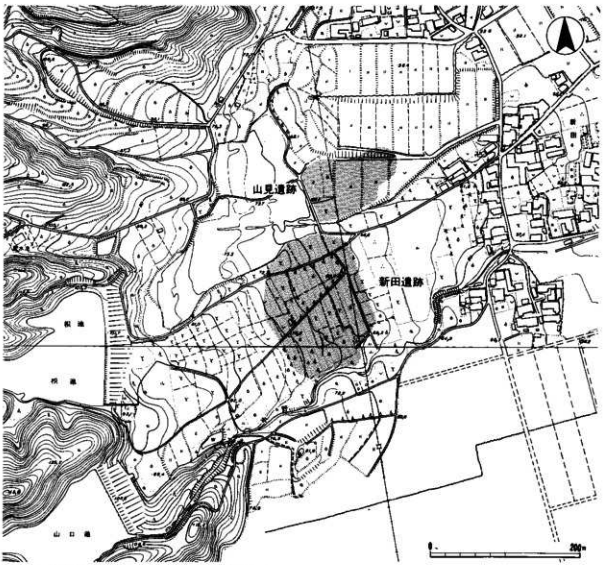
松阪市小阿坂町　新田（しんでん）遺跡　(17)

1．調査の経過と概要

新田遺跡は松阪市の市街地西郊の複合扇状地上に位置する。この扇状地は西方の一志山塊から流れ出た小河川により運搬されてきた多量の土砂を山麓に堆積させたものである。

遺跡は扇央部に立地する小阿坂町の新田集落の南西方に位置している。遺跡は北に開析の進んだ三渡川の小谷を界にして、それより北側に山見遺跡が広がっている。行政上は松阪市小阿坂町新田に属し、調査前は果樹（蜜柑）園、桑畑であった。なお、『松阪市史』第二巻によると、今回の調査区は新田A遺跡の東側に隣接し、新田B遺跡の西半にあたる。

1985（昭和60）年11月に、計画路線内に4m×4mの試掘坑を28カ所設定して第一次調査（試掘）を実施した。その結果、7カ所の試掘坑で遺構を確認し、多数の遺物が出土した。そのため4,400㎡について第二次調査を実施することとなり、1985（昭和



第4図　遺跡地形図（1：5,000）網目は遺跡範囲

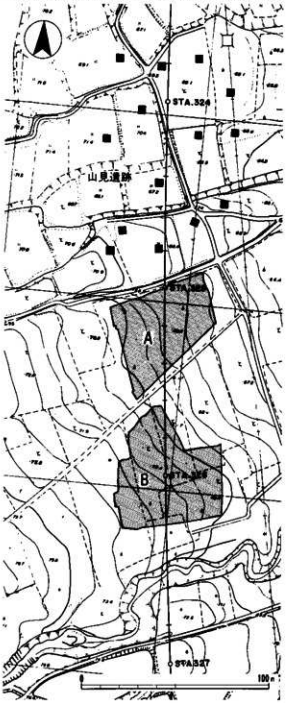
60）年12月27日から1986（昭和61）年３月25日まで実施した。

調査区は農道を挟んで南北に二分されるため、便宜上北地区をＡ地区、南地区をＢ地区と呼称した。４ｍメッシュの地区設定にあたっては、道路センター杭を利用した。ＳＴＡ326＋00杭を原点とし、ＳＴＡ325＋80杭とを結ぶ線を南北の基準線Ｋとし、地区設定の原則に従い、西から東へのアルファベットの符号を与えた。またこの南北線と直交する東西線は、原点を通る線を35とし、北から南へ数字を与えた。原点はＫ35である。

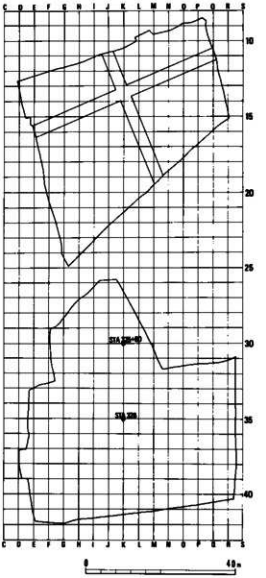
遺跡の基本的な層序は、第１層：暗褐色土（耕作土）、第２層：黄褐色土、第３層：暗黄褐色土、第４層：黒褐色土（地山）で、第４層までの深さは50～60cmであった。遺物は第２層に包含され、遺構は第３層上面で検出した。

検出した主な遺構には竪穴住居跡、土坑、焼土、溝などがある。いずれも奈良時代後半から平安時代に属するものである。

出土遺物には、遺構は検出されなかったものの、多量の縄文時代後期前葉を中心とした土器片と石器少量があるほか、古墳時代後期から鎌倉時代の土師器、須恵器、陶器などがある。



第５図　発掘区位置図（１：2,000）



第６図　発掘区地区割図（１：1,000）

2．遺　　構

竪穴住居跡

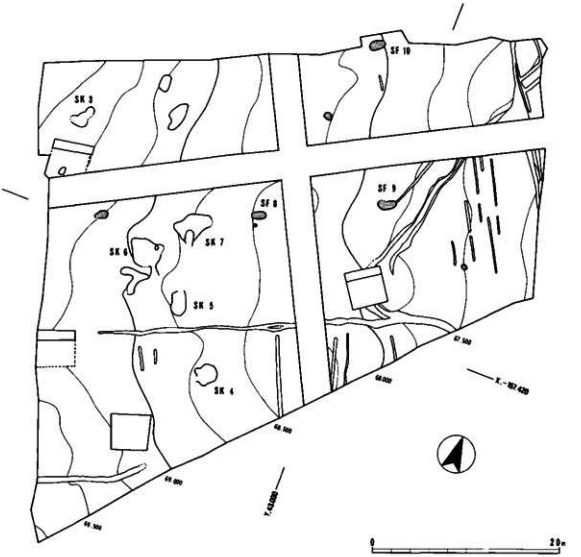
ＳＢ１　Ｂ地区の西端中央部で検出されたもので、南北約3.6m、東西約3.8mのややいびつな方形を呈する。検出面からの深さは、12～19cmはどで、埋土は黄褐色土であった。北辺中央部やや東寄りに直径約１mの焼土が検出された。土師器甕の破片や皿片が多数出土し、カマド跡と考えられる。

遺構面が畠柑の施肥穴で攪乱されているが、柱穴は確認されなかった。また貯蔵穴、貼床等も認められなかった。

ＳＢ２　Ｂ地区中央部やや北寄りで検出された。南北約2.5m，東西約2.5mの規模で、隅の丸い方形を呈する。検出面からの深さは８～12cmで底面は平坦、埋土は炭化物混りの暗黄灰色砂質土である。

東辺南寄りで約1.2m×1.0mの規模で焼土が検出された。「コ」の字形に西側に開いた焼土壁が確認され、カマド跡と考えられる。この焼土内からは土師器甕片が多く出土した。南東隅にある直径約40cm、深さ約15cmのピットが貯蔵穴であるかどうかは不明である。また柱穴や貼床は確認されなかった。

ＳＢ１に比して規模が小さく、本例は住居跡とは考えにくく、厨房的施設と考えられる。



第７図　Ａ地区遺構平面図（１：400）網目は焼土

土坑

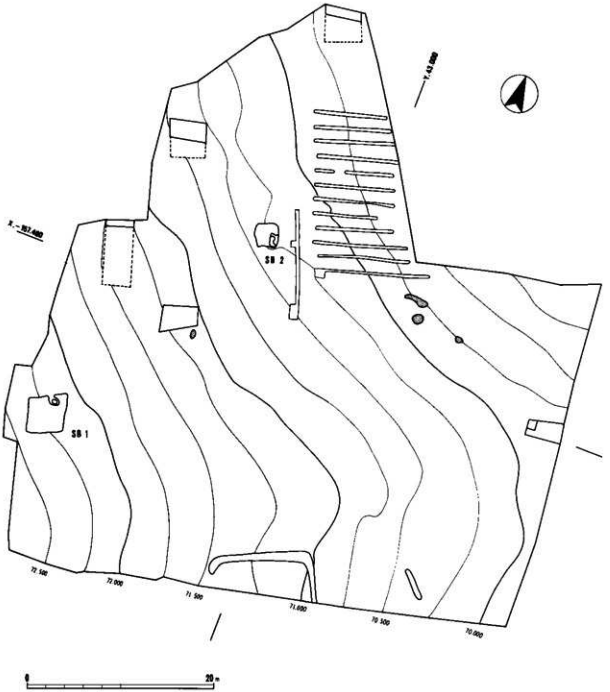
ＳＫ３　Ａ地区の北西隅で検出された土坑で、東西1.3m、南北0.7mの不定形な土坑である。蜜柑の施肥穴による攪乱のため、西端および東辺の一部は不明である。土師器杯が出土した。

ＳＫ４　Ａ地区の南西部やや中央寄りで検出された浅い土坑である。東西2.5m、南北2.3mの不整円形を呈する。検出面からの深さは５～６cm程で、さらに中央部が皿状にくぼむ。攪乱された薄い焼土を伴う。土師器甕片が出土した。

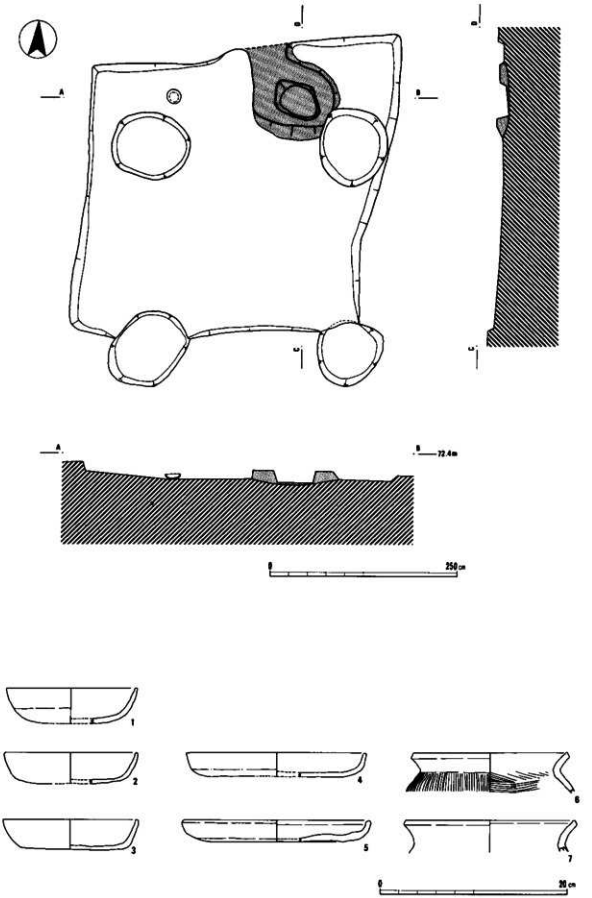
ＳＫ５　ＳＫ４の北西約６mに位置する。東西1.6m、南北2.5mの長円形を呈する浅い土坑である。検出面からの深さは10～15cm程で、底面は平坦でなく中央部は皿状に10cm程くぼむ。

土師器甕、杯の小片が出土した。

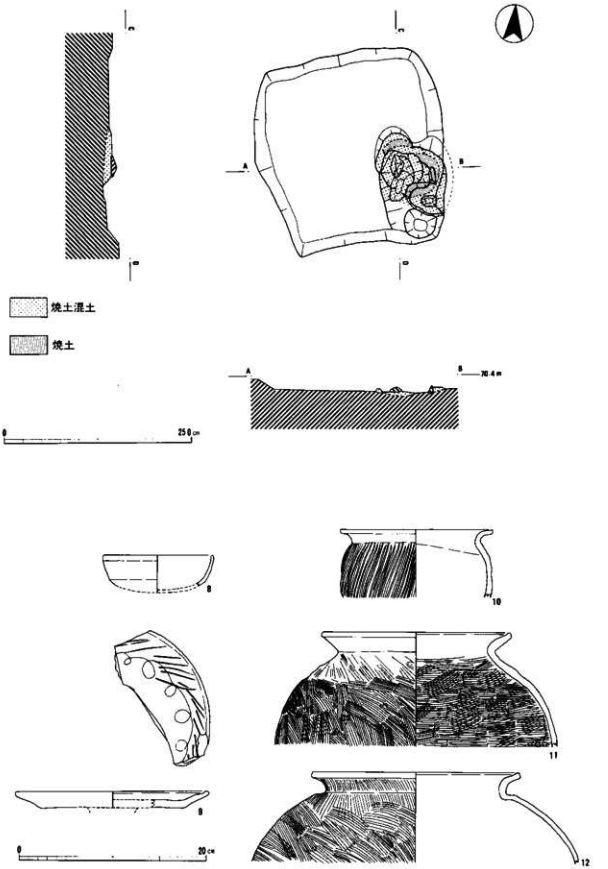
ＳＫ６　Ａ地区の西部やや中央寄りで検出された土



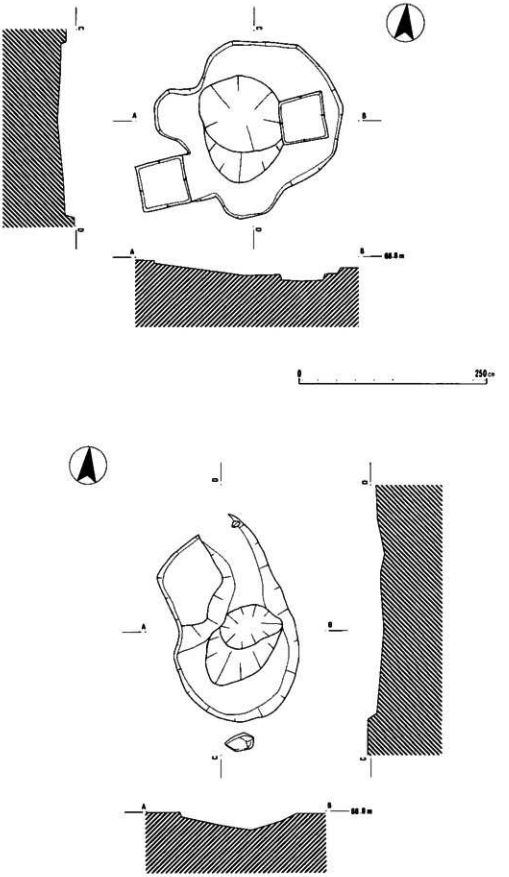
第８図　Ｂ地区遺構平面図（１：400）網目は焼土



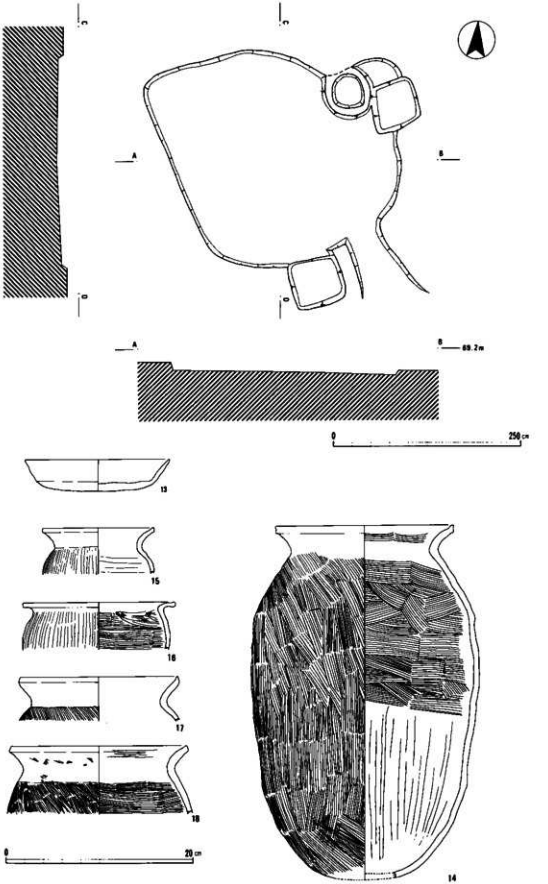
第９図　ＳＢ１実測図（１：50）網目は焼土、出土遺物実測図（１：４）



第10図　ＳＢ２実測図（１：50）網目は焼土、出土遺物実測図（１：４）



第11図　ＳＫ４、ＳＫ５実測図（１：50）



第12図　ＳＫ６実測図（１：50）、ＳＫ３、ＳＦ８～10出土遺物実測図（１：４）

坑で、東西約2.9m、南北約2.9mの浅い土坑である。西辺は直線的であるが東辺は弧状を呈する。全体的には隅の丸い方形を呈している。検出面からの深さは8～14cmで、底面はほぼ平坦、中央部がやや深くなる。

土師器小片が出土した。

ＳＫ７　ＳＫ６の北東約２ｍに位置する。東西4.0ｍ南北2.9mの不定形な土坑で、検出面からの深さは５～８cm程度と浅い。底面はほぼ平坦で、西半部分には薄い焼土が見られた。

焼土

ＳＦ８　Ａ地区中央部に位置し、0.8m×0.4m程の規模である。土師器長胴甕が出土した。

ＳＦ９　Ａ地区中央部やや東寄りに位置する。1.0ｍ×0.4mの規模である。土師器甕片が出土した。

ＳＦ10　Ａ地区の北端部中央やや東寄りに位置する。0.8m×0.4mの規模で、土師器甕片が出土した。

その他の遺構

以上の遺構のほかに数条の溝と若干のピットが検出された。これらの遺構は既述した土坑などと同じ奈良時代のものと考えられる。

3．遺　　物

遺構出土の遺物

ＳＢ１出土土器

土師器

椀（１）　推定口径14cm、器高3.8cmで、底部からゆるやかに内弯ぎみで立ち上がり、口縁部はやや内傾する。口縁端部内面に浅い沈線が入る。底部はユビオサエのちナデ、口縁部はヨコナデ、体部外面に粘土の接合痕が残る。胎土はやや粗く砂粒が混る。焼成は良く、浅黄橙（10ＹＲ８/３）を呈する。

杯（２・３）　（３）は床面上の土器で完形である。口径は（２）が14.2cm、（３）が14.6～14.8cm（ゆがみあり）で、器高はいずれも3.3cmである。どちらも底部から強く斜め上方に立ち上がる。底部はユビオサエのちナデ、口縁部内外面ともヨコナデである。（２）は口縁端部外面に浅い沈線が入る。（３）は粘土の接合痕が明瞭に残る。

胎土は（２）が並、（３）は良で砂粒を含む。焼成はともに良好で（２）はにぶい黄橙（10ＹＲ７/４）、（３）は浅黄（2.5Ｙ８/４）を呈する。

皿（４・５）　（４）は推定口径19.2cm、（５）は20.4cmで器高は（４）が2.7cm、（５）が2.3cmである。口縁端部は丸くおさめられ、内側に浅い沈線が入る。底部外面はヘラケズリ、内面は乱ナデ、口縁部内外面はヨコナデである。胎土はいずれも良で焼成も良く、（４）はにぶい橙（５ＹＲ６/３）、（５）は橙（５ＹＲ７/６）を呈する。

いずれも暗文はみられない。

甕（６・７）　小片のため推定した口径に無理があるかもしれないが、（６）は16cm、（７）は18cmである。いずれもく字形に外反する口縁部をもち、端部に面をもつ。（６）は体部内外面に４本/cmのハケメが施される。口縁部内面はハケメをナデ消している。いずれも胎土は粗、焼成は良で（６）はにぶい橙（7.5ＹＲ６/４）、（７）はにぶい黄橙（10ＹＲ７/３）を呈する。

ＳＢ２出土土器

土師器

椀（８）　推定口径12cm、同器高４cmほどのやや薄手の椀である。口縁部はやや内弯し、端部は丸みをおびる。内外面ともヨコナデ。胎土は粗、焼成は良で色調は浅黄橙（10ＹＲ８/４）。

高杯（９）　底面が内外とも平坦で杯部の浅い高杯の杯部である。口径は約21cmと考えられ、杯底部の厚さは0.8cmと厚く、口縁部へと次第に薄くなる。口縁部内面は強いヨコナデのためやや凹み、凹線状となる。端部は丸くおさめられる。杯部内面に放射状暗文と螺旋状暗文がみられる。胎土は精良、焼成も良好で橙（５ＹＲ７/８）を呈する。

甕（10～12）　（10）はロ径16.4cmで口縁部が強く外反する甕である。体部外面には４本/cmのハケメが左下りに施される。（11）はロ径20.6cm、（12）は22.8cmでいずれも球胴状を呈するものである。

（11）は体部内外面とも６本/cmのハケメ、（12）

は体部外面のみ５本/cmのハケメが施される。頸部は強くヨコナデされるため肩部が明瞭となる。
胎土は（10）が良、（11・12）が並、焼成はいずれも良好である。（10）が浅黄橙（10ＹＲ８/３）、（12）はにぶい黄橙（10ＹＲ７/４）を呈する。

ＳＫ３出土土器

土師器

杯（13）　口径15.2cm、器高3.5cmで３分の２ほど残存している。体部はやや外反しながら立上り、口縁部はやや尖る。底部はヘラケズリ後ナデ、体部外面はヘラミガキ、体部内面はヨコナデ、底部内面は乱ナデ。体部内面に放射状暗文、底部内面には不明瞭ではあるが螺旋暗文らしきものがわずかに残る。胎土は良、焼成は並でにぶい橙（５ＹＲ６/４）を呈する。器壁の剝落が著しい。

ＳＦ８出土遺物

土師器

甕（14）　口縁部および体部の一部を欠損するが、ほぼ完形に復元できた。口径は19cm、器高は37.8cmの長胴甕である。
く字形に開く口縁部は頸部がやや厚く、端部に向って次第に薄くなる。端部は垂直方向に面をもち、先端部は上方へつまみ上げられる。口縁部内外面ともヨコナデ、体部から底部外面には６～７本/cmのハケメ、内面は上半が横位のハケメ、下半がヘラケズリされる。底部は焼成後に打ち欠きによると思われる径５～６cmの穿孔がある。胎土は精良、焼成は良く、にぶい橙（7.5ＹＲ７/４）を呈し、体部に付煤が見られる。

ＳＦ９出土遺物

土師器

甕（15～17）　いずれも小片である。（15）は推定口径12cmの小型甕で、全体に摩耗が著しいが体部には縦位に６～７本/cmのハケメが施される。胎土は粗、焼成は良でにぶい黄橙（10ＹＲ７/４）を呈する。
（16）は口縁部が直角に近いほど強く外反するもの。推定口径は16.6cm、体部外面には３本/cmの粗いハケメが縦位に施される。内面は６～７本/cmの横位のハケメ、口縁部内外面はヨコナデ。胎土は並、焼成は良、にぶい橙（7.5ＹＲ７/３）を呈する。
（17）は長胴甕の口縁部であろう。口縁部が上方につまみ上げられる。口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面には右下りの８本/cmのハケメが施される。胎土は並、焼成は良、浅橫橙（10ＹＲ８/３）を呈する。

ＳＦ10出土遺物

土師器

甕（18）　口縁部の約２分の１が残る。口径は19cm。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面とも８本/cmのハケメ。刷毛原体は幅1.7cmで13本のものである。胎土はやや粗く焼成は良、にぶい黄橙（10ＹＲ７/４）を呈する。

包含層出土遺物

遺物包含層からは縄文土器、石器、古墳時代以降の土器が出土した。量的にはさほど多くないが、縄文土器は後期前葉を中心として比較的多く出土している。ただし、器形や文様の全容のわかるものはない。

１．縄文時代の遺物

縄文土器（19～126）　（19）～（22）は早期の土器で、（19）はネガティブ押型文の小片。摩耗が著しいが薄手の土器である。
（20～22）は内外面に条痕を施す土器片である。３点とも同一個体と思われる。横位に施された条痕は深くしっかりとしたもので、原体は不明。胎土に繊維は含まれないようである。胎土は粗いがよく焼けて堅緻、ザラザラした感触をうける。早期末葉に位置づけられよう。
（23～26）は器面に撚糸文を施す中期後葉の土器である。里木Ⅱ式に相当しよう。摩耗の著しい破片もある。
（27～35）は中期後葉～末葉と考えられるものである。（27・28）は同一個体と思われるが、ＲＬの節の大きな縄文地に幅広でやや浅い沈線で区画文が描かれるものである。（29）は体部片で、やはりＲＬの縄文地に垂下沈線と蛇行沈線か逆Ｕ字状の沈線を施すものであろう。

第13図　縄文土器実測図・拓影（1：3）

(30) は口縁端部が肥厚し、口縁直下に２本の幅広沈線、その下に楕円形の区画文が描かれ、内部に平行斜沈線が施されるもの。

(31・32) は同一個体であろう。口縁部には明確に区画文と考えられる文様はみられないが、体部片 (32) には垂下する蛇行沈線がみられる。

(33・34) も同一個体と思われる。(33) は把手が付くが欠損している。この把手部が口縁部と体部の文様帯を分け、体部には２～４本の平行沈線の束が垂下し、沈線間に縄文が縦位施文される。この縄文原体も単節のＲＬである。

(35) は北白川Ｃ式系の山形突起を有する深鉢である。口唇部は幅広く面どりされ、ＬＲ縄文が施され、外面には沈線と細い条線が羽状に施される。

(36～38) は後期初頭の中津式と考えられる土器片。ただし細片のため誤りの可能性もある。(36) は波状口縁の口縁部で、肥厚している。(37・38) は体部片であるが、沈線はやや細く、縄文を施す縄文帯も幅が狭い。中津式でも新しい段階のものであろう。いずれもＬＲの節の小さな（細い）縄を使用している。

(39～114) は後期前葉の土器。(39) の広瀬土坑40段階のものから、(66) の加曽利Ｂ式的なものまで、時期幅はあるが、北白川上層式期の土器片が多数を占める。

(39) は口縁部を拡張し、端面に太い沈線を施し外側を刻む土器である。

(40) は口縁部をＬ字形に内折させ、縁帯部に沈線を施す土器。

(41・42) は同一個体である。口縁部を肥厚させ、端面に縄文（ＬＲ）を施した後、凹点を囲み対向する弧線を描くものである。体部外面には全面に縄文が施される。

(43) は内外面とも無文の土器。刻目をもつ小突起がつく。

(44～49) は同一個体と考えられる。口縁部が幅約3.5cmにわたり肥厚し、そこに鋸歯文が施されるものである。

(50・51) は口縁部に１本の沈線が横走し、口縁端から沈線までの間に縄文（ＬＲ）を転がす土器である。沈線以下の体部は無文となる。(50) は口縁部内面に小竹管の刺突による小円文が、上下２段に施される。

(52・53) は同一個体であろう。Ｌ字形に内折する口縁部は特に肥厚はしないが、縁帯部にはヘラ描きの格子文が施される。

(54) は口縁部が幅２cmにわたって肥厚し、以下の体部に斜行沈線（条線）が施されるもの。肥厚部分はていねいにヘラミガキされる。

(55) は (50・51) と同様のものであろう。

(56) は口縁端部を平らにして面をつくり、そこに縄文（ＲＬ）を施している。また口縁部外面には縦と斜めの沈線が見られる。

(57) も口縁端部は同様に仕上げられ、ＬＲ縄文が施される。口縁部は外面に幅約2.5cmにわたって肥厚し、３本の沈線が引かれる。この肥厚部には縄文が施されている。

(58) は口縁に添って３本沈線が横走するもの。またその沈線から斜め下方にも同様の沈線が施されるようである。沈線間はＲＬ縄文が施されている。

(59) は浅鉢形土器と考えられる。口縁部が「く」字状に内折しＬＲの縄文地に５本の沈線が横走する。口縁端部には「８」字状の小さな瘤状突起がつく。この土器には赤色顔料が塗布されている。北白川上層式Ⅲ期に該当しよう。

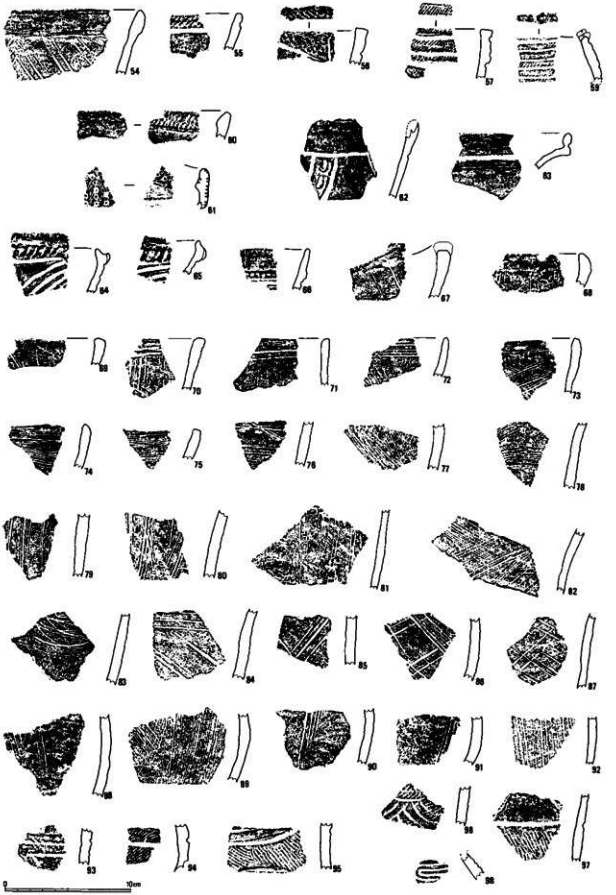
(60) は口縁部が内側に肥厚するが、外面は無文で内面にのみ縄文（ＬＲ）が口縁に沿って施される。

(61) は波状口縁の突起の斜面部分にあたる。口縁部内側に強いナデが施され凹むため、肥厚したように見える。この口縁部内外面に小竹管の刺突による小円文が施される。なお、地文に細かな縄文が施されているようである。

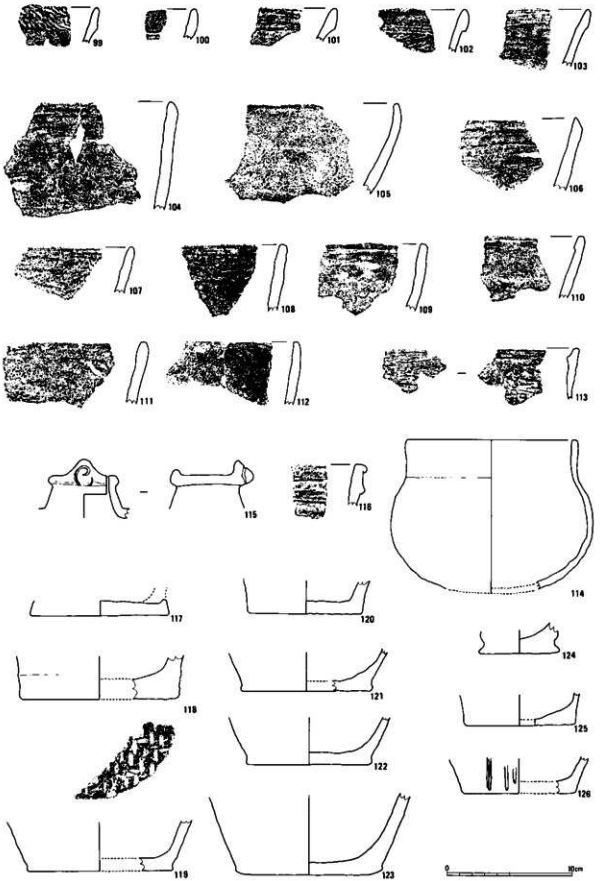
(62) は無文の口縁部から2.5cmほど下ったところに沈線が横走し、刺突文を挟んだ平行沈線が弧状に施される。

(63) は波状を呈する浅鉢であろうか。「く」字形に内折して短く立ち上った口縁部は、内外面ともよく研磨されている。外面には屈折部のやや近くに沈線が一条横走する。やはりこれも後期前葉に属するものであろう。

(64・65) は同一個体であろう。口縁部の突帯部に刻目が施され、その下に沈線が横走し、さらにそ



第14図　縄文土器実測図・拓影（1：3）



第15図　縄文土器実測図・拓影（1：3）

の下には斜行する平行沈線（多条）がみられる。関東の堀之内Ⅱ式にあたる。

（66）は口縁部に幅２cmの無文帯をおいて細い突帯が貼り付けられ、刻目というよりは刺突が連続して施され、以下に沈線が横走している。これも堀之内Ⅱ式の新しい時期か、加曽利Ｂ式に比定されよう。

（67～92）は条線文が器面に施される土器の口縁部および体部片。（67）は波状口縁で、波頂部が肥厚する。後期初頭まで遡るかもしれない。

（93～98）は磨消縄文や縄文地に沈線が施される土器の体部片。（98）は沈線のみの細片であるが、壺形土器であろう。

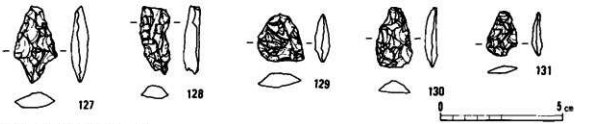
（99・100）は口縁部外面の肥厚部に縄文が施されるが、あとの（101～113）は無文の粗製土器。（101～103）のようにロ縁部が段をもって断面三角形になるのもと、（104・106）のような断面形のものと、肥厚などしないものなどがある。（113）は口縁部内側に突帯状の張り出しがつく。これら無文土器は内外面ともすべてナデ調整によるものである。

（114）は推定口径14cm、同器高12cmの鉢形土器である。球胴状の体部から肩部を経てややすぼまり、頸部から直立するロ縁部となる。器面は外面はミガキ、内面はナデ調整がなされている。

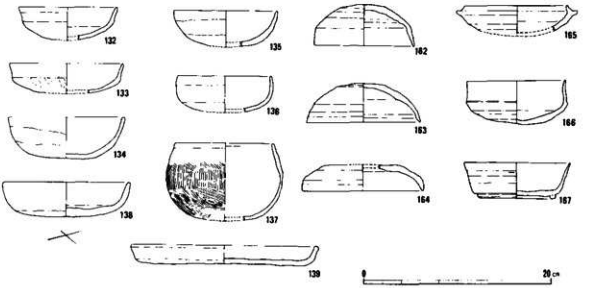
（115）は晩期に属すと思われる壺形土器の口頸部である。口径は5.5cm、口縁部は丸味をもって肥厚し山形の突起をもつ。この突起には正面にコブ状の突起が付され、ヘラ描沈線がめぐる。この突起の反対側にも小突起がつく。内外面ともよく研磨され、暗赤褐色を呈する。胎土は良く焼成も良好でレンガ状となり独特の特徴を有する。搬入品と考えられるが、大洞Ｂ式ないしはＢＣ式に相当するものであろうか。県内での類例はない。

（116）は晩期末葉の突帯文土器であろう。口縁から少し下ったところに素文の突帯（断面三角形）が一条付くものである。

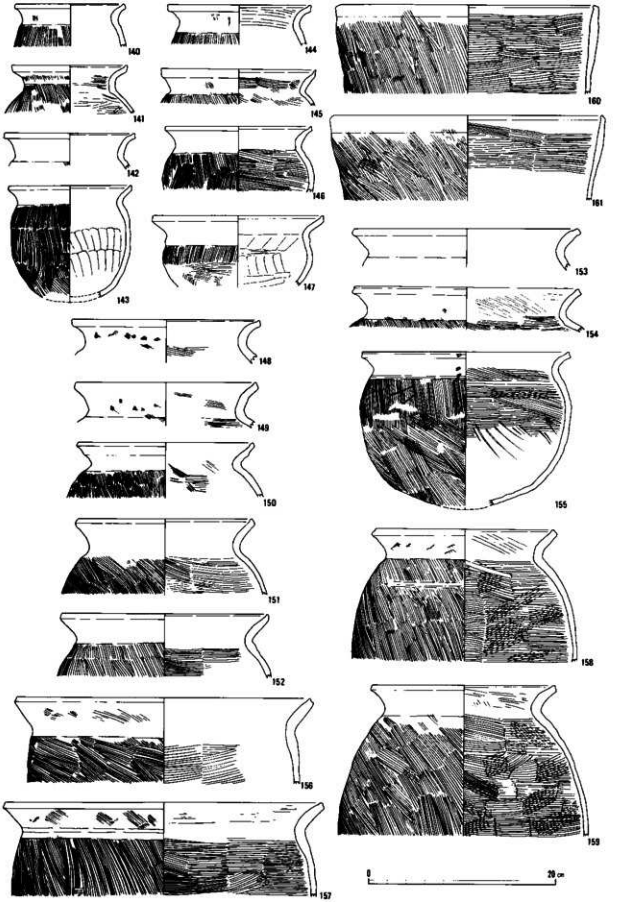
（117～126）は底部の破片である。（118）が底部外面に網代痕を残す。（126）の体部外面に垂下沈線のみられるもの以外は無文である。



第16図　石器実測図（２：３）



第17図　包含層出土遺物実測図（１：４）



第18図　包含層出土遺物実測図（1：4）

No.	遺物No.	出土位置	種別	器種	残存度	法量	調整・技法等	胎土	焼成	色調	備考	図No.	図版No.
132	0033	(A) H-15, No.4	土師器	椀	2分1	□10.6, 高(3.4)	口縁部ヨコナデ, 底部コビキサエ, ナデ	良	良	にぶい黄 2.5Y 6/3		17	16
133	0045	(A) I-15	〃	〃	4分1	□(12.0), 高(3.2)	〃 〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR 7/4		〃	12
134	0020	(A) M-13, No37	〃	〃	ほぼ完形	□12.4, 高4.5	粘土紐巻きあげ, 内外面ナデ	精良	〃	〃 10YR 6/3	外面付煤	〃	16
135	0032	(A) M-10	〃	〃	4分3	□11.2, 高3.7	〃 〃	やや粗	〃	浅黄橙 10YR 8/3		〃	11
136	0053	(A) M-14	〃	〃	3分1	□(10.0), 高3.8	〃 〃	精良	〃	にぶい橙 7.5YR 7/4		〃	12
137	0070	(A) L-14, No28	〃	鉢	〃	□(10.4), 高(8.2)	口縁部ヨコナデ, 体部ハケメ	やや粗	〃	にぶい黄橙 10YR 6/4	外面付煤	〃	〃
138	0021	(A) I-13	〃	杯	2分1	□13.6, 高3.6	〃 底部ナデ	並	〃	にぶい橙 7.5YR 6/4	底部外面ヘラ記号	〃	16
139	0024	(B) E-38	〃	皿	ほぼ完形	□20.1, 高2.0	〃	精良	〃	橙 5YR 6/8		〃	11
140	0076	(A) M-18, No31	〃	甕	4分1	□(11.4)	口縁部ヨコナデ, 体部ハケメ	やや粗	〃	〃 5YR 6/6		18	12
141	0042	(A) K-19	〃	〃	8分1	□(12.4)	〃 〃	並	〃	にぶい橙 5YR 6/4		〃	〃
142	0044	(A) M-13	〃	〃	〃	□(14.2)	〃 〃	良	〃	〃		〃	〃
143	0017	(A) M-14	〃	〃	2分1	□13.2, 高(12.3)	〃 体～底部ハケメ	並	並	にぶい褐 7.5YR 5/3	体部下半～底部内面ヘラケズリ	〃	11
144	0040	(A) N-13, No33	〃	〃	4分1	□(15.4)	〃 体部ハケ	〃	良	明赤褐 5YR 5/6		〃	12
145	0038	(A) K-12	〃	〃	〃	□(16.6)	〃 〃	良	〃	にぶい黄橙 10YR 7/3		〃	〃
146	0034	(A) J-15	〃	〃	3分1	□(15.4)	〃 〃	〃	並	にぶい黄褐 10YR 5/3	付煤	〃	〃
147	0315	(A) K-17	〃	〃	8分1	□(18.4)	〃 〃	並	良	〃 〃	体～底部内面ヘラケズリ	〃	〃
148	0035	(A) J-20, No70	〃	〃	4分1	□(20.2)	〃 〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR 6/3	口縁部付煤	〃	〃
149	0025	(A) J-15, No8	〃	〃	3分1	□(19.4)	〃 体部ハケメ	〃	〃	〃 10YR 7/3		〃	〃
150	0041	(A) J-14?	〃	〃	10分1	□(18.8)	〃 〃	良	〃	橙 7.5YR 7/6		〃	〃
151	0059	(A) T-15, No60	〃	〃	4分1	□(18.8)	〃 〃	並	〃	明黄褐 10YR 6/6	外面付煤	〃	〃
152	0037	(A) F-17	〃	〃	6分1	□(22.4)	〃 〃	〃	〃	橙 7.5YR 6/6		〃	〃
153	0039	(A) G-17	〃	〃	8分1	□(24.0)	〃	良	〃	浅黄橙 10YR 8/3		〃	〃
154	0056	(A) K-12	〃	〃	〃	□(24.0)	〃 体部ハケメ	〃	〃	〃 〃		〃	〃
155	0023	(A) J-20, No17	〃	〃	3分2	□21.8, 高(17.0)	〃 体～底部ハケメ	〃	〃	にぶい橙 7.5YR 7/4	体部下半～底部ヘラケズリ	〃	11
156	0073	(A) K-17, No25	〃	〃	10分1	□(31.4)	〃 体部ハケメ	〃	〃	にぶい黄橙 10YR 7/4		〃	12
157	0016	(A) M-14	〃	〃	5分1	□(33.8)	〃 体部内外面ハケメ	並	〃	橙 5YR 6/8	付煤	〃	〃
158	0010	(A) M-13, No36	〃	〃	2分1	□19.0	〃 〃	〃	〃	明黄褐 10YR 6/6		〃	〃
159	0022	(A) K-17	〃	〃	10分5	□19.6	〃 〃	良	〃	〃 〃		〃	11
160	0052	(A) 〃	〃	甕	10分1	□(27.2)	〃 〃	並	〃	橙 7.5YR 6/6		〃	12
161	0057	(A) J-19	〃	〃	8分1	□(28.8)	〃 〃	〃	〃	〃 7.5YR 7/6		〃	〃
162	0029	(A) M-14, No34	須恵器	杯蓋	ほぼ完形	□10.6, 高4.4	ロクロナデ, ロクロ右回転	〃	良	灰 5Y 5/1		17	11
163	0030	(A) M-14	〃	〃	3分1	□(12.0), 高4.1	〃 〃	やや粗・砂	〃	〃 〃		〃	〃
164	0081	(A) H-15	〃	〃	4分1	□(12.8), 高2.7	〃 〃	〃	〃	〃 7.5YR 4/1		〃	12
165	0065	(A) K-20	〃	杯身	3分1	□(11.0), 高(3.1)	〃 〃	良	良	〃 7.5YR 5/1	内外面自然釉	〃	〃
166	0027	(A) K-16, No24	〃	〃	2分1	□(10.5), 高4.7	ロクロナデ, 底部ヘラケズリ, ロクロ左回転	〃	〃	灰 7.5Y 4/1	自然釉	〃	11
167	0028	(B) J-26	〃	杯	3分1	□(12.0), 高3.8	ロクロ右回転	並	〃	青灰 10BG 5/1		〃	〃

石製品（127～131）　石鏃が5点ある。すべてサヌカイト製で（127）は長さ[①]3.1cm、幅1.8cm、厚0.6cm、重量2.8gである。（128）は2.7cm×1.2cm×0.5cm、2.3g、（129）は1.9cm×2.0cm×0.5cm、2.0g、（130）は2.4cm×1.5cm×0.4cm、1.6g、（131）は1.8cm×1.3cm×0.3cm、0.6gである。

2．歴史時代の遺物

出土遺物には土師器、須恵器がある。量的にはA地区からの出土が大半を占める。個々の土器については一覧表にまとめた。

（132・133・162～166）は古墳時代後期、（134～137）は飛鳥時代、（138・139・167）は奈良時代に、（140～161）の甕および鉢は概ね飛鳥時代から奈良時代に比定できるものである。このほか鍛冶はあるが平安時代から鎌倉時代までの土師器、山茶椀片も出土している。

4．結　語

新田遺跡は扇状地の扇央部付近の緩傾斜地に立地する遺跡である。

調査の結果、住居跡などの遺構こそ検出されなかったものの、縄文時代の土器を中心とした遺物が一定量出土した。また奈良時代と考えられる若干の遺構の検出と、古墳時代から鎌倉時代にわたる遺物が出土した。いずれも良好といえるものではないが、以下に若干のまとめをしておく。

今回の調査の成果のうちでも重要なものが、縄文時代後期前葉を中心とした遺物の出土であろう。ただ、遺構は全く検出されなかったし、出土した遺物も小片・細片が多くて、全体の器形や文様構成の判る資料が出土しなかったのが惜しまれる。しかしながら、新たな縄文遺跡の発見という点で大きな意義があろう。当遺跡の南方約1kmには藪ノ下遺跡がある。藪ノ下遺跡は後期初頭の中津式の土器が多量に出土したが、中津式の新しい段階（Ⅱ式）で断絶する。そして、若干の空白はあるが新田遺跡が最盛期を迎えるわけで、藪ノ下の縄文人が後期前葉に新田へ移動したのではないかという想定も成り立つのである。ここではその可能性を指摘するにとどめるが今回の調査地より以西の高所に集落の中心があった可能性が高い。

出土した縄文土器は早期、中期、晩期のものも若干含まれるが、ほとんどが後期前葉の広瀬Ⅱ式40段階の ものから北白川七層式田期までのものである。量的にはやや多いとはいえ、器種構成や組成を知るには不十分なものであろう。

1989年に調査が実施された土手広遺跡（松阪市御麻生薗町）で当該期の好資料を多く出土[②]しており、それらとの比較により当地域周辺の様相について、より深い理解が得られるものと思われる。

さて、そのほかに竪穴住居跡が2棟検出されている。いずれも小規模なものである。ＳＢ１は一辺が3.6～3.8m、ＳＢ２が一辺2.5mと極めて小さい。しかしいずれもカマド跡と考えられる焼土がみられる。出土遺物からＳＢ１が奈良時代中期[③]と考えられるほか、ＳＢ２や他の土坑も奈良時代前半におさまるものと思われる。

竪穴住居は広い調査区内でこれ以外には検出されておらず、今回の調査地はごく小規模な集落の一部かまたは集落の縁辺部と考えられよう。

なお、新田遺跡の北に隣接する山見遺跡[④]は、第5図に示したように、4m×4mの試掘坑を14カ所設定して第1次調査（試掘）を実施したが、すでに圃場整備事業によって削平を受けていたため、若干のピットを確認したにすぎない。また遺物もほとんどが客土の表土層からの出土であったため、面的な調査には至らなかったことを付記しておく。

（田村　陽一）

〔註、参考文献〕

① 遺物の項で土器の色調については『新版　標準土色帖』1988年版を用いた。
② 千葉豊「縁帯文系土器群の成立と展開」『史林』72－6　1989
③ 以下この項で数値のみ記す。
④ 松阪市教育委員会榎本義嗣氏のご好意により遺物を実見させていただいた。
⑤ 斎宮跡調査事務所編「斎宮跡の十師器」『斎宮跡調査事務所年報1984』斎宮跡調査事務所1985
⑥ 三重県教育委員会編『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県教育委員会1986

遺跡全景（南上空より）　（1981年撮影　松阪農林事務所提供）

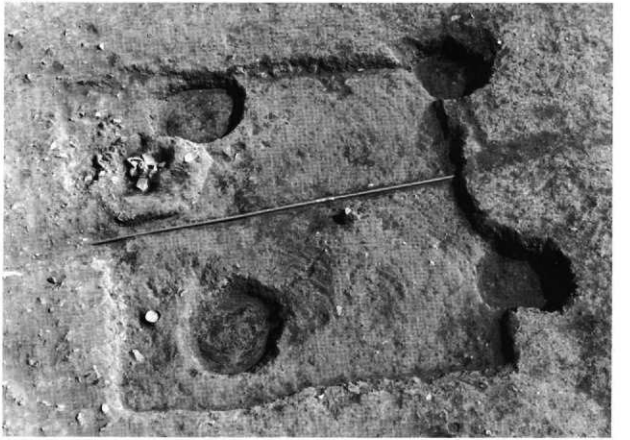
遺跡遠景（西から）

遺跡遠景（北から、手前は山見遺跡）

調査前近景（南から）

調査後全景（北から）

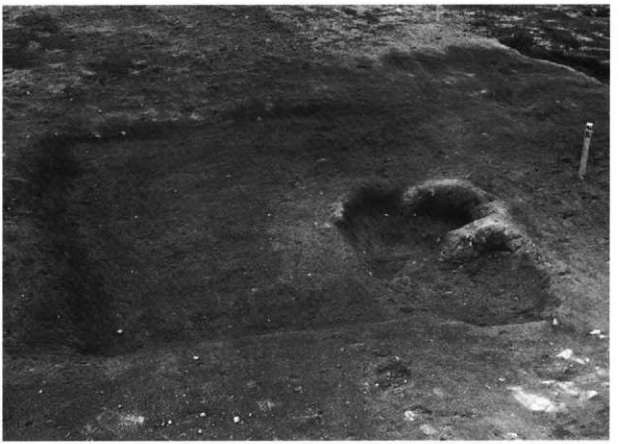
調査後全景（南から）



SB1（西から）

SB1カマド（南から）

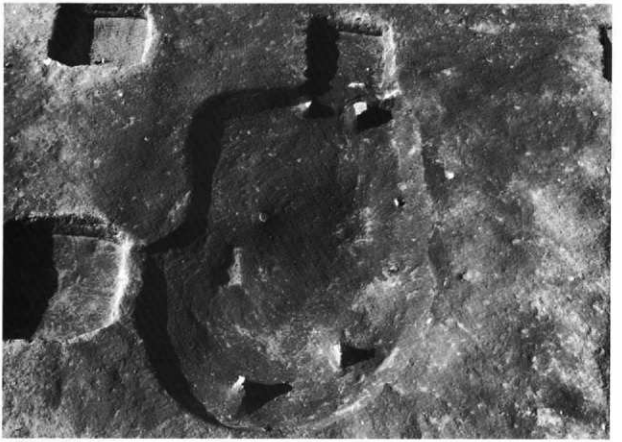
SB2（南から）



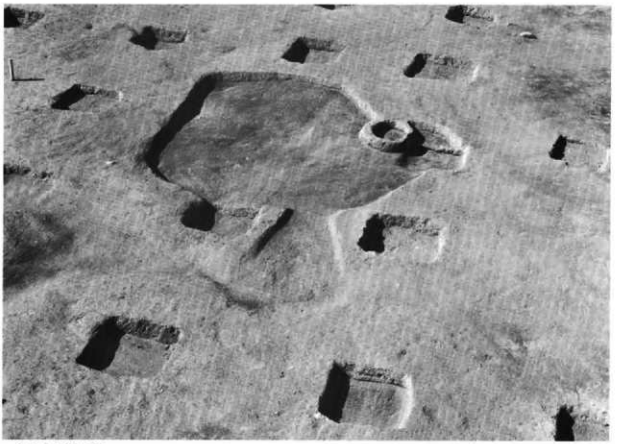
SB2（南から）

SK5～7（西から）

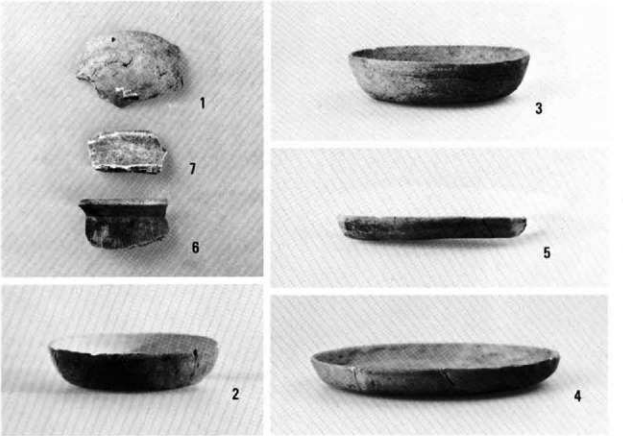
SK4（北から）



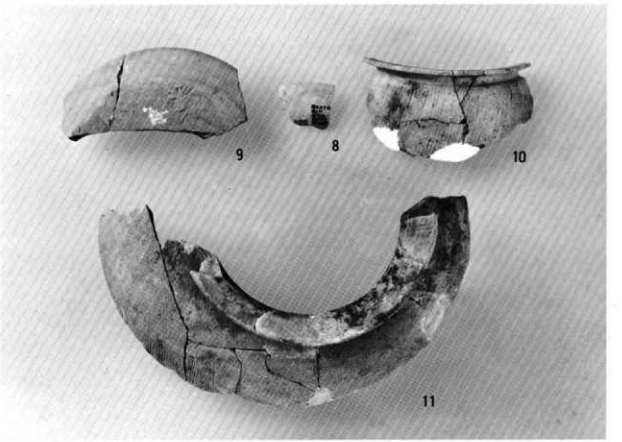
SK5（南から）



SK6（南から）

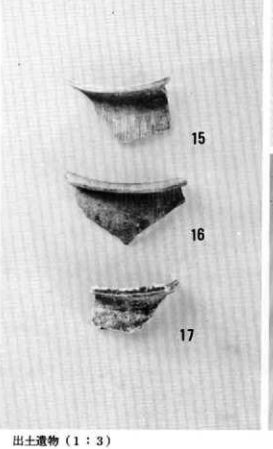


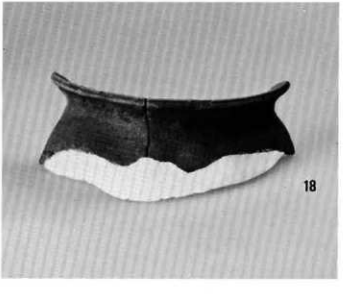
出土遺物（1：3）



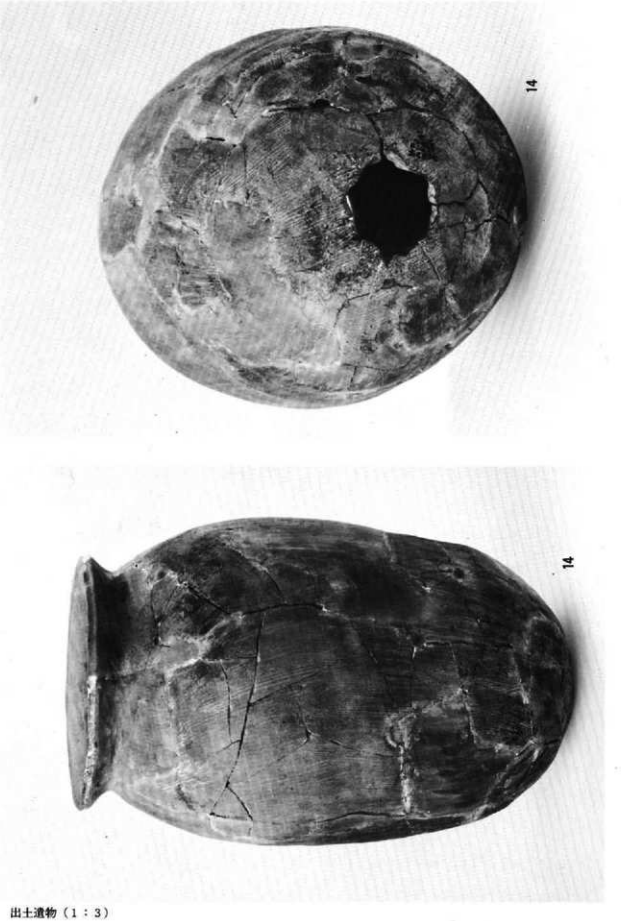
出土遺物（1：3）

出土遺物（1：3）



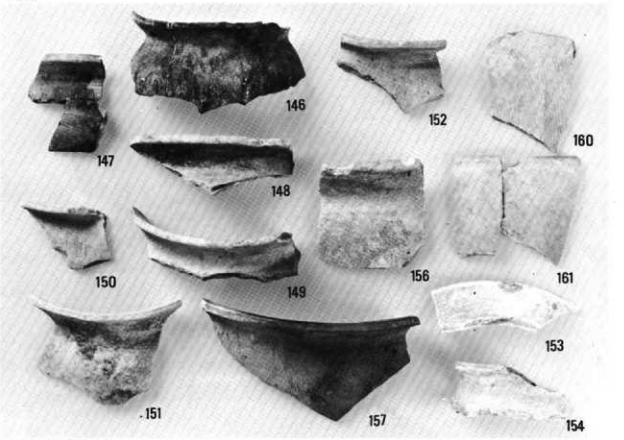


出土遺物（1：3）

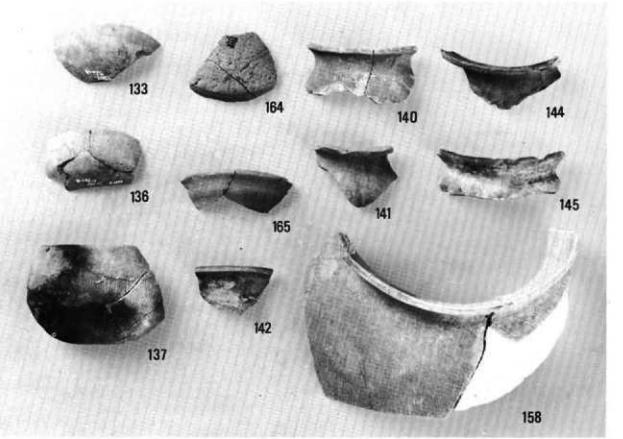


出土遺物（1：3）

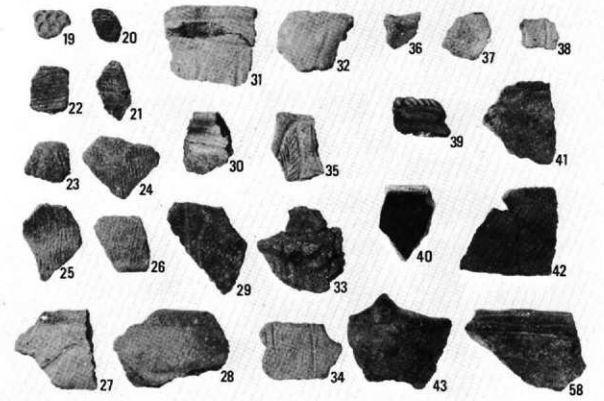
出土遺物（1：3）



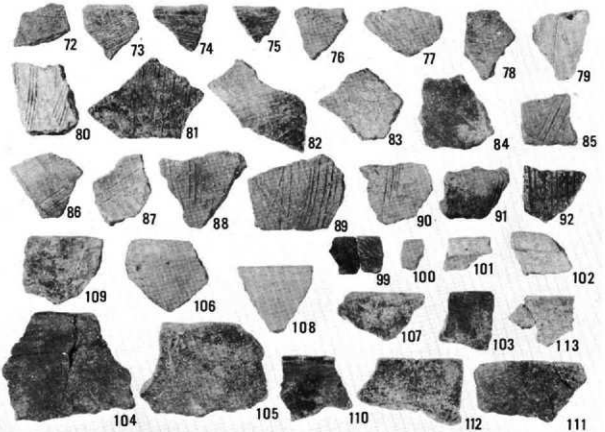
出土遺物（1：3）



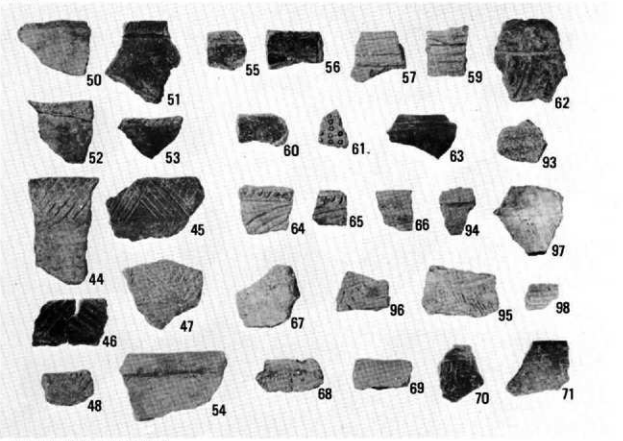
出土遺物（1：3）



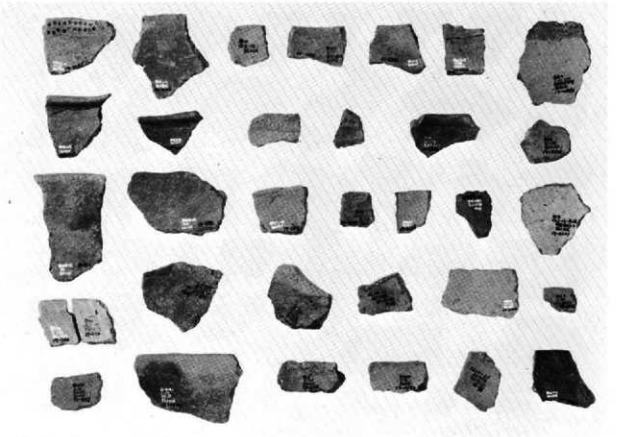
出土縄文土器（1：3）



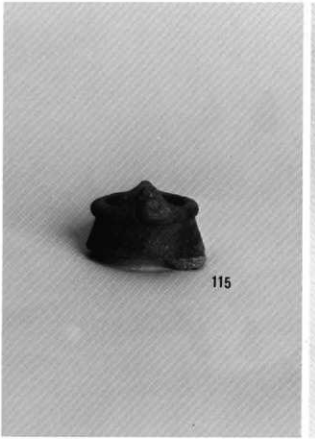
出土縄文土器（1：3）

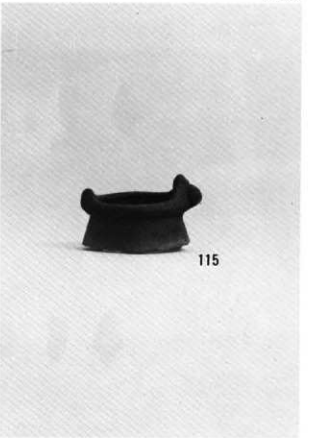


出土縄文土器（1：3）外面

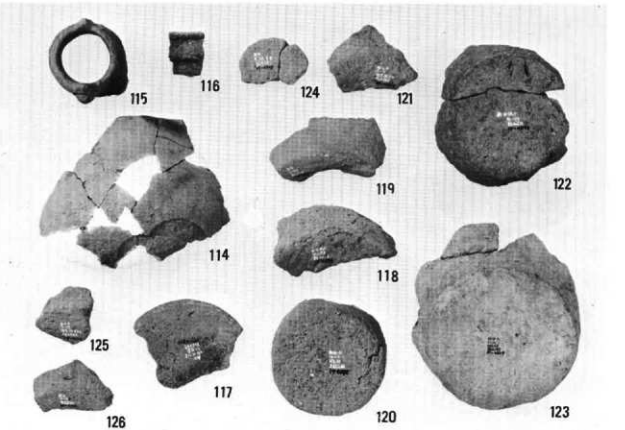


出土縄文土器（1：3）内面

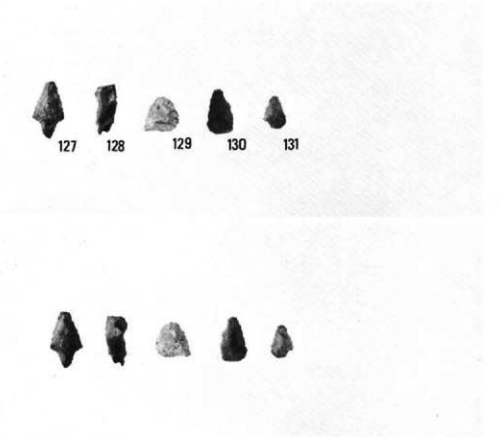




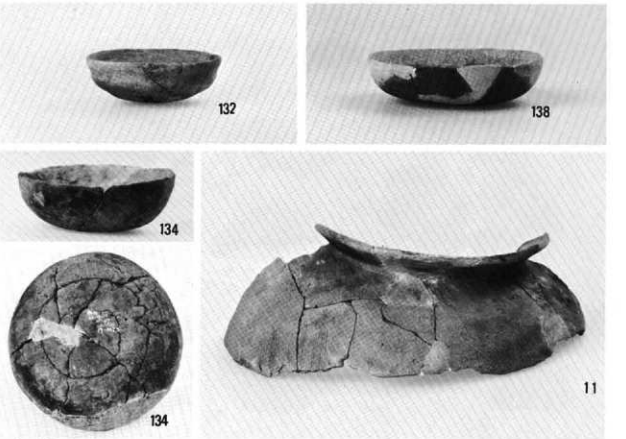
出土縄文土器（1：2）



出土縄文土器（1：3）



出土石器（1：2）上……表面、下……裏面



出土土器（1：3）

松阪市岩内町　藪ノ下遺跡　(19)

1. 調査の経過

藪ノ下遺跡は観音岳（609.5m）の北に源を発した岩内川が瑞巌寺付近を谷口として、もっぱら北東方へ乱流を繰り返して形成した扇状地上に位置する。行政上は松阪市岩内町字藪ノ下に属している。

谷口部には岩内町の集落が立地しているが、この集落の東にずれに舌状に張り出した比高約２m前後の微高地がある。標高約64mのこの微高地上に本遺跡に立地している。

昭和58年度の県営圃場整備事業により当地域の地形に大きく改変され、本遺跡の立地していた舌状の微高地も、東半の突出部がすべて削平されてしまった。

調査前の現況は蜜柑園と畑地であった。

遺跡の範囲としては、この削平された突出部も含め東西約70m、南北約40mに広がると考えられる。

第１次調査は遺構の有無および広がりを確認するため幅２mのトレンチを設定して、1986（昭和61）年３月１日より同月25日まで実施した。

当初は削平された古墳の基底部が検出されるかと思われたが全く検出されず、古墳に関連する遺物の

第19図　遺跡地形図（１：5,000）網目は遺跡範囲

出土もなかった。しかし、中世の遺物を含む土坑やピットが検出されたほか、L・Xトレンチを中心に多量の縄文後期初頭の土器が出土した。

この結果をもとに、第2次調査区を設定した。第1次調査区の南東部を中心とした約1,000㎡で、調査途中に遺物の多く出土する南東部を用地幅いっぱいまで拡張した結果、最終的には約1,400㎡となった。

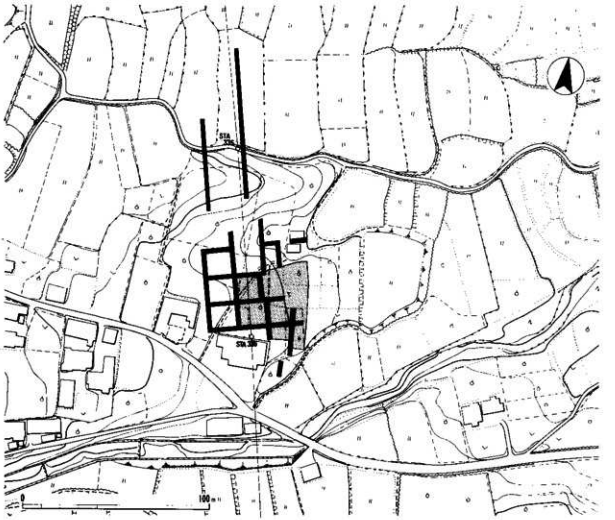
第2次調査は1986年6月30日～10月3日までの期間実施した。

2．調査区の設定

調査区内の地区設定は原則に従って4ｍメッシュで行った。南北の基準線は残存していた道路センター杭で、精度上問題のないＳＴＡ335＋40と＋60杭を南北基準線Ｋとし、西から東へアルファベットを与えた。またこの基準線とＳＴＡ335＋40杭に直交する線を東西基準線11とし、北から南へ数字を与えた。この結果、ＳＴＡ335＋40杭はＫ―11となった。

第1次調査時のトレンチは概ねこの地区割に沿うため、16m毎に土層観察用の畦（幅1ｍ）を残すことにした。ただし、第1次調査のトレンチ設定時には用地買収上の制約から、トレンチが一部不規則になった区域があり、本調査区内の畦も変則的なものとなった。

この土層観察用の畦によって本調査区は大きく8区に分けられるため、便宜上北の3区を西から東へＡ～Ｃ区、中の3区を西から東へＤ～Ｆ区、南の2区を西から東へＧ、Ｈ区と呼称した。



第20図　発掘区位置図（1：2,000）

3．層　　序

本遺跡は扇状地という堆積の著しい地形に立地するため、複雑な堆積状況を示している。
縄文時代の遺構面下には径が１ｍ以上もある岩も含め、多量の礫が厚く堆積している様子が調査後の断ち割りにより確認された。この礫層は河成堆積物と考えられる。

縄文時代の遺物包含層の上層にも部分的な広がりをもつ砂礫層がみられ、縄文時代後期以降にも洪水にみまわれていることが判明した。なお、本遺跡や周辺の遺跡も含めた扇状地域の地形発達史については付篇の論考を参照されたい。

現在この扇状地は開析が進み、岩内川も洪水時に河道を変えることはなくなっている。

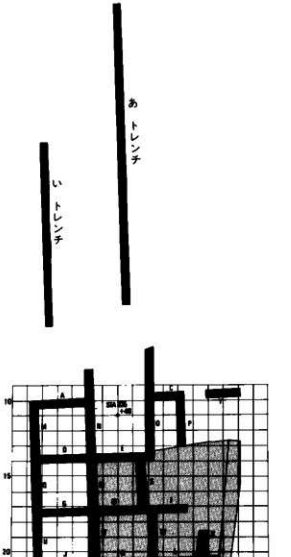
縄文時代の遺物が多出した第１次調査Ｌトレンチと Ｘトレンチの交差部分における層序は以下のとおりである。（Ｅ区南壁東端）

第１層……褐色砂質土（耕作土）　7.5Ｙ R4/4
第２層……明黄褐色砂質土　10Ｙ R6/8
第３層……褐灰色砂礫
第４層……明黄褐色砂質土　10Ｙ R6/8
第５層……にぶい黄褐色土　10Ｙ R5/4
第６層……にぶい黄褐色土（砂礫混り）
第７層……褐灰色砂礫（地山）

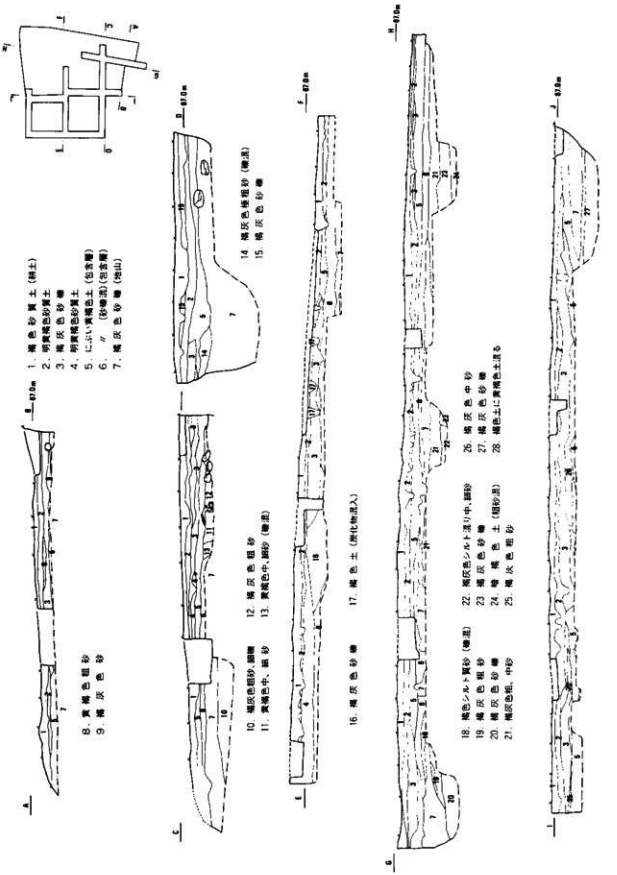
このうち第３層の砂礫層は洪水堆積物と考えられるが、発掘区域の全面には広がらないもので、洪水堆積時の末端部分と考えられる。

中世の遺物は耕作土中に含まれ、遺構は第２層上面で検出した。また弥生時代、縄文時代の遺物は第５層と第６層に含まれ、遺構は第７層上面で検出した。なお、弥生時代の遺物はほとんどすべてが第５層の上面で出土している。また、第３層を挟んで上下に明黄褐色土がみられるが、これは部分的な攪乱と考えられる。基本的にはＨ区の西壁北端部の層序が標準なものである。

縄文時代の遺物包含層は第５層、６層と上下２層に分けられるが、出土遺物に型式差はなく、同時期の堆積層と考えられる。



第21図　発掘区地区割図（１：1,000）



第22図　発掘区土層断面図（1：200）

4．遺構と遺物

下層で検出した縄文時代の遺構には土坑、ピットがあり、遺物は早期末から晩期末までの土器が多量に出土したが、石器の出土は微量であった。

上層遺構としては掘立柱建物、柵列、土坑、ピットなどが検出され、古代末～中世の土師器、陶器などが出土した。

以下に下層遺構・遺物、上層遺構・遺物の順に報告する。

A．縄文時代の遺構と遺物

土坑

ＳＫ１　Ｅ区南中央付近で検出された不定形な土坑である。東西3.3m、南北3.5mで検出面からの深さは20～30cmである。西半は砂礫に切り込まれる。

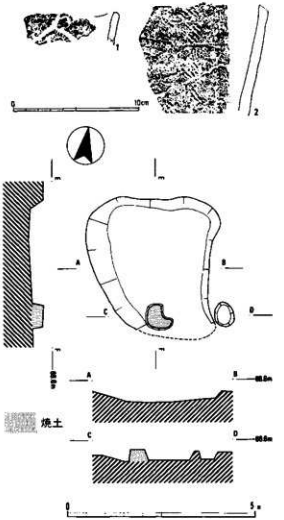
土坑の南端付近には淡く赤変した焼土が見られた。また南端は第１次調査時のトレンチによって掘削されてしまっているが、その付近から完形にちかい深鉢（209）が出土している。

土坑内からの遺物の出土は少量であるが、中期末ないし後期初頭のものである。

（１）は波状口縁の口縁部片である。沈線文が施されるがモチーフは不明である。（２）は深鉢の体部片である。縄文を間隔をあけて縦に転がしたもので、中期末の手法である。この２片のほか、埋土中から（227）の一部分（少片）が出土している。このことよりＳＫ１は後期に属するものと考えられる。

ピット

直径が20～40cmの円形を呈するピットが少数検出された。いずれも出土遺物はなかった。



第23図　ＳＫ１実測図(1:100) 出土遺物拓影(1:3)

以上の他はすべて包含層からの出土であるため、包含層出土の縄文土器として一括して扱うことにする。遺物は包含層中に各時代のものが混在しており層位的な分離はできない。したがって従来の既存型式に基づき分類を行った。

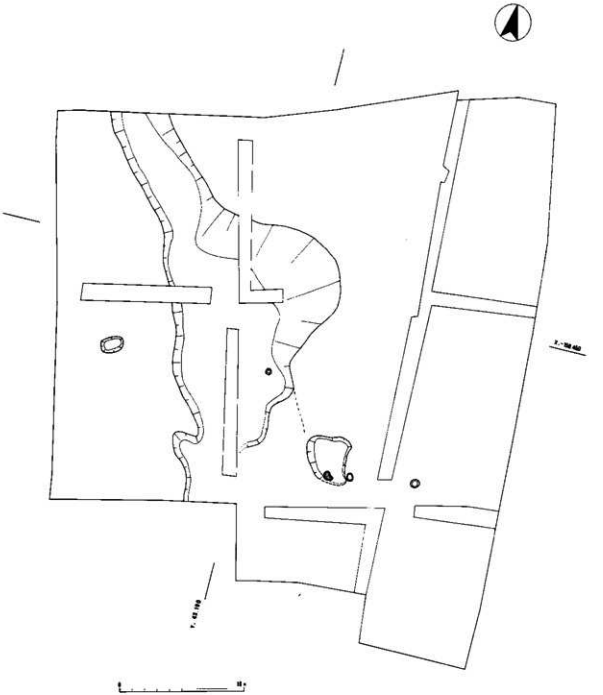
本遺跡の縄文土器は早期末から晩期末に及ぶ。まずそれを６群に大別した。

第Ⅰ群土器……早期末～前期初頭
第Ⅱ群土器……前期
第Ⅲ群土器……中期
第Ⅳ群土器……後期初頭
第Ⅴ群土器……後期末
第Ⅵ群土器……晩期末

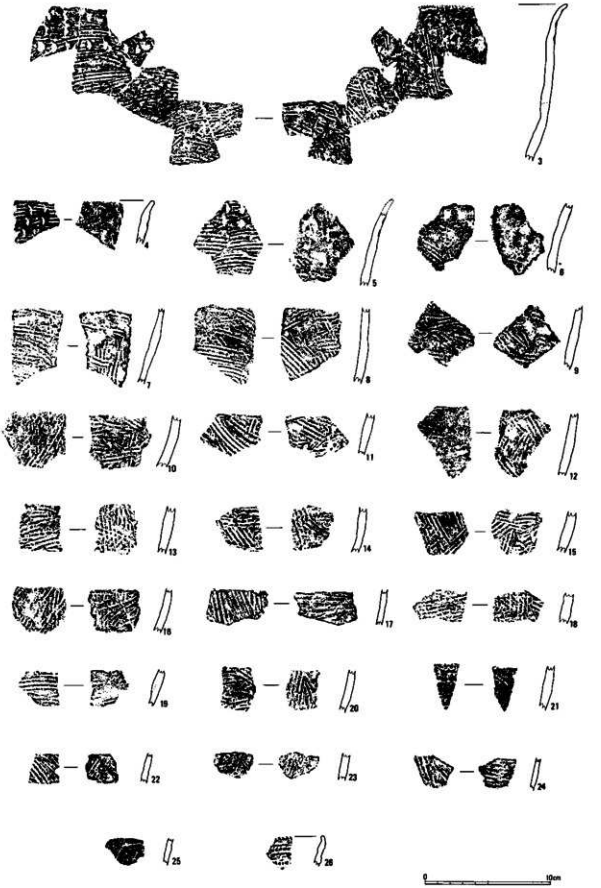
以上のように本遺跡出土土器の主体を占めるのは中期末から後期初頭のものである。

第Ⅰ群土器

深鉢（３～24）　すべて同一個体の破片である。推定口径30.4cmの深鉢で、小片がかなり散った状態で出土した。なかには器面が摩耗したものもみられる。



第24図　縄文時代遺構平面図（1：300）網目は焼土



第25図　縄文土器拓影１（１：３）

頸部がほとんどくびれず、ゆるく外反した短い口縁部につづく。口縁端はやや薄く丸みをもつ。一部にキザミのようにみえる部分があるが、これは器面調整時の貝殻が当ったものであろう。器面には内外面とも二枚貝条痕が施され、外面口縁部下には3段にわたってD字爪形文が連続的に施されている。

胎土は粗く器面はザラザラとした感触を受ける。焼成は良好で堅緻である。胎土には繊維は含まない。

近畿地方の石山VIII式[6]に類似する。また東海地方西部での塩屋中層A式またはB式[7]に類似する。しかしこれも石山VII式同様に条痕が目立たない点、本例と異なる。粟津貝塚湖底遺跡の早期・前期土器[8]（SZ1群・2群土器）が近いかもしれない。

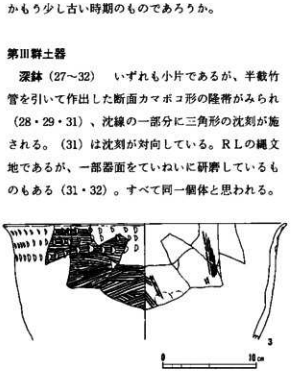
第II群土器

深鉢（25・26）　（25）は小片のため判断に誤りがあるかもしれないが木島式土器の体部片であろう。器壁が薄く、ユビオサエ痕が残る。外面には細い条線が不定方向に施されている。

（26）も薄手の土器である。口縁部下に低い隆帯を貼りつけ、半截竹管で押し引きによる連続C字文が施される。また口唇部にも押し引きが施されΣ字状に似たものとなる。前期末の大破山式に併行するかもう少し古い時期のものであろうか。

第III群土器

深鉢（27～32）　いずれも小片であるが、半截竹管を引いて作出した断面カマボコ形の隆帯がみられ（28・29・31）、沈線の一部分に三角形の沈刻が施される。（31）は沈刻が対向している。RLの縄文地であるが、一部器面をていねいに研磨しているものもある（31・32）。すべて同一個体と思われる。



第26図　縄文土器（早期末）実測図（1：4）

胎土は並であるが比較的薄手でよく焼けている。

注口土器（33）　器形から注口土器か浅鉢と考えられる。対向する三角形沈刻が施されている。

以上、（27）～（33）は東海地方の北裏C1式に類似する。

深鉢（34～68）　（34～47）は同一個体である。口縁部を欠くが、キャリパー形の口縁部をもつ深鉢であろう。（34）は口縁部に近い部分であろう。また（35～38）は頸部付近で、細い竹管を半截したもので弧線や波状文、直線文を施している。（35）にみられる垂下直線文のように、原体を押し引いて施文している。口縁部付近から底部付近まで地文には細かな撚糸文が施されている。底部は若干の上げ底となっている。

胎土は並、砂および金雲母を含み、焼成は良好。全体的ににぶい黄橙ないし黄褐色を呈する。

（50～65）も特徴的な色（赤褐色）を呈するもので、一見して同一個体と判定できるものである。内弯しつつ内傾するロ縁部（50～55）と頸部（56）の傾きからキャリパー形が想定できる。口縁部直下に無文帯をおき、やや下から体部にかけて撚りの粗くて太めの撚糸文が施される。

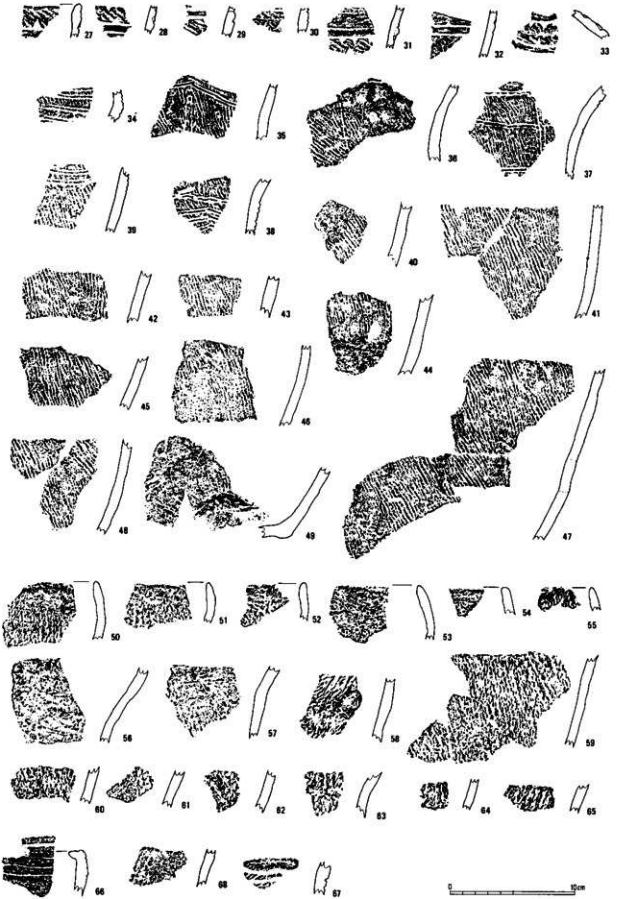
胎土は精良で砂が混るが焼成は良好である。

（66）はL字形に内折した口縁部をもつ。端面は縁帯状となり沈線が1本施される。また口縁部外面にも沈線が3本平行して施される。地文はなく無文である。

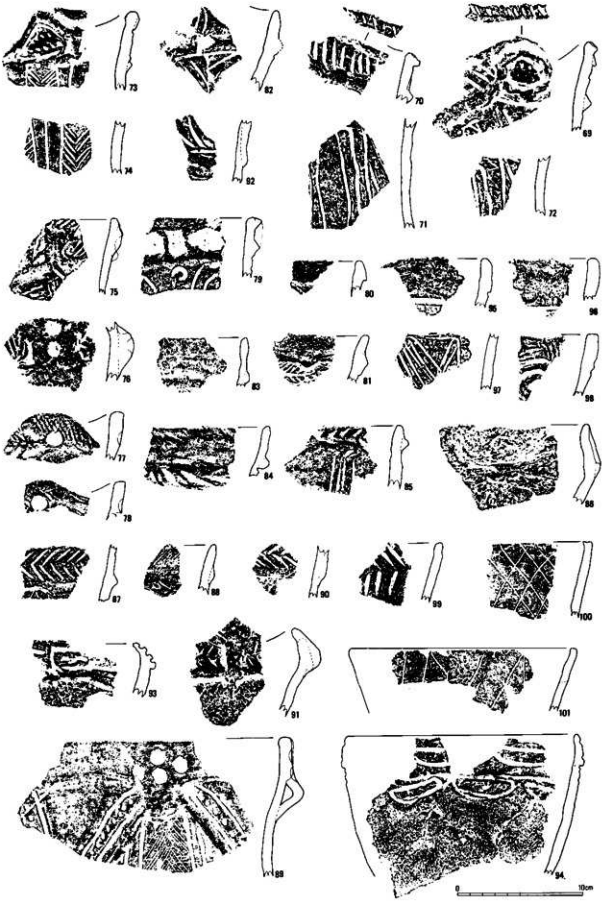
以上の（34～66）は中期後葉の里木II式[9]に類似する。また小片のため不詳だが（67）も同様のものであろう。（68）は胎土、色調から（50～65）に酷似するが、他の時期のものかもしれない。

深鉢（69～158）　いわゆる磨消縄文が成立する以前の段階の土器を中期末として一括した。しかし、これらは多少の時期差が認められる。

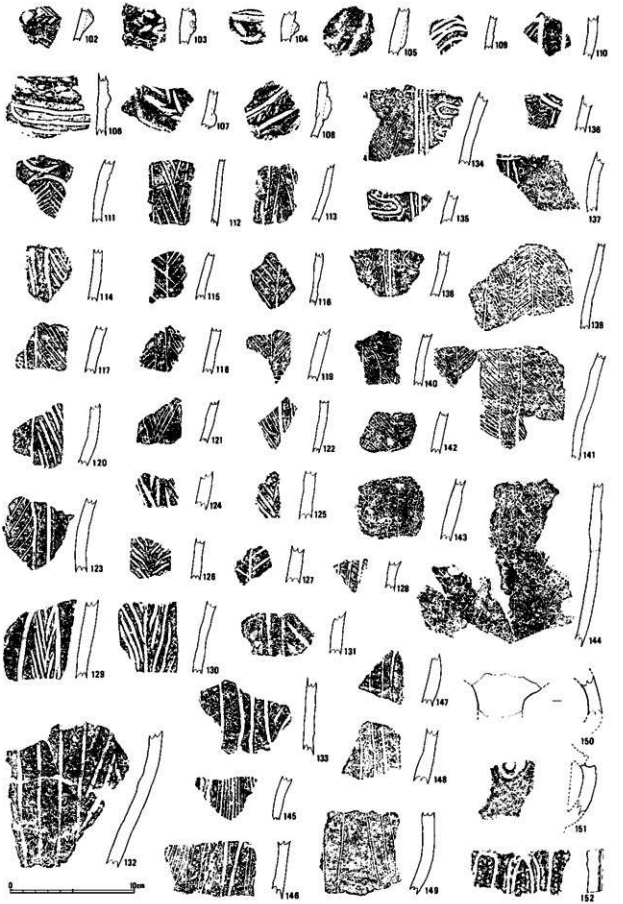
（69～76）は隆帯によって口縁部下に円形や楕円形の区画をつくり、その内部に羽状沈線（75・76）や平行沈線（69・70）、刺突文（73）を施すものである。（79～81）は区画が小さくなり、（80・81）は横位の羽状沈線が施されるが、（79）は何も施文されていない。これらの土器の体部には、垂下沈線と羽状沈線が施されるもの（71～75）や垂下沈線の



第27図　縄文土器拓影２（１：３）



第28図　縄文土器拓影３（１：３）



第29図　縄文土器拓影４（１：３）

頭部が旗状に巻くもの（79）もある。（75）の口縁部直下に縄文らしきものが施される以外に縄文の施文例はない。なお、（69〜72）と（73・74）はそれぞれ同一個体である。

（82〜88）は口縁端部からやや下ったところに隆帯を横走させ、口縁部と体部の文様帯を区別するものである。（83・84）は口縁部文様帯は無文、（86）も無文であるが、隆帯が半月状となる。（82）は波状口縁で頂部口縁部下には同心円状の沈線文が施されるようである。また（85・87）は羽状沈線が、（88）には縄文が施される。体部文様は垂下平行沈線（85）や羽状沈線（82・87）などが施される。（77・78）は同一個体であるが、隆帯もしくは把手が剝離している。

（89〜94）は口縁部が段状に肥厚するもので、横位の羽状沈線（90・91）や長楕円区画（94）、長方形状の沈線区画内に刺突を施す（93）ものなどがある。（91）は口縁部に小突起がつく。（89）は段状に肥厚する口縁部は無文であるが、橋状把手がつき、把手部から体部にかけては斜方向に隆帯が貼られ、その外側に刺突文を挟んだ平行沈線を施す。また内側には垂下平行沈線と羽状沈線（下に開くもの）が施されている。

（94）は肥厚部とその下に横長楕円文を２列配列するモチーフをもつ。このようなモチーフは洗谷貝塚[8]の中津式土器の鉢形土器に類似ものがみられる。本例の場合は口縁部の段状肥厚部が明瞭でなくなってきているものの、下端部の段部がはっきり残っていることから中期末の段階に属すると考えられる。

（95〜101）は頸部がくびれず体部から直線的に口縁部へつづくものである。口縁部文様帯がなく体部文様帯のみで構成される。（95〜97）は同一個体で逆じ字の沈線内に上方に開く羽状沈線が施されるものであるが、口縁部約３cmは無文である。

（100・101）は細い沈線文が口縁部から施文される。（100）は格子状、（101）は間隔の大きな羽状に施されている。いずれもバケツ形の器形であろう。

（99）は横位の羽状沈線がみられる。これは口縁部文様のみで体部の文様は不明である。（98）も縄文地？に渦巻状の沈線がみられるが、体部については不明である。

（102〜149）は体部片である。（102〜108）は口縁部に近い部分で、（109）は頸部の連弧文の部分であろう。体部文様には垂下沈線と羽状沈線の組合せが多い。羽状沈線は上方に開くものと下方に開くものがあり、閉じる部分に沈線が１本入るものと入らないものがあるほか、施文原体の太さの違いによって太いものと細いものがある。また原体に櫛状工具を使用した例（134〜138）もある。（139〜141）は同一個体であるが、縄文（Ｌ）地の土器はこれのみである。

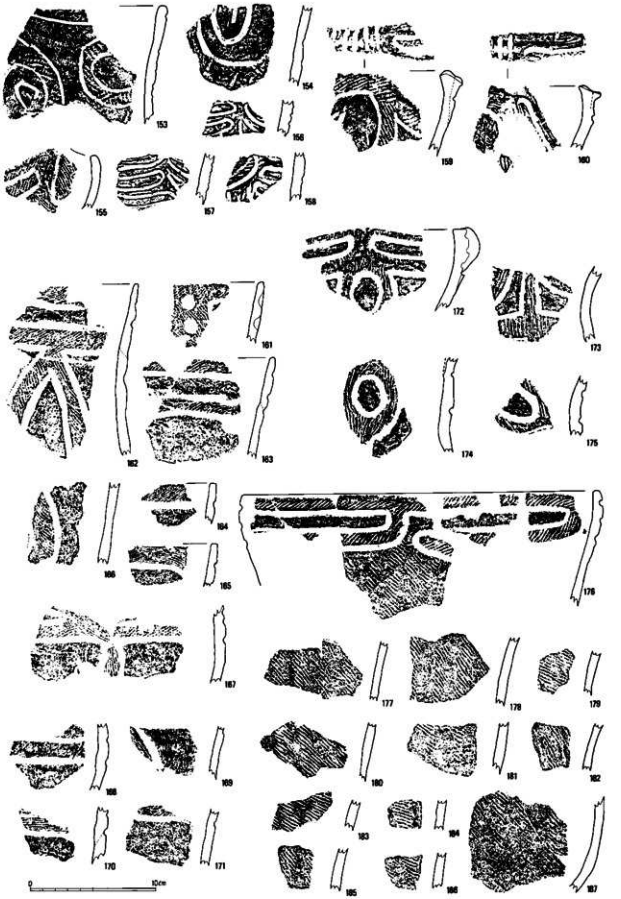
（134・135）は同一個体、（136・137）も同一個体と考えられるが（136・137）は胎土が他の土器と異なる。中部方面からの搬入品であろうか。（134・135・138）には蛇行沈線もみられる。その他、羽状沈線にかえて条線を垂下沈線間に施す例（145・146）などもみられる。

（153〜155）は縄文系の深鉢。（153）は口縁部下に一条の沈線が横走し、その下に渦巻文が施される。部分的に縄文（ＬＲ）を充塡しており、帯状の磨消（充塡）縄文の成立直前をうかがわせる。（154）は渦巻沈線文の下に別の沈線文が展開するようで、そこに縄文らしきものも見られる。（155）は波状口縁であるが、やはり磨消縄文の成立前のものであろう。

脚付深鉢（152）　脚台の付く深鉢の脚部片である。円孔および楕円孔があけられ、その間の器面には沈線文と刺突文が施される。東庄内Ｂ遺跡[10]ＳＢ８出土遺物などに類例がある。

橋状把手（150・151）　口縁部の方が体部径より小さい壺形土器の体部上半につく橋状把手であろう。

第30図　縄文土器（中期末）実測図（１：４）



第31図　縄文土器拓影５（１：３）

（150）は無文、（151）は刺突によると思われる同心円文がみられる。この２点は同一個体か。

第Ⅳ群土器

本群に属する土器が今回の出土土器の大多数を占めている。正確な個体数は把握できないが、およそ150個体程度と思われる。

これらは後期初頭の中津式に相当する。器種としては深鉢が圧倒的に多いが、その他に浅鉢、鉢、双耳壺等がある。深鉢には有文土器に磨消縄文系および沈線文系があり、粗製土器には縄文、条線文を施こした土器、および無文土器がある。ここでは器形と文様構成に着目して分類を行った。

器形としては口縁形態により水平口縁（１類）、波状口縁（２類）、山形突起状口縁（３類）に分けられる。また文様構成は口縁部文様帯（区画文）および紡錘文を有するもの（ａ）、中津式の主文様である J 字文（小渦巻状のものや剣先文も含む）が、器面に対して横方向に展開するもの（ｂ）、同じく器面に対して縦方向に展開するもの（ｃ）に三分され、Ⅳ群深鉢形土器は以下のような器種構成となる。

Ａ１類ａ……磨消縄文系の水平口縁土器で、口縁部区画文と紡錘文を有するもの。
Ａ１類ｂ……磨消縄文系の水平口縁土器で、文様が器面に対し横方向に展開するもの。
Ａ１類ｃ……磨消縄文系の水平口縁土器で、文様が器面に対し縦方向に展開するもの。
Ａ２類ｂ……磨消縄文系の波状口縁土器で、文様が器面に対し横方向に展開するもの。
Ａ２類ｃ……磨消縄文系の波状口縁土器で、文様が器面に対し縦方向に展開するもの。
Ａ３類……磨消縄文系の山形突起状口縁を有するもの。
Ｂ１類……沈線文系の水平口縁の土器。
Ｂ２類……沈線文系の波状口縁の土器。
Ｃ類……横走沈線と縦位縄文施文のもの。
Ｄ類……縄文を全面施文するもの。
Ｅ類……条線文を器面に施文するもの。
Ｆ類……無文土器。

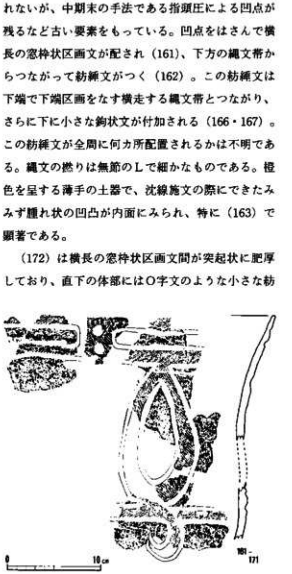
深鉢Ａ類

Ａ類は磨消縄文系の深鉢である。本遺跡出土深鉢の主体を占めるものである。器形はやや内弯する口縁部からゆるくくびれる頸部を経て、肩部でやや張ったのち内弯気味にすぼまって平底の底部にいたるものが一般的である。体部最大径は多くのものが頸部のくびれ部に近い上半の方にある。口縁形態としては水平口縁、波状口縁、山形突起状口縁がある。また磨消縄文（充填縄文）のほかに、縄文を撚状工具による条縁文に置換したり、無文のままのものがある。

Ａ１類ａ（161～175）　２個体あり（161～171）と（172～175）がそれぞれ同一個体である。

（161～171）は口縁部に隆帯や段状肥厚こそみられないが、中期末の手法である指頭圧による凹点が残るなど古い要素をもっている。凹点をはさんで横長の窓枠状区画文が配され（161）、下方の縄文帯からつながって紡錘文がつく（162）。この紡錘文は下端で下端区画をなす横走する縄文帯とつながり、さらに下に小さな鉤状文が付加される（166・167）。この紡錘文が全周に何カ所配置されるかは不明である。縄文の撚りは無節のＬで細かなものである。橙色を呈する薄手の土器で、沈線施文の際にできたみみず腫れ状の凹凸が内面にみられ、特に（163）で顕著である。

（172）は横長の窓枠状区画文間が突起状に肥厚しており、直下の体部にはＯ字文のような小さな紡



第32図　縄文土器161～171復元図（１：４）

第33図　縄文土器拓影６（１：３）

縄文が窓枠状区画とつながって施される。この枝縄文は上下２段に施されると思われる。このような文様構成をとるものは近畿地方ではみられなくて、東日本的な要素をもつものといえよう。愛知県水汲遺跡[8]に類例がある。なおこの（172～175）の土器では、沈線内に充塡する縄文が、櫛状工具による条線文に置換されている。

Ａ３類（156・157）　同一個体の破片である。富士山形をした大きな山形突起をもつ波状口縁深鉢である。口縁端部は面をやや拡張し縁帯部をつくる。そして平坦な頂部には沈線の施文原体と同一の丸棒状工具にて刻目を施こし、両側の斜面部には窓枠状の区画文を施こしている。口縁部外面頂部には小さなＪ字状文が描かれ、無節の縄文（Ｌ）が充塡されている。

この土器は近畿地方の北白川Ｃ式[9]の山形突起状口縁をもつ深鉢Ｃ類の系譜を引くものである。類似の土器は奈良県横原町の高井遺跡[10]にみられる。

Ａ１類ｂ（176～218）　（176～187）は同一個体に属するもので、口縁部下に横長のＪ字文が施される。Ｊ字の沈線内には無節の縄文（Ｌ）が充塡され、頸部以下の無文部には同一の原体による縄文が、間隔をあけて縦に帯状に施文される。これは底部近くにまで及んでいる。

このような縄文を間隔をあけて縦に施文する手法は中期末の手法であるが、ここでは後期初頭まで残ったと考えた。また口縁部の文様も横長の窓枠状区画文の一端が切れたものとして考えられよう。

（188・189）も古い要素をもつ土器である。頸部のくびれはやや強く、体部の張りもやや大きい。口唇部は水平に面をもち、無節の縄文（Ｌ）が施されている。口縁部直下は無文帯で、その下に横長のＪ字文がつく縄文帯が横走する。（189）と接合しないので文様の構成が疑かではないが、縄文部と無文部が逆転したような構成をもつ縄文帯が横走し、横に二帯の文様帯となるものと思われる。あるいは上下の文様帯がＪ字の部分で連結するかもしれない。なお、下の縄文帯は下端区画をなしている。文様の多段化という新しい要素を考慮するならば、さほど古いものとは考えられない。

この土器の体部の縄文帯は、無節の縄文（Ｌ）を沈線間の帯状の部分に対して、直交する形で縦に施文する特殊な施文法を採用している。胎土に大粒の砂粒が多く含まれ、焼成の不良な土器である。

（190～195）は小片ばかりであるが、口径が40cmを超すと思われる大型の深鉢である。口縁部はやや内斜し肥厚する。端部は丸みを帯びるが内面に稜をもつ。口縁部に無文部はもたず、直下から縄文帯が横走し、横長のＪ字文がつく。この先端部は残存していないが、剣先状に尖るかもしれない。またもう一帯の文様帯が体部につくことが（195）から推定できる。縄文は無節のＬを沈線施文後に充塡している。体部内面には煮コゲと思われる炭化物が付着している。

（196～199）は同一個体と思われる。口縁部下に無文帯をおいて平行沈線が施され、縄文を置換したと考えられる櫛状工具による条線が充塡されている。この櫛状工具は原体幅0.5cmで４本の工具である。

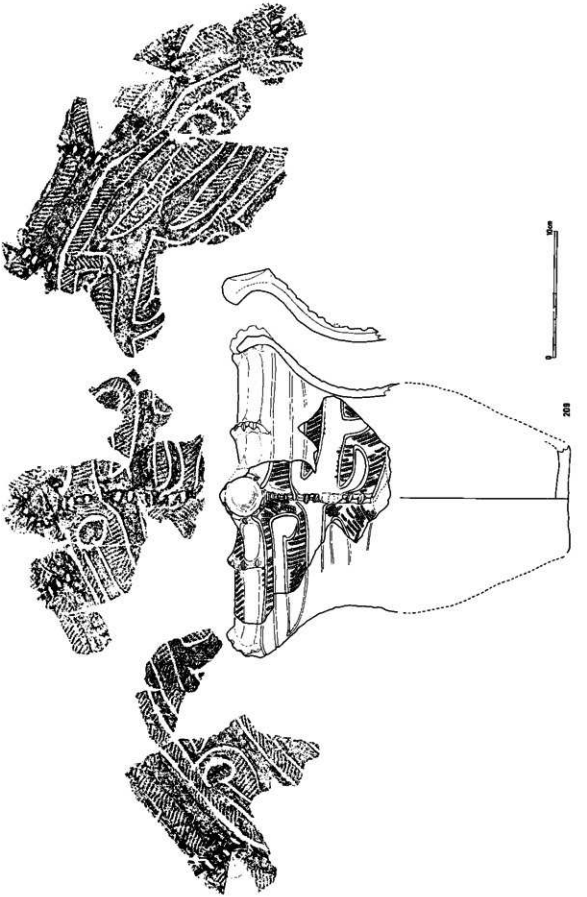
（198）などからすると横長のＪ字文がつくものと思われる。やはりこの土器も横二段の構成をとるものであろう。

（200～208）は同一個体であろう。ただし（200）は別個体かもしれない。頸部のくびれは弱く、体部の張り出しも弱い。口縁部はやや内斜し、端部で丸みをもって肥厚する。ただし端部は水平方向に面をもつ。（188・189）と類似したモチーフであるが、横長のＪ字文の先端は尖らずに丸みをもち、さらに若干折れ曲がるように鉤状となっている。文様の逆転がみられ、横三帯で最下端は下端区画をなしている。体部外面の無文部と、口縁端面および内面は頸部までていねいなミガキ調整。なお、櫛描条線の原体は幅0.9cm、５本である。

（209）は第１次調査時に出土したものである。出土地点はＳＫ１の南端付近で、ＳＫ１との関連も考えられる。

口縁部から頸部にかけてはほぼ残存しているものの接合しない。推定口径は23cm程であろう。頸部から外反しながら口縁部が立ち上り、キャリパー状に内斜する。端面はやや丸味を帯びている。

全周に８カ所と考えられる刻目を有する小突起が配され、そのうち１カ所には小突起の間に大きな突起が入る。この突起は直径３cm程の凹状のもので、



第34図　縄文土器拓影７（１：３）

凹部はていねいなナデ、円周上に刻目が施される。この大突起には刻目の入った隆帯が体部まで垂下しており、東方からの影響がうかがえる。

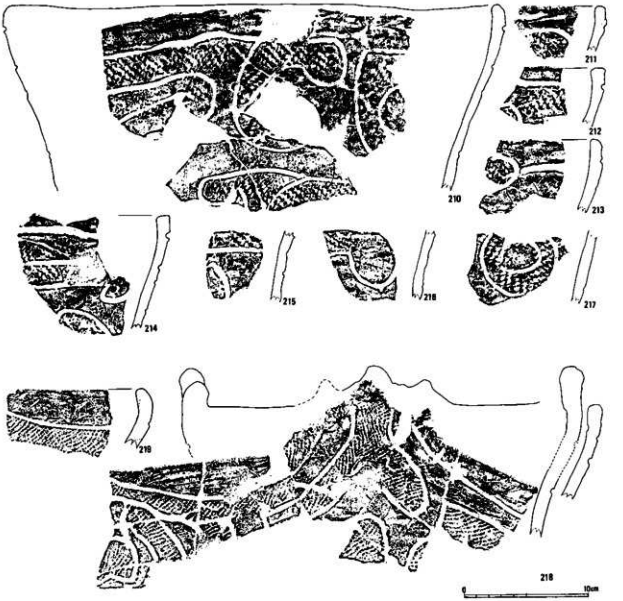
口縁部外面でキャリパー状に内傾する部分には、口縁に帯状に単節の縄文（ＲＬ）を施し、その下を磨いている。全周に８カ所の小突起が、この無文部を縦に区切り、無文部下の横走する縄文帯とで窓枠状区画を形成している。

口縁部につづく頸部から体部にかけては、横長のＪ字文（剣先文）が施される。上下二帯と思われ、それぞれ分離していると考えられる。また下段の横走する縄文帯からは上方にもＵ字形に縄文帯が施され、ちょうど無文部が横長のＪ字を裏返したような文様を構成している。

（210～217）および（218・219）はそれぞれ同一個体に属する。（210～217）はやや肥厚する口縁部は無文で、その下に横走する文様帯がくる。しかしこの文様の描き方はいわゆる中津式のものでなく、沈線が三叉の部分があり一筆書きになっていない。したがって縄文（ＲＬ）は施すものの、典型的な磨消縄文とはなっていない。

（218・219）は３個１対の突起をもつもので、突起部には人字形の文様が施されるほか、複雑な帯状縄文や渦巻文が施される。これも（210～217）同様に、沈線が三叉になるところがある。

以上２個体の土器は、いずれも胎土が粗くザラザ



第35図　縄文土器拓影８（１：３）

ラした器壁で、他の土器と異なった胎土である。
典型的な磨消縄文が成立していない古い段階のものとするか、あるいは中津式土器の文様を知らない者が作ったものと考えるかであろう。

A 1 類 c (220～226)　2個体ある。(220～222)は同一個体で推定口径42cm程の大型の深鉢である。口縁部はほとんど肥厚せず、端部は丸味をもつ。口縁下に無文部をおいて横走する縄文帯から、縦長で2段のJ字文が施される。沈線の幅は広く、太い単節LR縄文が充填される。(222)は体部下半の部分であるが、下端区画をなすと思われる。1本の沈線がみられる。古い要素を残した土器である。

(223～226)は同一個体に属す。口縁部は若干肥厚し、端部はやや丸味を帯びて内弯する。全周に4カ所と考えられる突起がつく。この突起には刺突が施されている。この突起によって区画されるA口縁部無文帯の下に縦2段のJ字文が施されるとともに、このJ字文を囲むように縦方向に区画するための帯状の文様が施される。(223)では明かでないが、2段のJ字文の下方の体上部には横走する下端区画があると考えられる。突起部分から下へ伸びる沈線帯はこの下端区画につながり、両側にはJ字文との間の空白を調整するための沈線帯が、下端区画から上方へ伸びていると考えられる。このように、本例においては縦、横の区画が明確になされており、古い要素を残すが新しい傾向も発生している。なお、本例は沈線内に充填する縄文を、櫛描条線に置換している。原体は幅0.9cmで6本の工具である。

A 2 類 b (227～238)　(227)は小型の深鉢。口縁部から体上部は約4分の3を欠くが、体部下半から底部は完存。口縁部は4波頂のゆるい波状口縁をなすと思われる。(228)のように口縁部に沿ってミガキの無文帯があり、その下に横長のJ字文をもつ文様帯を二帯配している。上下の文様帯は連結しないと思われる。J字文は、やや鋭さを欠くが剣先状を呈する。体部無文部および内面と底部外面はていねいなミガキ調整。小さな土器にもかかわらず、底径の大きな平底の底部がつく。

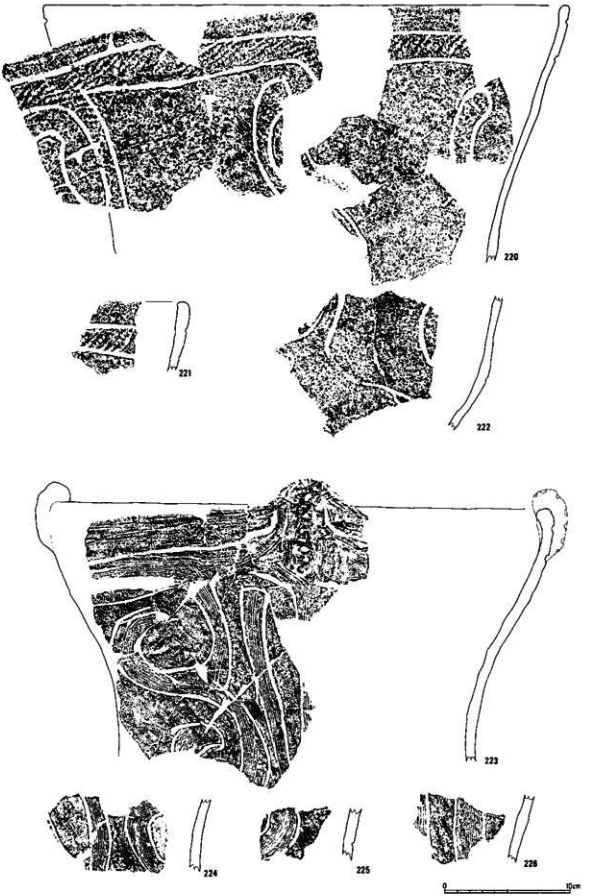
(228～235)は同一個体である。また(236～238)も胎土等がよく似ており、同一個体の可能性がある。(228～235)は推定口径38cm程の大型の波状口縁深鉢である。口縁部は内側にやや肥厚し、4波頂部は丸味をもって大きく肥厚する。口縁部はミガキによる無文帯となっている。その下に単節LRの縄文帯があり、波頂部よりやや右下りの位置からJ字文が付され、ちょうど"J"の末端部が波頂部下の位置になる。そしてさらに左方へ伸び、先端は尖らずに鉤状に下方に曲がる。この鉤状になる部分は、2段目の縄文部の受け部との間の無文部を左右に裏返した横長のJ字文となる効果を作出している。この上下二帯の文様帯は上下には連結しない。また最下段の横長の剣先文は先端部が連続し、下端区画をなしている。なお、(228)でJ字文が左と右で若干異なるのを注意したい。

(230～238)は(228)などと出土地点が約30m離れるが、胎土、色調、縄文などがよく似ている。しかしJ字文の施される位置が、波頂部より左下方となっており、右下方の(228)などと異なる。基本的な文様構成は同じである。

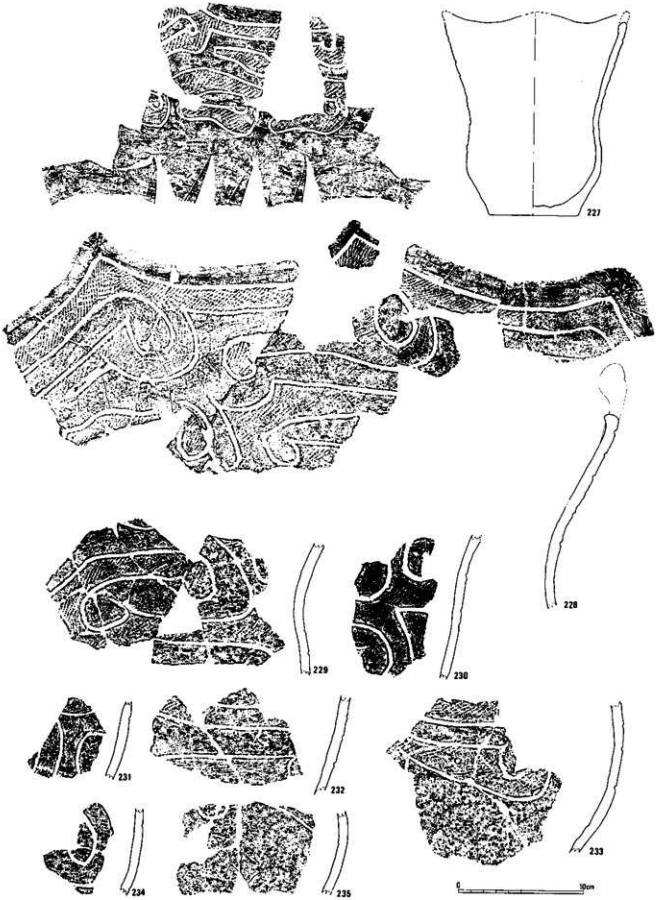
A 2 類 c (239～301)　(243～252)は同一個体。口縁部が外側に肥厚するという古い要素をもつ。遺存状態が悪く、器面の剥落、摩耗が著しい。口縁部が無文部で、その下に太い沈線による幅広の文様帯が横走し、大きなJ字状文が波頂部下に付される。このJ字文は通常のものを裏返したものである。縦位に2段となるものかどうかは確かではないが、(245)のように下段へつながる。(249)や(251)は体部下半の文様の下端部分であるが、明確な下端区画とはならないものの、沈線による下端区画文らしきものがみられる。なお本例は縄文にかえて原体幅1.4cmで12本の櫛描条線文が充填されている。

(239～242)は同一個体である。口径55cm程の大型深鉢であるが、器壁は7mm程度で薄い。口縁部の無文部下に原体幅1.0cmで5本の櫛描条線を充填した文様帯が横走し、波頂部下には大きな縦長のJ字文が、谷部には直線的に垂下する沈線帯が器面を縦に区画している。J字文は縦2段に施され、下端区画も成立していると考えられる。

(253～263)は同一個体。ゆるやかな山形の波状口縁を呈し、端部はやや拡張され軽く面取りされるため、内面に稜がみられる。



第36図　縄文土器拓影９（１：３）



第37図　縄文土器拓影10（1：3）

口縁部下は無文帯であるが、波頂部は縦位に口唇部まで文様が入り込んで無文部を区画している。無文帯下の横走する縄文帯から、縦長のＪ字文（剣先文）が施される。波頂部下にはどのような文様が施されるのか、（253）の資料などからはわからない。主文様となるＪ字文（剣先文）間には、空間をうめるための数形の文様が入るようである。浅黄色を呈し、胎土が特徴的で他の土器と異なる。称名寺式的な土器である。

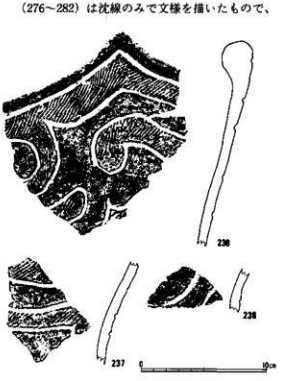
（267～275）も特徴的な胎土で明らかに同一個体とわかるものである。６ないし８個の小波頂部をもつもので、波頂部で沈線が口唇部にまで入り込む。谷の部分が窓枠状の区画となり、区画文の名残りと考えられる。無文帯の下に縄文（無節のＬ）帯が横走し、縦長のＪ字文が施される。

（264～266）は同一個体である。６個の小波頂部をもつもので、波頂部は大きく肥厚し、刻みというよりは太い沈線が、口縁部外面の横走沈線から続いて施されている。体部には縦長のＪ字文が施される。

Ｊ字文間には空間を充填するように、三日月状の文様が施され、櫛状工具による条線文が充填されている。

（267～275）よりやや後出的か。

（276～282）は沈線のみで文様を描いたもので、同一個体と思われる。



第38図　縄文土器拓影11（１：３）

（276）は波状口縁の波頂部より右にやや低い部分で、ごくわずかではあるが口縁端部が残る。縦長のＪ字文が垂下するものであろう。

（277）以下は胎土、施文等の特徴から同一個体と考えたが、別個体かもしれない。その場合もう少し古い中期末の段階のものを含むかもしれない。

（283～298）はすべて同一個体に属す。２個１対の波状口縁で、口縁部に幅の狭いわずかばかりの無文帯を残し、（264～266）に類似する。波頂部よりやや右にずれて太い沈線による縦長の大きなＪ字が施される。沈線内は縄文ではなく櫛描条線を充填する。原体は幅0.9cm、５本の工具と考えられる。

胎土に砂粒が多く含まれ、器面の剥落が著しい。

（299・300）は同一個体。口縁部を欠くが、（299）は口縁部下に施された縦位のＪ字文が２段確認できる。Ｊ字文を取り巻く沈線文が多重化しており、上段と下段のＪ字文は、縄文部と無文部が逆転しており、新しい傾向を示す。沈線内には無節の縄文（Ｌ）が充填される。

このようなモチーフは大阪府恩智遺跡出土土器[8]に類例がある。

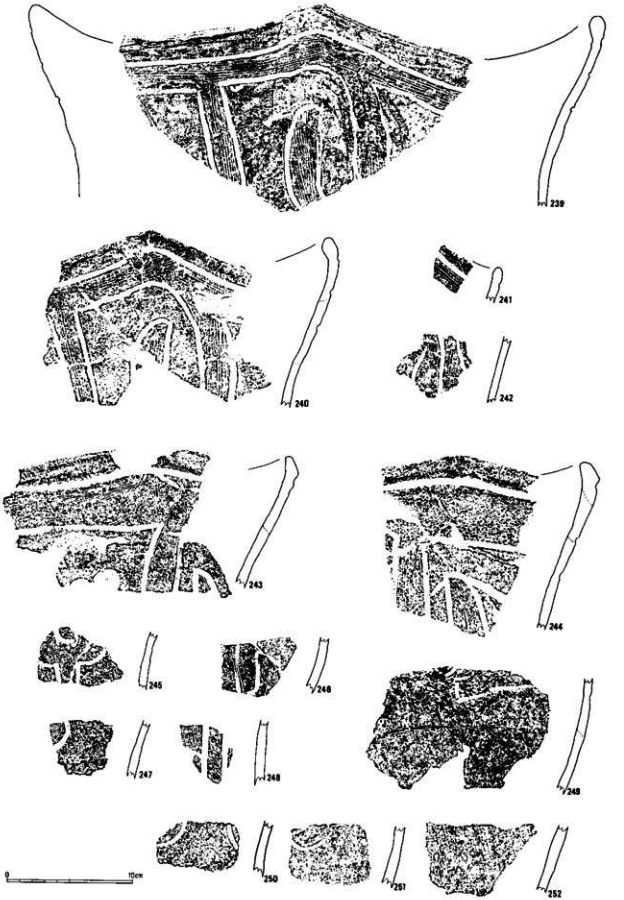
（301）は頸部から体部上半にかけての、縦位２段にＪ字文を施した破片であるが、（299・300）と同様の縄文部と無文部の逆転がみられる。一見して胎土が他の土器と異なるのがわかるが、焼成も良好で堅緻で称名寺式土器そのものと考えられる。[9]

以上、器形や文様構成がかなりの程度判明するものについて述べてきたが、以下には深鉢Ａ類で細分ができないものも含めた小破片などをまとめて簡単に報告する。

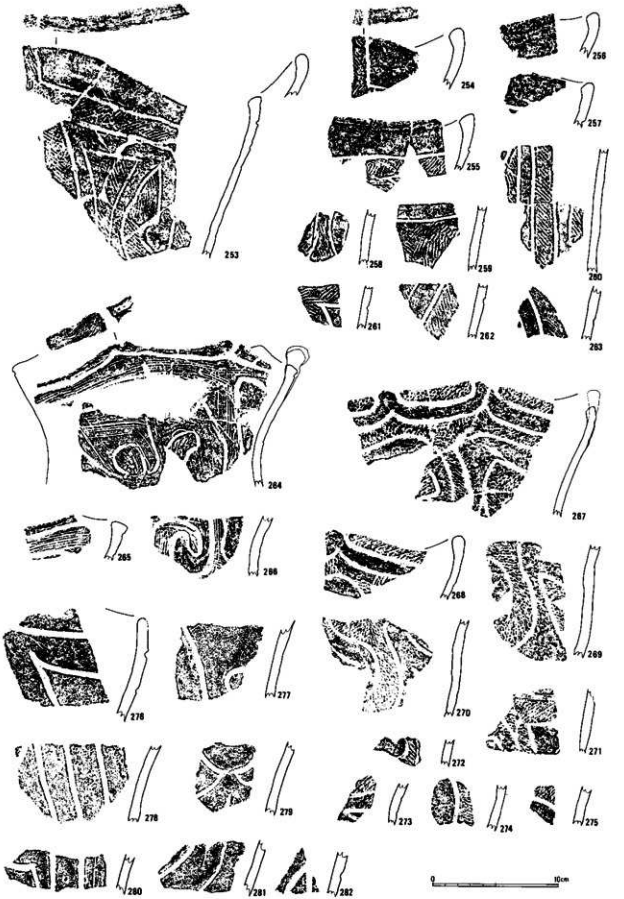
（302～394）が口縁部片、（395～541）が体部片である。（302～346）はＡ１類の口縁部片（一部体部片を含む）である。（302～305）、（306～311）、（312～318）、（324・325）、（333～335）はそれぞれ同一個体である。

（306～311）はＡ１類ｃ種に入れられよう。水平口縁の土器については、口縁部は肥厚しないものが多いようである。

（321）は口唇部にまで沈線が入り込み、縄文も



第39図　縄文土器拓影12（1：3）



第40図　縄文土器拓影13（1：3）

施される。(322) も同様。(346) はより新しいものかもしれない。

(349～394) はＡ２類の口縁部。(350・351)、(353～355)、(360・361)、(362～364)、(371・372)、(378・379)、(388～390)、(392・393) がそれぞれ同一個体である。

(347～365・367～369) は口唇部にまで沈線が入り込み、縄文が口縁部から続いて施文されたり (350・351・365)、刺突されたり (349・360・361・365・369・370)、刻みが施されるもの (348・367)、口唇部に沈線が入るもの (362～364・374)、縄文が施されるもの (371・372) などがある。また (365・366・368・374) などのように貫通孔のあるものもある。

(365) は波頂部が舌状突起化している。

(371・372) は口唇部にも縄文が施されるという古い要素をもつ。しかし、全体的には口縁端部が肥厚する例がほとんどで、なかにはかなり新しい要素を認めることができるものもある。(375) は福田ＫＩＩ式につながるモチーフを有するものである。

(380) などは独特の口縁端部の肥厚がみられ、文様も小さな渦巻状のものとなっており、より新しい時期のものかもしれない。

(395～541) は体部片である。

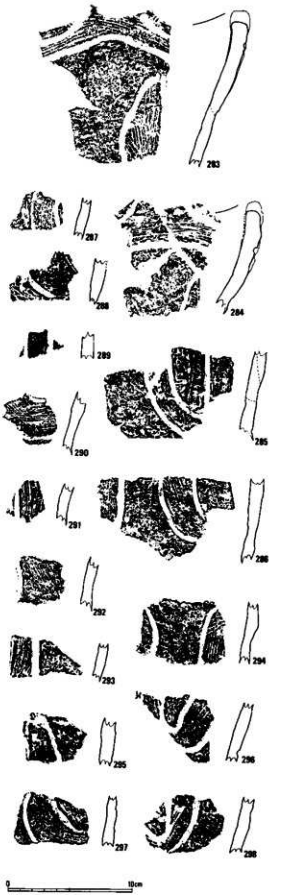
(395) には夫字状のモチーフがみられる。沈線間および下端区画と思われる１本の沈線下には、棚状工具による条線文が施される。その原体は幅１cmで６本の工具である。このモチーフは瀬戸内地方に一般的にみられるものであるが、愛知県水汲遺跡にも類例がある。後述の沈線文土器 (559) のモチーフと関連するものと思われる。

(396) は体部から底部がほぼ残る。どのようなモチーフであるのかよくわからないが下端区画が確認できる。

(397・398) は同一個体。垂下する沈線と、蛇行沈線と思われる沈線がみられる。中期末～後期初頭に位置づけられるものであろうか。

(458) には補修孔と思われる円孔の一部が残る。(469) は下端区画をなす縄文帯である。(470～472) は大型の深鉢の体部下半部。縦長のＪ字文が施されるようである。

(508～510) は同一個体。沈線間を条線で充塡す



第41図　縄文土器拓影14（１：３）

るが、原体は半截竹管である。

（511・512）は同一個体で、櫛条工具による施文。（513～544）は沈線のみで中津式の文様を描くものである。

深鉢Ｂ１類（545・548・550～558・564・565）　水平口縁の土器で沈線で文様が描かれるものである。

（545）は口縁部下に横長のＪ字文状の沈線文が施され、その下には３本の沈線がゆるくカーブしながら垂下する。そのうち左端の１本は逆Ｕ字状になるようである。

（548）は口縁部下に浅い沈線がみられ、口唇部に刻目が入る。（550）は地文に縄文のようなものがみられるが、何かわからない。やや浅いが曲線的な文様が口縁部下に描かれる。口唇部は面取りされ、そこにも縄文を回転施文したような文様がみられる。

（552～558）は同一個体。口縁部に刻目が入り、口縁部下に横走沈線が２本描かれる。その下には蛇行沈線と思われる文様がみられる。この蛇行沈線は、屈曲部にアクセントがつけられ、夫字に通じるモチーフであろうか。また（556～558）のように、Ｊ字文もしくは鈎状文化した破片もある。（552）の最下段の沈線帯は横に連続し、下端区画のようにもみえよう。胎土は精良で焼成も良好な土器である。

（564・565）は同一個体である。口縁部から体部、底部にわたり、かなりの破片が出土したが、口縁部と体～底部は接合しない。推定口径34.2cm、同器高33.5cm。口縁部付近でごくわずかに内弯するが、頸部がほとんどくびれず、直線的に開く深鉢である。

口縁部直下に横長のＪ字文的な文様が連続し、その下には渦文的な文様が施され、それ以下の体部は無文である。ただし一部の体部下半部片には、底部付近にまで垂下する沈線がみられる。

この渦文的な文様は、場所によっては異なり、三叉になる部分もあるなど、文様が定形化していない。中津式成立期前後頃のものであろうか。

またこの土器は水平口縁ではあるが、口縁部下のＪ字文的な文様１単位ごとにごく ゆるやかな小波状を呈している。

（559～563）は体部片のみで口縁部を欠く。（559）ではいくつもの蛇行沈線が垂下するのがみられる。この破片の左半分をみると夫字文のモチーフにつながるように思える。

深鉢Ｂ２類（546・547・549）　波状口縁の沈線文系土器。（546・547）は同一個体と思われる。口縁部に２条の平行沈線が施され、その下に曲線的な文様が施されるがモチーフは不明。

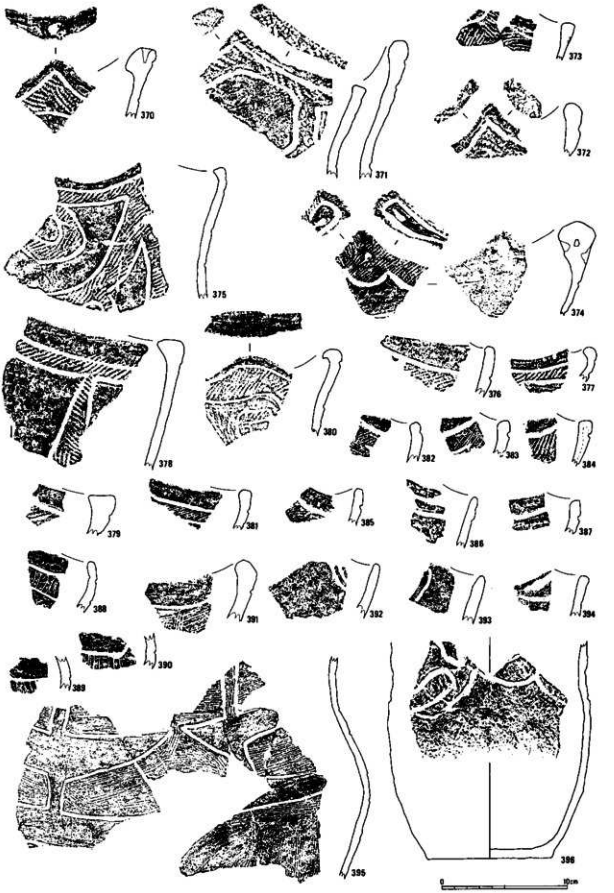
（549）は（548）とよく似た沈線が施される。波頂部に刻目が入る。

深鉢Ｃ類（566～580）　粗製土器のうち、口縁部のやや下ったところに沈線を１本横走させ、体部に縄文を縦位に回転施文するものである。西関東地方の称名寺式の古い階段に多くみられ、加曽利Ｅ式の新しい段階（ＥⅣ式）に組成する粗製土器の系譜をひくものであろうか。今のところ滋賀県能登川町の今安楽寺遺跡例が西限のようである。

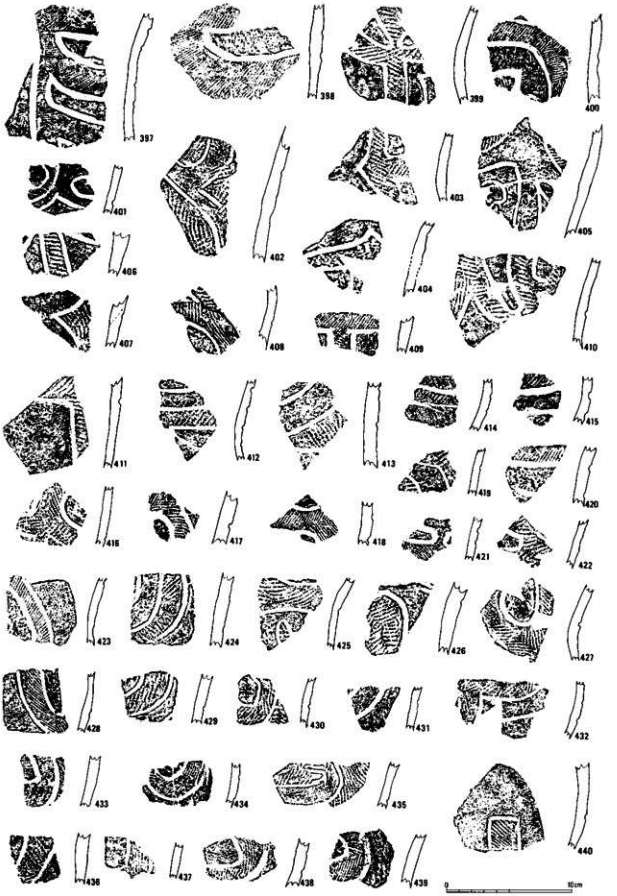
第42図　縄文土器拓影15（１：３）

第43図　縄文土器拓影16（1：3）

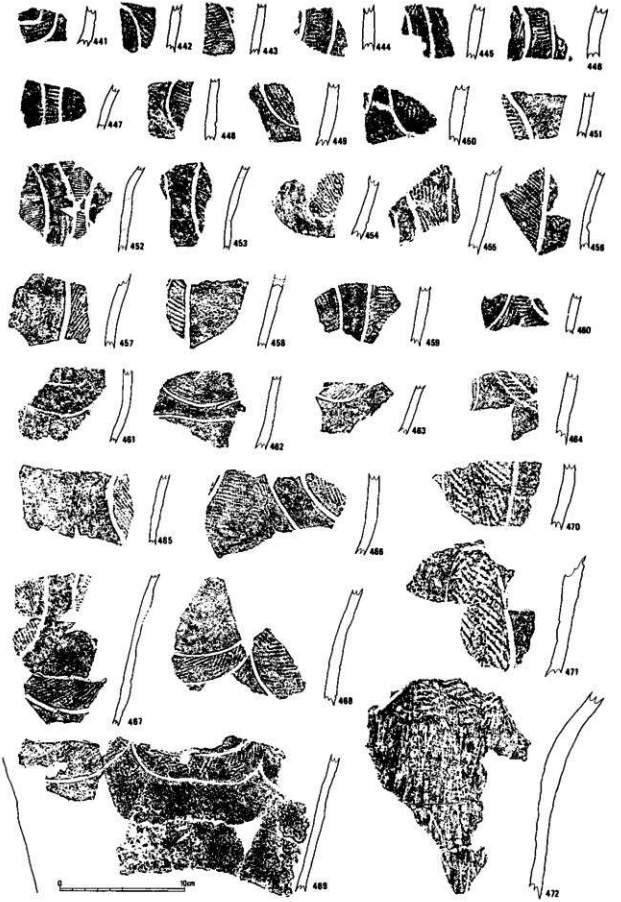
第44図　縄文土器拓影17（1：3）



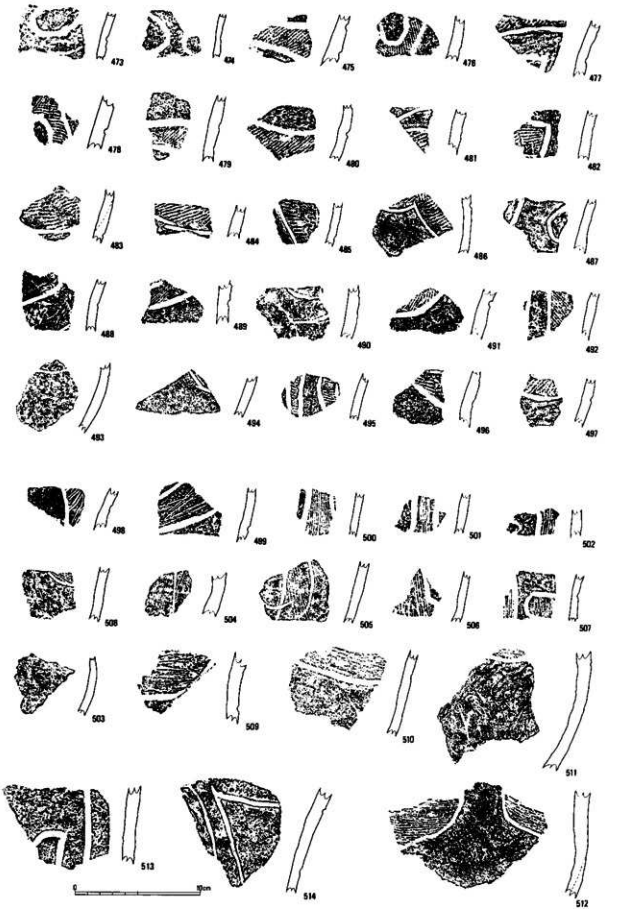
第45図　縄文土器拓影18（1：3）



第46図　縄文土器拓影19（1：3）



第47図　縄文土器拓影20（1：3）



第48図　縄文土器拓影21（1：3）

（566～578）は同一個体である。口縁部の幅約3.5cmの部分は無文で、ていねいなミガキが施される。その下に沈線が１本施され、以下に単節の縄文（ＬＲ）を縦位に回転施文している。同じところに何度も施文されたためか、縄の節が重複しておりやや特異な印象をうける。

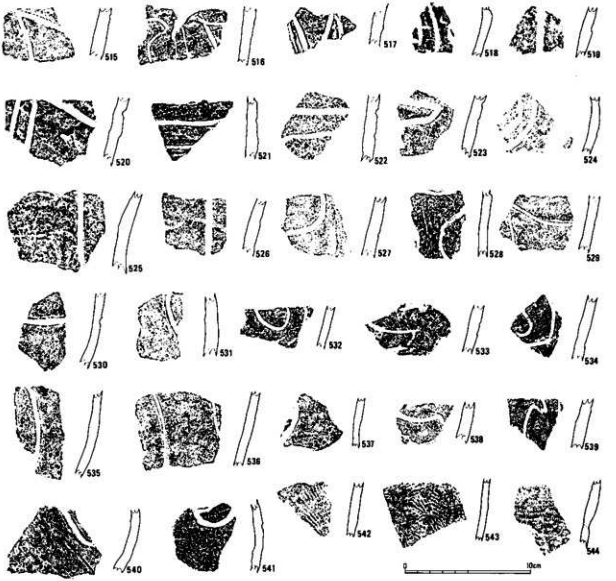
（579・580）は同一個体。（566）などのように口縁部下の無文部がていねいに研磨されていない。体部に縦位回転施文される縄文は無節のＬで、口縁部直下より施文される。

深鉢Ｄ類（581～586）　（581）は波状口縁、（582～584）は平縁の土器である。（581）は単節のＲＬ縄文を、（582～584）はＬＲ縄文を器面全体に施すものである。

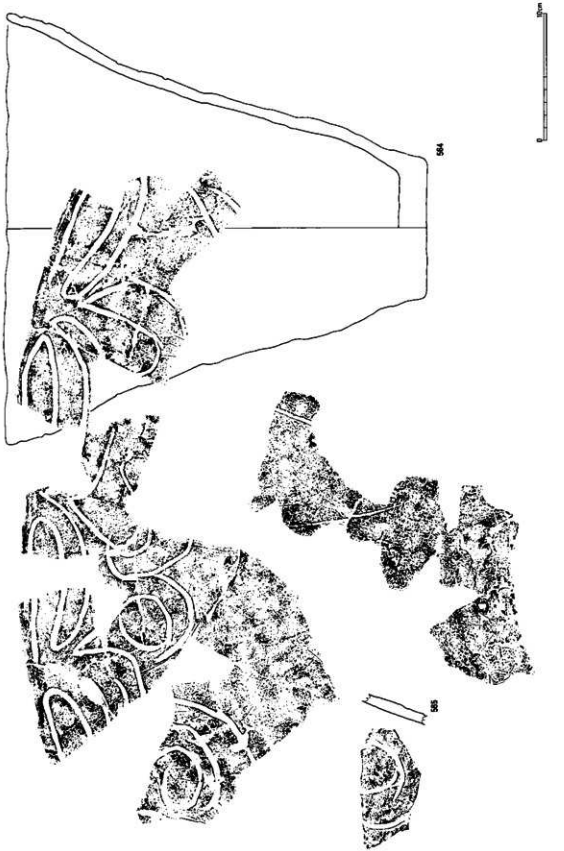
（585・586）の体部片は、磨消（充填）縄文の縄文部であるかもしれない。

深鉢Ｅ類（587～628）　条線文を器面に施すものである。（587～591）は同一個体と考えられる。原体幅2.1cmで７本の櫛状工具で、横長の円形文を縦、横に順次描いていく。愛知県南知多町の林ノ峰貝塚Ｅ層出土土器[9]に類例がある。

（592～602）も胎土の特徴から同一個体と思われるが、（602）は条線の太さがやや細く、別個体かもしれない。やや内弯ぎみの口縁部は端部で肥厚し、丸味をもつ面をもつ。口縁部下で鋸歯状の、体部で交差（595）しつつ、体部下半ではかなり雑に条線



第49図　縄文土器拓影22（１：３）



第50図　縄文土器拓影23（1：3）

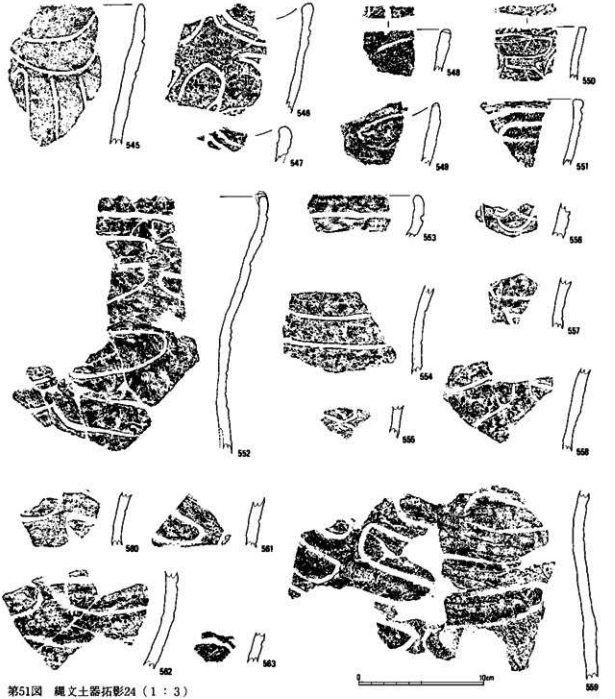
が施されるようである。条線の原体は不明であるが、１本の線の幅が太く、断面形は丸味を帯びるものではなく角ばっているものである。

(603～613) は同一個体。口縁部は特に肥厚しないが、外面には強いヨコナデのために浅い凹線が一条口縁部直下に入る。比較的細い条線を右下りおよび左下がりに施し交差させる。胎土はやや粗いが直径２～３㎜の砂粒を多く含む。

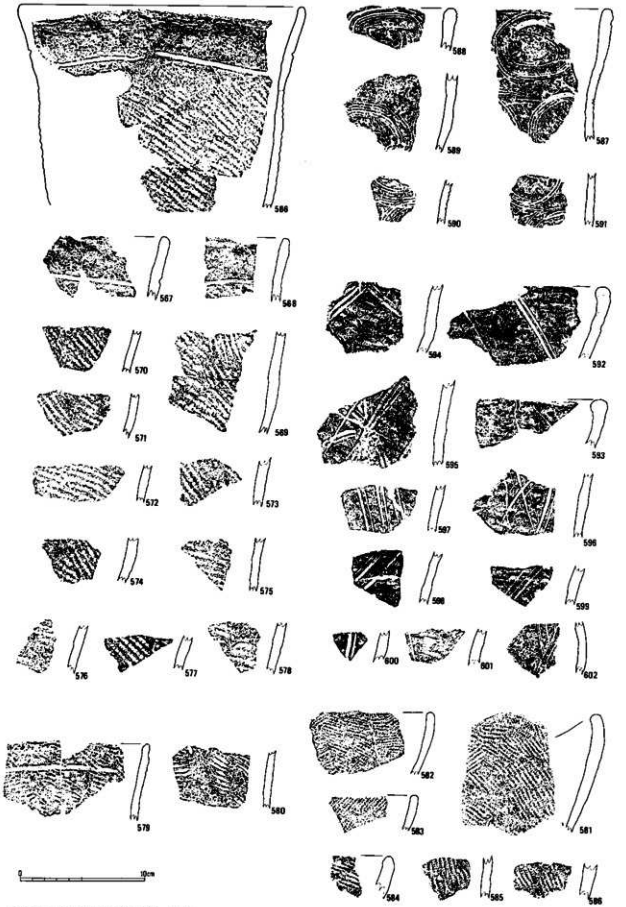
(614～621) は同一個体。他のⅠ類と比べ非常に細い条線が器面に施される。施文は規格性や方向性がなく不規則に施され、(621) のように蛇行させるような部分もある。

(622・623)、(625・626)、(627・628) が胎土等の特徴からそれぞれ同一個体と思われる。(627) の口縁部をのぞいて全て体部下半の破片である。

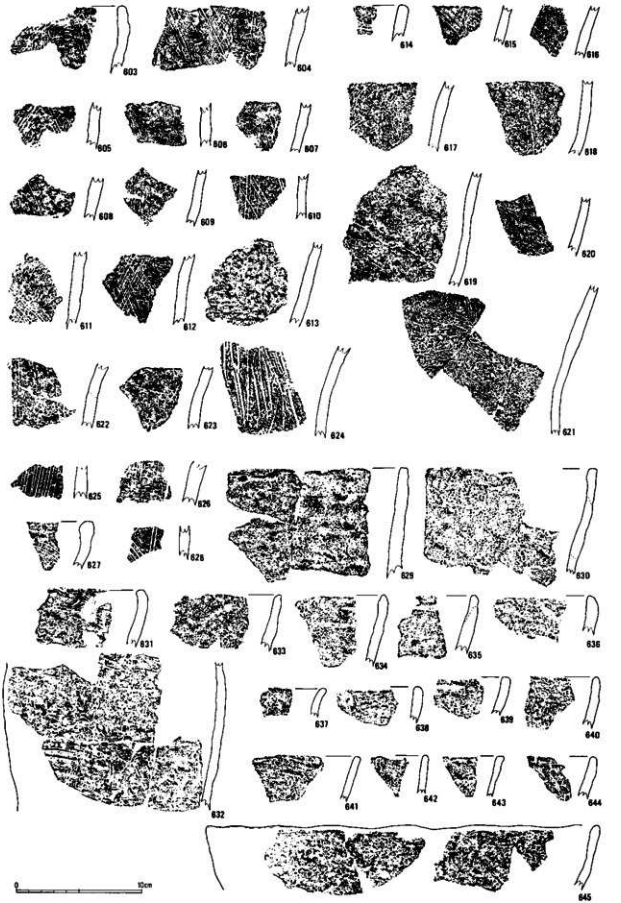
深鉢Ｆ類 (629～645)　無文土器である。有文土器の出土量に比して非常に少ない。器面調整はすべてナデで、条痕やケズリ調整のものはない。口縁部はやや内両するもの (631) や外反するもの (637)、



第51図　縄文土器拓影24（１：３）



第52図　縄文土器拓影25（1：3）

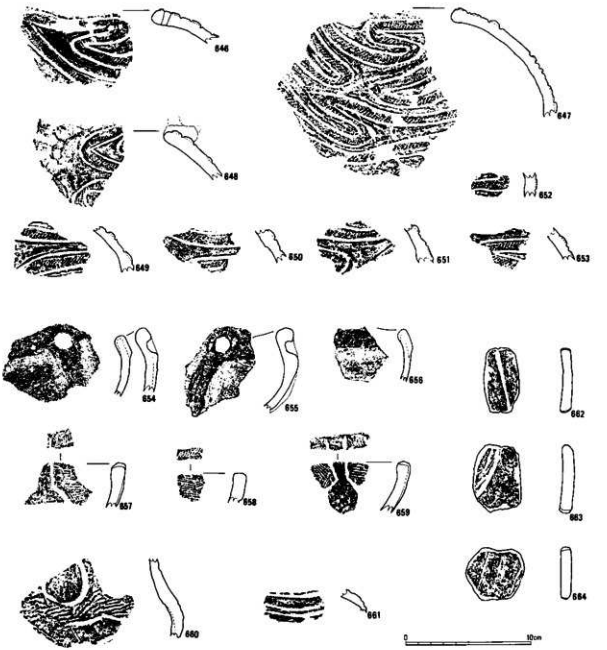


第53図　縄文土器拓影26（1：3）

直線的に開くもの（641）もあるが、大多数は頸部があまりくびれず、若干内弯気味にゆるやかに立上るものである。端部は丸味をもつものが多いが、（629・630・641・643）のように面取りするものもある。

鉢・浅鉢（646～659・661）　（646～653）は同一個体である。破片がやや小さく口径を推定するのに難があるが、およそ20cm程度、最大径40cmほどの大型の鉢形土器である。偏平球状に近い形態で、注口がつくものかもしれない。口縁部は水平に近い状態にまで内傾し、丸く仕上げられている。焼成前の穿孔が（646）にみられるほか、欠損のため形態は不明だが突起も付されている（648）。口縁部から体部にかけて幅1cmの平行沈線による雲形の文様が描かれている。この平行沈線間には粘土紐が貼りつけられ隆帯となっており、ここに単節のLR縄文が施される。縄文は細かなものである。無文部はていねいなミガキ調整が施される。県内及び三重県周辺での類例を知らない。

（654～656）は内弯度の強いボウル形の鉢であろう。器表に文様はなく、内外面ともすべて入念なミ



第54図　縄文土器拓影27（1：3）

ガキ調整で仕上げられている。口縁部に沿って段状に肥厚し、小波状をなす口縁の波頂部にて体部へと縦に肥厚帯（隆帯）が垂下する。(655) ではこの肥厚体が曲線的で、斜め下方に垂下している。また波頂部下には凹点が施される。3点とも同一個体である。この個体は中津式に組成するものかどうか不明であるが、とりあえずここに入れておく。

(657～659) は同一個体で、ボウル形の鉢もしくは浅鉢である。体部の沈線が口唇部にまで入り込み、縄文（LR）も施される。

(661) は口縁部を欠くが、口縁部直下から逆く字状に屈折する浅鉢の体上部の小片である。横走する浅い沈線がみられるだけで所属時期を決めかねる。

双耳壺（660）　体部の破片1片だけであるが、下半部の曲線的な器形から双耳壺と推定。沈線はやや太く、無節の縄文（L）が充塡されている。体上部には把手状の耳がつくと考えられる。この器種は中期末より福田KⅡ式古段階[29]まで安定的に組成し、特に中津式の新しい段階で盛行すると[30]考えられる。

土製品（662～664）　（662）は土器片錘。沈線文の施された体部片の周囲を磨き、上下に切目を入れたものである。重量17.6gである。(663・664) は（662）のように明瞭な切目がみられず、周囲の研磨もみられないことから土器片錘とするのにややためらう。

(663) は沈線間の縄文を条線におきかえたもの、(664) は平行沈線がみられる。

第Ⅴ群土器

浅鉢（665）　1点のみの出土である。口径の推定も難しい小片であるが、逆く字形に屈折した短い口縁部は、端部で外反する。端部は丸く仕上げられ、口縁部外面には浅く不明瞭な2条の凹線が施されている。後期末葉の宮滝式に類似する。

第Ⅵ群土器

深鉢（666～669）　晩期末葉の突帯文土器である。(666) は口縁部下2cmのところに指頭圧によると思われるO字刻目をもつ突帯がつく深鉢である。頸部と体部の境が段や稜をなさず、器形のうえからはほとんど変化がない。ただ頸部は横位の条痕調整、体部は下から上へのケズリ調整と、器面調整の方向を変えて両者を区別している。なお、条痕の原体は不明である。(667) も同一個体と考えられる。突帯文土器の中でも新しい時期[31]のものになろう。（668・669）は二枚貝条痕の施された体部片である。内面には厚く煮焦げの炭化物が付着している。

底部（670～709）

今回の調査において出土した土器底部は、全出土土器の総個体数からみると、量的に非常に少量の感を受ける。ほとんどすべてを網羅しても第55図のごとくである。この中には時期比定の可能なものも含まれるが、すべて一括して収録した。

瀬戸内地方の中津式の底部に一般的な上げ底の底部はほとんどなく、強いてあげれば（678・679・684）くらいで、他はことごとく平底である。また成形技法については明確にしえないものが多い。底部に網代痕の残るものは（681・687・688）の3点である。

石器

土器の出土量に比べ極端に少ない。既刊の概報[32]でも述べたが、土器の出土の多かった発掘区南東部の4m四方のグリッド（Q－23区）1箇所について、層厚約30cmの包含層の土をすべて篩がけしたが、剥片、砕片さえ採集されたかった。

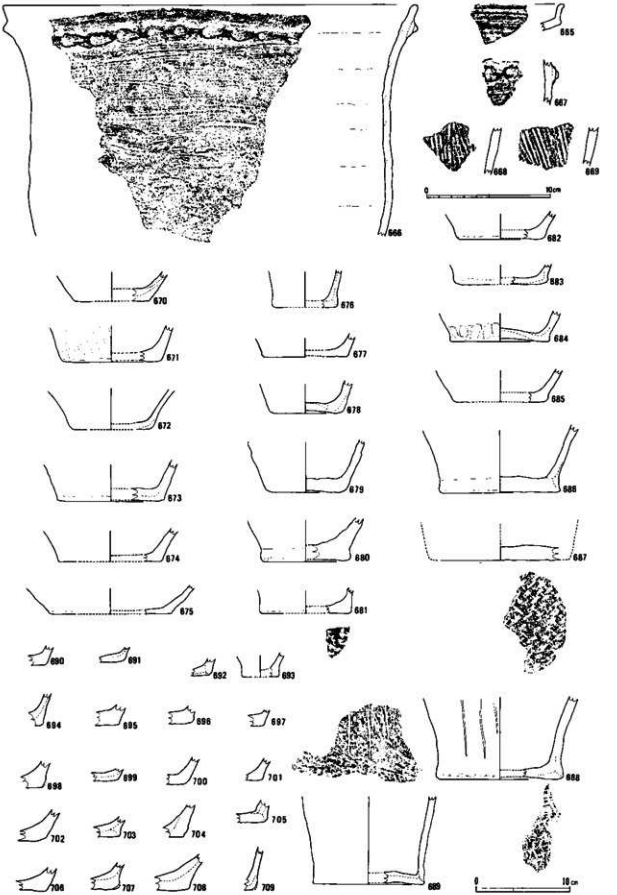
出土した石器には石鏃が5点ある。他に剥片が10片程度あるだけである。

石鏃（710～713）（710）はチャート製の凹基無茎石鏃。脚部の一部を欠失するが、長さは2.26cm、現存幅1.46cm、厚さ0.48cmで重量は1.25gである。第1次調査Lトレンチ壁面から出土。

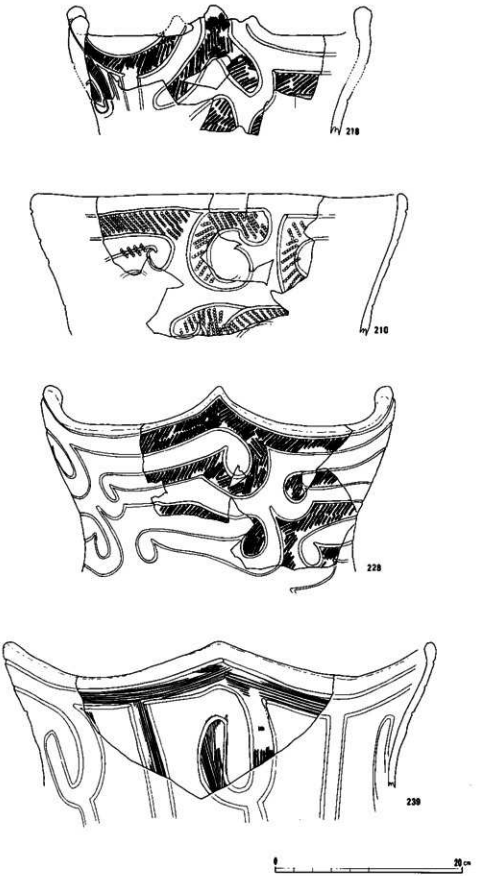
(711) はサヌカイト製の凹基無茎石鏃。先端部と脚部を欠失する。現存長1.65cm、同幅1.34cm、厚さ0.34cm、重量は0.74gである。包含層出土。

(712) はサヌカイト製平基無茎石鏃。先端部を一部欠失する。長さ1.64cm、幅1.53cm、厚さ0.35cm、重量は0.95gである。包含層出土。

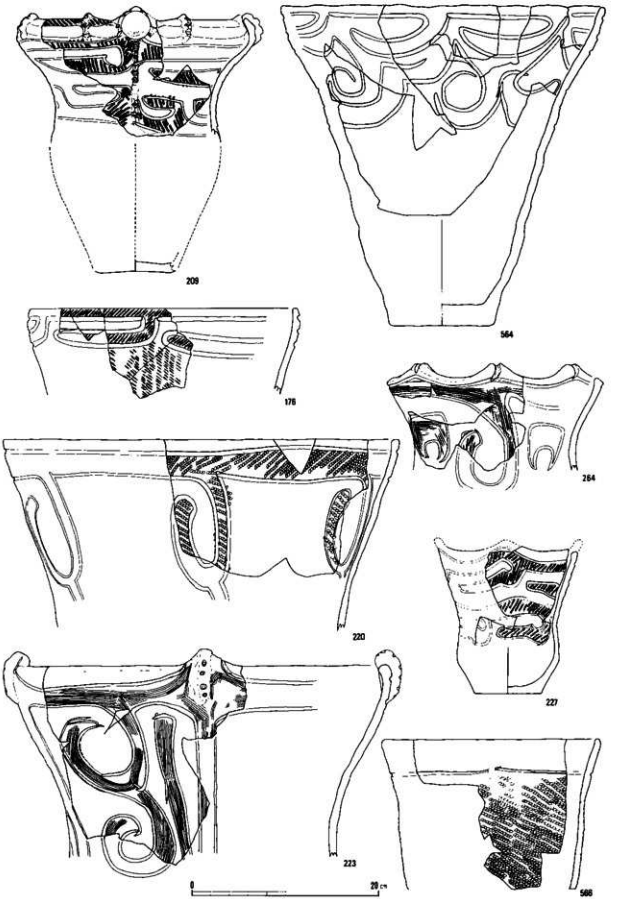
(713) はサヌカイト製の平基無茎石鏃。5点の



第55図　縄文土器実測図・拓影28（665～669は１：３、他は１：４）



第56図　縄文土器実測図（１：４）



第57図　縄文土器実測図（1：4）

出土石鏃中で最大のものである。長さ3.55cm、幅2.44cm、厚さ0.83cmで重量は6.45gである。荒い調整が施される。第1次調査Lトレンチ出土。すぐ近くで（209）の土器が出土している。

（714）はチャート製の凸基石鏃。

剝片（715）　長さ4.41cm、幅は2.57cm、厚さは0.64cm、重量は6.71gである。一部に自然面を残すサヌカイト剝片である。

B．弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は層位的な分離はできなかったが、縄文時代の遺物包含層の上面から出土した。しかし遺構は検出することができなかった。

出土遺物には前期および中期の土器があるが、量的には微量である。

1．前期の土器

壺（716～732）　（716・717）が同一個体、（720～731）が同一個体と思われる。（716）は内外面ミガキ調整の施された壺の口縁～頸部。口縁部が厚く、端部は丸味をもつ。胎土は精良、焼成も良好で橙色を呈する。（717）はその底部片。かなり大型の壺である。（719）は頸部から肩部にかけての破片。細かなハケメののち2本1対のヘラ描平行沈線が器面をめぐる。

（720～730）は（720～723）が頸部下から肩部の破片。5条のヘラ描平行沈線がみられる。（724～727）は肩部～体上部の破片。右下りのハケメののち、5条の平行するヘラ描沈線が施される。（729・730）は体部下半の破片。外面はヘラミガキが施される。（731）もよく似た胎土のため同一個体かと思われる。小さな突起が付されている。胎土は精良で焼成も良く、橙色を呈する。

（732）は頸部の破片。縦位のハケメ調整ののち多条のヘラ描沈線が施される。胎土は精良で砂粒を含み、焼成はよい。にぶい黄橙色を呈する。

甕（736・737）　（736）はやや厚く丸味がかった口縁部をもつ。口縁端部はヘラキザミが施される。また頸部直下には、ハケメ調整の後に横位のヘラ描沈線が2～3条ほど施される。

（737）は口縁端部の刻目のみが施されるものである。（736・737）ともにいわゆる亜流の遠賀川式土器とよばれるものである。

鉢（738・739）は同一個体と思われる。頸部に2本の沈線が確認できる。頸部から口縁部にかけての外反度がゆるく、鉢形土器と判断した。

以上の土器は（719）がやや古い様相がうかがえるが、すべて前期の新段階に位置づけられるものである。

2．中期の土器

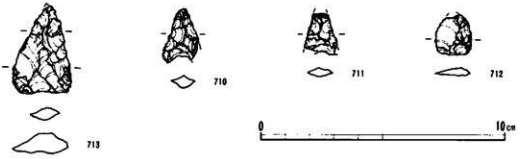
壺（733～735）　（733）は受け口状口縁の壺である。口径6.6cmで、受け口の部分の4カ所が外方へやや拡張され垂れ下り、大きめの刻目が入る。上方から見ると方形を意識したような形である。口縁部外面に横線、体部には横線と波状文が施される。胎土は並、焼成は良く、黄褐色を呈する。

（734・735）は同一個体。頸部から肩部にかけて波状文とヘラ描沈線が施される。

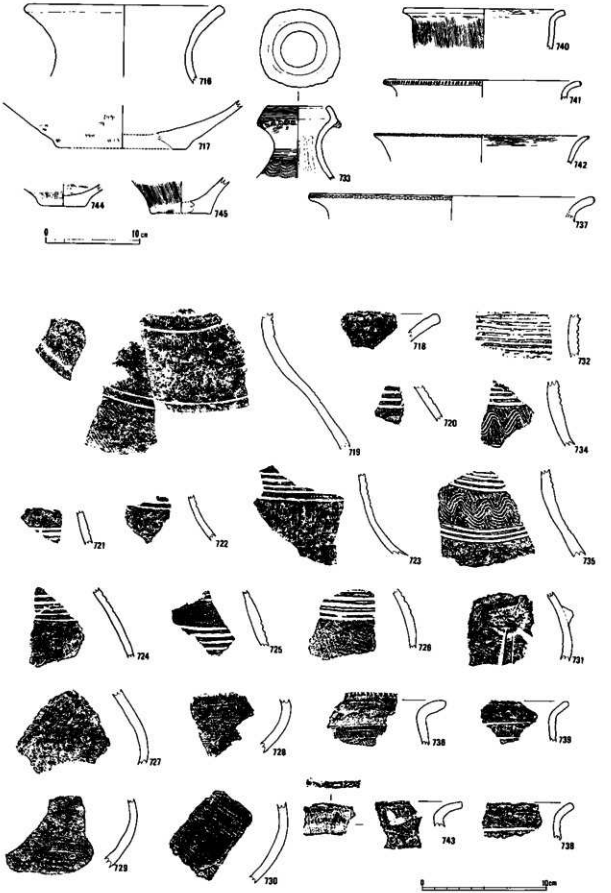
甕（740～743）　（740・743）は口縁端部を刻まないもの、（741・742）は端部を刻むものである。

3．底部

（717）の他に2点ある（744・745）。（744）は壺の、（745）は甕の底部であろう。



第58図　石鏃実測図（2：3）



第59図　弥生土器実測図・拓影（上段は１：４、下段は１：３）

C．歴史時代の遺構と遺物

上層で検出した遺構には、掘立柱建物、柱列、土坑、大小のピット多数などがある。また出土遺物には平安時代から鎌倉時代にかけての土器類、鋳貨、石塔類などがある。

以下に遺構、遺物の順に述べる。

1．掘立柱建物

ＳＢ２・３・４　発掘区のほぼ中央、Ｂ地区とＥ地区にまたがって検出された。２間×３間の東西棟の建物である。ほぼ同じ位置で２度の建て替えが行われている。

ＳＢ２は桁行5.25m、梁行3.8mで柱間は桁行北側柱で1.45m＋2.35m＋1.45m、梁行で1.9mの等間である。棟方向はＥ12.5°Ｎ。ＳＢ３、４も若干の不揃いはあるものの、ほぼＳＢ２と同じである。桁行中央の柱間が広い。柱穴の掘形は直径20～30cm前後で、深さは20～40cm、根石をもつ柱穴もある。地山面が砂礫であるためか、ＳＢ４の梁行東側柱は検出できなかった。柱穴内より土師器小皿（747）が出土した。明確な時期比定は難しいが鎌倉時代と推定。

ＳＢ５　ＳＢ２～４の南約６mに位置する。２間×３間の東西棟で桁行4.0m、梁行3.1m。棟方向はＥ4.5°Ｎである。柱通りはよくないが、桁行北側柱で1.5m＋1.0m＋1.5m、梁行で1.55mの等間である。桁行中央の柱間が狭い。柱穴の掘形は直径20～36cmで深さは30～40cmである。東に90cmほど離れて２間分の柱列が検出されており、建物に伴う塀と考えられる。柱穴内より土師器の細片が出土したが、時期は不明である。

ところで、ＳＢ５西方のＤ地区では多数のピットが検出された。第62図に示したように、ＳＢ５と方位をそろえるような掘立柱建物が想定できそうなのではあるが、柱通りも悪いためここでは建物としては扱わなかった。しかし３間×４間程度の総柱建物の可能性も指摘しておきたい。その場合ＳＫ８はいわゆる南東隅土坑と考えられるものになろう。この土坑からは（752）やロクロ製土師器片が出土しており、概ね南東隅に土坑を有する総柱建物の出現する時期に符合することからも推定できよう。

2．土坑

ＳＫ６　発掘区の南端中央部付近（Ｇ地区）で検出。東西1.5m、南北2.0mの略長方形を呈し、検出面からの深さは30cmほどの底がほぼ平坦な土坑である。南側および西側の壁面の一部に、河原石が残っていた。土坑内からは鎌倉時代の土師器鍋、小皿等のほか（776）が出土した。

ＳＫ７　Ｅ地区の南端中央部で検出。南側の一部は発掘区外にのびる。砂地の地山面を約40cmほど掘り込んでいる。やはり長方形に近いプランである。（775）や土師器片が少量出土した。ＳＫ６とさほど変わらない時期のものであろう。

ＳＫ８　ＳＫ７の北1.5mに位置する。東西2.6m、南北2.0mの長方形に近いプランで、検出面からの深さは約30cmであった。前述のように平安時代末期の（752）などが出土した。

以上のような遺構のほかに多数のピットがある。中でもPit９（直径48cm、検出面からの深さ20cm）からは（777）が出土している。

3．遺物

土師器

小皿Ａ（746～748）　手ずくねにより成形されたもので、ユビオサエ痕が残る。口縁部は丸味をもち、底部にくらべやや厚い。歪みが大きい。（746）は内面に『弘賀』と読める墨書がある。また口縁端部２カ所に油煙痕が見られ、灯明皿として利用されたものと思われる。（747）はＳＢ４出土。

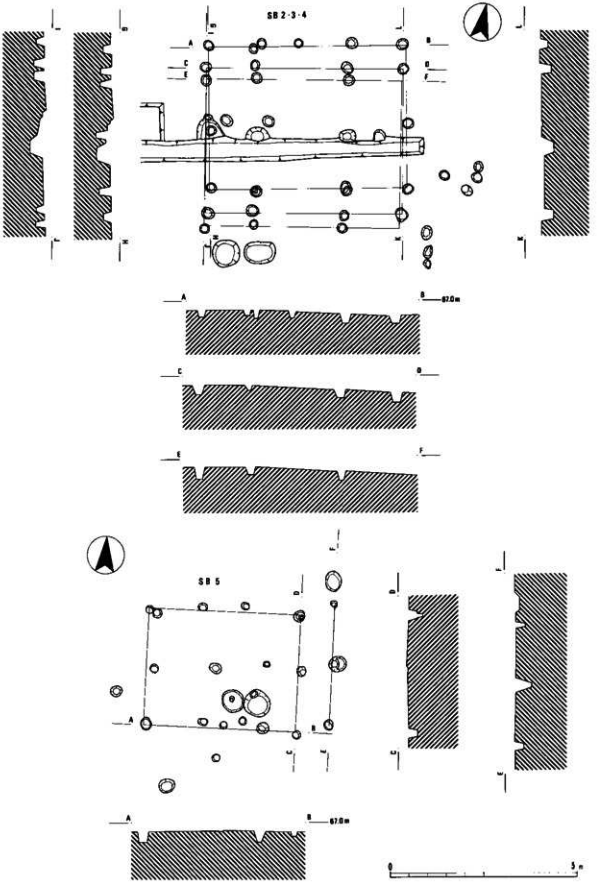
小皿Ｂ（749・750）　手ずくね成形によるが、口縁部に強いヨコナデが施されるものである。器壁は概して厚い。いずれもピット出土。

皿（751）　口径11.4cm、器高2.6cm。底部は非常に薄く、内弯しながら直角に近い立ち上りをなし、口縁端部は尖る。

鍋（752・753）　（752）はＳＫ８からの出土。小片であるが、口縁端部に面をもつ平安時代末期のもので、新田分類の鍋４類にあたる。

（753）も小片である。薄手で小型の鍋で、口縁部は折り返されヨコナデされる。新田分類の鍋６類にあたる。

第60図　歴史時代遺構実測図（1：200）



第61図　ＳＢ２～５実測図（１：100）

瓦器羽釜（754）　ミニチュアの羽釜である。口径は3.8cm、内外面とも暗灰色にいぶし焼きされる。鍔より上部に３本の沈線が入り、ていねいなつくりである。鎌倉時代前半期のものであろうか。

陶器

灰釉陶器（755）　推定底径7.0cm、丸味をおびた角高台がつく椀である。ロクロ水挽、体部上半外面に灰釉（漬け掛け）が施される。東山72号窯式に相当する。

山茶椀（756～773）　（756～760）があトレンチからの出土、（763～773）がＹトレンチからの出土である（756～760）は全体の器形がわかるものがないが、胎土が精良で仕上げも良く、高台は断面が三角形をなすものである。底部外面の糸切り痕はナデ消される。藤澤編年のⅡ段階第３型式～第４型式に相当するものであろう。（756・757）は小椀か。

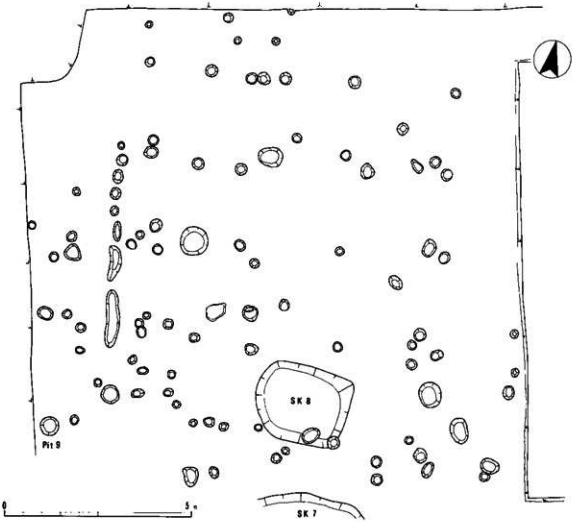
（763～773）はあトレンチ出土のものより新しい様相を呈する。Ⅱ段階第４型式～Ⅲ段階第５型式に相当する。また（763）はもう少し新しいものであろう。

小椀（774）　１点のみ出土した。底部にモミガラ痕がつくが、藤澤編年のⅡ段階第４型式にあたる。なお口縁部に油煙痕が付着している。Ａトレンチから出土したものである。

捏鉢（775・776）　（775）はＳＫ７から出土。（776）はＳＫ６からの出土である。（775）は口縁部の小片。（776）は底部片で断面三角形のしっかりした高台がつく。焼成が甘く、全体に摩耗が著しい。鎌倉時代前半のものであろう。

銭貨（777）　緑青で全面を覆われる。北宋銭の皇宋通宝（初鋳1039年）である。

石製品



第62図　Ｄ地区遺構実測図（１：100）

五輪塔（778～780）と宝篋印塔（781～785）がある。これらは一括して放置されていたものを採集したものである。採集位置は第１次調査時のＢトレンチ（設定のみで掘削せず）の北方数ｍの地点である。付近に墓地はなく、何らかの理由で集められ放置されたものであろう。なお、調査地の北方約250ｍの地点には、本線工事着工時直前まで使用されていた共同墓地（土葬）があり、苔むした一石五輪塔が散在していた。距離的にはこの墓地が近く、本遺跡の石造物も関係するものかもしれない。

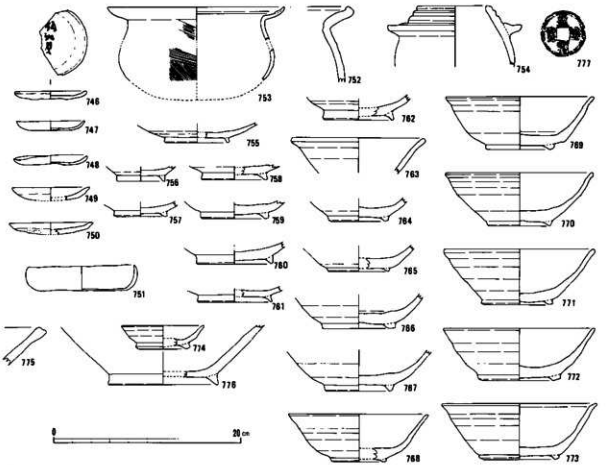
（778）は空風輪、（779・780）は空風火輪、（781～784）は宝篋印塔の相輪、（785）は笠である。

５．結　　語

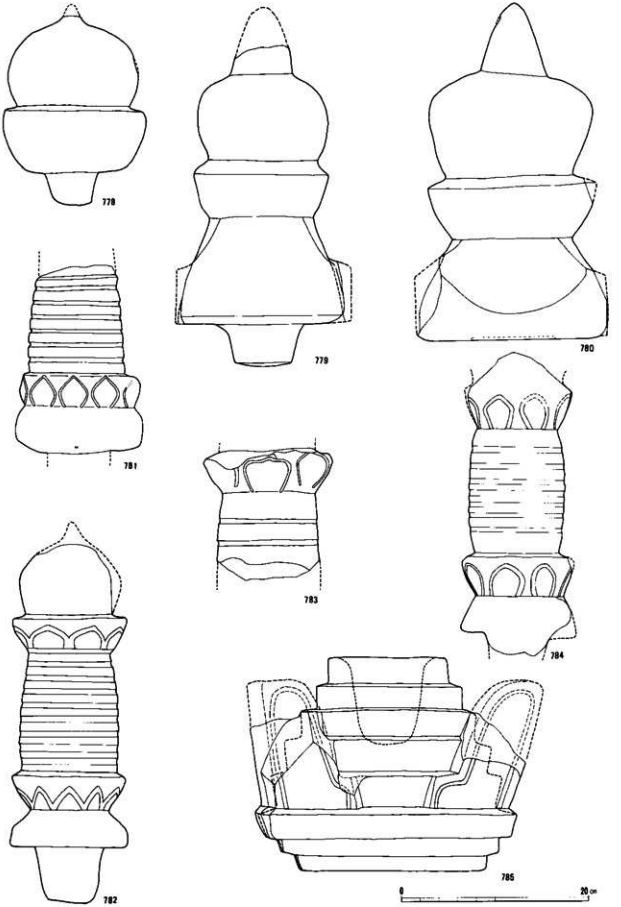
今回の調査では、遺構について注目すべきものは検出されなかったものの、縄文時代の遺物が多く出土し、新たな知見が得られた。出土遺物は早期末から晩期末の各時代にわたるが、なかでも後期初頭に位置づけられる中津式土器が量的に多数を占め、器種構成などを明らかにすることができたと思う。しかし、その結果さらに多くの問題点が提起されることになった。今ここでそれらについて考察する余裕はないが、縄文時代とくに後期初頭の時期について、調査の成果のまとめと若干の問題点についてふれてみたい。

まず遺跡立地についてであるが、当遺跡は地形的にはマクロに見れば扇状地の扇頂部谷口付近に立地している。言い換えれば山地と平野の接点であり、異なる環境帯の利用による食料確保にとって最適の立地であったと考えられる。

またミクロに見れば、調査の経過の項でも記したが、舌状に張り出した微高地が地形図や空中写真から確認でき、おそらくはこの微高地上に集落が営まれたのであろう。残念なことに、その中心部と考え



第63図　歴史時代遺物実測図（１：４、ただし754・777は１：２）



第64図　石製品実測図（1：4）

られる舌状微高地は、すでに圃場整備事業によって削平されていた。しかし、土地の古老の話によると、この微高地の南端部分が、かつて台風による岩内川の洪水のために浸食され、その時に多くの土器が洗い出されたという。それが縄文土器であったかどうかは判定できないが、この微高地に縄文集落が広がっていた可能性は高い。

今回の調査においては、縄文土器が出土するのは発掘区の東南部に集中しており、さらに発掘区外へ広がる傾向であったことなどから、調査区は集落の西縁部にあたるものと考えられる。

このような立地の遺跡であるが、扇状地であるため川の氾濫には縄文人も悩まされたであろう。すなわち、縄文時代の遺構面下には径1mにも達する巨石を混えた河成堆積物が厚く堆積しているし、縄文時代の遺物包含層の直上にも、洪水による砂礫が堆積していたのである。あるいはこの洪水のために藪ノ下縄文人は移住を余儀なくされたのかもしれない。

さて、今回の出土縄文土器のうち多数を占めるいわゆる中津式土器について若干の分析を行いたい。

近年の良好な資料の増加に伴ない、中期末から中津式への変化、そして中津式から次型式の福田KⅡ式へのスムースな変化を把握できるようになってきている。このような背景のなかで、当遺跡の資料は中津式の分布圏の東限に近い地域の様相を知る上での好資料であるといえよう。また関東の称名寺式との対比という点からも重要であろう。鈴鹿市の東庄内A遺跡は学史的にも有名であるが、当遺跡の土器とやや様相を異にしている。

いわゆる中津式に相当する藪ノ下遺跡第Ⅳ群土器の器種には深鉢、浅鉢、鉢、双耳壺がある。深鉢には磨消縄文系（A類）、沈線文系（B類）、口縁部に無文帯を有し、横走沈線下の体部に縄文を縦位施文するもの（C類）、縄文を全面に施すもの（D類）、条線文を施すもの（E類）、無文のもの（F類）がある。深鉢の器形はほとんどが頸部がややくびれ、口縁が内弯気味であるが、C類のように頸部がほとんどくびれないものもある。また口縁形態には水平口縁、波状口縁、富士山形を呈する山形口縁がある。

ところで先学の研究成果によれば、中津式は新古の2時期に区分される。すなわち、今村氏の中津Ⅰ式とⅡ式、および玉田氏の中津・福田KⅡ式土器様式の第Ⅰ様式（中津Ⅰ式）および第Ⅱ様式（中津Ⅱ式）である。玉田氏は第Ⅰ様式をさらに古段階と新段階に二分されている。

第Ⅰ様式古段階は中期末の伝統を残すもので、口縁部文様帯に窓枠状の区画文をもち、胴部に紡錘文が盛行するものがひとつのメルクマールとされている。当遺跡出土土器中にも若干ながら見られる（161～175）。また中期末北白川C式の深鉢C類の系譜を引く富士山型の山形突起を有する（159・160）もこの段階に入るものであろう。

（176～187）は横長のJ字文であるが、典型的な磨消縄文が成立しておらず、体部には中期末の手法である縄文を間隔をあけて縦位に施す手法も見られる。この横長のJ字のモチーフは窓枠状区画の一端が途切れて成立したものと思われる。その他に深鉢B類（沈線文系）中にも中期末的なモチーフの見られるものもある（545・559・564）が、これらが古段階に属するかどうかはわからない。

古段階から新段階への変化は、口縁部文様帯が上方にせり上ってゆく変化としてとらえることができる。窓枠状区画の上の縄文帯がなくて、口唇部から切り込んで垂下する縄文帯は区画文の名残りと考えられる。この新段階に属すると思われるもの（188～298など）が多い。

つづく第Ⅱ様式（中津Ⅱ式）への変化は、文様帯が多段化することにある。また、関東の称名寺式の変化と同様に、中津式でもⅠ式からⅡ式への変化の際にネガとポジの逆転、すなわち縄文部と無文部の逆転の現象が見られる。当遺跡出土例中にも文様帯が多段化した例があり（228～235・299～301）、これらは第Ⅱ様式に属しよう。器形の変化としては、口縁部が次第に肥厚するものが多くなる（228～235）。また沈線がⅠ式よりも細くなり、沈線間の幅も狭くなり、縄文の充填される帯が細くなる傾向がうかがえる。

このように磨消縄文系の深鉢（A類）については、かなり変遷の過程が追えるが、沈線文系（B類）については個体数が少ないことなどの制約もあってか、明らかにすることができない。

関東系の深鉢C類は、中期末から継続して後期初

頭にまで残る土器であるが、滋賀県能登川町の今安楽寺遺跡例から、第Ⅰ様式（中津Ⅰ式）新段階までは残るようで、薮ノ下遺跡出土の（566～580）もこの段階のものと考えたい。

さて次に文様および文様構成についてみると、玉田氏らも指摘するように地域差がみられる。ここで西日本の広域にわたってそれらを詳しく分析する余裕はないが、中津式の分布の東限に近い当地と、瀬戸内地方とではかなりの違いが指摘できる。ここではその概略を示すにとどめ、別稿を期したい。

文様構成の面からみると、縦長のＪ字文や剣先文が多く、横に連結するものの縦方向に文様が展開する深鉢が多いことである。これは関東の称名寺式土器の多くが縦方向に文様が展開していく構成をとることからして、関東地方との交流が密であったことを示している。また、中津式には見られない縦長の剣先文をもつ土器（253～263）や、称名寺式そのものとの指摘を受けた土器（301）も出土している。さらに、口縁部から垂下する隆帯を貼り付け、刻目を施す手法（209）も中津式にはなく関東的であるし、磨消縄文の縄文にかえて沈線間に充塡される櫛状工具などによる条線文も中津式には見られないものである。条線文充塡の類例は、県内では東庄内Ａ遺跡には見られないものの、一志郡嬉野町の桃野遺跡出土遺物中にあるほか、先にあげた今安楽寺遺跡では、関東系の深鉢Ｃ類（口縁部下に無文帯をおき１本の横走沈線下の体部に縄文を縦位施文）とセットで出土した深鉢に見られる。

称名寺Ⅰ式ａ類が、中津Ⅰ式古段階の窓枠状区画と紡錘文をもつ土器と酷似することや、その類例が神奈川を中心とする関東南西部に多いことなどを考えると、中津Ⅰ式古段階では瀬戸内から、新段階で滋賀・三重から関東南西部までが、密接な地域間交流が行われる地域として、ある種の共通した文化圏に属していたことが考えられる。

では次に器面に対して横方向にＪ字文などが展開していく例をみたい。薮ノ下遺跡出土例では縦方向に文様が展開するものと同様、水平口縁の土器にも波状口縁の土器にも見られる。Ⅰ式新段階に相当する（188～199・209）などは横長の剣先文やＪ字文が上下２段に配され、上下の文様は分離している。それらより若干後出の要素の認められる（201～208・228～236）などはネガとポジの文様の発想がうかがえ、縄文の充塡された横長の剣先文を受けて無文帯となる部分が反対側（左側）からのびる無文の剣先文となるような工夫がなされている。つまり剣先文の先端を丸味をもたせて下へ膨らませているのである。これによってポジとネガの剣先文（厳密には剣先文といえないか）を多段化させているのが特徴的である。

横長のＪ字文や剣先文は山陰、瀬戸内、近畿地方にも広く分布していることから、薮ノ下遺跡における横方向への文様が展開する文様構成の土器については西日本の中津式共通の要素としてとらえることができよう。

このほか中津式にはＯ字文や夫字状文なども多く見られるが、薮ノ下遺跡でのあり方は、それらの分布中心地域からの距離的な隔りを感じさせる。

そのほか、無文土器の器面調整法についても、瀬戸内の貝殻条痕に対してナデ調整であることや、縄文の撚りも瀬戸内、山陰のＲＬ優勢に対し、古い段階のＬの優勢、新しい段階のＬＲ優勢が指摘できよう。また瀬戸内の底部の凹底に対し平底である点も地域色としてとらえられるものである。

以上、薮ノ下遺跡出土の中津式土器について若干の検討を加えたが、これら土器群は後期初頭の伊勢湾西岸地域の様相を一定程度示しているものではなかろうか。今後より詳しい検討を加え、当該期土器の地域相に迫ることが課題であろう。

（田村　陽一）

〔註、参考文献〕

調査および遺物整理や関係資料の実見等において多くの方々より御教示をいただいた。記して感謝いたします。（敬称略）

安孫子昭二、石井　寛、泉　拓良、伊藤正人、植田文雄、大野　薫、奥　義次、奥川弘成、加納　実、川崎　保、久保弘二郎、合田幸美、杉山　祥、武田耕平、谷岡陽一、玉田芳英、千葉　豊、土肥　孝、中村　豊、西田泰民、西脇対名夫、平井　勝、深澤芳樹、前原　豊、松尾信裕、梅沢一雲、矢野健一、山下勝年、納田弘実

① 事実に先立つ調査は今回の調査地の北西約200mの地点で小規模なトレンチ調査が行われ、中世の遺構、遺物が検出されている。

中村信裕　「藤の下遺跡」.『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1984

② 坪井清足ほか　『石山貝塚』　平安学園考古クラブ　1956

③ 山下勝年　「所謂石山式土器の再検討」『知多古文化研究』5　1989

④ 泉　拓良ほか　『栗津貝塚湖底遺跡』　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1984

⑤ 関俊彦・森子　『里木貝塚』　倉敷考古館　1971

⑥ 茂谷貝塚発掘調査団　『茂谷貝塚』　福山市教育委員会　1976

⑦ 谷本鋭次　「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』　三重県文化財連盟　1970

⑧ 大橋　勲ほか　『本荘遺跡』　藤岡町教育委員会　1982

⑨ 泉　拓良、宮授祥多、上北白川遺分町遺跡出土の縄文土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告III』京都大学埋蔵文化財研究センター　1985

⑩ 橋原町教育委員会柳沢一宏氏のご厚意により出土遺物を実見させていただいた。

⑪ このような例は大阪府仏並遺跡に類例がある。

岩崎二郎ほか　『仏並遺跡発掘調査報告書』　大阪府埋蔵文化財協会　1986

⑫ このような変化は弥名寺式にもみられ、I式とII式を区別するメルクマールの1つとなっている。

今井信雄　「弥名寺式土器の研究」『考古学雑誌』63－1・2　1977

⑬ 泉　拓良ほか　『恩智遺跡』　瓜生堂遺跡調査会　1980

⑭ 横浜市埋蔵文化財調査委員会　石井　寛氏の御教示による。

⑮ 奈良国立文化財研究所　玉田芳英氏の御教示による。

⑯ 註⑥に同じ。

⑰ 鈴木保彦ほか　「縄文時代中期後半の諸問題」『神奈川考古』第10・11号　神奈川考古同人会　1980・81

谷井　彪ほか　「縄文中期土器群の再編」『研究紀要1982』埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982

港北ニュータウン埋文調査団　『弥号寺式土器に関する交流研究会　資料集』　1985

⑱ 植田文雄　「猪熊遺東岸における縄文後期集落の調査」『第7回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』　大阪文化財センター　1989

⑲ 山下勝年ほか　『林ノ峰貝塚I』　海知多町教育委員会　1983

⑳ 北条町教育委員会　『島遺跡発掘調査報告書第1集』　北条町教育委員会　1983

㉑ 三重県埋蔵文化財センター　難波裕昌氏の御教示による。

㉒ 鈴木克彦　「伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相」『三重県史研究』第6号　1990

㉓ 三重県教育委員会　『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報III』　三重県教育委員会　1987

㉔ 弥生土器については三重県埋蔵文化財センター吉水康夫氏の御教示をいただいた。

㉕ 浅尾　悟　「土坑を伴う中世掘立柱建物について」『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要V』　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1990

㉖ 新田　洋　「平安時代～中世における煮炊用具――I伊勢型」鍋に関する若干の覚書」『三重考古学研究I』　三重考古学談話会　1985

㉗ 梅崎彰一　「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡分布調査報告（III）尾北地区・三河地区』　愛知県教育委員会　1983

倉藤孝正　「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル211号』　1982

㉘ 藤澤良祐　「瀬戸古窯址群I」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要I』　瀬戸市歴史民俗資料館　1982

㉙ 今村啓爾　「弥名寺式土器の研究（下）」『考古学雑誌』63－2　1977

㉚ 玉田芳英　「中津・福田KII式土器様式」『縄文土器大観』4　1989

㉛ 註㉔に同じ。

㉜ 註㉘に同じ。

㉝ 註㉘および㉙に同じ。

㉞ 註㉕に同じ。

㉟ 筆者の知るところでは類例は多くないが、関東にもみられるようである。

神谷佳平　「弥名寺式土器」『縄文文化の研究』4　1981

㊱ 三重県教育委員会　『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報IV』　1988

㊲ 註㉘に同じ。

第4表　出土遺物観察表1

上器No	遺物No	出土位置	時期	器種	部位	文様・施文	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	図版番号	図版番号
1	0633	N 19～20, SK11の旧	中末～後初	深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	精良, 砂・金	並	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄 2.5Y6/3	23	21
2	0749	〃 SK11の1	〃	〃	体部	縄文（L）を縦向方施文	〃	〃	並, 砂（長）・金	良	灰黄褐 10YR5/2	左同	〃	〃
3	0100	O・19第3層上面	早末～前初	〃	口縁部	内外面条痕→D字爪形文	条痕（二枚貝）	条痕（二枚貝）	粗	〃	褐 10YR4/6	暗褐 10YR3/4	25	12
4	0101	O一19型 下層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
5	0102	P一19型	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
6	0103	第1次Xトレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR5/4	左同	〃	〃
7	0106	O・19第2層	〃	〃	体部	内外面条痕	〃	〃	〃	〃	褐 10YR4/6	暗褐 10YR3/4	〃	〃
8	0104	第1次Xトレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
9	0118	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	暗褐 10YR3/3	左同	〃	〃
10	0112	R一20型	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	明褐 7.5YR5/8	灰褐 7.5YR4/2	〃	〃
11	0109	P一19型	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	褐 10YR4/4	暗褐 10YR3/4	〃	〃
12	0119	表採	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10YR5/4	〃	〃
13	0110	P一19型	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	明褐 7.5YR5/6	褐 7.5YR4/3	〃	〃
14	0111	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	褐 10YR4/6	にぶい黄褐 10YR4/3	〃	〃
15	0113	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	明赤褐 5YR5/8	暗褐 7.5YR3/3	〃	〃
16	0107	表採	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 5YR5/6	にぶい黄褐 10YR5/4	〃	〃
17	0105	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10YR5/4	〃 〃	〃	〃
18	0114	O一19型下層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	明褐 7.5YR5/8	暗褐 7.5YR3/3	〃	〃
19	0108	P一19Nb30	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	褐 7.5YR4/3	褐 7.5YR4/4	〃	〃
20	0115	R一20型	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 7.5YR4/6	暗褐 7.5YR3/4	〃	〃
21	0116	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	明褐 7.5YR5/8	黒褐 10YR3/1	〃	〃
22	0117	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黒褐 2.5Y3/1	暗褐 10YR3/3	〃	〃
23	0120	表採	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄褐 10YR5/6	黒褐 10YR2/3	〃	〃
24	0122	P一22, No88	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	褐 10YR4/6	にぶい黄褐 10YR4/3	〃	〃
25	0124	P・17型	前・初	〃	〃	条線	ナデ	ナデ	良	〃	にぶい黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR4/2	〃	〃
26	0123	P 17, No113	前・末	〃	口縁部	半截竹管押引	〃	〃	並	〃	にぶい黄橙 10YR6/3	左同	〃	〃
27	0125	Q一23型	前末～中初	〃	〃	縄文（RL），三角形沈刻	〃	ミガキ	〃	〃	〃 〃	〃	27	13
28	0129	排土中	〃	浅鉢？	体部	縄文（RL？），〃	〃	〃	〃	〃	黒 10YR2/1	にぶい黄橙 10YR6/3	〃	〃
29	0130	Q一23型	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黒褐 10YR3/1	灰褐 10YR5/1	〃	〃
30	0132	表採	〃	？	〃	〃	〃	〃	やや粗	〃	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	〃
31	0126	Q一23型	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並, 砂	〃	〃 〃	オリーブ褐 2.5Y4/4	〃	〃
32	0128	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並, 砂（石・長）	〃	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃
33	0127	〃	〃	注口？〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 10YR5/4	〃 10YR6/3	〃	
34	0169	第1次Sトレンチ	中・後	深鉢	口縁部	撚糸文, 平行沈線	〃	ナデ	並, 砂・金	〃	明黄褐 10YR6/6	左同	〃	13
35	0159	第1次Oトレンチ	〃	〃	頸部	〃 平行押引沈線	〃	〃	並, 砂	〃	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	〃	〃
36	0161	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並, 砂（長）	〃	黄褐 2.5Y5/6	黄褐 2.5Y5/4	〃	〃
37	0157	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	やや粗, 砂	〃	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい橙 5YR6/4	〃	〃
38	0158	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	にぶい橙 7.5YR6/4	〃 〃	〃	〃
39	0165	表採	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃 〃	〃	にぶい褐 7.5YR5/3	〃 7.5YR6/4	〃	〃

第5表　出土遺物観察表2

40	0166	第1次Oトレンチ	中・後	擂鉢	体部	擂糸文	ナ　デ	ナ　デ	並, 砂(長)・金雲母	良	黄　褐　10YR5/8	明　褐　7.5YR5/8	27	13
41	0160	〃	〃	〃	〃	〃		〃	やや粗, 砂	やや不良	にぶい橙　7.5YR6/4	左　　同	〃	〃
42	0164	表採	〃	〃	〃	〃		〃	並, 砂	良	黄　褐　2.5Y5/6	明黄褐　10YR6/6	〃	〃
43	0167	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃　10Y R5/6	左　　同	〃	〃
44	0174	第1次Oトレンチ	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	〃	〃	〃	褐　10Y R4/6	明赤褐　5 Y R5/8	〃	〃
45	0173	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	明　褐　7.5Y R5/8	黄　褐　10Y R5/6	〃	〃
46	0163	R−15包	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	黄　褐　2.5Y5/6	明　褐　7.5Y R5/6	〃	〃
47	0162	第1次Oトレンチ	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	オリーブ褐　2.5Y4/4	黄　褐　10Y R5/6	〃	〃
48	0175	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	褐　10Y R4/6	明　褐　7.5Y R5/6	〃	〃
49	0176	〃	〃	〃	底　部	〃	ナ　デ	〃	並, 砂(長)・金	〃	黄　褐　10Y R5/6	明赤褐　5 Y R5/8	〃	〃
50	0135	P−17包	〃	〃	口縁部	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	精良, 砂	〃	〃　　〃	〃　　〃	〃	〃
51	0136	R−17包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	暗　褐　7.5Y R3/3	暗赤褐　5 Y R3/6	〃	〃
52	0137	R−20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	暗赤褐　5 Y R3/4	明赤褐　5 Y R5/8	〃	〃
53	0138	P−17包	〃	〃	〃	無　文	〃	〃	〃	〃	赤　褐　5 Y R4/6	〃　5 Y R5/6	〃	〃
54	0140	表採	〃	〃	〃	擂糸文	〃	〃	〃	〃	〃　　〃	左　　同	〃	〃
55	0139	R　17包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	暗赤褐　2.5Y R3/4	〃	〃	〃
56	0143	〃	〃	〃	頸　部	〃	〃	〃	〃	〃	〃　5 Y R3/3	黒　褐　5 Y R2/1	〃	〃
57	0141	R−20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	赤　褐　5 Y R4/6	にぶい赤褐　5 Y R4/4	〃	〃
58	0142	R−17包	〃	〃	体　部	〃	ナ　デ	〃	〃	〃	暗赤褐　5 Y R3/3	赤　褐　2.5Y R4/6	〃	〃
59	0150	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	赤　褐　5 Y R4/8	明赤褐　2.5Y R5/6	〃	〃
60	0144	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃　5 Y R4/6	暗赤褐　5 Y R3/4	〃	〃
61	0149	P−17包	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	暗暗赤褐　5 Y R2/4	左　　同	〃	〃
62	0151	R−17包	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃	〃	〃	明赤褐　2.5Y R5/6	〃	〃	〃
63	0145	R−20包	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	赤　褐　5 Y R4/6	明赤褐　5 Y R5/8	〃	〃
64	0153	表採	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	暗赤褐　2.5Y3/6	赤　褐　2.5Y4/6	〃	〃
65	0148	R−17包	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	にぶい赤褐　5 Y R4/4	明赤褐　2.5Y R5/8	〃	〃
66	0131	第1次N北トレンチ	〃	〃	口縁部	沈　線	ヨコナデ	〃	やや粗, 砂	並	にぶい褐　7.5Y R5/4	褐　7.5Y R4/3	〃	〃
67	0133	N−14第2層	〃?	〃	体　部	擂糸文・沈線	ナデ	〃	〃	良	褐　7.5Y R4/4	明赤褐　5 Y R5/6	〃	〃
68	0147	P−17包	中・後	〃	〃	擂糸文	〃	〃	並, 砂	〃	明赤褐　5 Y R5/6	左　　同	〃	〃
69	0187	Q−17, No38	中・末	〃	口縁部	隆帯区画, 沈線文	〃	〃	並	不良	灰黄褐　10Y R4/2	にぶい黄褐　10Y R7/2	28	14
70	0213	R−17包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　　〃	左　　同	〃	〃
71	0213	〃	〃	〃	体　部	羽状沈線文	〃	〃	並, 砂	やや良	灰黄褐　10Y R4/2	〃	〃	〃
72	0212	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	精良, 砂・金	良	〃　　〃	灰黄褐　10Y R5/2	〃	〃
73	0178	R−16, No.9	〃	〃	口縁部	隆帯区画, 刺突・沈線文	〃	〃	並, 砂	〃	にぶい褐　7.5Y R5/4	にぶい赤褐　5 Y R5/4	〃	〃
74	0179	Q　16, No.8	〃	〃	体　部	羽状沈線文	〃	ヨコナデ	〃	〃	〃　　〃	〃　　〃	〃	〃
75	0183	第1次X延長トレンチ	〃	〃	口縁部	隆帯区画, 沈線文	〃	〃	精良, 砂	やや良	にぶい黄褐　10Y R5/4	左　　同	〃	〃
76	0182	Q−23包	〃	〃	〃	沈線文, 凹点	〃	〃	並, 砂(長)	並	浅黄橙　10Y R8/4	〃	〃	〃
77	0198	R−18包	〃	〃	〃	縄文(RL), 隆帯, 凹点	〃	ナ　デ	精良, 砂	〃	にぶい黄橙　10Y R7/4	〃	〃	〃
78	0199	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　　〃	〃	〃	〃
79	0180	Q−14, P 1	〃	〃	〃	隆帯区画, 沈線文	〃	ヨコナデ	並	良	にぶい赤褐　5 Y R5/4	にぶい橙　7.5Y R6/4	〃	〃
80	0203	Q−17, No12	〃	〃	〃	沈線文	ヨコナデ	〃	精良, 砂	不良	黒　褐　10Y R3/1	左　　同	〃	〃

第6表　出土遺物観察表3

遺物No	出土位置	時期	器種	部位	文様・施文	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	図番号	図版番号
81 0200	H区, No.1	中・末	深鉢	口縁部	羽状沈線文	ヨコナデ	ヨコナデ	やや粗, 砂	不良	暗褐 10YR3/3	左同	28	14
82 0201	R—13包	〃	〃	〃	隆帯, 羽状沈線文	ナデ	〃	粗, 砂	〃	同 10YR3/4	褐 10YR4/4	〃	〃
83 0753	R—16包	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃	精良, 砂・金	良	明黄褐 10YR7/6	橙 7.5YR7/6	〃	〃
84 0184	Q—17, No.14	〃	〃	〃	〃 沈線文	〃	〃	精良, 砂(長)	〃	にぶい黄橙 10YR6/3	左同	〃	〃
85 0181	Q—21包	〃	〃	〃	〃 〃	ナデ	〃	並, 砂	〃	〃 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	〃
86 0748	P—17包	〃	〃	〃	〃 無文	〃	ミガキ	精良, 砂・金	不良	にぶい黄橙 10YR7/4	左同	〃	〃
87 0185	第1表L延長トレンチ	〃	〃	〃	隆帯, 羽状沈線文	〃	ヨコナデ	並, 砂	良	〃	〃	〃	〃
88 0246	R—13包	〃	〃	〃	〃 縄文(L)、沈線文	〃	ミガキ	〃	〃	明褐 7.5YR5/6	左同	〃	〃
89 0253	Q—21, No.9	〃	〃	〃	沈線・刺突文, 凹点	ヨコナデ	ヨコナデ	やや粗, 砂	やや良	にぶい黄褐 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	〃	〃
90 0222	R—16包	〃	〃	〃	羽状沈線文	〃	〃	〃	やや不良	暗褐 7.5YR3/3	にぶい黄褐 10YR5/4	〃	〃
91 0177	R—20包	〃	〃	〃	小突起, 羽状沈線文	〃	〃	〃	良	にぶい黄橙 10YR7/3	左同	〃	〃
92 0252	J—16表採	〃	〃	〃	沈線文	ナデ	ナデ	並, 砂	〃	にぶい橙 5YR6/4	〃	〃	〃
93 0186	R—16包	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃	〃	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/3	〃	〃
94 0254	P—22, No.81	中末～後初	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃	〃	〃	橙 5YR6/6	左同	〃	〃
95 0234	Q—23包	中・末	〃	〃	沈線文	〃	〃	粗, 砂	〃	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	〃	〃
96 0233	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃
97 0235	〃	〃	〃	〃	羽状沈線文	ナデ	〃	精良, 砂	〃	浅黄 2.5Y7/3	〃	〃	〃
98 0590	Q—22, No.15	〃	〃	〃	縄文(?), 淡色沈線	〃	ナデ	並, 砂	〃	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	〃
99 0189	第1表X延長トレンチ	〃	〃	〃	羽状沈線文	〃	ヨコナデ	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	〃 10YR6/4	〃	〃
100 0746	〃 I, トレンチ	〃	〃	〃	沈線文	ミガキ?	ナデ	良, 砂・金	不良	灰黄褐 10YR5/2	褐 灰 10YR4/1	〃	〃
101 0741-4	Q—23包, R—20包	〃	〃	〃	〃	ナデ	ヨコナデ	〃	〃	〃 10YR4/2	黒褐 10YR3/1	〃	〃
102 0202	J—16包	〃	〃	〃	羽状沈線文, 凹点	〃	〃	やや粗, 砂	良	明黄褐 10YR6/6	明褐 7.5YR5/6	29	15
103 0247	Q—17, No.7	〃	〃	〃	隆帯区画, 刺突文	〃	ナデ	精良, 砂	〃	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	〃	〃
104 0248	〃 , No.20	〃	〃	〃	隆帯 ギザミ	〃	〃	やや粗, 砂	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
105 0250	R—16, 包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗, 砂・金	〃	明褐 7.5YR5/8	左同	〃	〃
106 0190	第1表L トレンチ	〃	〃	〃	〃 刺突文, 沈線文	〃	ヨコナデ	並, 砂・金	並	明黄褐 10YR7/6	にぶい橙 10YR7/4	〃	〃
107 0251	Q—22包	〃	〃	〃	〃 羽状沈線文	〃	〃	〃 〃	良	にぶい橙 7.5YR7/4	〃 10YR6/3	〃	〃
108 0249	Q—19, No.50	〃	〃	〃	〃 縄文?沈線文	〃	ナデ	やや粗, 砂・金	〃	明赤褐 5YR5/8	左同	〃	〃
109 0257	B区 第3層	〃	〃	頸部	沈線文	〃	ヨコナデ	〃	〃	灰黄褐 10YR5/2	黒褐 10YR3/1	〃	〃
110 0743	Q 23包	〃	〃	体部	〃	〃	ナデ	良, 砂・金	〃	〃 〃	左同	〃	〃
111 0218	R—13包	〃	〃	〃	羽状沈線文	〃	〃	やや粗, 砂・金	〃	暗褐 10YR3/4	〃	〃	〃
112 0240-6	Q—包, 表採	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗, 砂・金	〃	明褐 7.5YR5/8	明黄褐 10YR6/6	〃	〃
113 0242	Q—23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良, 砂・金	不良	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR4/6	〃	〃
114 0223	R—13包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並, 砂	良	にぶい黄褐 10YR5/3	左同	〃	〃
115 0241	P—22, No.82	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良, 砂	不良	にぶい黄橙 10YR7/3	明黄褐 10YR6/6	〃	〃
116 0224	Q 22, No.18	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良, 砂	〃	黒褐 5YR2/2	褐 7.5YR4/3	〃	〃
117 0216	R—15包	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	並, 砂・金	良	黄褐 10YR5/6	赤褐 5YR4/6	〃	〃
118 0209	Q—16, No.2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良, 砂	〃	にぶい黄橙 10YR6/4	橙 7.5YR6/8	〃	〃
119 0210	R—15包	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	並, 砂・金	〃	灰褐 7.5YR4/2	〃 7.5YR6/6	〃	〃

第7表　出土遺物観察表4

120	0208	R−18包	中・末	深鉢	体部	羽状沈線文	ナデ	ナデ	並, 砂	良	褐	10YR4/4	にぶい黄橙	10YR6/4	29	15
121	0217	R−13包	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	並, 砂(長)・金	〃	にぶい赤褐	5YR4/4	にぶい赤褐	5YR5/4	〃	〃
122	0221	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良, 砂	〃	明赤褐	5YR3/3	〃		〃	〃
123	0205	R−14包	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	〃	やや不良	暗赤褐	5YR3/3	左同		〃	〃
124	0227	R−16包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並, 砂	良	にぶい黄褐	10YR4/3	〃		〃	〃
125	0226	Q−21包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	やや粗, 砂	並	褐	7.5YR4/3	にぶい黄褐	10YR5/3	〃	〃
126	0220	Q −15包	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	並, 砂	良	〃		明褐	7.5YR5/6	〃	〃
127	0225	R−15包	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	やや粗, 砂	〃	明褐	7.5YR5/6	左同		〃	〃
128	0236	表採	〃	〃	〃	平行沈線文	〃	〃	〃	〃	褐	7.5YR4/3	にぶい褐	7.5YR5/4	〃	〃
129	0206	R−15包	〃	〃	〃	羽状沈線文	〃	ヨコナデ	やや粗	〃	にぶい黄褐	10YR5/4	左同		〃	〃
130	0207	R 18包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良, 砂・金	〃	暗褐	10YR3/3	にぶい黄橙	10YR6/4	〃	〃
131	0219	R−16包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄褐	10YR5/6	左同		〃	〃
132	0255	R−13包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	やや粗, 砂・金	〃	褐	7.5YR4/4	明褐	7.5YR5/8	〃	〃
133	0214	M −18, №112	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	粗, 砂	不良	にぶい黄褐	10YR5/4	左同		〃	〃
134	0196	第1次Xトレンチ	〃	〃	〃	蛇行沈線文, 羽状文(櫛)	〃	ヨコナデ	並, 砂	良	黄褐	10YR5/8	明黄褐	10YR6/6	〃	〃
135	0742	R−20包	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	やや粗, 砂・金	〃	褐	7.5YR4/3	にぶい黄橙	10YR7/4	〃	〃
136	0751	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	沈線文, 羽状文(櫛)	〃	〃	並, 砂・金	〃	にぶい黄橙	10YR7/4	〃		〃	〃
137	0194・5	第1次Xトレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃	〃	明褐	7.5YR5/8	〃		〃	〃
138	0197	Q−21包	〃	〃	〃	蛇行沈線文, 羽状文(櫛)	〃	〃	並, 砂	〃	褐	10YR4/6	褐	10YR5/6	〃	〃
139	0191	P−21, №30	〃	〃	〃	縄文(L), 羽状沈線文	〃	〃	並, 砂・金	〃	にぶい黄橙	10YR6/3	浅黄橙	10YR8/3	〃	〃
140	0193	〃 , №23	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	〃	〃	暗褐	10YR3/4	にぶい黄褐	10YR6/3	〃	〃
141	0192	P−21包?	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良, 砂・金	〃	黒褐	2.5Y3/2	にぶい黄橙	10YR6/4	〃	〃
142	0752	R 20包	〃	〃	〃	羽状沈線文	〃	ナデ	並, 砂・金	〃	にぶい黄橙	10YR7/3	左同		〃	〃
143	0756	R 19包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙	10YR7/4	〃		〃	〃
144	0229	Q−19, №67	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	良, 砂(石・長)・金	〃	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR5/4	〃	〃
145	0215	第1次Eトレンチ	〃	〃	〃	条線文	〃	〃	並, 砂・金	〃	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい褐	7.5YR5/4	〃	〃
146	0740	R−14包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗, 砂・金	〃	にぶい黄橙	10YR7/3	左同		〃	〃
147	0755	表採	〃	〃	〃	平行沈線文	〃	ミガキ	並, 砂・金	〃	灰黄褐	10YR6/2	〃		〃	〃
148	0754	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/4	〃	〃
149	0741	Q−22包	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	並, 砂(長)・金	〃	灰黄褐	10YR4/2	明褐	7.5YR5/6	〃	〃
150	0844	Q・21包	〃	鉢?	把手	無文	〃	ナデ	良, 砂	〃	にぶい黄褐	10YR6/3	左同		〃	〃
151	0843	P−21包	〃	〃	〃	刺突文	〃	〃	精良, 砂・金	〃	灰黄褐	10YR6/2	〃		〃	〃
152	0204	K−14第2層	〃	内付深鉢	脚部	沈線文, 刺突文	〃	〃	精良, 砂	〃	黄褐	10YR5/6	明赤褐	5YR5/8	〃	〃
153	0258	Q−16, №8	中末〜後初	深鉢	口縁部	渦巻沈線文, 縄文(LR)	〃	ミガキ	精良, 砂・金	〃	褐灰	7.5YR4/1	灰黄褐	10YR5/2	31	14
154	0747	Q−19包	〃	〃	体部	渦巻沈線文	〃	ヨコナデ	並, 砂・金	不良	灰黄褐	10YR5/2	浅黄橙	10YR8/4	〃	〃
155	0391	第1次X延長トレンチ	〃	〃	口縁部	縄文(LR), 沈線文	〃	ナデ	並, 砂	良	灰黄褐	10YR4/2	にぶい黄橙	10YR6/4	〃	〃
156	0884	O−20第3層上面	〃	〃	体部	沈線文	ミガキ	〃	並, 砂	〃	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	10YR7/4	〃	〃
157	0635	第1次X・Lトレンチ交差部	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	やや粗, 砂・金	〃	にぶい黄褐	10YR5/4	〃	〃	〃	〃
158	0636	Q−23包	〃	〃	〃	縄文?, 沈線文	〃	ナデ	〃	〃	灰	N4/1	〃	〃	〃	〃
159	0259	〃	〃	〃	口縁部	口唇キザミ, 沈線区画, 縄文(L)	〃	ミガキ	精良, 砂・金	〃	にぶい黄橙	10YR7/4	褐灰	10YR4/1	〃	16
160	0260	O−19, №62	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	褐灰	10YR4/1	暗灰黄	2.5Y4/2	〃	〃

第8表　出土遺物観察表5

土器No.	遺物No.	出土位置	時期	器種	部位	文様・施文	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	図番号	図版番号
161	0266	Q−23包	後期	深鉢	口縁部	沈線区画，縄文（L），凹点		ミガキ	精良，砂	良	褐　10YR4/6	明褐　7.5YR5/6	31	16
162	0265	〃	〃	〃	〃	沈線，充填縄文（L）	ミガキ	〃	〃	〃	明褐　7.5YR5/6	明赤褐　5YR5/6	〃	〃
163	0267	R−20包・Q23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	橙　7.5YR6/6	黄褐　10YR5/6	〃	〃
164	0269	Q−23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　7.5YR6/8	左　同	〃	〃
165	0268	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良，砂・金	〃	明赤褐　5YR5/8	橙　7.5YR6/8	〃	〃
166	0275	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃	不良	橙　5YR6/6	暗赤褐　5YR3/4	〃	〃
167	0278	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	橙　7.5YR7/6	明赤褐　5YR5/6	〃	〃
168	0280	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	〃	〃	橙　7.5YR6/8	灰褐　7.5YR4/2	〃	〃
169	0273	〃	〃	〃	〃	ナデ	ヨコナデ	〃	〃	〃	左　同	〃	〃
170	0279	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	〃	〃	〃　5YR6/6	にぶい黄褐　10YR5/3	〃	〃
171	0272	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良	橙　5YR6/8	橙　7.5YR5/6	〃	〃
172	0261	第1次Xトレンチ	〃	〃	〃	沈線区画文，条線充填	ミガキ	ミガキ	良，砂・金	〃	黄褐　2.5Y5/4	オリーブ褐　2.5Y4/6	〃	〃
173	0264	Q−20，No.9	〃	〃	頸部	沈線，条線充填	〃	〃	〃	〃	にぶい橙　7.5YR6/4	左　同	〃	〃
174	0262	第1次Xトレンチ	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃	〃	オリーブ褐　2.5Y4/6	にぶい黄褐　10YR4/3	〃	〃
175	0263	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄褐　10YR5/4	にぶい黄褐　10YR5/3	〃	〃
176	0282	〃	〃	〃	口縁部	沈線，縄文（L）	ナデ	〃	粗，砂	〃	橙　7.5YR6/6	橙　5YR6/6	〃	〃
177	0286	〃	〃	〃	体部	縄文（L）横縄文	〃	〃	粗，砂・金	〃	〃　5YR6/8	〃　〃	〃	〃
178	0287	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃　〃	〃	〃
179	0294	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃　〃	〃	〃
180	0288	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	橙　7.5YR6/8	〃	〃
181	0290	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　5YR6/6	左　同	〃	〃
182	0295	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　7.5YR7/6	〃	〃	〃
183	0289	第1次Xトレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　5YR6/6	橙　7.5YR7/6	〃	〃
184	0297	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃　5YR6/8	〃	〃
185	0292	P−20，P 1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	左　同	〃	〃
186	0293	P−20，No.11	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃
187	0291	第1次Xトレンチ	〃	〃	〃	〃	ナデ	〃	粗，砂（石・長）金	〃	橙　7.5YR6/6	にぶい黄褐　10YR5/4	〃	〃
188	0305	Q−19，No.46	〃	〃	口縁部	沈線，充填縄文（L）	〃	ヨコナデ	精良，砂	不良	褐灰　10YR4/1	〃　10YR5/3	33	17
189	0305	〃	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐　10YR5/4	〃　〃	〃	〃
190	0309	Q−23包	〃	〃	口縁部	〃	ミガキ	ミガキ	粗，砂	良	〃　10YR5/3	〃　10YR5/4	〃	〃
191	0307	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	灰黄褐　10YR4/2	〃　〃	〃	〃
192	0306	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗，砂・金	〃	〃　〃	〃　10YR4/3	〃	〃
193	0308	R−20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗，砂	やや良	黒褐　10YR3/2	〃　〃	〃	〃
194	0708	〃	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃	〃	褐灰　10YR4/1	灰黄褐　10YR4/2	〃	〃
195	0310	Q−23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良	にぶい黄褐　10YR5/3	不　明	〃	〃
196	0487-6	E区北カベ包	〃	〃	口縁部	沈線，条線充填	〃	〃	〃	〃	浅黄橙　10YR8/4	左　同	〃	〃
197	0489	Q−21包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良，砂	〃	〃　10YR8/3	〃	〃	〃
198	0491	〃	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃
199	0490	P−19包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃

200	0486	H区拡張区	後・初	埋　鉢	口縁部	沈線，条線充填	ミガキ	ミガキ	やや粗，砂・金	良	黄　褐　2.5Y5/3	左　同	33	17
201	0478	Q　19，No40ほか	〃	〃	口縁～体部	〃	〃	〃	並，砂	〃	にぶい黄褐 10Y R6/4	にぶい黄褐 10Y R5/4	〃	〃
202	0479	Q—23包	〃	〃	体　部	〃	〃	ナ　デ	やや粗，砂・金	〃	黄　褐　2.5Y5/3	左　同	〃	〃
203	0483	Q　17第2層中	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃
204	0484	表採	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	暗灰黄　2.5Y5/2	〃	〃	〃
205	0485	R—16包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄　褐　2.5Y5/3	〃	〃	〃
206	0480	Q—17第3層中	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10Y R6/4	黄　褐　2.5Y5/4	〃	〃
207	0481	Q　-23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄　褐　2.5Y5/3	左　同	〃	〃
208	0482	N—18第2層中	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	暗灰黄　2.5Y4/2	〃	〃
209	0396	第1次Lトレンチ	〃	〃	口縁部	沈線，縄文（LR）充填	〃	ミガキ	良，砂	〃	浅　黄　2.5Y7/3	左　同	34	18
210	0419	Q—23包	〃	〃	〃	沈線，縄文（RL）	〃	〃	粗，砂（長）	〃	〃　2.5Y7/4	〃	35	19
211	0426	Q—22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10Y R6/4	にぶい黄　2.5Y6/4	〃	〃
212	0422	Q—21包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10Y R5/4	黄　褐　2.5Y5/3	〃	〃
213	0421	R　16包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10Y R6/4	にぶい橙　7.5Y R6/4	〃	〃
214	0420	Q—21包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄　褐　2.5Y5/3	〃	〃
215	0425	Q—22	〃	〃	体　部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	左　同	〃	〃
216	0423	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄　褐　2.5Y5/3	〃	〃
217	0424	Q—23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
218	0337	R　19包	〃	〃	口縁部	沈線，縄文（LR）	〃	〃	並，砂・金	不良	褐　灰　10Y R4/1	左　同	〃	〃
219	0338	O—18，No70	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
220	0397	Q—18，No37ほか	〃	〃	口縁～体部	沈線，縄文（LR）充填	〃	〃	並，砂（石・長）・金	良	にぶい黄橙 10Y R7/4	〃	36	20
221	0398	Q—17，No80	〃	〃	口縁部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
222	0397	Q—18，No68	〃	〃	体　部	〃	〃	ナ　デ	〃	〃	〃	〃	〃	〃
223	0515	表土ハギ後	〃	〃	口縁部	沈線，条線充填	〃	ミガキ	精良，砂・金	〃	にぶい黄　2.5Y6/3	浅　黄　2.5Y7/4	〃	〃
224	0514	第1次Lトレンチ	〃	〃	体　部	〃	〃	ナ　デ	〃	〃	黄　褐　2.5Y5/3	にぶい黄　2.5Y6/3	〃	〃
225	0516	Q—23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	浅　黄　2.5Y7/3	左　同	〃	〃
226	0513	F区No4	〃	〃	〃	〃	ミガキ	精良，砂（長）・金	〃	〃	灰　黄　2.5Y6/2	〃	〃	〃
227	0393	N—20包，SK11	〃	〃	口縁～底部	沈線，縄文（LR）充填	〃	精良，砂	並	〃	にぶい黄橙 10Y R6/4	暗灰黄　2.5Y4/2	37	21
228	0858	R—20包	〃	〃	口縁部	〃	〃	〃	並，砂・金	良	〃　〃	にぶい黄褐 10Y R5/4	〃	22
229	0859	〃	〃	〃	頸　部	〃	〃	〃	〃	〃	褐　10Y R4/4	にぶい黄橙 10Y R6/3	〃	〃
230	0863	〃	〃	〃	体　部	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10Y R7/4	灰黄褐　10Y R6/2	〃	〃
231	0865	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10Y R6/4	左　同	〃	〃
232	0864	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
233	0861	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂・金	〃	〃	〃	灰黄褐　10Y R6/2	〃	〃
234	0866	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	左　同	〃	〃
235	0862	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	灰黄褐　10Y R6/2	〃	〃
236	0399	O　14第3層上面	〃	〃	口縁部	〃	〃	〃	並，砂・金	〃	にぶい黄褐 10Y R4/3	左　同	38	21
237	0400	〃	〃	〃	体　部	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10Y R6/4	〃	〃	〃
238	0401	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
239	0465	O—19，No22	〃	〃	口縁部	沈線，条線充填	〃	〃	粗，砂・金	〃	暗灰黄　7.5Y R4/2	にぶい黄橙 10Y R6/3	39	23
240	0466	O—19，包ほか	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

第10表　出土遺物観察表7

七郎No.	遺物No.	出土位置	時期	器種	部位	文様・施文	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	図番号	図版番号
241	0468	Q　22包	後・初	深鉢	口縁部	沈線，条線充填	ミガキ	ミガキ	粗，砂・金	良	にぶい黄橙 10Y R6/4	左　同	39	23
242	0467	O　19，№90	〃	〃	体　部	〃	〃	ナ　デ	〃	〃	黄　褐　10Y R5/6	にぶい黄褐 10Y R5/2	〃	〃
243	0469	P一17包	〃	〃	口縁部	〃	〃	ミガキ	精良，砂・金	不良	灰黄褐　10Y R5/2	淡黄橙　10Y R8/8	〃	〃
244	0470	R一17包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂（石・長）	〃	浅黄橙　10Y R8/3	左　同	〃	〃
245	0474	〃	〃	〃	体　部	〃	〃	ナ　デ	〃	〃	〃	褐　灰　10Y R6/1	〃	〃
246	0520	R一20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	淡　黄　2.5Y8/3	明黄褐　2.5Y7/4	〃	〃
247	0473	R一17包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	浅黄橙　10Y R8/3	にぶい黄橙 10Y R7/4	〃	〃
248	0825	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	灰黄褐　10Y R6/2	〃	〃	〃
249	0726	R一20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	浅黄橙　10Y R8/4	〃	〃	〃
250	0472	P　17包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
251	0727	R一20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10Y R7/3	左　同	〃	〃
252	0729	〃	〃	〃	〃	無文	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
253	0403	〃	〃	〃	口縁部	沈線，縄文（L R）充填	〃	ミガキ	並，砂・金	良	浅　黄　10Y R8/4	〃	40	24
254	0404	Q一23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
255	0402-6	Q一22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
256	0407	R　20包	〃	〃	〃	沈線	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
257	0405	Q一23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
258	0409	Q一22包	〃	〃	体　部	沈線，縄文（L R）充填	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
259	0410	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
260	0408	R一20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
261	0711	Q一23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10Y R7/3	〃	〃	〃
262	0710	Q一22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
263	0712	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	褐　灰　10Y R5/1	にぶい黄橙 10Y R7/3	〃	
264	0475	Q一21包・Q一23包	〃	〃	口縁～体部	沈線，条線充填	〃	〃	良，砂	不良	にぶい褐　7.5Y R5/4	灰黄褐　10Y R5/2	〃	24
265	0476	Q一23包	〃	〃	口縁部	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10Y R5/3	褐　7.5Y R4/3	〃	〃
266	0477	Q一21包，地山直上	〃	〃	体　部	〃	〃	ナ　デ	〃	〃	灰黄褐　10Y R5/2	暗灰黄　2.5Y4/2	〃	〃
267	0329	R一20包・Q一22包	〃	〃	口縁部	沈線，縄文（L）充填	〃	ミガキ	やや粗，砂	良	にぶい黄橙 10Y R6/4	黄　褐　10Y R5/6	〃	〃
268	0330	Q一22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂	不良	にぶい黄褐 10Y R4/3	にぶい褐　7.5Y R5/4	〃	〃
269	0332	〃	〃	〃	体　部	〃	〃	〃	〃	並	〃　10Y R5/3	〃　〃	〃	〃
270	0331	R一20包・Q一22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃　〃	〃	〃
271	0333	Q一22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　10Y R5/4	明　褐　7.5Y R5/6	〃	〃
272	0645	表採	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	にぶい黄褐 10Y R5/4	〃	〃
273	0335	Q一22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい褐　7.5Y R5/4	にぶい褐　7.5Y R5/3	〃	〃
274	0334	Q一23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10Y R5/3	黄　褐　10Y R5/6	〃	〃
275	0336	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	にぶい橙　7.5Y R6/4	〃	〃
276	0593	Q一19，№38	〃	〃	口縁部	沈　線	ナ　デ	ナ　デ	並，砂・金	良	にぶい黄褐 10Y R6/4	黄　褐　10Y R5/6	〃	〃
277	0595	P一14第2層中	〃	〃	体　部	〃	〃	ヨコナデ	〃	〃	〃	左　同	〃	〃
278	0852	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂	〃	〃	〃	〃	〃
279	0596	O一19包	〃	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	〃	〃	明黄褐　10Y R6/6	にぶい黄　2.5Y6/4	〃	〃

第11表　出土遺物観察表8

280	0598	N　15第2層中	後・初	縄鉢	体　部	沈　線	ナ　デ	ヨコナデ	良，砂・金	良	にぶい橙　7.5YR6/4	にぶい橙　10YR6/3	40	24
281	0599	O　19第3層上面	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR6/4	左　同	〃	〃
282	0600	〃　，№19	〃	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃
283	0498	R　20包・Q　22包	〃	〃	口縁部	沈線，条線充填	ミガキ	ミガキ	〃	不良	黄　褐　2.5Y5/3	黄　灰　2.5Y3/1	41	25
284	0499	Q　22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	暗灰黄　2.5Y4/2	左　同	〃	〃
285	0501	〃	〃	〃	体　部	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃
286	0500	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄　灰　2.5Y4/1	左　同	〃	〃
287	0512	R—16包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　2.5Y5/1	〃	〃	〃
288	0507	Q—22包	〃	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	〃	〃	〃　2.5Y4/1	暗灰黄　2.5Y5/2	〃	〃
289	0511	R　20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	〃
290	0505	Q　22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	暗灰黄　2.5Y4/2	にぶい黄　2.5Y6/3	〃	〃
291	0510	表採	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄　灰　2.5Y4/1	暗灰黄　2.5Y5/2	〃	〃
292	0504	R　20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	暗黄褐　10YR4/2	にぶい黄橙 10YR6/3	〃	〃
293	0506	Q　22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄　灰　2.5Y4/1	黄　褐　2.5Y5/3	〃	〃
294	0820	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	黄　灰　2.5Y5/1	〃	〃
295	0508	R　20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	灰黄褐　10YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/3	〃	〃
296	0502	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　10YR4/2	〃　〃	〃	〃
297	0503	Q—22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	にぶい黄褐 10YR5/3	〃	〃
298	0509	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄　灰　2.5Y4/1	にぶい黄　2.5Y6/3	〃	〃
299	0437	N—19第3層上面	〃	〃	頸部	沈線，縄文（L）充填	〃	ミガキ	やや粗，砂・金	良	にぶい黄橙 10YR7/3	左　同	42	〃
300	0436	〃	〃	〃	体　部	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	〃	〃
301	0459	第1次L トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	明黄褐　10YR7/6	〃　〃	〃	〃
302	0378	Q　23包	〃	〃	口縁部	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	精良，砂	〃	灰　5Y4/1	黒　褐　2.5Y3/1	43	26
303	0379	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄　灰　2.5Y5/1	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃
304	0381	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄　灰　2.5Y4/1	左　同	〃	〃
305	0380	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	〃	〃
306	0445	R　-20包	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）充填	ミガキ	ミガキ	良，砂・金	〃	灰黄褐　10YR6/2	橙　7.5YR7/6	〃	〃
307	0449	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	〃　〃	〃	〃
308	0447	R　20包・P　21包	〃	〃	体　部	〃	〃	〃	粗，砂・金	〃	にぶい橙　7.5YR6/4	〃　〃	〃	〃
309	0448	P　22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	左　同	〃	〃
310	0455	第1次X・L トレンチ交差部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	灰黄褐　10YR5/2	橙　7.5YR7/6	〃	〃
311	0456	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい褐　7.5YR5/3	〃　〃	〃	〃
312	0444	第1次X トレンチ・Q-19包	〃	〃	口縁部	沈線，縄文（LR）充填	〃	〃	精良，砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	左　同	〃	〃
313	0446	P　21包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	〃	〃
314	0450	Q　18包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃
315	0451	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	〃	〃
316	0452	N—19，№114	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良，砂・金	〃	〃　〃	浅黄橙　10YR8/3	〃	〃
317	0453	P　18，№109	〃	〃	体　部	〃	〃	〃	〃	〃	浅黄橙　10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	〃
318	0454	Q　17，№39	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/2	〃　〃	〃	〃
319	0347	Q　21包，地山直上	〃	〃	口縁部	沈線，縄文（L）充填	〃	〃	粗，砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR6/4	左　同	〃	〃
320	0348	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）充填	〃	〃	良，砂・金	〃	〃　〃	〃	〃	〃

土器No.	遺物No.	出土位置	時期	器種	部位	文様・施文	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	図版番号	図版番号
321	0389	第1次X延長トレンチ	後・初	深鉢	口縁部	沈線、縄文（L？）、列突	ミガキ	ミガキ	良、砂・金	やや良	褐　10YR4/4	左　同	43	26
322	0388	Q—20、№8	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR）充填	〃	〃	精良、砂・金	良	にぶい黄橙　10YR6/4	〃	〃	〃
323	0356	P　21包	〃	〃	〃	〃	—	—	良、砂（長）	〃	明黄褐　10YR7/6	〃	〃	〃
324	0352	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	ミガキ	ミガキ	良	〃	灰黄褐　10YR4/2	にぶい黄褐　10YR5/3	〃	〃
325	0351	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良、砂・金	不良	褐　10YR4/4	〃	〃	〃
326	0361	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並、砂	並	にぶい黄橙　10YR7/4	左　同	〃	〃
327	0364	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良、砂	良	黄　褐　10YR5/6	にぶい黄褐　10YR5/4	〃	〃
328	0373	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	やや粗、砂	不良	明黄褐　10YR6/6	褐　灰　10YR4/1	〃	〃
329	0685	Q—22包	〃	〃	〃	沈線、縄文（L）充填	〃	〃	並、砂・金	並	にぶい黄橙　10YR8/3	浅黄橙　10YR8/3	〃	〃
330	0362	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR）充填	〃	〃	〃	不良	黒　褐　10YR3/1	にぶい黄褐　10YR5/3	〃	〃
331	0693	Q　23包	〃	〃	〃	沈線、縄文？	ナデ	ナデ	精良、砂・金	並	にぶい橙　7.5YR7/4	にぶい黄橙　10YR7/3	〃	〃
332	0655	Q—21、№76	〃	〃	〃	沈線	ミガキ	ミガキ	良、砂・金	良	灰　白　2.5Y8/2	浅黄橙　10YR8/3	〃	〃
333	0695	P—21、№46	〃	〃	〃	沈線、縄文（L）充填	〃	〃	並、砂・金	〃	にぶい黄橙　10YR7/3	左　同	〃	〃
334	0696	N—18第2層中	〃	〃	体　部	〃	〃	〃	良、金	〃	〃　〃	浅　黄　2.5Y7/3	〃	〃
335	0697	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	〃	〃	浅黄橙　10YR8/4	左　同	〃	〃
336	0371	P　22、№93	〃	〃	口縁部	沈線、縄文（RL？）充填	〃	〃	やや粗	〃	にぶい黄橙　10YR6/4	〃	〃	〃
337	0375	排土中	〃	〃	〃	沈線、縄文（L？）充填	〃	〃	良、砂・金	〃	橙　7.5YR7/6	にぶい黄橙　10YR7/3	〃	〃
338	0609	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	沈線	ナデ	ナデ	良、砂	並	にぶい橙　5YR7/4	左　同	〃	〃
339	0392	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR？）充填	ミガキ	ミガキ	並、砂	良	にぶい黄橙　10YR7/4	〃	〃	〃
340	0363	表　採	〃	〃	〃	沈線、縄文（L）充填	〃	〃	並、砂（長）	〃	〃　〃	にぶい黄橙　10YR7/3	〃	〃
341	0357	O　17第3層中	〃	〃	〃	沈線、縄文（RL）充填	〃	〃	良、砂（長）・金	〃	暗　褐　10YR3/3	にぶい黄褐　10YR4/3	〃	〃
342	0372	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR？）充填	〃	〃	やや粗、砂・金	不良	にぶい黄橙　10YR6/4	左　同	〃	〃
343	0349	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良、砂・金	良	灰黄褐　10YR4/2	〃	〃	〃
344	0630	排土中	〃	〃	〃	沈線	〃	〃	並、砂・金	〃	にぶい黄橙　10YR7/4	橙　7.5YR7/6	〃	〃
345	0548	第1次X・Lトレンチ交差部	〃	〃	〃	沈線、条線充填	〃	〃	〃	〃	浅　黄　2.5Y8/3	左　同	〃	〃
346	0764	Q—21、№75	〃	〃	〃	ヘラ沈線？	〃	〃	〃	〃	褐　灰　10YR4/1	にぶい褐　7.5YR5/3	〃	〃
347	0368	N　19第3層上面	〃	〃	〃	沈線、縄文（L）充填	〃	〃	良、砂・金	〃	にぶい黄橙　10YR7/4	〃	44	27
348	0369	Q—23包	〃	〃	〃	沈線、縄文（RL）充填	〃	〃	〃	〃	〃　〃	左　同	〃	〃
349	0358	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR）充填	〃	〃	精良、砂	不良	にぶい黄橙　10YR6/4	明黄褐　10YR7/6	〃	〃
350	0386	R　19包、R　20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並、砂・金	良	にぶい黄褐　10YR5/3	にぶい黄褐　10YR6/3	〃	〃
351	0387	R—16包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並	にぶい黄褐　10YR4/3	にぶい黄褐　10YR5/3	〃	〃
352	0311	Q—21包	〃	〃	〃	沈線、縄文（L）充填	〃	〃	良	良	にぶい黄橙　10YR7/3	左　同	〃	〃
353	0383	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR）充填	〃	〃	精良、砂	不良	褐　7.5YR4/3	にぶい黄橙　10YR6/4	〃	〃
354	0382	R—16、№3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	灰　褐　7.5YR4/2	にぶい黄褐　10YR5/4	〃	〃
355	0385	O—20第3層上面	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良、砂・金	並	にぶい黄橙　10YR7/3	〃　〃	〃	〃
356	0642	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	沈　線	ナデ	ナデ	並、砂・金	〃	黄　灰　2.5Y4/1	にぶい黄橙　10YR6/3	〃	〃
357	0390	〃	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR）充填	ミガキ	ミガキ	良、砂・金	良	にぶい黄橙　10YR7/4	左　同	〃	〃
358	0370	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	沈線、縄文有？	—	—	粗、砂（長）	〃	〃　〃	〃	〃	〃
359	0638	Q　23包	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR？）	ミガキ	ミガキ	やや粗、砂・金	並	〃　〃	〃	〃	〃

360	0360	第1次X・L トレンチ交差部	後・初	〃	口縁部	沈線，縄文（LR），刺突	ミガキ	ミガキ	並，砂	並	にぶい黄褐 10YR4/3	にぶい黄橙 10YR7/4	44	27
361	0359	O—20，№85	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙　10YR8/3	〃	〃
362	0345	H区拡張区	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）	〃	〃	良，砂・金	良	にぶい黄橙 10YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃
363	0346	Q—23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	灰黄褐　10YR4/2	左　同	〃	〃
364	0724	Q—23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂・金	〃	褐　灰　10YR4/1	〃	〃	〃
365	0342	O　20第3層上面	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10YR7/4	〃	〃	〃
366	0574	R—30包	〃	〃	〃	沈線，円孔	〃	〃	精良，砂・金	並	灰黄褐　10YR5/2	にぶい黄褐 10YR7/3	〃	〃
367	0573	Q—23包	〃	〃	〃	沈線，キザミ	〃	〃	良，金	〃	にぶい黄褐 5YR5/4	左　同	〃	〃
368	0631	第1次X トレンチ	〃	〃	〃	沈線，孔	〃	〃	良，砂・金	良	〃　〃	にぶい褐　7.5YR6/3	〃	〃
369	0495	Q　21包	〃	〃	〃	沈線，条線（クシ），刺突	〃	〃	〃	〃	褐　灰　10YR4/1	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	〃
370	0341	O—18，№110	〃	〃	〃	沈線，縄文（RL）刺突	〃	〃	良，砂	不良	にぶい赤褐　5YR4/4	暗赤褐　5YR3/2	45	〃
371	0340	N—19第3層上面	〃	〃	〃	沈線，縄文（RL）	〃	〃	良，砂・金	良	にぶい褐　7.5YR5/4	左　同	〃	〃
372	0339	Q—18排土中	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃
373	0703	第1次X トレンチ	〃	〃	〃	沈線，縄文（L）	〃	〃	やや粗，砂・金	〃	褐　灰　10YR4/1	灰黄褐　10YR4/2	〃	〃
374	0343	Q—23包	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR），刺突	〃	〃	良，砂・金	〃	黄　灰　2.5Y4/1	〃　〃	〃	〃
375	0353	R　15，№4	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）	〃	〃	良，砂	〃	暗灰黄　2.5Y4/2	黄　褐　2.5Y5/3	〃	〃
376	0355	Q　23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂（長・石）・金	並	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	〃
377	0354	R　13包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂	良	黒　褐　10YR2/2	褐　灰　10YR4/1	〃	〃
378	0432	R—19包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂・金	〃	黄　褐　2.5Y5/3	暗灰黄　2.5Y5/2	〃	〃
379	0433	P—21，№45	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃　〃	〃	〃
380	0350	P—18第3層上面	後・初？	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR6/4	灰黄褐　10YR4/2	〃	〃
381	0365	第1次L トレンチ	後・初	〃	〃	〃	〃	〃	精良，砂（長・石）・金	〃	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃
382	0377	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂・金	不良	にぶい黄橙 10YR6/4	〃　〃	〃	〃
383	0366	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂・金	〃	にぶい黄褐 10YR5/3	褐　7.5YR6/6	〃	〃
384	0376	第1次L トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂	並	にぶい黄橙 10YR7/3	褐　灰　10YR4/1	〃	〃
385	0694	Q—23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	やや粗，砂	良	にぶい黄褐 10YR6/4	左　同	〃	〃
386	0651	P—22，№65	〃	〃	〃	沈　線	〃	〃	精良，砂・金	〃	灰黄褐　10YR6/2	にぶい黄橙 10YR6/3	〃	〃
387	0652	第1次X・L トレンチ交差部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂・金	不良	にぶい黄橙 10YR6/3	黒　10YR2/1	〃	〃
388	0521	第1次L トレンチ	〃	〃	〃	沈線，条線	〃	〃	〃	並	〃　〃	左　同	〃	〃
389	0523	〃	〃	〃	体　部	〃	〃	ナ　デ	良，砂	〃	〃　〃	〃	〃	〃
390	0522	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃
391	0524	P—15第2層中	〃	〃	口縁部	沈線，条線（クシ）	〃	〃	良，砂（長）・金	良	にぶい黄褐 10YR7/3	左　同	〃	〃
392	0591	M　19第3層上面	後・初？	〃	〃	沈　線	ナ　デ	〃	並，砂・金	〃	黄　褐　2.5Y5/4	にぶい黄褐 10YR6/4	〃	〃
393	0592	M—19，№115	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	暗灰黄　2.5Y5/2	〃	〃
394	0629	N　20包	後・初	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/3	左　同	〃	
395	0494	R—13包	〃	〃	体　部	沈線，条線（クシ）	〃	〃	精良，砂	並	にぶい黄褐 10YR5/2	〃	〃	27
396	0395	H区南東部拡張区	〃	〃	体～底部	沈線，縄文（LR？）	〃	ナ　デ	精良，砂・金	良	にぶい黄褐 10YR7/3	〃	〃	28
397	0457	第1次L延長トレンチほか	〃	〃	体　部	沈線，縄文（LR）	〃	ヨコナデ	良，砂・金	〃	浅黄橙　10YR8/4	にぶい黄褐 10YR6/3	46	〃
398	0458	N　18第3層上面	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	左　同	〃	〃
399	0431	O—17，№95	〃	〃	〃	〃	ミガキ	ミガキ	並，砂・金	〃	灰黄褐　10YR6/2	暗灰黄　2.5Y5/2	〃	〃
400	0802	第1次X トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良，砂・金	不良	にぶい黄橙 10YR7/3	左　同	〃	〃

第14表　出土遺物観察表11

十部No.	遺物No.	出土位置	時期	器種	部位	文様・施文	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	図版番号	図版番号
401	0637	O　19第3層上面	後・初	深鉢	体部	沈線，縄文（RL）	ミガキ	ナデ	良，砂・金	不良	灰黄褐　10Y R5/2	にぶい黄橙 10Y R6/4	46	28
402	0440	N—19第3層上面	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂・金	良	にぶい黄橙 10Y R7/3	褐　灰　10Y R5/1	〃	〃
403	0670	R　20包	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）	〃	ミガキ	良，砂・金	〃	にぶい黄褐 10Y R5/3	左　同	〃	〃
404	0661	〃	〃	〃	〃	沈線，縄文（RL）	〃	〃	精良，砂・金	やや不良	にぶい黄橙 10Y R7/2	〃	〃	〃
405	0461	Q　23包	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）	〃	〃	並，砂（長）・金	良	黄　灰　2.5Y4/1	〃	〃	〃
406	0649	Q—21包	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	並，砂・金	〃	にぶい黄橙 10Y R7/3	〃	〃	〃
407	0857	Q—22，№77	〃	〃	〃	沈線，縄文（RL）	〃	ミガキ	〃	〃	〃	〃	〃	〃
408	0657	R—19包	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	良，砂・金	不良	灰黄褐　10Y R6/2	にぶい黄橙 10Y R7/4	〃	〃
409	0650	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）	〃	〃	精良，砂・金	良	灰黄褐　2.5Y6/3	〃	〃	〃
410	0435	R　20包	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	並，砂・金	〃	浅黄　2.5Y7/3	黄　灰　2.5Y5/1	〃	〃
411	0434	R—19包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10Y R4/3	暗灰黄　2.5Y5/2	〃	〃
412	0671	O—20第3層上面	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂・金	不良	にぶい黄橙 10Y R6/3	灰　褐　7.5Y R4/2	〃	〃
413	0669	Q　17，№35	〃	〃	〃	沈線，縄文（RL）	〃	〃	並，砂・金	良	〃　〃	灰黄褐　10Y R6/2	〃	〃
414	0873	Q　22，№60	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）	〃	ナデ	やや粗，砂・金	〃	灰　黄　2.5Y6/2	左　同	〃	
415	0725	第1字X延長トレンチ	〃	〃	〃	沈線，縄文（L？）	〃	ヨコナデ	〃	〃	にぶい橙　7.5Y R6/4	にぶい黄橙 10Y R7/3	〃	
416	0686	O—18第3層上面	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）	〃	ナデ	並，砂・金	並	灰黄褐　10Y R5/2	灰　黄　2.5Y6/2	〃	29
417	0704	O—19包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂（長）・金	良	褐　灰　10Y R5/1	浅黄橙　10Y R8/4	〃	〃
418	0732	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	精良，砂・金	不良	にぶい黄橙 10Y R7/4	左　同	〃	〃
419	0672	R—16包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂・金	〃	灰黄褐　10Y R5/2	〃	〃	〃
420	0682	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良	浅　黄　2.5Y8/3	〃	〃	〃
421	0721	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	沈線，縄文（RL）	〃	ナデ	並，砂・金	不良	にぶい黄褐 10Y R4/3	黒　褐　10Y R3/1	〃	〃
422	0714	Q—21包	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）	〃	ヨコナデ	〃	良	灰黄褐　10Y R5/2	左　同	〃	〃
423	0464	第1次Xトレンチ	〃	〃	〃	沈線，縄文（RL）	〃	ミガキ	精良，砂・金	不良	褐　7.5Y R4/3	黒　10Y R2/1	〃	〃
424	0462	Q　21，№80	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂・金	良	にぶい黄褐 10Y R7/3	左　同	〃	〃
425	0463	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）	〃	〃	精良，砂・金	不良	灰黄褐　10Y R5/2	〃	〃	〃
426	0660	R—19包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂・金	並	〃　〃	〃	〃	〃
427	0868	Q—22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂・金	良	灰　黄　2.5Y7/2	暗灰黄　2.5Y5/2	〃	〃
428	0460	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃	〃	にぶい黄褐 10Y R7/4	左　同	〃	〃
429	0659	R—19包	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	粗，砂・金	並	灰黄褐　10Y R4/2	〃	〃	
430	0723	Q　21包	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR？）	〃	ナデ	精良，砂・金	〃	黒　10Y R1.7/1	褐　灰　10Y R5/1	〃	29
431	0687	Q—23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂・金	〃	褐　灰　10Y R6/1	灰黄褐　10Y R6/2	〃	
432	0713	Q—22包・Q—23包	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）	〃	ヨコナデ	並，砂・金	〃	にぶい黄橙 10Y R7/3	褐　灰　10Y R5/1	〃	29
433	0850	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	精良，砂・金	良	にぶい黄橙 10Y R7/4	左　同	〃	〃
434	0698	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	沈線，縄文（L）	〃	〃	良，砂・金	〃	にぶい黄橙 10Y R6/3	灰黄褐　10Y R5/2	〃	〃
435	0869	Q—22包	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）	〃	ミガキ	並，砂・金	〃	暗灰黄　2.5Y5/2	黄　灰　2.5Y5/1	〃	〃
436	0680	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	沈線，縄文（RL）	〃	ヨコナデ	粗，砂・金	〃	にぶい黄　2.5Y6/3	〃	〃	〃
437	0675	Q　23包	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR？）	〃	ミガキ	並，砂	〃	〃　〃	灰黄褐　10Y R5/2	〃	〃
438	0701	第1次Xトレンチ	〃	〃	〃	沈線，縄文（L）	〃	ヨコナデ	精良，砂・金	不良	灰　白　10Y R8/2	浅黄橙　10Y R8/3	〃	〃
439	0676	O　18第2層中	〃	〃	〃	沈線，縄文（LR）	〃	〃	良，砂・金	良	褐　灰　10Y R6/1	〃　〃	〃	〃

440	0442	N−19第3層上面	後・初	深鉢	体　部	沈線、縄文（RL）	ミガキ	ナ　デ	良、砂（長）・金	良	黄　沢　2.5Y4/1	暗灰黄　2.5Y5/2	46	29
441	0691	Q−23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗、砂・金	〃	黒　褐　10Y R3/1	灰黄褐　10Y R5/2	47	〃
442	0667	R−18包	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR）	〃	ヨコナデ	良、砂・金	〃	褐　灰　10Y R4/1	灰黄褐　10Y R6/2	〃	〃
443	0690	Q　23包	〃	〃	〃	沈線、縄文（L）	〃	ミガキ	精良、砂	〃	黒　褐　10Y R3/1	にぶい黄橙　10Y R7/2	〃	〃
444	0719	第1次L トレンチ	〃	〃	〃	沈線、縄文（RL）	〃	〃	密、金	〃	にぶい黄橙　10Y R7/4	左　同	〃	〃
445	0679	O−20、No.37	〃	〃	〃	沈線、縄文（RL？）	〃	ナ　デ	やや粗、砂・金	〃	〃　〃	灰黄褐　10Y R6/2	〃	〃
446	0658	R−19包	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR？）	〃	ミガキ	粗、砂・金	並	灰黄褐　10Y R4/2	黒　褐　10Y R3/1	〃	〃
447	0730	第1次L トレンチ	〃	〃	〃	沈線、縄文（RL？）	〃	〃	良、砂・金	良	にぶい黄橙　10Y R6/4	にぶい黄橙　10Y R7/3	〃	〃
448	0689	Q−23包	〃	〃	〃	沈線、縄文（L）	〃	〃	精良、砂・金	〃	灰黄褐　10Y R6/2	〃　〃	〃	〃
449	0666	P−17第2層上面	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR？）	〃	ナ　デ	並、砂・金	〃	褐　灰　10Y R4/1	〃　〃	〃	〃
450	0678	Q−23	〃	〃	〃	沈線、縄文（RL？）	〃	ミガキ	やや粗、砂・金	〃	にぶい黄　2.5Y6/3	左　同	〃	〃
451	0731	R−20包	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR）	〃	〃	並、砂・金	〃	灰黄褐　10Y R5/2	にぶい黄橙　10Y R6/3	〃	〃
452	0699	第1次X トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	不良	〃　〃	黒　褐　10Y R3/1	〃	〃
453	0674	Q−23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並	にぶい黄橙　10Y R7/3	灰黄褐　10Y R5/2	〃	〃
454	0700	H トレンチ西カベ	〃	〃	〃	沈線、縄文（L）	〃	ナ　デ	精良、砂・金	良	灰黄褐　10Y R5/2	にぶい黄橙　10Y R7/4	〃	〃
455	0677	F区　No.7	〃	〃	〃	沈線、縄文（RL？）	〃	ミガキ	良、砂・金	〃	にぶい黄橙　10Y R7/4	〃　〃	〃	〃
456	0688	Q−23包	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR）	〃	ナ　デ	〃	〃	灰黄褐　10Y R5/2	左　同	〃	〃
457	0654	R　20包	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	精良、砂・金	〃	にぶい黄橙　10Y R6/3	〃	〃	〃
458	0656	R　19包	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	並、砂・金	並	〃　〃	灰黄褐　10Y R5/2	〃	〃
459	0718	第1次L トレンチ	〃	〃	〃	沈線、縄文（RL）	〃	〃	良、金	良	〃　〃	左　同	〃	〃
460	0716	第1次L 拡充トレンチ	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR）	〃	ナ　デ	並、砂・金	〃	褐　灰　10Y R6/1	にぶい黄橙　10Y R7/4	〃	〃
461	0715	Q−18〜19第3層上面	〃	〃	〃	沈線、縄文（RL？）	ナ　デ	ミガキ	良、砂・金	〃	にぶい黄橙　10Y R7/3	左　同	〃	〃
462	0662	R−20包	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR）	ミガキ	ヨコナデ	精良、砂・金	〃	灰黄褐　10Y R6/2	〃	〃	〃
463	0430	O−19、No.101	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	暗黄灰　2.5Y4/2	黄　褐　2.5Y5/3	〃	〃
464	0665	R−19包	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	精良、砂・金	〃	褐　灰　10Y R4/1	灰黄褐　10Y R6/2	〃	〃
465	0722	N−19第3層上面	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	良、砂（長）・金	〃	黒　10Y R1.7/1	灰黄褐　10Y R5/2	〃	30
466	0441	O−20第3層上面	〃	〃	〃	沈線、縄文（RL）	〃	ナ　デ	良、砂	〃	浅黄橙　10Y R8/3	にぶい黄橙　10Y R7/3	〃	〃
467	0673	Q−21包、Q−23包	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR）	〃	ミガキ	精良、砂・金	〃	にぶい黄橙　10Y R6/3	左　同	〃	〃
468	0443	O　20第3層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良、砂	〃	灰　5Y4/1	灰オリーブ　5Y5/2	〃	〃
469	0429	O　19、No.44、106	〃	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	良、砂（石・礫）・金	〃	灰黄褐　10Y R5/2	黄　褐　2.5Y5/4	〃	〃
470	0647	R　14包	〃	〃	〃	沈線、縄文（RL）	〃	ヨコナデ	並、砂・金	〃	褐　10Y R4/4	にぶい黄橙　10Y R6/3	〃	〃
471	0648	R　13包、P　15包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐　10Y R4/3	灰黄褐　10Y R4/2	〃	〃
472	0646	R　13包、R　14包	〃	〃	〃	〃	ケズリ	〃	〃	〃	褐　10Y R4/4	にぶい黄橙　10Y R6/3	〃	〃
473	0639	Q−23包	〃	〃	〃	沈線、縄文？	ミガキ	〃	良、砂・金	〃	浅黄橙　10Y R8/3	灰　黄　2.5Y6/2	48	〃
474	0640	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	左　同	〃	〃
475	0705	P−19包	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR）	〃	ナ　デ	〃	〃	褐　灰　10Y R4/1	橙　10Y R7/6	〃	〃
476	0644	第1次X トレンチ	〃	〃	〃	沈線、縄文（L）	〃	〃	精良、砂・金	不良	橙　7.5Y R7/6	にぶい黄橙　10Y R7/4	〃	〃
477	0438	Q−22、No.34	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	良、金	良	にぶい黄橙　10Y R7/3	灰黄褐　10Y R5/2	〃	
478	0704	O　19、包	〃	〃	〃	沈線、縄文（LR）	〃	〃	精良、砂・金	〃	褐　灰　10Y R5/1	にぶい黄橙　10Y R7/2	〃	
479	0683	第1次L トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並	にぶい黄橙　10Y R7/3	左　同	〃	30
480	0684	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	やや粗、砂・金	良	〃　〃	〃	〃	〃

土器No.	遺物No.	出土位置	時期	器種	部位	文様・施文	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	図番号	図版番号
481	0709	排土中	後・初	深鉢	体部	沈線、縄文（L）	ミガキ	ナデ	精良、砂・金	並	褐灰　10YR4/1	左　同	48	30
482	0439	Q 22、No.34	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	良、砂	良	にぶい黄褐　10YR7/3	灰黄褐　10YR5/2	〃	〃
483	0702	P 22、No.89	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良、砂・金	〃	褐灰　10YR5/1	にぶい黄橙　10YR7/4	〃	〃
484	0707	R—19包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	褐灰　10YR4/1	左　同	〃	〃
485	0876	Q—23包	〃	〃	〃	沈線、縄文（L R）	〃	ナデ	〃	〃	にぶい黄橙　10YR7/2	浅黄橙　10YR8/3	〃	〃
486	0855	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙　10YR7/4	左　同	〃	〃
487	0427	Q 21包	〃	〃	〃	沈線、縄文（L R ?）	〃	ミガキ	粗、砂	〃	にぶい黄橙　10YR6/3	にぶい黄橙　2.5Y6/3	〃	
488	0668	Q—19、No.54	〃	〃	〃	沈線、縄文？	〃	〃	並、金	並	灰褐　10YR4/2	にぶい黄橙　10YR7/4	〃	30
489	0733	第1次X・Lトレンチ交差部	〃	〃	〃	沈線、縄文（L R）	〃	〃	精良、砂・金	良	灰　白　10YR8/2	にぶい黄橙　10YR7/2	〃	〃
490	0692	Q 21包	〃	〃	〃	沈線、縄文（L R ?）	〃	ナデ	やや粗、砂・金	〃	にぶい黄橙　10YR6/4	にぶい黄　2.5Y6/4	〃	〃
491	0706	O—19、No.38	〃	〃	〃	沈線、縄文（L R）	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐　10YR7/2	浅黄橙　10YR8/3	〃	〃
492	0735	R 18包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並、砂・金	不良	にぶい黄橙　10YR7/4	黒　10YR2/1	〃	〃
493	0967	R 20包	〃	〃	〃	沈線、縄文？	〃	〃	やや粗、砂・金	良	〃　〃	左　同	〃	〃
494	0720	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	沈線、縄文（R L）	〃	ヨコナデ	並、金	〃	にぶい橙　7.5Y R7/4	にぶい黄橙　10YR7/3	〃	〃
495	0875	Q—23包	〃	〃	〃	沈線、縄文（L）	〃	ナデ	精良、砂・金	〃	〃　〃	にぶい橙　7.5Y R6/4	〃	〃
496	0681	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	並、砂・金	〃	浅黄橙　10YR8/4	左　同	〃	〃
497	0849	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	沈線、縄文（L R）	〃	ヨコナデ	良、砂・金	〃	にぶい黄橙　10YR6/3	〃	〃	〃
498	0526	Q—22、No.60	〃	〃	〃	沈線、条線	〃	ナデ	やや粗、砂・金	良	褐灰　10YR4/1	〃	〃	〃
499	0493	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良、砂・金	〃	にぶい黄橙　10YR7/4	〃	〃	〃
500	0529	P 18、No.81	〃	〃	〃	沈線、条線（クシ）	〃	〃	〃	〃	浅黄橙　10YR8/4	灰黄褐　10YR6/2	〃	〃
501	0527	Q 21包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙　10YR7/4	左　同	〃	〃
502	0531	第1次X・Lトレンチ交差部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並、砂	〃	灰黄褐　10YR5/2	浅黄橙　10YR8/4	〃	〃
503	0842	第1次Lトレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	やや粗、砂・金	〃	にぶい黄橙　10YR6/3	左　同	〃	〃
504	0570	R—13包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	灰黄褐　10YR5/2	にぶい褐　7.5Y R5/4	〃	〃
505	0525	R—16包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並、砂・金	〃	〃　〃	左　同	〃	〃
506	0528	R—18包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良、砂・金	〃	浅黄橙　10YR8/4	褐　灰　10YR4/1	〃	〃
507	0492	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	良、金	〃	〃　〃	左　同	〃	〃
508	0530	M—14第2層	〃	〃	〃	沈線、条線（羊歯状皆）	〃	ナデ	やや粗、砂・金	〃	灰黄褐　10YR6/2	にぶい黄橙　10YR7/3	〃	〃
509	0518	H区西カベ	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	並、砂（長・石）・金	〃	浅　黄　2.5Y8/3	左　同	〃	〃
510	0519	N—17第2層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃　〃	〃	〃
511	0497	H区南東拡張	〃	〃	〃	沈線、条線（クシ）	〃	ナデ	〃	〃	灰黄褐　10YR6/2	浅　黄　2.5Y8/3	〃	〃
512	0496	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃
513	0594	O—20、E区南アゼ	〃	〃	〃	沈線	〃	ヨコナデ	〃	〃	橙　7.5Y R6/6	明黄褐　10YR6/6	〃	〃
514	0580	Q—23包	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	やや粗、砂（長）・金	〃	にぶい黄橙　10YR6/3	左　同	〃	〃
515	0583	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	やや粗、砂	〃	にぶい黄褐　10YR5/3	灰黄褐　10YR5/2	49	31
516	0643	R 20包	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	粗、砂・金	〃	灰黄褐　10YR5/2	〃　〃	〃	〃
517	0585	R 16包	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	〃	〃	にぶい黄褐　10YR4/3	橙　5Y R6/8	〃	〃
518	0576	R—20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良、砂	並	褐灰　7.5Y R4/1	にぶい黄橙　10YR7/3	〃	〃
519	0771	Q—22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗、砂・金	良	にぶい黄橙　10YR6/3	左　同	〃	〃

520	0584	Q—22包	後・初	縄鉢	体部	沈線	ナデ	ナデ	並, 砂・金	並	にぶい黄橙 10YR5/3	暗灰黄 2.5Y5/2	49	31
521	0605	第1次L トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良, 砂	良	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 5YR6/4	〃	〃
522	0632	第1次W トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	並, 砂・金	〃	橙 7.5YR7/4	左 同	〃	〃
523	0625	第1次L トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	〃	〃
524	0613	O—20第3層	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	精良, 砂・金	〃	にぶい橙 5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	〃	〃
525	0770	Q—22包	〃	〃	〃	〃	ミガキ	ヨコナデ	並, 砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR6/3	左 同	〃	〃
526	0597	R—20包	〃	〃	〃	〃	ナデ	ナデ	〃	〃	〃 〃	にぶい黄 2.5Y6/3	〃	〃
527	0623	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗, 砂・金	並	黄 灰 2.5Y5/1	黄 灰 2.5Y6/1	〃	〃
528	0578	第1次D トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黒 褐 10YR3/1	褐 灰 10YR5/1	〃	〃
529	0621	R—19包	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃	〃	灰黄褐 10YR5/2	左 同	〃	〃
530	0773	O—20, P11	〃	〃	〃	〃	ミガキ	ナデ	並, 砂・金	良	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	〃	〃
531	0624	第1次X 延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃
532	0872	R—20包	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	〃	〃	褐 灰 10YR4/1	灰黄褐 10YR6/2	〃	〃
533	0737	Q—21包	〃	〃	〃	〃	ナデ	ナデ	やや粗, 砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	明黄褐 10YR6/6	〃	〃
534	0582	Q—23包	〃	〃	〃	〃	ミガキ	〃	並, 砂・金	〃	〃 〃	褐 灰 10YR4/1	〃	〃
535	0738	Q—18～19第3層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗, 砂・金	〃	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃
536	0739	R—19包	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	並, 金	〃	灰黄褐 10YR6/2	左 同	〃	〃
537	0641	Q—23包	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	並, 砂・金	〃	黄 灰 2.5Y5/1	灰 黄 2.5Y6/2	〃	〃
538	0626	O—19第3層上面	〃	〃	〃	〃	ナデ	ヨコナデ	粗, 砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	左 同	〃	〃
539	0581	Q—23包	〃	〃	〃	〃	ミガキ	ナデ	〃	〃	褐 灰 10YR4/1	〃	〃	〃
540	0736	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	〃	〃
541	0587	第1次X 延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	ナデ	〃	並, 砂・金	〃	黄 褐 10YR5/6	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	〃
542	0854	Q—23包	後・初?	〃	〃	縄文（RL, 縦方向施文）	〃	〃	粗, 砂・金	〃	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄褐 10YR5/3	〃	〃
543	0750	D区南カベ	〃	〃	〃	縄文?	〃	〃	良, 砂・金	〃	橙 5YR6/8	左 同	〃	〃
544	0758	N 20, №13, 33	中・末?	〃	〃	撚縄文（巻貝）	〃	〃	並, 砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	〃	〃
545	0572	P—22, №68	後・初	〃	口縁部	沈線	〃	〃	並, 砂	並	〃 〃	左 同	50	〃
546	0577	O—19, №124	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	精良, 砂	不良	黒 褐 10YR3/1	〃	〃	〃
547	0579	排土中	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	良, 砂・金	良	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/3	〃	〃
548	0589	P—21包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並, 砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄褐 10YR5/2	〃	〃
549	0588	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	精良, 砂・金	並	にぶい黄橙 10YR5/3	暗 褐 10YR3/3	〃	〃
550	0586	Q—23包	〃	〃	〃	沈線, 縄文?	〃	〃	精良, 砂	良	にぶい黄橙 10YR7/3	左 同	〃	〃
551	0627	Q—23包	〃	〃	〃	沈線	〃	ナデ	精良, 砂・金	〃	にぶい橙 5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	〃
552	0603	N 20包ほか	〃	〃	口縁～体部	〃	〃	〃	精良, 砂	〃	〃 〃	〃	〃	〃
553	0601	P 18第3層	〃	〃	口縁部	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃
554	0602	N 20包	〃	〃	体部	〃	〃	ヨコナデ	〃	〃	にぶい橙 7.5YR7/4	〃	〃	〃
555	0610	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃
556	0622	Q—21包	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	並, 砂	〃	灰黄褐 10YR5/2	〃	〃	〃
557	0608	N—20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	橙 7.5YR7/6	〃	〃	〃
558	0604	N～O 20包ほか	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良, 砂	〃	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 5YR6/4	〃	〃
559	0614	N 20, №15, 16, 54	〃	〃	〃	絡行沈線	〃	〃	良, 砂・金	〃	灰黄褐 10YR5/2	左 同	〃	〃
560	0617	O—19, №66	〃	〃	〃	沈線	〃	〃	良, 砂・金	〃	〃 〃	〃	〃	〃

土器No.	遺物No.	出土位置	時期	器種	部位	文様・施文	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	図番号	図版番号
561	0616	R 20包	後・初	深鉢	体部	沈線	ミガキ	ナデ	良，砂・金	良	明灰黄 2.5Y5/2	左 同	50	31
562	0615	O—19，P—19，R 19包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	褐 灰 10Y R5/1	黄 褐 2.5Y5/3	〃	〃
563	0618	N～O 20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄 灰 2.5Y6/1	にぶい黄 2.5Y6/3	〃	〃
564	0619	N～O 19，No.9，60焼	〃	〃	口縁～底部	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	左 同	51	32
565	0620	N 19第3層上面	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃	〃	灰黄褐 10Y R6/2	〃	〃	〃
566	0313	Q 23包ほか	〃	〃	口縁～体部	沈線，縄文（L）縦施文	〃	ミガキ	精良，砂・金	〃	にぶい黄褐 10Y R5/4	にぶい黄橙 10Y R6/4	52	〃
567	0316	第1次L延長トレンチ	〃	〃	口縁部	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
568	0315	第1次Xトレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
569	0322	Q 21包，第1次Xトレンチ	〃	〃	体 部	縄文（L）縦施文	ナデ	〃	〃	〃	明黄褐 2.5Y6/6	浅 黄 2.5Y7/4	〃	〃
570	0317	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
571	0319	Q 22包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
572	0318	R—21包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
573	0320	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
574	0323	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
575	0321	Q 20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
576	0326	P—21，No.26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
577	0324	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	32
578	0325	Q—21，No.78	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
579	0327	Q—22，No.32，42	〃	〃	口縁部	沈線，縄文（L）縦施文	〃	〃	〃	〃	灰黄褐 10Y R4/2	明黄褐 10Y R6/6	〃	32
580	0328	Q 22，No.41	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃
581	0760	N 19，No.74	〃	〃	口縁部	縄文（RL）	〃	〃	並，砂・金	やや不良	灰黄褐 10Y R6/2	褐 灰 10Y R4/1	〃	〃
582	0761	第1次Wトレンチ	〃	〃	〃	〃（LR）	〃	〃	良，砂・金	良	褐 灰 10Y R4/1	にぶい黄橙 10Y R7/4	〃	〃
583	0762	O 18第2層中	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂・金	〃	にぶい黄橙 10Y R7/3	浅黄橙 10Y R8/3	〃	〃
584	0763	Q 23包	〃	〃	〃	〃（RL）	〃	〃	〃	〃	〃 〃	左 同	〃	〃
585	0845	第1次L トレンチ	〃	〃	体 部	〃	〃	ナデ	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃
586	0846	Q ・23No.43	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂・金	〃	褐 灰 10Y R5/1	灰黄褐 10Y R6/2	〃	〃
587	0532	R—20包	〃	〃	口縁～体部	条線	ミガキ	ミガキ	〃	〃	灰黄褐 10Y R5/2	左 同	〃	33
588	0534	〃	〃	〃	口縁部	〃	〃	〃	〃	〃	暗灰黄 2.5Y5/2	灰 黄 2.5Y6/2	〃	〃
589	0533	〃	〃	〃	体 部	〃	ケズ	〃	〃	〃	にぶい黄 2.5Y6/3	左 同	〃	〃
590	0536	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黒 褐 10Y R3/1	にぶい黄橙 10Y R7/4	〃	〃
591	0535	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10Y R6/3	左 同	〃	〃
592	0537	R 19包	〃	〃	口縁部	〃	ミガキ	〃	粗，砂	並	にぶい黄褐 10Y R5/3	橙 5Y R6/6	〃	〃
593	0541	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良	黄 褐 10Y R5/6	明 褐 7.5Y R5/6	〃	〃
594	0538	P 21包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂（長）	〃	にぶい黄橙 10Y R7/3	にぶい褐 7.5Y R5/4	〃	〃
595	0539	〃	〃	〃	体 部	〃	〃	ナデ	良	並	にぶい黄褐 10Y R5/3	左 同	〃	〃
596	0546	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	並，砂	良	褐 灰 10Y R4/1	灰黄褐 10Y R5/2	〃	〃
597	0545	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10Y R5/4	左 同	〃	〃
598	0547	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	明 褐 7.5Y R5/6	黄 褐 10Y R5/6	〃	〃
599	0542	P—21包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10Y R5/4	褐 7.5Y R4/4	〃	〃

第19表　出土遺物観察表16

600	0544	Q－21包	後・初	深鉢	体部	条線	ナデ	ナデ	やや粗，砂・金	良	にぶい褐 7.5Y R5/4	にぶい橙 7.5Y R6/4	52	33
601	0543	P 21包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	暗灰黄 2.5Y5/2	にぶい褐 7.5Y R5/4	〃	〃
602	0540	第1次X延長トンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10Y R6/4	左　同	〃	〃
603	0558	第1次X・Lトレンチ交差部	〃	〃	口縁部	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	粗，砂・金	並	〃　〃	〃	53	〃
604	0559	〃	〃	〃	体　部	〃	ナ　デ	ナ　デ	やや粗，砂（長）・金	良	灰黄褐 10Y R4/2	〃	〃	〃
605	0562	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃
606	0563	Q 21，5×10	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並	黒　褐 10Y R3/1	〃	〃	〃
607	0874	Q 23包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良	にぶい黄橙 10Y R7/3	〃	〃	〃
608	0564	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃
609	0851	第1次トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	灰黄褐 10Y R5/2	にぶい黄褐 10Y R7/2	〃	〃
610	0566	第1次Xトレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂・金	〃	にぶい黄橙 10Y R6/3	左　同	〃	〃
611	0561	第1次X・Lトレンチ交差部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	やや粗，砂（長）・金	〃	灰黄褐 10Y R4/2	にぶい黄橙 10Y R7/3	〃	〃
612	0560	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃　〃	〃	〃
613	0565	Q 21	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃	〃	〃	灰黄褐 10Y R6/2	〃　〃	〃	〃
614	0557	Q 23包	〃	〃	口縁部	〃	ミガキ	ミガキ	並，砂・金	〃	にぶい黄橙 10Y R7/4	左　同	〃	〃
615	0556	P－22，5×67	〃	〃	体　部	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃
616	0555	Q－23包	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	ナ　デ	〃	〃	〃　〃	灰黄褐 10Y R6/2	〃	〃
617	0551	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	〃	〃	〃　〃	浅　黄 2.5Y7/3	〃	〃
618	0552	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	〃	〃	〃　〃	にぶい黄橙 10Y R6/3	〃	〃
619	0553	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	灰黄褐 10Y R5/2	左　同	〃	〃
620	0554	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10Y R7/3	灰黄褐 10Y R5/2	〃	〃
621	0550	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ミガキ	〃	〃	にぶい黄 2.5Y6/3	浅　黄 2.5Y7/3	〃	〃
622	0568	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	やや粗，砂（長）	〃	灰黄褐 10Y R5/2	にぶい黄橙 10Y R6/3	〃	〃
623	0848	Q－22包	〃	〃	〃	〃	ミガキ	〃	粗，砂・金	〃	にぶい黄褐 7.5Y R5/4	〃　〃	〃	〃
624	0567	M－19第3層上面	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	〃	並，砂（石・長）	〃	にぶい黄褐 10Y R7/2	にぶい黄橙 10Y R7/4	〃	〃
625	0571	Q－21包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良，砂	〃	褐　灰 10Y R5/1	左　同	〃	〃
626	0569	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	やや粗，砂・金	並	にぶい黄褐 10Y R6/3	〃	〃	〃
627	0549	Q－23包	〃	〃	口縁部	〃	ミガキ	ミガキ	並，砂・金	良	赤　黄 2.5Y8/3	〃	〃	〃
628	0759	第1次L トレンチ	〃	〃	体部	〃	ナ　デ	ナ　デ	並，砂	並	褐　灰 10Y R4/1	灰　褐 7.5Y R5/2	〃	〃
629	0775	第1次X延長トレンチ北か	〃	〃	口縁部	無文	〃	〃	良，砂・金	良	暗灰黄 2.5Y5/2	にぶい黄橙 10Y R7/4	〃	34
630	0779	H区拡張区	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	並，砂	〃	灰黄褐 10Y R5/2	左　同	〃	〃
631	0611	Q－22包	〃	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	精良，砂・レキ・金	〃	にぶい橙 5Y R6/3	橙　5Y R6/6	〃	〃
632	0606	O－20第3層上面	〃	〃	体　部	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃	〃　〃	〃	〃
633	0780	N～O －20包	〃	〃	口縁部	〃	〃	〃	粗，砂・金	並	黄　褐 2.5Y5/3	左　同	〃	〃
634	0782	J－15第2層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良，砂・金	良	にぶい黄橙 10Y R7/3	灰黄褐 10Y R6/2	〃	〃
635	0785	N～O －20包	〃	〃	〃	〃	ミガキ	ミガキ	並，砂・金	〃	暗灰黄 2.5Y5/2	にぶい黄橙 10Y R6/4	〃	〃
636	0781	R 20包	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	ナ　デ	〃	並	褐　灰 10Y R4/1	左　同	〃	〃
637	0791	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	ミガキ	ミガキ	良，砂	不良	黒　褐 10Y R3/1	〃	〃	〃
638	0777	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂・金	並	灰黄褐 10Y R5/2	にぶい黄橙 10Y R7/2	〃	〃
639	0786	Q－21包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良，砂・金	不良	〃　〃	褐　灰 10Y R4/1	〃	〃
640	0778	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	ナ　デ	〃	良	褐　灰 10Y R5/1	にぶい黄橙 10Y R7/3	〃	〃

土器No	遺物No	出土位置	時期	器種	部位	文様・施文	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	図版番号	図版番号
641	0783	第1次X延長トレンチ	後・初	深鉢	口縁部	無文	ミガキ	ミガキ	芝，砂・金	不良	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	53	34
642	0788	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂・金	並	褐灰 10YR4/1	左同	〃	〃
643	0789	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良	〃	〃 〃	〃	〃	〃
644	0787	Q-21，№59	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並，砂・金	〃	灰黄褐 10YR6/2	〃	〃	〃
645	0776	第1次L延長トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂	不良	褐灰 10YR5/1	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃
646	0418	O-20包	〃	鉢？	〃	粘土紐貼りつけ，縄文（L R）	〃	〃	精良，砂・金	〃	灰黄褐 10YR4/2	左同	54	〃
647	0411	O-19，№60	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	〃	〃
648	0412	第1次トレンチ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃
649	0413	1'-21，第3層	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃
650	0414	R 19包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃
651	0415	O 19，№26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃
652	0416	Q 21，№10	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	灰黄褐 10YR5/2	左同	〃	〃
653	0417	H区No.3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃
654	0765	Q-21包	〃	鉢	口縁部	降帯，円点	〃	〃	良，砂・金	良	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	〃	〃
655	0766	R-20包	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃
656	0767	〃	〃	〃	〃	隆帯	〃	〃	〃	〃	にぶい橙 7.5Y R6/4	〃	〃	〃
657	0374	第1次X・L トレンチ交差部	〃	浅鉢	〃	沈線，縄文（L R）	〃	〃	精良，砂・金	並	〃 〃	〃	〃	〃
658	0367	P-22，№89	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並	不良	にぶい黄橙 10YR4/3	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃
659	0344	第1次X・L トレンチ交差部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂・金	良	〃 〃	にぶい橙 7.5Y R6/4	〃	〃
660	0312	Q 22包	〃	双耳壺	体部	沈線，縄文（L）	〃	ナデ	良，砂	〃	明黄褐 10YR6/8	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃
661	0653	P-21，№27	〃？	浅鉢	〃	沈線	〃	ヨコナデ	良，砂・金	〃	明黄褐 10YR7/6	左同	〃	〃
662	0799	R-20包	〃	土器片錘	—	〃	〃	ナデ	並，砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	〃	〃
663	0800	Q 21包	〃	〃？	〃	沈線，条痕	〃	〃	良，砂・金	〃	にぶい黄 2.5Y 6/3	〃	〃	〃
664	0801	R 16包	〃	〃？	—	沈線	〃	〃	並，砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR7/3	橙 7.5Y R6/6	〃	〃
665	0794	J 17第2層	後・末	浅鉢	口縁部	凹線文	〃	ミガキ	良，金	並	〃 〃	左同	55	35
666	0795	R 15～16包	晩・末	深鉢	口縁～体部	凸帯文，条痕	条痕，ケズリ	ヨコナデ	並，砂・金	不良	にぶい黄橙 10YR5/4	〃	〃	〃
667	0796	R-16包	〃	〃	体部	〃	条痕	〃	粗，砂・金	良	橙 7.5Y R7/6	〃	〃	〃
668	0798	K-19包	〃	〃	〃	条痕	〃	〃	〃	〃	にぶい橙 7.5Y R7/4	にぶい褐 7.5Y R6/3	〃	〃
669	0797	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	橙 7.5Y R7/6	浅黄橙 10Y R8/4	〃	〃
670	0827	R 16包	〃	底部			ミガキ・ナデ	ナデ	良，砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄 2.5Y6/2	〃	〃
671	0808	第1次X トレンチ	〃	〃			ナデ	〃	並，砂	並	にぶい黄橙 10YR6/3	左同	〃	〃
672	0841	第1次L トレンチ	〃	〃			ミガキ・ナデ	〃	精良，砂・金	良	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	〃
673	0810	Q-19包	〃	〃			〃	〃	〃	〃	黄褐 2.5Y5/3	浅黄 2.5Y7/3	〃	〃
674	0809	第1次Q トレンチ	〃	〃			〃	ミガキ	良，砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR5/3	左同	〃	〃
675	0829	Q 23包・Q 21包	〃	浅鉢？			ミガキ	ナデ	精良，砂・金	〃	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃
676	0830	K 14第2層	〃	深鉢			ナデ	〃	並，砂・金	〃	にぶい橙 7.5Y R6/4	灰黄褐 10YR4/2	〃	〃
677	0804	第1次X延長トレンチ	〃	〃			ミガキ	〃	良，砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR6/3	浅黄橙 10YR8/3	〃	〃
678	0834-6	R-20包・Q-23包	〃	〃			ナデ	〃	〃	〃	灰黄褐 10YR5/2	にぶい橙 7.5Y R6/4	〃	〃
679	0824	第1次L トレンチ	〃	〃			〃	〃	〃	〃	黄褐 2.5Y5/4	左同	〃	〃

第21表　出土遺物観察表18

680	0807	第1次L トレンチ		擬鉢	底部		ナデ	ナデ	精良、砂	良	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	55	35
681	0803	N−18第3層上面		〃	〃	鎌代廃	ミガキ・ナデ	〃	やや粗、砂・金	〃	橙 7.5YR6/6	左同	〃	〃
682	0826	Q −23包		〃	〃		〃	ミガキ	並、砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR6/4	褐灰 10YR4/1	〃	〃
683	0828	R−20包		〃	〃		ナデ	ナデ	良、砂・金	〃	〃 〃	浅黄 2.5Y8/3	〃	〃
684	0612	N−20包		〃	〃		〃	〃	精良、砂・レキ	〃	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 10YR6/4	〃	〃
685	0822	第1次L トレンチ		〃	〃		ミガキ・ナデ	〃	良、砂	〃	にぶい黄橙 10YR6/3	左同	〃	〃
686	0823	R −13包		〃	〃		ナデ	〃	並、砂・金	並	〃 〃	にぶい黄 2.5Y6/3	〃	36
687	0811	Q−20、№55		〃	〃	鎌代廃	〃	〃	良、砂・金	不良	にぶい黄褐 10YR5/3	暗灰黄 10YR5/2	〃	35
688	0821	N−14第2層中	中・末	〃	〃	〃	〃	〃	並、砂	〃	にぶい褐 7.5YR5/4	左同	〃	36
689	0607	N −20、№97		〃	〃		〃	〃	精良、砂	良	にぶい橙 5YR6/4	〃	〃	〃
690	0838	第1次X トレンチ		〃	〃		〃	〃	やや粗、砂・金	〃	にぶい褐 7.5YR5/4	〃	〃	〃
691	0818	Q−22包		〃	〃		〃	〃	良、砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR7/2	〃	〃	〃
692	0839	表採		〃	〃		〃	〃	粗、砂	〃	灰黄 2.5Y6/2	暗灰黄 2.5Y5/2	〃	〃
693	0840	P −21、№22		小型擬鉢	〃		ミガキ	ミガキ	並、砂	〃	暗灰黄 2.5Y5/2	〃	〃	〃
694	0816	第1次L トレンチ		擬鉢	〃		ナデ	ナデ	粗、砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR7/3	左同	〃	〃
695	0819	P−22、№70		〃	〃		〃	〃	精良、砂	〃	にぶい橙 5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	〃
696	0831	第1次L トレンチ		〃	〃		〃	〃	並、砂・金	〃	橙 7.5YR7/6	にぶい褐 7.5YR6/3	〃	〃
697	0836	P −19、№27		〃	〃		ミガキ・ナデ	〃	良、砂・金	〃	〃 〃	にぶい黄褐 10YR5/3	〃	〃
698	0832	R−19包		〃	〃		ナデ	〃	並、砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR7/3	左同	〃	〃
699	0837	第1次X トレンチ		〃	〃		ミガキ・ナデ	〃	良、砂・金	〃	にぶい黄褐 10YR5/3	橙 7.5YR6/6	〃	〃
700	0812	R−20包		〃	〃		〃	〃	並、砂・金	〃	にぶい褐 7.5YR6/3	左同	〃	〃
701	0835	〃		〃	〃		ナデ	〃	良、砂・金	並	灰黄褐 10YR5/2	〃	〃	〃
702	0805	第1次X トレンチ		〃	〃		〃	〃	並、砂・金	良	暗灰黄 2.5Y5/2	〃	〃	〃
703	0833	第1次X・Lトレンチ交差部		〃	〃		〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐 10YR5/3	明褐 7.5YR5/6	〃	〃
704	0815	第1次L トレンチ		〃	〃		〃	〃	〃	〃	褐灰 10YR4/1	左同	〃	〃
705	0817	Q −22包		〃	〃		〃	〃	良、砂・金	〃	にぶい黄橙 10YR7/2	〃	〃	〃
706	0806	第1次L 延長トレンチ		〃	〃		〃	〃	粗、砂・金	〃	灰黄褐 10YR6/2	〃	〃	〃
707	0834	〃		〃	〃		〃	〃	粗、砂	〃	にぶい橙 7.5YR7/4	〃	〃	〃
708	0813	O−20第3層上面		〃	〃		〃	〃	〃	〃	にぶい赤褐 5YR4/3	〃	〃	〃
709	0814	R−15包		〃	〃		〃	〃	並、砂・金	〃	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃

〔注〕

① 遺物№欄は縄ノ下遺跡の遺跡番号である19を冠した6ケタの通し番号（19−0000）のうちの下4ケタ番号であり、遺物の実測番号を示す。

② 時期欄には早期～晩期の各期を初期、前葉、後葉、末葉と大まかに区分し略記した。

③ 胎土欄の胎土は精良、良、並、やや粗、粗と区分した。また砂の混入がみられる時には砂と記入し、なかでも長石や石英の混入の目立つものについてはカッコ付きで（長）、（石）などと表わした。また金雲母の混入がみられる時は金とした。

④ 焼成は　良、やや良、並、やや不良、不良と区分した。

⑤ 色調は『新版　標準土色帖』1988年版を使用した。

第22表　出土遺物観察表19（弥生土器）

土器No.	遺物No.	出土位置	時期	器種	部位	文様・技法等	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	図番号	図版番号
716	0050	O-17第2層	前期	壺	口縁部	無文	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良，砂	良	橙　5YR6/6	にぶい橙　5YR6/4	59	37
717	0061	N-17 〃	〃	〃	底部	平底	ハケ→ミガキ	ナデ	〃	〃	明赤褐　5YR5/6	橙　5YR6/6	〃	〃
718	0079	P-16 〃	〃	〃	口縁部	無文	ヘラミガキ	ヘラミガキ	〃	〃	橙　7.5YR6/6	左同	〃	〃
719	0051	O-16〃上面	〃	〃	頸～体部	沈線	ハケ→ナデ	ヨコナデ	〃	〃	明赤褐　5YR5/8	にぶい赤褐　5YR4/4	〃	〃
720	0057	Q-15第2層	〃	〃	体部	〃	ヘラミガキ	〃	やや粗，砂（長）	〃	橙　7.5YR6/6	にぶい赤褐　5YR4/3	〃	〃
721	0056	O-17 〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良，砂（石・長）	〃	にぶい橙　7.5YR7/4	左同	〃	〃
722	0075	P-14 〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗，砂	〃	橙　7.5YR7/6	〃	〃	〃
723	0052	O-16第2層上面	〃	〃	頸～体部	〃	〃	〃	精良，砂	〃	橙　7.5YR6/8	にぶい橙　7.5YR6/4	〃	〃
724	0053	P-14第2層	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃	〃	明赤褐　5YR5/6	にぶい赤褐　5YR4/3	〃	〃
725	0055	P-16 〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	やや粗，砂	〃	橙　5YR6/6	左同	〃	〃
726	0054	N-17 〃	〃	〃	〃	〃	ハケ→ミガキ	〃	並，砂	〃	明赤褐　5YR5/6	橙　5YR6/6	〃	〃
727	0080	O-18 〃	〃	〃	〃	無文	〃	〃	並砂（石・長）	〃	褐　7.5YR4/4	明赤褐　5YR5/8	〃	〃
728	0077	N-18 〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	精良，砂（長）	〃	明褐　7.5YR5/6	左同	〃	〃
729	0076	〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃
730	0078	O-16〃上面	〃	〃	〃	〃	〃	〃	やや粗，砂（石・長）	〃	橙　5YR6/6	橙　5YR6/8	〃	〃
731	0058	N-17第2層	〃	〃	〃	無文，小突起	〃	〃	並，砂（石・長）	〃	〃　7.5YR6/6	左同	〃	〃
732	0059	O-19 〃	中期	〃	頸部	沈線	ハケ→ナデ	〃	精良，砂・金	〃	にぶい黄橙　10YR7/3	にぶい黄　2.5Y6/4	〃	〃
733	0062	第1次Gトレンチ	〃	〃	口縁～頸部	櫛描文（横線，波状），刺目	〃	〃	〃	〃	橙　7.5YR7/6	にぶい黄橙　10YR6/4	〃	〃
734	0064	〃 L延長トレンチ	〃	〃	頸部	波状文（具波），沈線（ヘラ）	ハケ→ミガキ	ナデ	並，砂	〃	にぶい黄橙　10YR6/4	〃 〃	〃	〃
735	0063	〃 〃	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐　10YR5/3	にぶい黄橙　10YR7/4	〃	〃
736	0071	H区拡張部	前期	壺	口縁部	沈線，刺目（ハケ）	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	良	並	褐　7.5YR5/6	黄褐　10YR5/6	〃	〃
737	0065	O-18第2層	〃	〃	〃	刺目（ヘラ）	ヨコナデ	〃	精良，砂（石・長）	良	明赤褐　2.5YR5/6	左同	〃	〃
738	0066	N-17 〃	〃	鉢	〃	沈線	〃	〃	並，砂	〃	にぶい黄橙　10YR7/3	〃	〃	〃
739	0069	O-18 〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙　10YR7/4	〃	〃	〃
740	0067	N-18第3層上面	中期	壺	〃	無文	ハケ	ハケ→ヨコナデ	良，砂	〃	にぶい褐　7.5YR5/4	にぶい橙　7.5YR6/4	〃	〃
741	0070	第1次X延長トレンチ	〃	〃	〃	刺目（ヘラ）	ヨコナデ	ヨコナデ	精良，砂	〃	橙　5YR6/6	左同	〃	〃
742	0068	O-19第3層上面	〃	〃	〃	〃	〃	ハケ→ヨコナデ	〃	並	灰黄褐　10YR4/2	褐灰　10YR5/1	〃	〃
743	0072	I-18，P. 4	〃	〃	〃	無文	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	並	良	褐　7.5YR4/4	左同	〃	〃
744	0073	第1次Gトレンチ		壺	底部	平底	ハケ→ナデ	ハケ	〃	不良	褐灰　10YR4/1	灰黄褐　10YR5/2	〃	〃
745	0074	〃 X延長トレンチ		壺	〃	〃	ハケ	ナデ	粗，砂	並	にぶい褐　7.5YR5/4	褐灰　10YR4/1	〃	〃

〔註〕

各欄の記述内容については，縄文土器の項に準じる。

No.	遺物No.	出土位置	種別	器種	残存度	法量	調整・技法等	胎土	焼成	色調	備考	図No.	図版No.
746	0022	第1次Gトレンチ	土師器	小皿	3分1	口（7.7），高0.9	ユビオサエ，ナデ	良	並	にぶい黄橙 10Y R7/2	墨書 「弘 賀」	63	38
747	0025	N 16，P. 6	〃	〃	〃	口（7.3），高1.0	〃	精良	良	灰 白 2.5Y8/2	〃	〃	〃
748	0023	M 19第2層	〃	〃	完存	口 8.0 ，高1.0	〃	良，砂	〃	浅 黄 2.5Y8/3	〃	〃	〃
749	0024	I—15，P. 2	〃	〃	4分1	口（8.3），高1.4	〃　口縁部ヨコナデ	〃	〃	浅 黄 2.5Y7/3	〃	〃	〃
750	0021	J—19，P. 1	〃	〃	〃	口（9.0），高1.3	〃　〃	精良，砂	〃	灰 白 10Y8/1	〃	〃	〃
751	0029	Q—21区	〃	皿	5分4	口 11.4 ，高2.6	〃　〃	〃	〃	浅 黄 2.5Y8/3	〃	〃	〃
752	0027	J 19，SK 8	〃	壺	10分1		〃　〃	並	〃	にぶい黄 2.5Y6/4	〃	〃	〃
753	0032	M 19第2層	〃	鍋	口縁3分1	口（12.9）	体部ハケメ，口縁部折り返し，ヨコナデ	やや粗，砂	〃	浅 黄 2.5Y8/3	〃	〃	〃
754	0031	〃	瓦質土器	羽 釜	3分1	口（3.8）	外面ヘラミガキ，内面ユビオサエ，ナデ	精良	〃	暗 灰 N3/0	〃	〃	〃
755	0019	第1次Nトレンチ	灰釉陶器	椀	4分1	底径（7.0）	ロクロ水挽，ロクロ回転？	良	〃	灰 7.5Y6/1	〃	〃	〃
756	0014	〃	陶 器	山茶椀	底部完存	底径 5.1	〃　〃	〃	〃	〃 5 Y6/1	〃	〃	〃
757	0017	〃	〃	〃	〃 3分1	底径（5.6）	〃　〃	精良	〃	〃 10Y6/1	〃	〃	〃
758	0016	〃	〃	〃	〃 〃	底径（7.0）	〃　〃	〃	〃	灰オリーブ 7.5Y6/2	〃	〃	〃
759	0012	〃	〃	〃	〃 完存	底径（7.1）	〃　ロクロ右回転	並	〃	灰 10Y5/1	〃	〃	〃
760	0020	〃	〃	〃	〃 4分1	底径（8.1）	〃　ロクロ回転？，底部糸切痕	やや粗	〃	明オリーブ灰 5GY7/1	〃	〃	〃
761	0015	K—19第3層	〃	〃	〃 3分1	底径（7.8）	〃　〃　〃	良	〃	灰 白 5 Y7/2	〃	〃	〃
762	0018	第1次N北トレンチ	〃	〃	〃 4分1	底径（7.6）	〃　〃	〃	〃	オリーブ灰 5 G Y6/1	〃	〃	〃
763	0009	第1次Yトレンチ	〃	〃	4分1	口（14.0）	〃　ロクロ左回転	並，砂	〃	灰 白 5 Y7/2	〃	〃	〃
764	0010	〃	〃	〃	底部完存	底径 6.6	〃　ロクロ回転？，高台モミガラ痕	粗，砂	〃	灰 黄 2.5Y7/2	〃	〃	〃
765	0011	〃	〃	〃	〃 3分1	底径（6.6）	〃　〃　内面自然釉	並	〃	灰 白 5 Y7/2	〃	〃	〃
766	0008	〃	〃	〃	〃 4分3	底径（7.4）	〃　ロクロ右回転	〃	〃	〃 5 Y7/2	〃	〃	〃
767	0006	〃	〃	〃	〃 完存	底径（6.6）	〃　〃　高台モミガラ痕	やや粗	〃	灰オリーブ 5 Y6/2	〃	〃	〃
768	0007	〃	〃	〃	4分1	口 15.0 ，高5.0	〃　ロクロ右回転？　〃	〃	〃	灰 白 5 Y7/2	〃	〃	〃
769	0003	〃	〃	〃	3分2	口 15.8 ，高5.7	〃　〃	並	〃	〃 7.5Y7/2	〃	〃	〃
770	0002	〃	〃	〃	5分1	口 15.6 ，高5.7	〃　ロクロ回転？	〃	〃	灰 7.5Y7/1	〃	〃	〃
771	0001	〃	〃	〃	4分3	口 16.0 ，高5.9	〃　ロクロ右回転，高台モミガラ痕	良，砂	〃	灰オリーブ 5 Y6/2	〃	〃	39
772	0005	〃	〃	〃	3分2	口 16.2 ，高5.6	〃　ロクロ回転？　〃	〃	〃	灰 白 5 Y7/1	〃	〃	〃
773	0004	〃	〃	〃	3分1	口（16.6），高5.9	〃　〃	粗	〃	〃 〃	〃	〃	〃
774	0013	第1次Nトレンチ	〃	小 椀	〃	口（8.8），高2.5	〃　ロクロ左回転？高台モミガラ痕	良	〃	灰 5 Y6/1	〃	〃	38
775	0026	K 20，SK 6	〃	捏 鉢	口縁10分1		〃　ロクロ回転？自然釉	並，砂	〃	〃 10Y5/1	〃	〃	〃
776	0029	N 22，SK 1	〃	〃	底部5分1	底径（12.0）	〃　ロクロ左回転	並	〃	灰 白 5 Y7/2	〃	〃	〃
777	0030	I—20，P. 1	金属製品	銭 貨	完 存						皇宋通宝	〃	〃
778	0036	炭 採	石製品	五輪塔	ほぼ完存	高（20.7），幅 15.4					空風輪	64	39
779	0035	〃	〃	〃	〃	高（34.4），幅（17.4）					中風火輪	〃	〃
780	0033	〃	〃	〃	〃	高 35.9 ，幅 20.3					〃	〃	40
781	0040	〃	〃	宝篋印塔	2分1	高（20.0），幅 13.9					相 輪	〃	〃
782	0039	〃	〃	〃	ほぼ完存	高（38.5），幅 13.1					〃	〃	41
783	0037	〃	〃	〃	3分1	高（14.1），幅 13.9					〃	〃	42
784	0034	〃	〃	〃	4分3	高（32.5），幅 11.7					〃	〃	41
785	0038	〃	〃	〃	5分4	高 22.5 ，幅（27.2）					笠，隅飾突起欠	〃	42

※法量欄の口はは径，高は器高を示す。（　）付きの数値は推定値である。

遺跡遠景（東上空から）　（1987年撮影　松阪農林事務所提供）

遺跡遠景（南から）

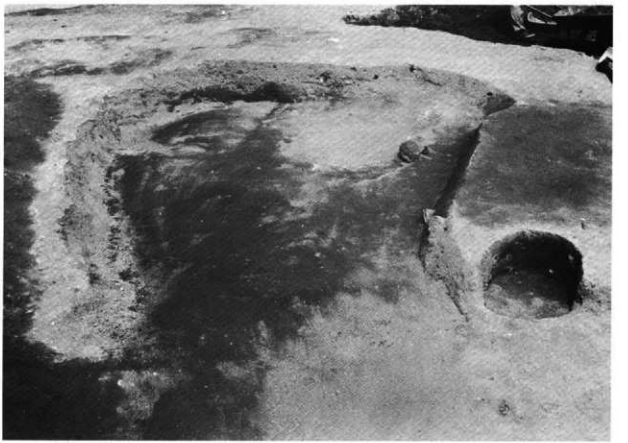
調査前近景（北西から）

第1次調査トレンチ（北から）

調査後全景（東上空から）

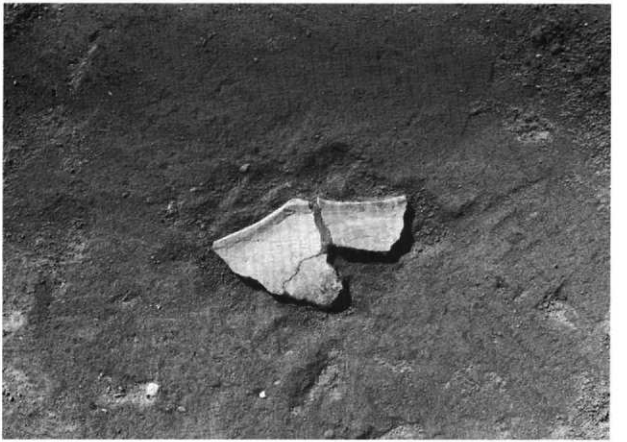
調査風景（南東端付近、南から）

SK1（西から）

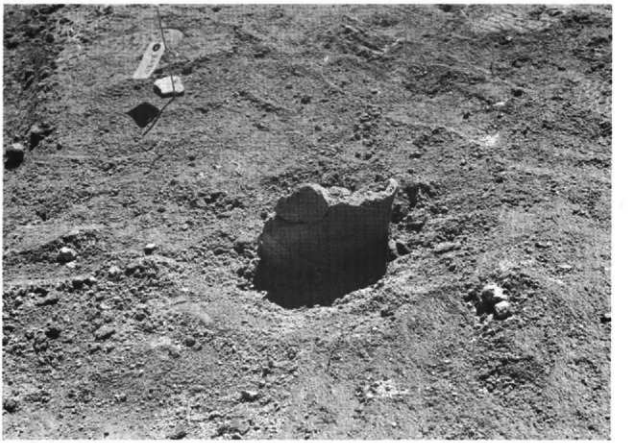


SK1（南から）

土器（223）出土状況

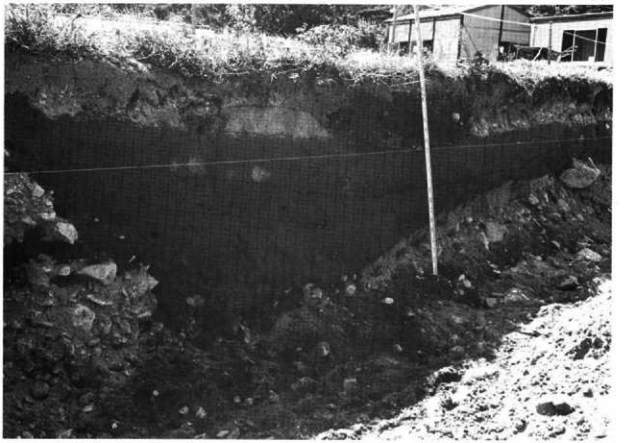


土器（239）出土状況



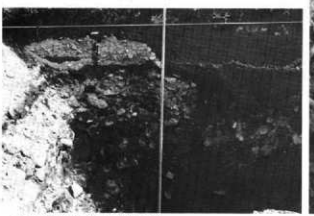
土器（94）出土状況

E区南壁断面（北から）



D区南壁断面（北東から）

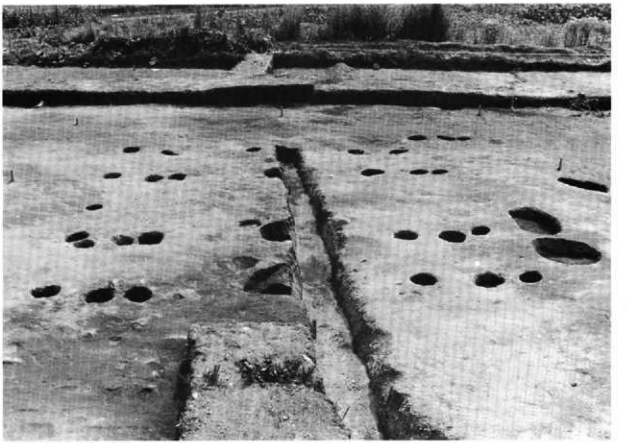
D区南東隅壁断面（北西から）



D区南壁東端断面（北から）

D区東端断面（西から）

SB2～4（北から）

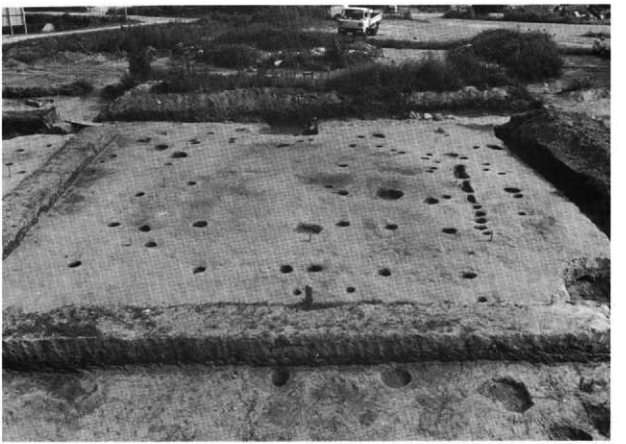


SB2～4（西から）

SB5（西から）

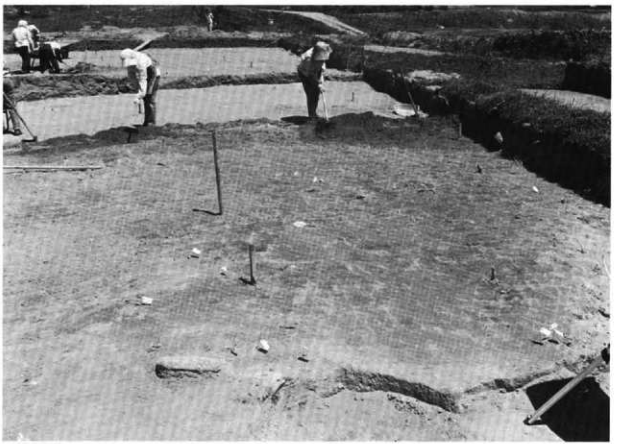
SK6（北から）

SK7（北から）

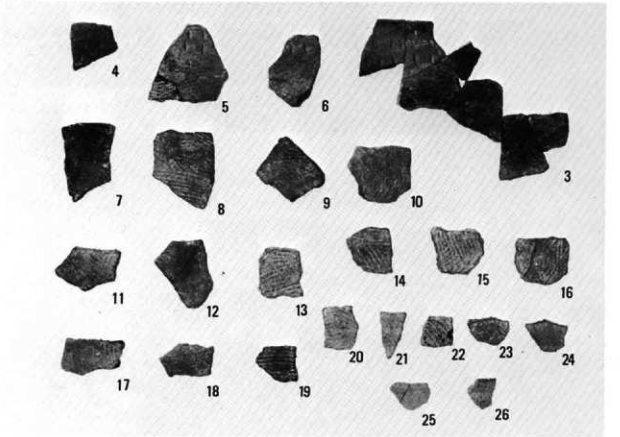


D区上層遺構全景（北から）

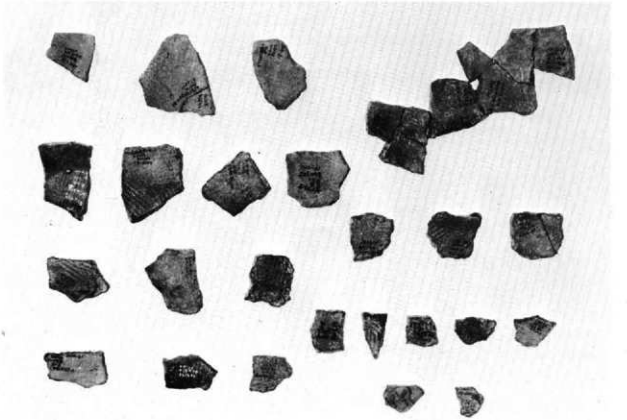
D区上層遺構全景（ＳＫ８検出後南から）



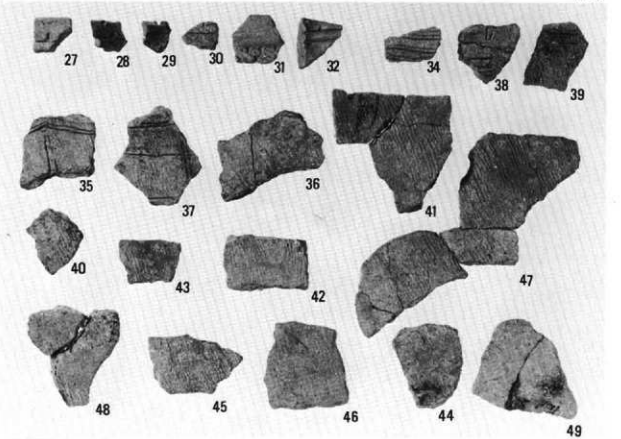
調査風景



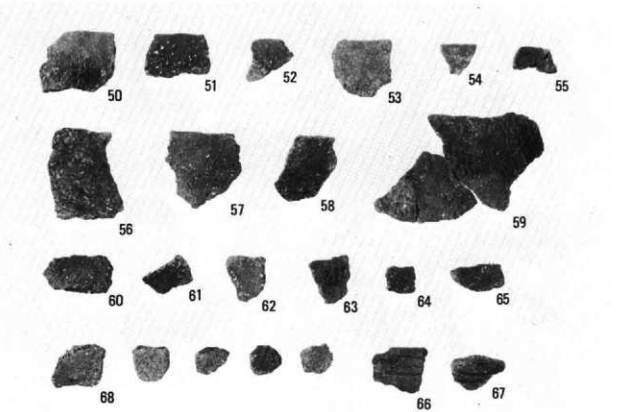
出土遺物（1：3）表面



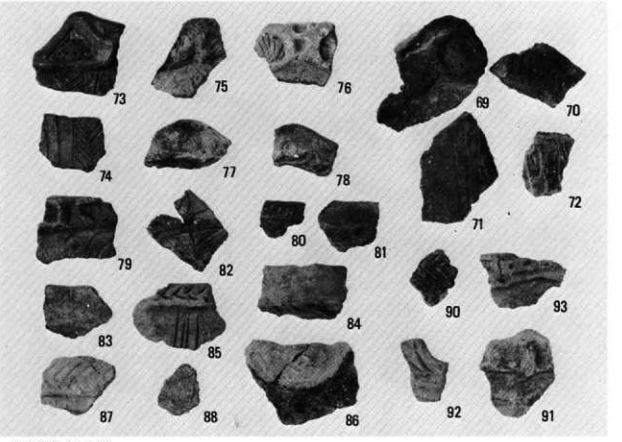
出土遺物（1：3）裏面



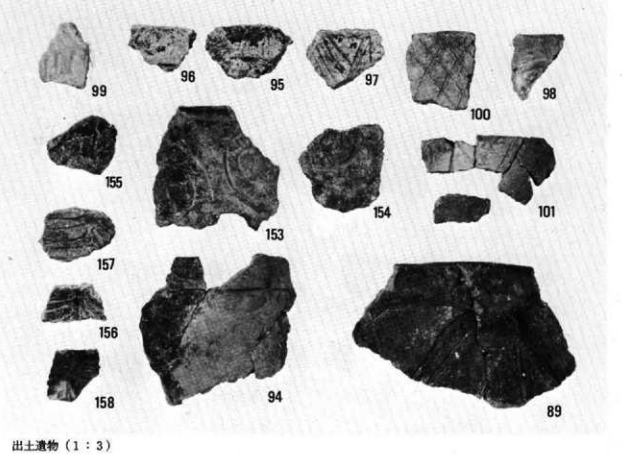
出土遺物（1：3）



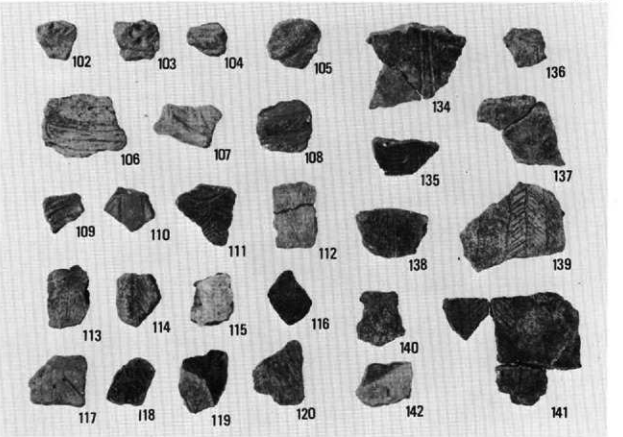
出土遺物（1：3）



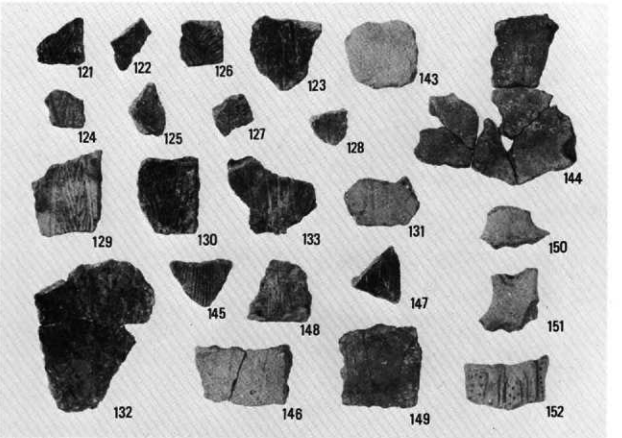
出土遺物（1：3）



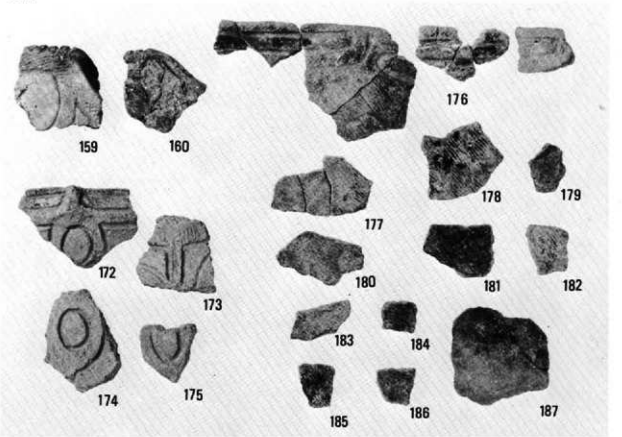
出土遺物（1：3）



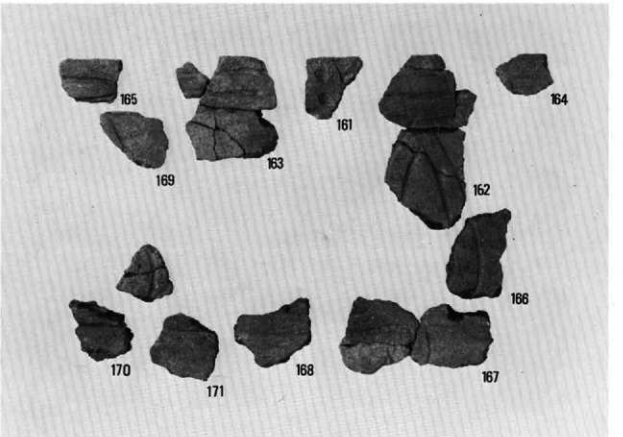
出土遺物（1：3）



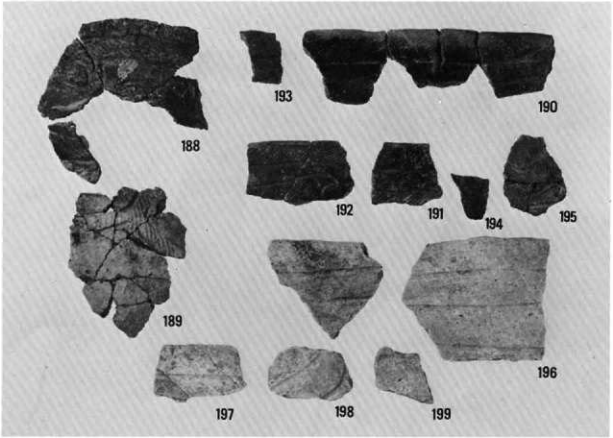
出土遺物（1：3）



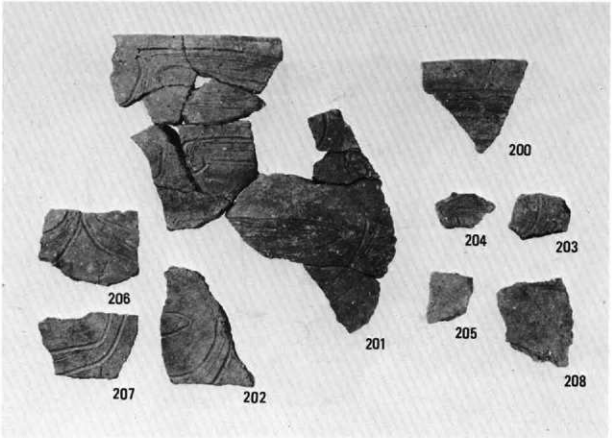
出土遺物（1：3）



出土遺物（1：3）



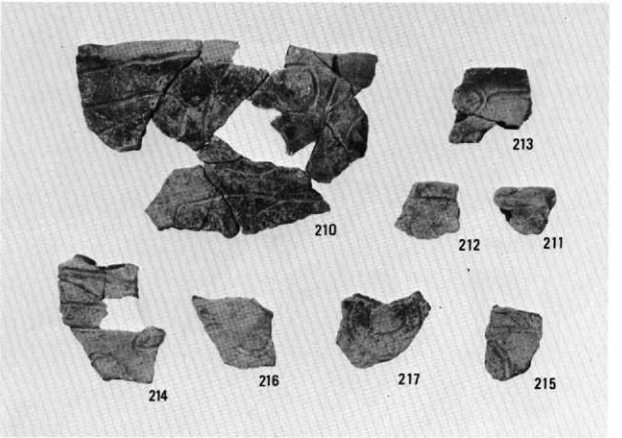
出土遺物（1：3）



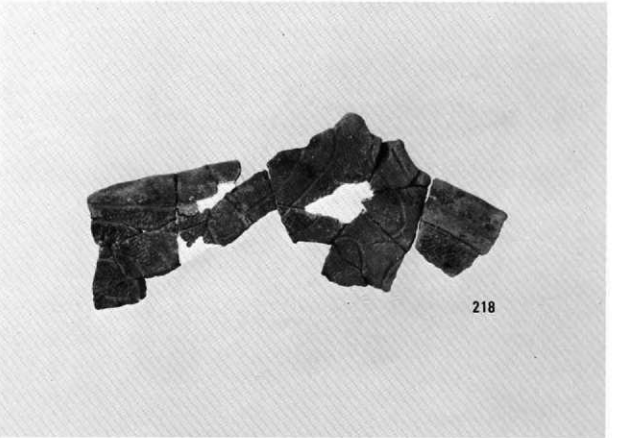
出土遺物（1：3）

出土遺物

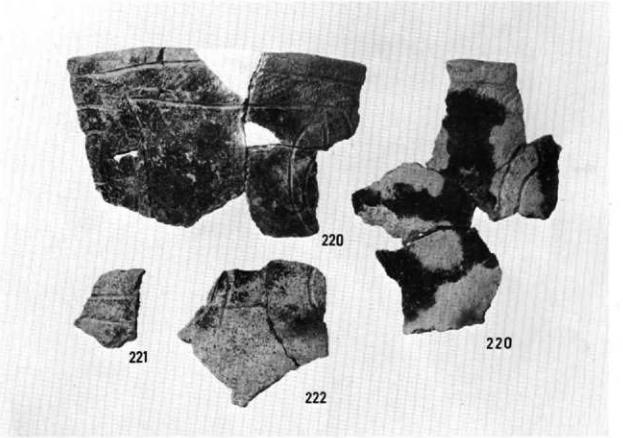
出土遺物



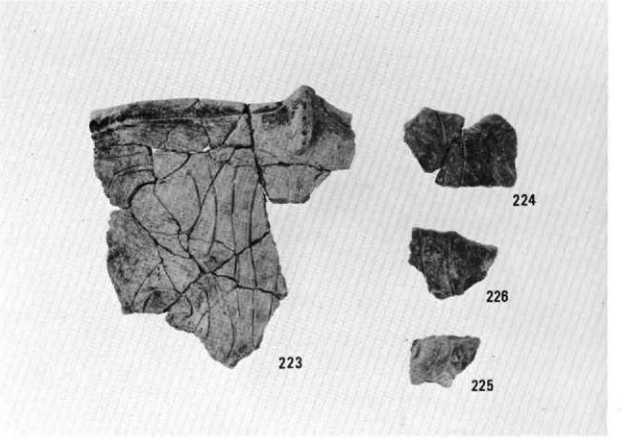
出土遺物（1：3）



出土遺物（1：3）

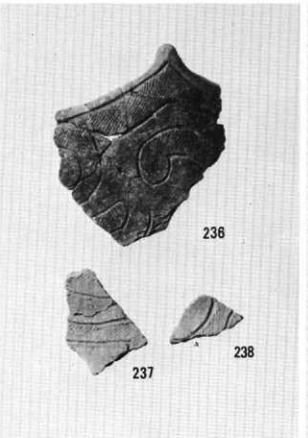


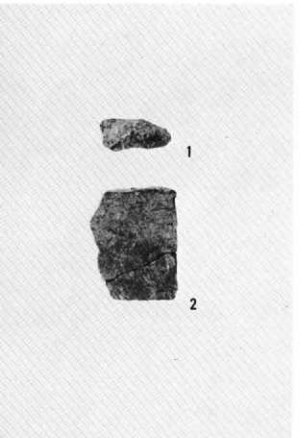
出土遺物（1：3）



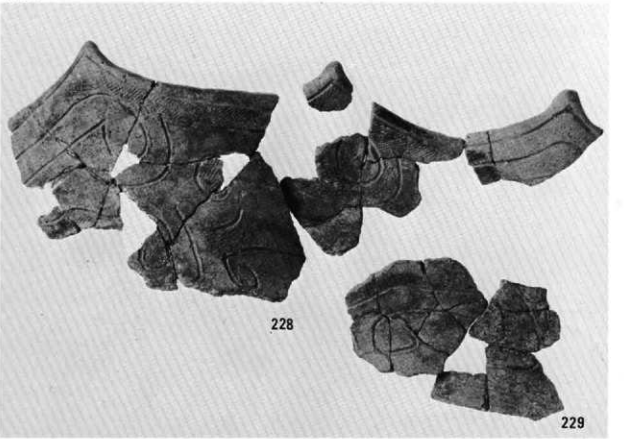
出土遺物（1：3）

出土遺物

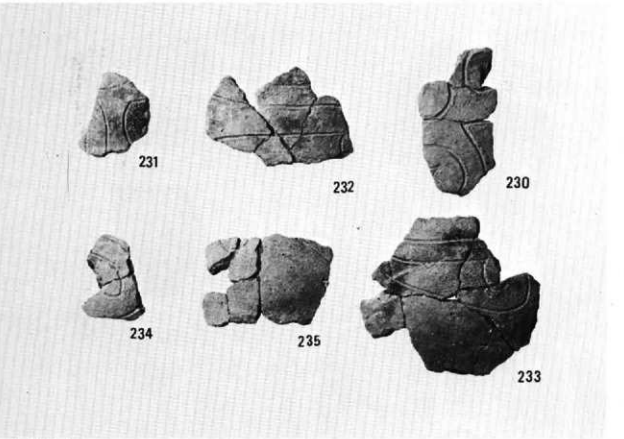




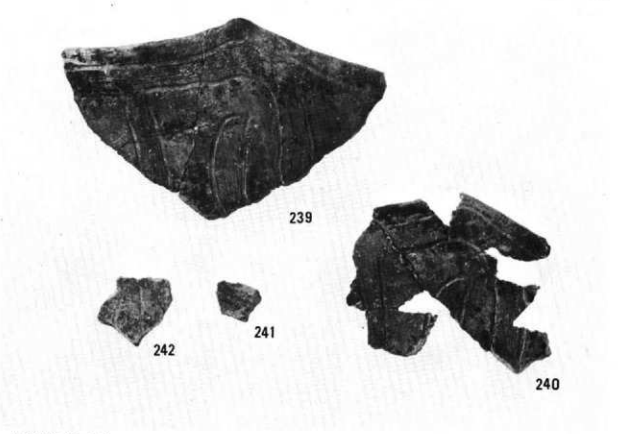
出土遺物（1：3）



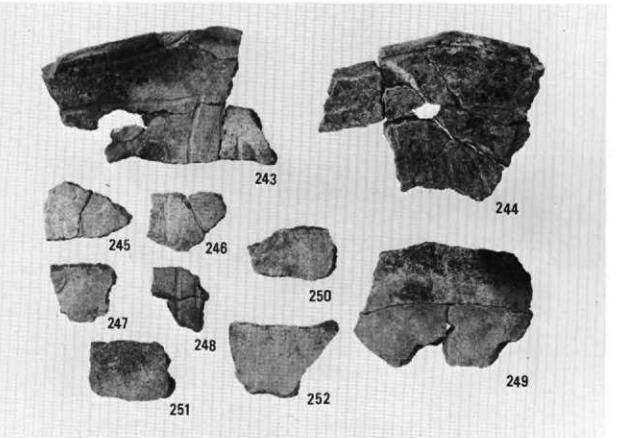
出土遺物（1：3）



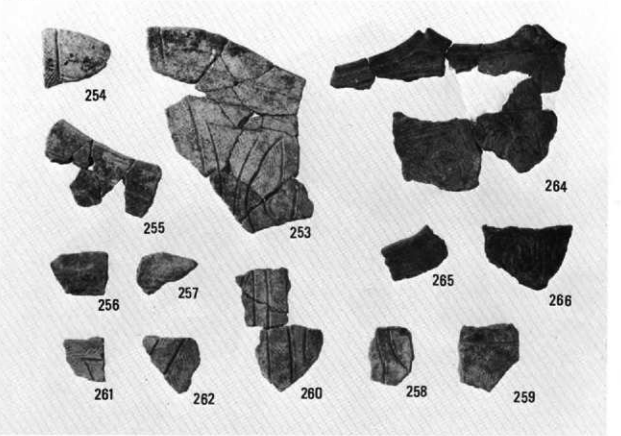
出土遺物（1：3）



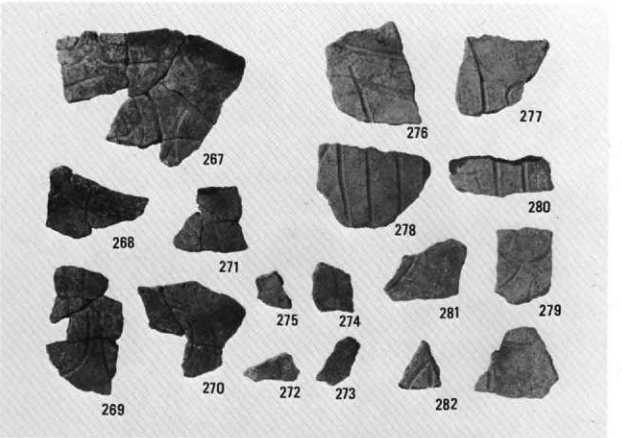
出土遺物（1：3）



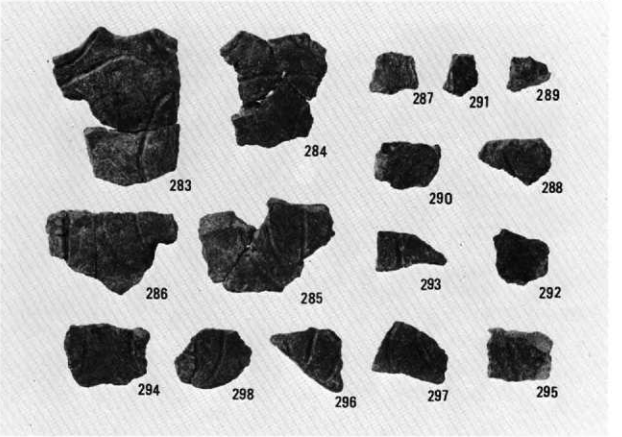
出土遺物（1：3）



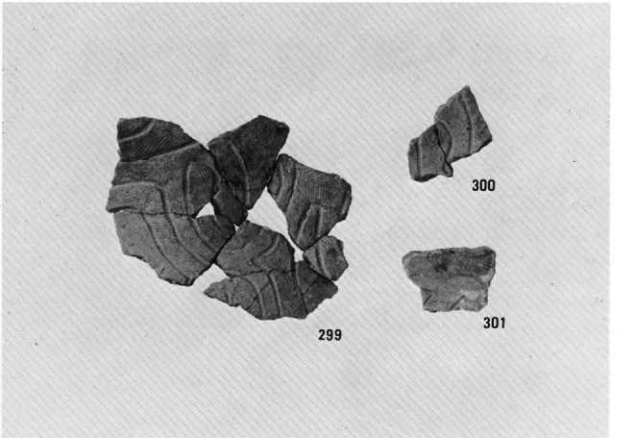
出土遺物（1：3）



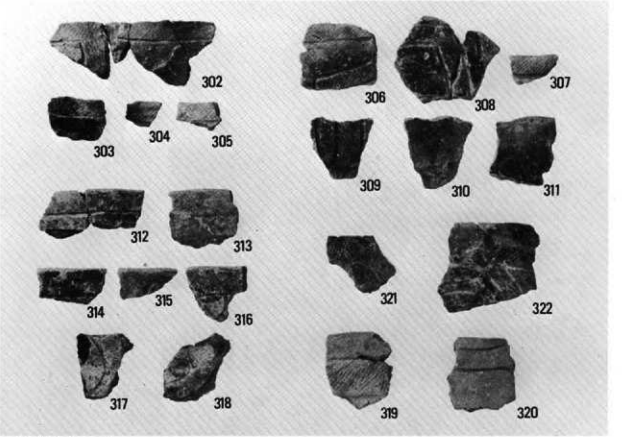
出土遺物（1：3）



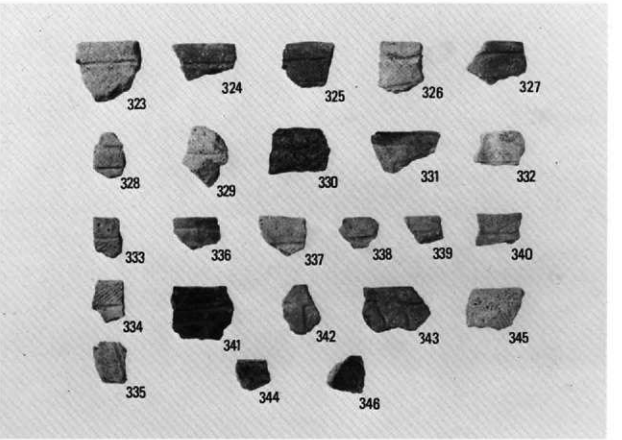
出土遺物（1：3）



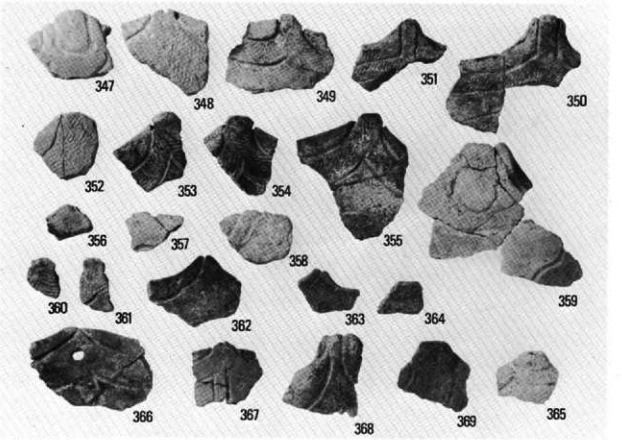
出土遺物（1：3）



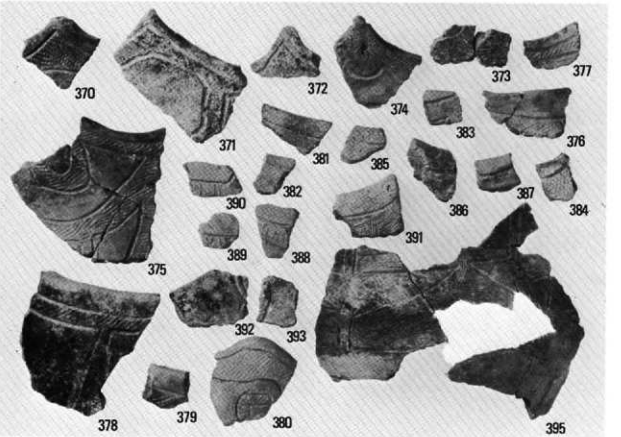
出土遺物（1：3）



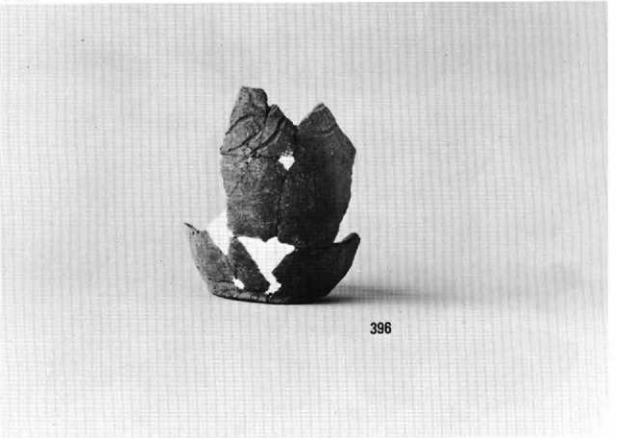
出土遺物（1：3）



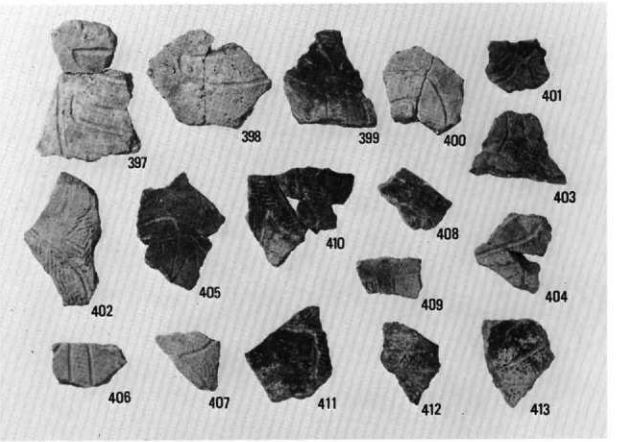
出土遺物（1：3）



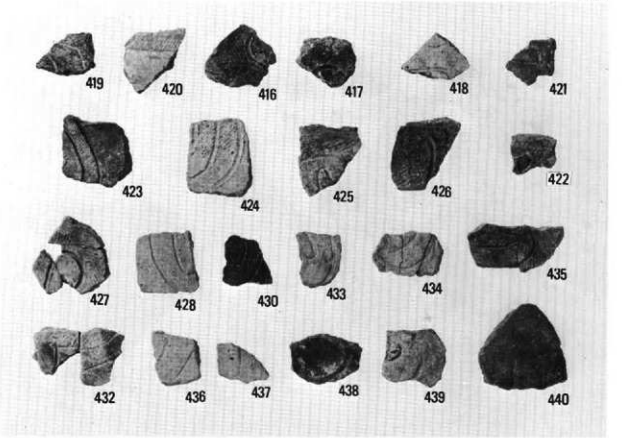
出土遺物（1：3）



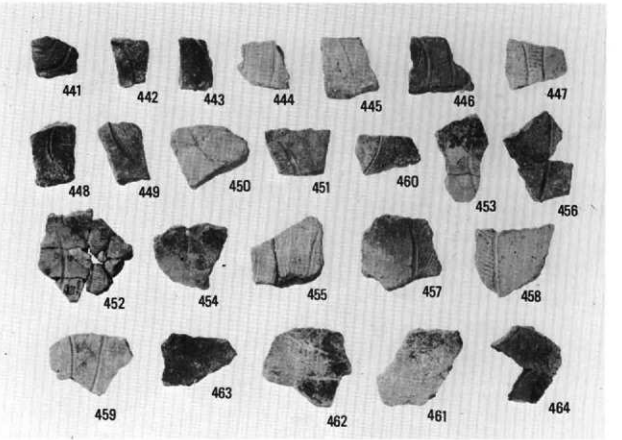
出土遺物（1：3）



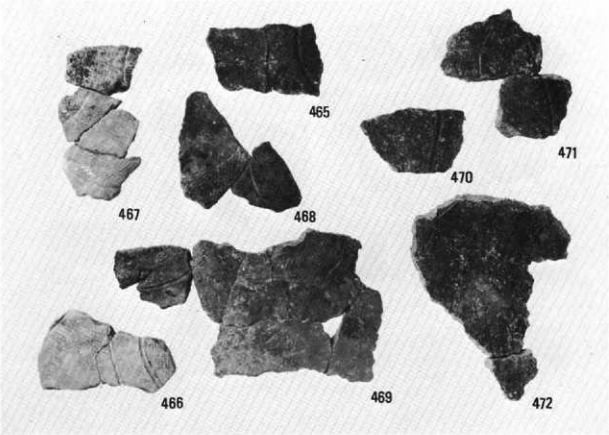
出土遺物（1：3）



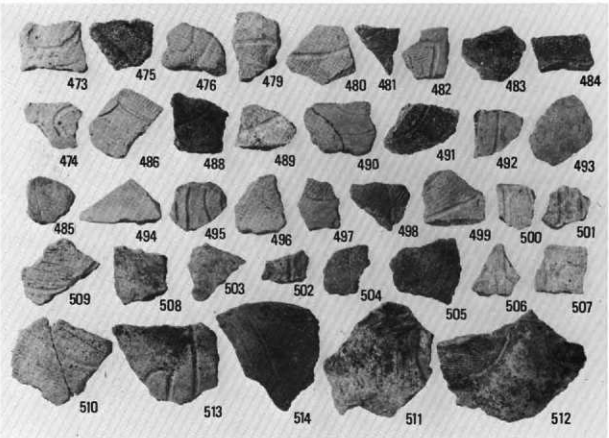
出土遺物（1：3）



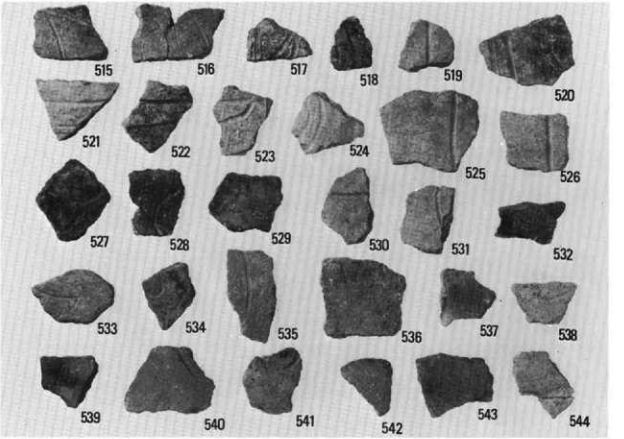
出土遺物（1：3）



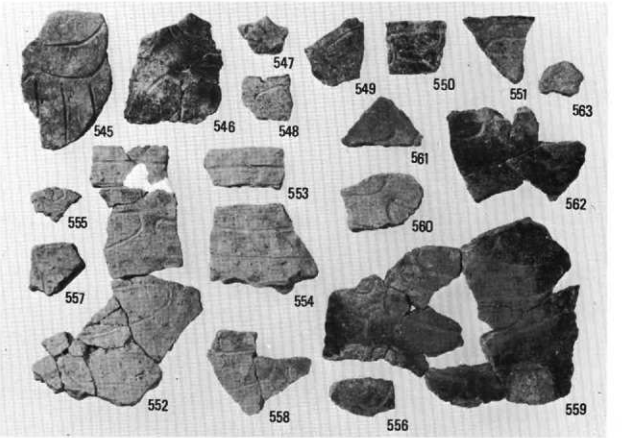
出土遺物（1：3）



出土遺物（1：3）



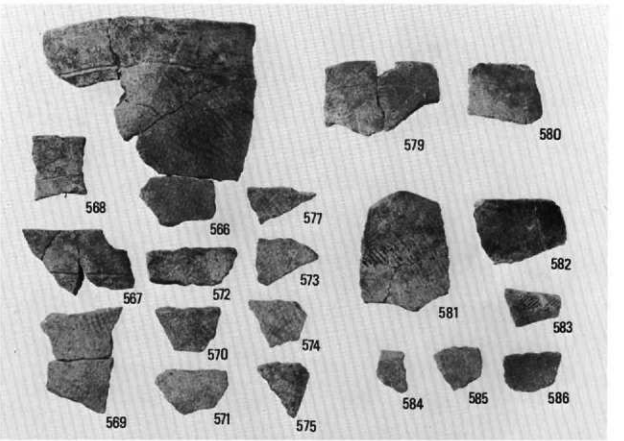
出土遺物（1：3）



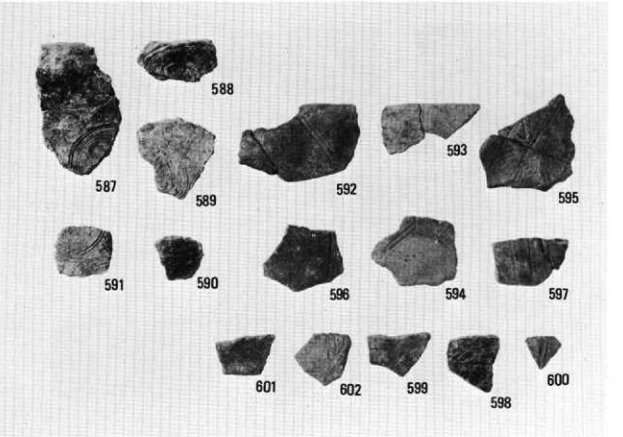
出土遺物（1：3）

564

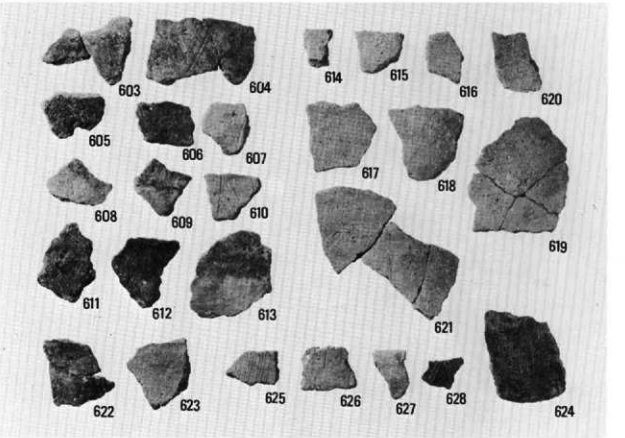
出土遺物


568
566
577
579
580
567
572
573
581
582
583
570
574
569
571
575
584
585
586

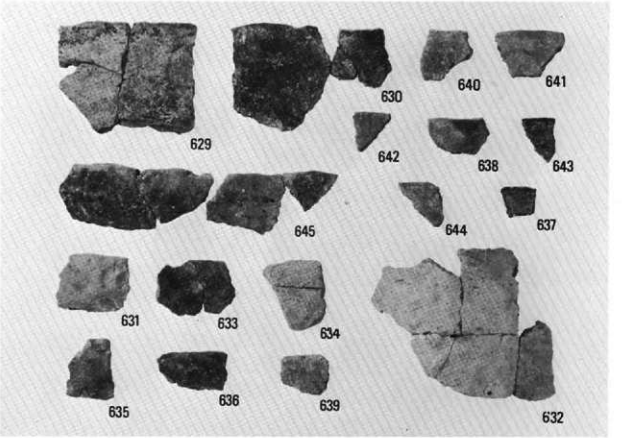
出土遺物（1：3）



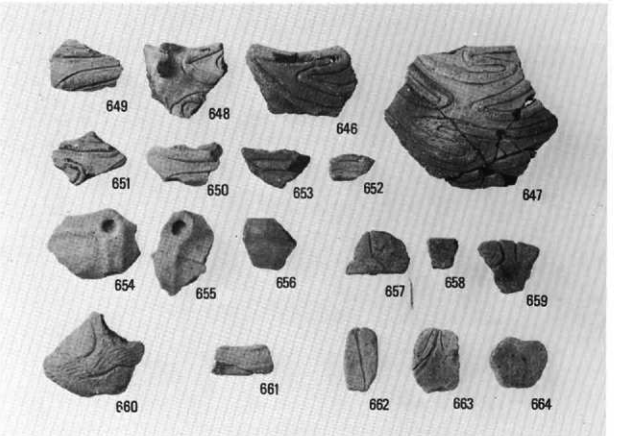
出土遺物（1：3）



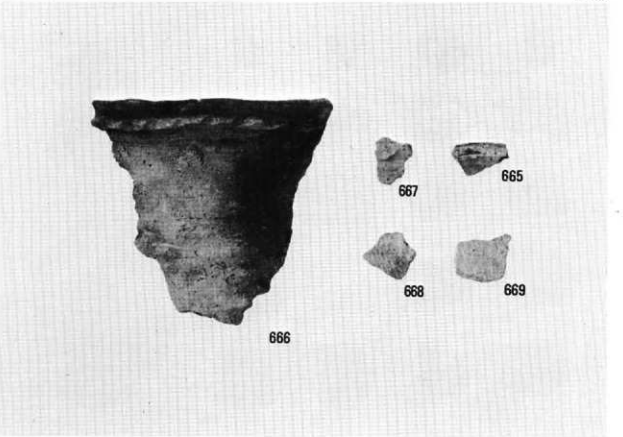
出土遺物（1：3）



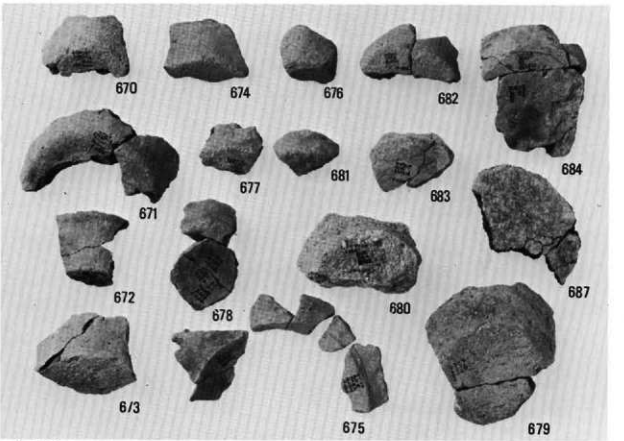
出土遺物（1：3）



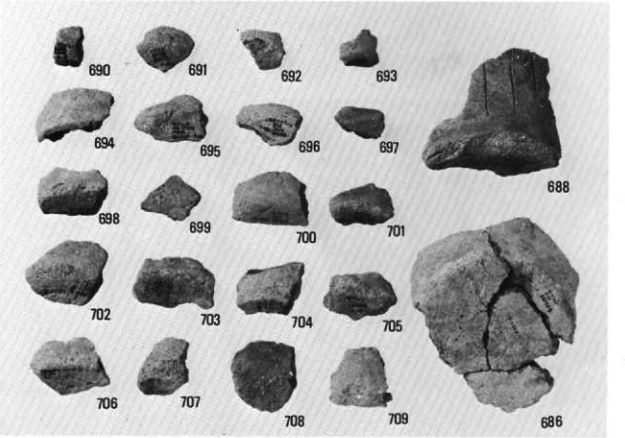
出土遺物（1：3）



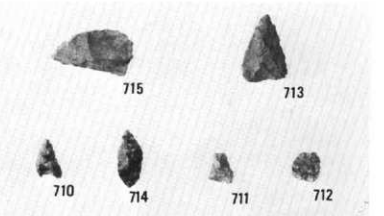
出土遺物（1：3）



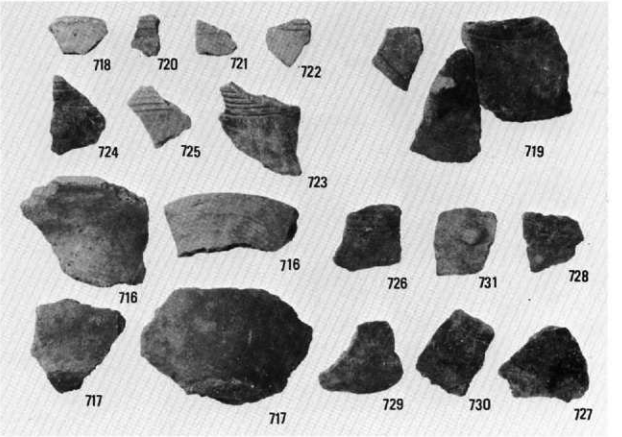
出土遺物（1：3）



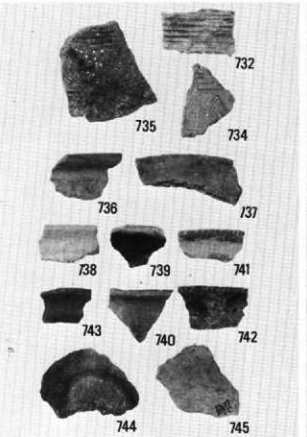
出土遺物（1：3）

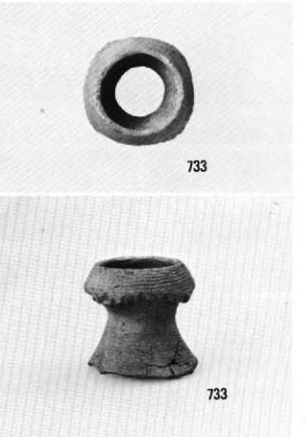


出土遺物（1：3）　711～715は1：2

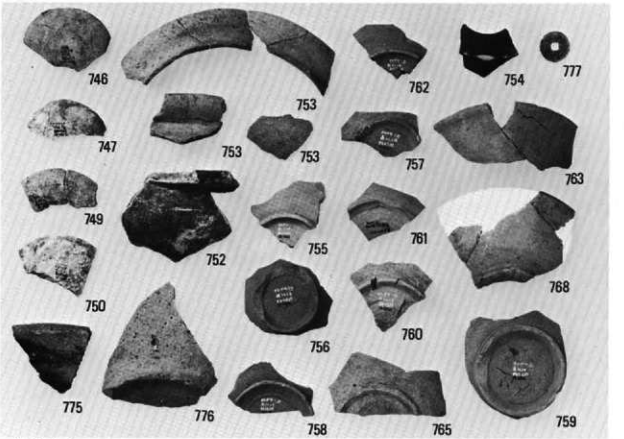


出土遺物（1：3）

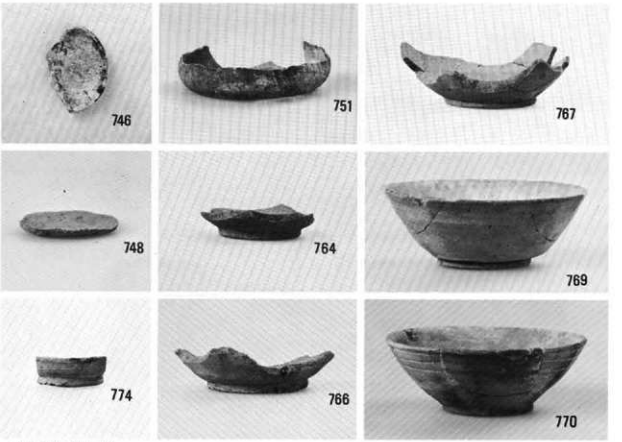




出土遺物（1：3）

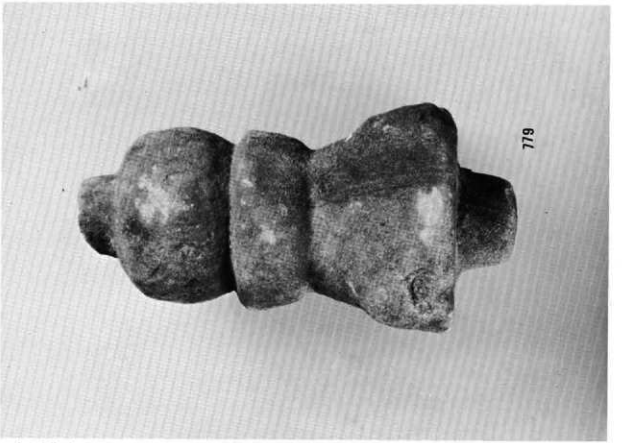


出土遺物（1：3）

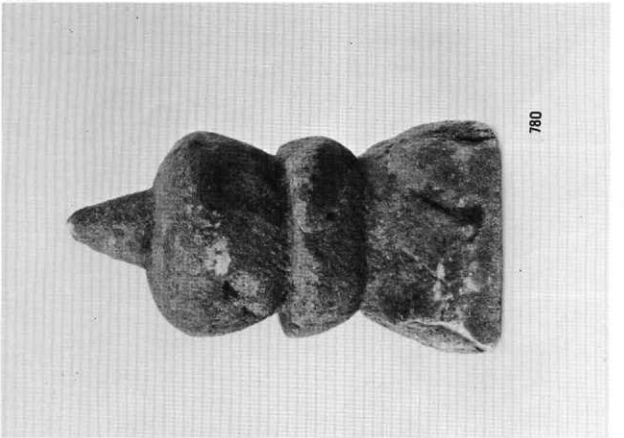


出土遺物（1：3）

出土遺物（1：3）

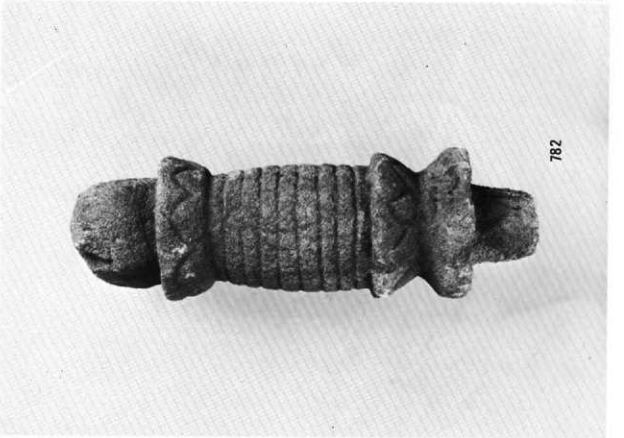


出土遺物（1：3）



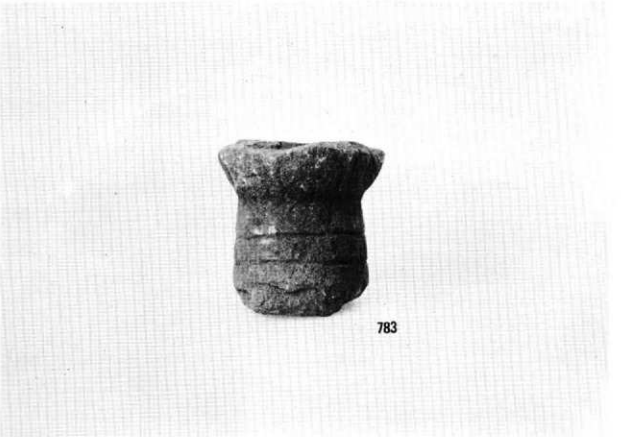
出土遺物（1：3）

出土遺物（1：3）

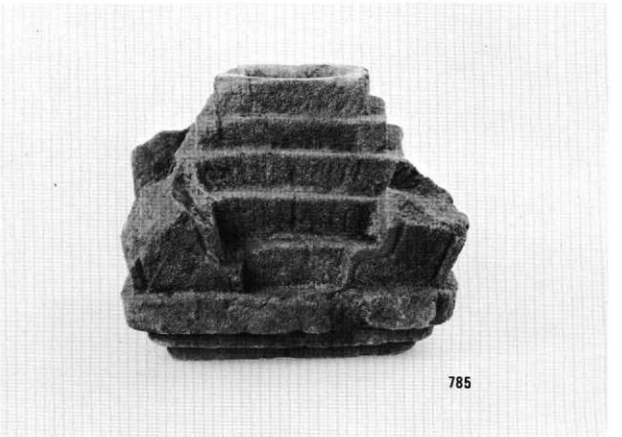


出土遺物（1：3）

出土遺物（1：3）



出土遺物（1：3）



出土遺物（1：3）

松阪市伊勢寺町　榎長（えんのき）遺跡（おさ）　(20)

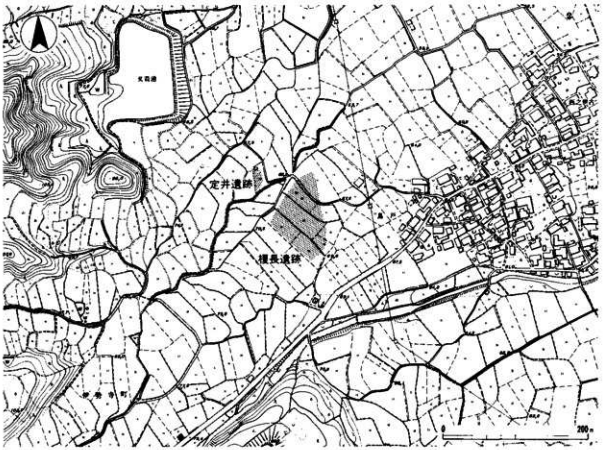
1．はじめに

榎長遺跡は堀坂川左岸、伊勢寺扇状地内の扇頂部近くに位置し、標高67～70mで現況は水田である。行政区画上は、松阪市伊勢寺町字榎長である。また当遺跡の北東には定井遺跡[1]が近接している。このため第一次（試掘）調査は、定井遺跡の範囲確認調査を兼ねて、昭和60年10月18日から同月24日までの間に事業地内に4×4mの試掘坑を20箇所設定した。その結果、榎長遺跡は、約2,440m²の範囲において本調査を行うこととなり、同年11月26日から翌61年3月18日までの間に実施した。定井遺跡については事業地内には遺跡が広がらない事が確認され、本調査には至らなかった。

なお榎長遺跡は今回調査区の東側で、昭和63年度に県営圃場整備事業に伴って発掘調査が行われており、奈良時代の遺構、遺物が検出されている[2]。

2．層　序

当遺跡における層序は上から順に耕作土、床土、旧耕作土および旧床土、灰黄褐色砂質土または暗褐色砂質土（遺物包含層）、黄褐色砂質土（地山）である。旧耕作土および旧床土は多い所で3層、約70



第65図　遺跡地形図（1：5,000）

cmで、中世の遺物が細片となって包含されていた。遺物包含層は厚い所で約60cmである。調査区は近世以降の開墾により、一部に削平を受けており、床土の下が地山となっているところもみられる。

3．遺　　構

主な遺構は発掘区の西端から南端にかけてと北部にそのほとんどが集中しており、竪穴住居12棟、掘立柱建物4棟、柵列3条、土坑、溝および多数のピットなどを検出した。発掘区の中央部には遺構はほとんどなく、現在の水田によって削平されたものと考えられる。

なお遺構実測図は掘り上がり後の図面であり、新旧関係については本文中及び表の備考欄に記した。以下、主要遺構についてのみ紹介しておきたい。

① 奈良時代

A．竪穴住居

ＳＢ13　3.0×2.4m以上の方形で深さは検出面から15～20cmである。長軸方向はN23°Wである。切り合い関係により、ＳＢ15・17より新しい。

ＳＢ14　2.3以上×3.4mの方形で、長軸方向はN68°Wである。

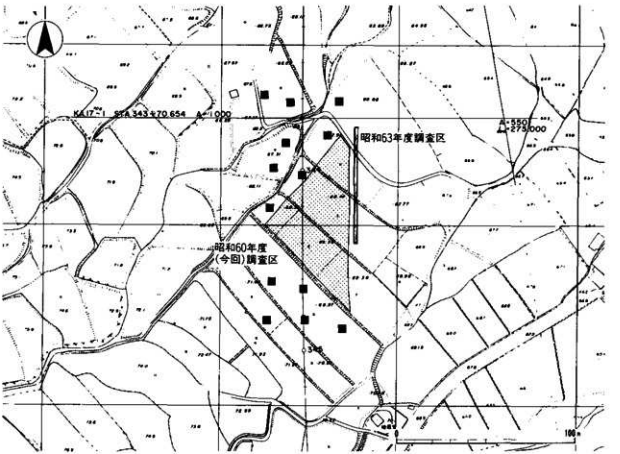
ＳＢ15　3.7×3.2mの方形で、床面は堅く締まる。長軸方向はN39°Wである。南西辺には長さ2.8m、幅20～40cm、深さ35cmの周溝が、北東辺には50×70cmの焼土がみられる。主柱穴は径約20cmである。

ＳＢ16　3.7×3.3mの方形で、長軸方向はN40°Wである。幅30～80cm、深さ20cmの周溝が巡り、北東辺には70×70cmの焼土がみられる。

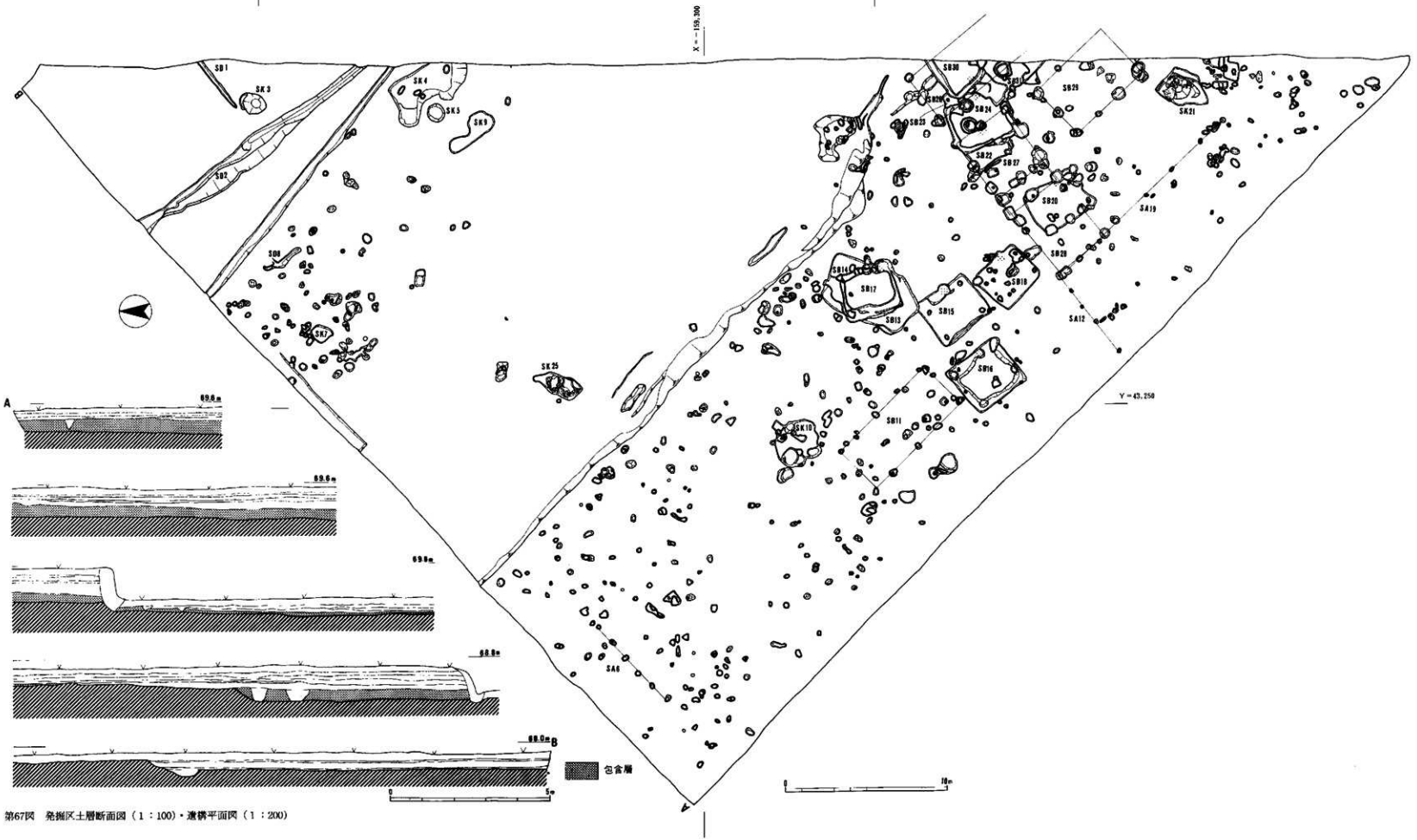
ＳＢ17　3.4×3.2mの方形で、長軸方向はN16°Wである。幅20～90cm、深さ30～40cmの周溝が四周に巡る。北東辺には、焼土が二箇所みられ、それぞれ、60×60cmと40×40cmである。

ＳＢ18　3.2×2.9mの方形で、長軸方向はN44°Wである。北東辺に50×50cmの焼土がみられる。

ＳＢ20　3.7×2.8mの方形で、長軸方向はN32°



第66図　発掘区位置図（1：2,000）



第67図　発掘区土層断面図（1：100）・遺構平面図（1：200）

Wである。北東辺に40×60cmの焼土がみられる。掘立柱建物ＳＢ28とＳＢ27の柱穴に切られる。

ＳＢ22　2.7×2.2mの方形で、長軸方向はN32°Wである。北東辺に40×70cmの焼土がみられる。切り合い関係によりＳＢ24より新しい。

ＳＢ23　3.3×2.8mの方形で、北東辺に70×40cmの焼土がみられる。長軸方向はN34°Wである。切り合い関係によりＳＢ24・30より新しい。

ＳＢ24　4.0×3.3mの方形で、幅30cm、深さ20～35cmの周溝が巡る。北東辺に40×30cmの焼土がみられる。方位はN24°Wである。ＳＢ22とＳＢ23に切られる。

ＳＢ30　3.2以上×2.7mの方形で、50cm程の幅で周溝が巡る。長軸方向はN39°Wである。

ＳＢ31　2.6以上×3.0m以上の方形である。長軸方向はN39°Wである。

Ｂ．掘立柱建物

ＳＢ26　3間以上×2間で、柱間寸法は桁行1.8m等間、梁行1.7m等間である。棟方向はN42°Wである。柱掘形は、径60～70cmである。切り合い関係により竪穴住居ＳＢ23・24・31より新しい。

ＳＢ27　3間×2間で柱間寸法は桁行1.8m等間、梁行1.9m等間である。柱掘形は60×80cm程の方形である。棟方向はN52°Eである。切り合い関係によりＳＢ28および竪穴住居ＳＢ20・22・24より新しい。

ＳＢ28　3間×2間で、柱間寸法は桁行1.9m等間、梁行は北東側で1.8m等間、南西側が1.6m＋2.0mである。柱掘形は60×90cm程度を標準とする。棟方向はN50°Eである。切り合い関係によりＳＢ27より古く、竪穴住居ＳＢ20より新しい。

ＳＢ29　南東側梁行の柱穴を調査区の断面で確認しているため、規模は3間×2間と考えられる。柱間寸法は桁行、梁行とも1.8m等間である。柱掘形は、50×70cmの方形を標準とする。棟方向はN43°Eである。

Ｃ．柵列

ＳＡ12　4間分検出し、柱間寸法は北東から1.2m＋1.2m＋1.2m＋2.4mで、方向はN51°E、柱掘形は径30cmの円形または方形である。

ＳＡ19　6間分検出したが、柱間寸法は北西から2.1m＋2.2m＋2.5m＋2.1m＋2.4m＋1.9mで、方向はN43°W、柱掘形は径30～60cm程の楕円形である。

Ｄ．土坑

ＳＫ10　2.4×2.7mの不整方形を呈し、深さは10～20cmである。竪穴住居の可能性も否定できないが、他の竪穴住居に比べ、平面形が不整で比較的小さく、焼土も検出されなかったので、一応土坑とした。なお土坑の上面や付近の包含層からは坩堝（109）や鉄滓が出土している。

②　中世以降

Ａ．溝

ＳＤ1　長さ3m以上、幅30cm、深さ5cmで、方向はＳＤ2に直交する。

ＳＤ2　長さ17m以上、幅0.5～1.7m、深さ10～50cmである。山茶碗（58）が出土しているため中世以降の溝としたが、断面観察の結果から考えると近世～近代にかけての開墾に伴う溝の可能性が高い。

③　時期不明

Ａ．掘立柱建物

ＳＢ11　4間×2間で、桁行は7.4m、梁行は3.2mである。柱間寸法は桁行が北東側から1.3m＋1.9m＋2.0m＋2.2m、南西側が1.3m＋2.3m＋1.8m＋2.0m、梁行は1.6m等間である。柱掘形は径30～50cmである。棟方向はN45°Eである。

Ｂ．柵列

ＳＡ6　5間分検出した。柱間寸法は1.2m等間である。南東側に柵列と平行してピットが検出されているので掘立柱建物となる可能性もある。方向はN47°Eである。

Ｃ．溝

ＳＤ8　長さ2.5m、幅30～50cm、深さ10cmである。

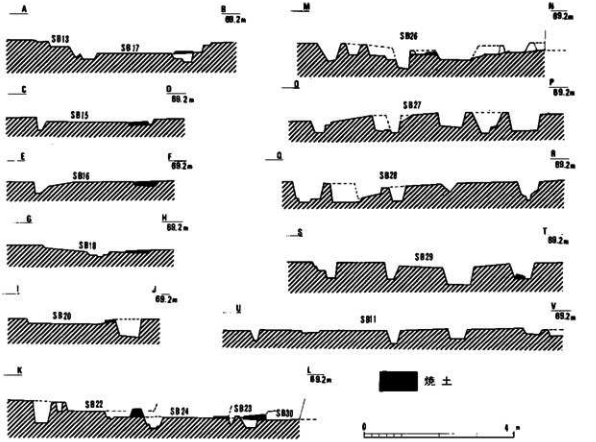
Ｄ．土坑

ＳＫ3　径約1.2～1.7mで深さ40cmである。

ＳＫ4　5×3mの不定形な土坑である。北にコーナーを持ち、床の一部が堅く締まっているため竪穴住居の可能性もある。

ＳＫ5　径約1m、深さ20cmの円形の土坑である。

ＳＫ7　平面形は一辺1m前後の台形を呈する土坑で深さ20cmである。



第68図　主要遺構断面図（1：100）

竪穴住居一覧

遺　構	規模（m）	長軸方向	周　溝	カマド	出土遺物	備　　考
ＳＢ13	3.0×2.4以上	N23°W	×	北東辺		ＳＢ15.17より新
ＳＢ14	2.3以上×3.4	N68°W	×	なし		
ＳＢ15	3.7×3.2	N39°W	○（南東辺）	北東辺	1・2	ＳＢ13より古
ＳＢ16	3.7×3.3	N40°W	○	北東辺	3～7	
ＳＢ17	3.4×3.2	N16°W	○	北東辺	8～10	ＳＢ13より古
ＳＢ18	3.2×2.9	N44°W	×	北東辺	11～14	
ＳＢ20	3.7×2.8	N32°W	×	北東辺	15	掘立柱建物ＳＢ27.28より古
ＳＢ22	2.7×2.2	N32°W	×	北東辺	16～25	ＳＢ24より新、掘立柱建物ＳＢ27より古
ＳＢ23	3.3×2.8	N34°W	×	北東辺	26～34	ＳＢ24.30より新
ＳＢ24	4.0×3.3	N24°W	○	北東辺	35～37	ＳＢ22.23、掘立柱建物ＳＢ27より古
ＳＢ30	3.2以上×2.7	N39°W	○	?		ＳＢ23より古
ＳＢ31	2.6以上×3.0以上	N39°W	×	?		

掘立柱建物一覧

遺　構	規模（間）	棟方向	桁行（m）	梁行（m）	柱間寸法（m） 桁　行	柱間寸法（m） 梁　行	出土遺物	備　　考
ＳＢ26	3以上×2	N42°W	5.4	3.4	1.8	1.7	38	竪穴住居ＳＢ23.24.31より新
ＳＢ27	3×2	N52°E	5.4	3.8	1.8	1.9	39～42	ＳＢ28.竪穴住居ＳＢ20・22・23・24より新
ＳＢ28	3×2	N50°E	5.7	3.6	1.9	1.8(1.6+2.0)		ＳＢ27より古、竪穴ＳＢ20より新
ＳＢ29	3×2	N43°W	5.4	3.6	1.8	1.8		
ＳＢ11	4×2	N45°W	7.4	3.2	1.3+1.9+2.0+2.2 (1.3+2.3+1.8+2.0)	1.6		

柵列一覧

遺　構	規模（間）	方　向	柱間寸法（m）	出土遺物	備　　考
ＳＡ12	4	N51°E	1.2+1.2+1.2+2.4	43	
ＳＡ19	6	N43°W	2.1+2.2+2.5+2.1+2.4+1.9	44	
ＳＡ6	5	N47°E	1.2		

第24表　竪穴住居、掘立柱建物、柵列一覧

第69図　主要遺構実測図（1：100）

ＳＫ９　平面形は最大3.3×1.4mの不定形であり、深さは５～10cmである。

ＳＫ21　平面形は一辺２ｍ前後の五角形状を呈し深さは40cmである。土坑内には80cm程の石１個と20cm前後の石が多数みられる。

ＳＫ25　3.0×1.3mで、深さは40cmである。

４．遺　　物

１、遺構出土の遺物

①　ＳＢ15出土の遺物

土師器

椀（１）　推定口径14.4cm、器高3.2cm、口縁部はヨコナデ、体部から底部外面は未調整である。粘土紐つなぎ痕がみられる。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を若干含む。

須恵器

蓋（２）　口縁部の小片で口径は推定である。灰色を呈し、１mm未満の砂粒を含む。外面は淡黄色の自然釉がみられる。

②　ＳＢ16出土の遺物

土師器

椀（３）　焼土出土である。推定口径13cm、器高4.3cm、口縁部はヨコナデ、体部から底部外面は未調整で粘土紐つなぎ痕がみられる。色調は暗褐色をしており、二次焼成を受けている。

杯（４）　推定口径16cm前後で、口縁部はヨコナデ、底部外面はヘラケズリである。色調は黄橙色である。

甕ＡＩ（５）　口縁部は短く外反し、胴部が球状になるもので口径は12cm前後の小型のものである。口縁部をヨコナデし、胴部外面はハケメ調整を施す。

甕ＡII（６）　ＡＩと同じ形態をした中型のもので口径約17cm、器高15.5cmである。焼土出土で、口縁部はヨコナデ、胴部外面上半は７本／cmの、下半から底部は13本／５cmの原体でハケメ調整をする。内面は口縁部には横位のハケメが残っており、胴部上半はナデ消し、下半以下はヘラケズリする。色調はにぶい黄橙色で、二次焼成を受けている。

須恵器

壺（７）　底部のみの破片であるが、高台径約７cmで高台はハの字に外傾する。胴部はロクロケズリで、ロクロ回転は時計回りである。

③　ＳＢ17出土の遺物

土師器

杯（８）　周溝出土片と焼土出土片が接合したものである。推定口径約16cm、口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリである。内面は体部に右下がりの放射状暗文が、底部に螺旋暗文が施される。明赤褐色を呈し、胎土は精良である。

甕ＡII（９）　周溝出土の口縁部小片である。口縁部はヨコナデで、胴部内面にはハケメがみられる。色調はにぶい黄褐色を呈する。

須恵器

杯Ｂ（10）　高台を有するもので、口径約13cm、器高約４cmである。底部と体部の境が明瞭で、体部は直線的に外傾する。体部はロクロナデ、底部はヘラケズリである。灰色を呈し、胎土には細砂粒を含む。

④　ＳＢ18出土の遺物

土師器

椀（11）　口縁部の小片である。口縁部ヨコナデ底部は未調整である。色調は灰オリーブ色を呈する。

杯（12）　口縁部の小片である。色調は橙色を呈する。

皿（13・14）　小片のため口径は不明であるが、おそらく20cm前後になるものと思われる。口縁部をヨコナデし、底部外面はヘラケズリである。

⑤　ＳＢ20出土の遺物

土師器

甕ＡII（15）　口径15cm前後、器面磨耗のため調整は不明である。色調は淡黄色を呈する。

⑥　ＳＢ22出土の遺物

土師器

椀（16）　口縁部ヨコナデ、底部外面は未調整で浅黄橙色を呈する。

杯（17）　推定口径15cm、器高約３cm、口縁部ヨコナデ、底部は未調整である。色調は黄橙色を呈する。

Ⅲ（18）　推定口径21cm、器高2.4cm、口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリである。橙色を呈する。

甕AⅡ（19・20）　推定口径16cmで、口縁部ヨコナデ、（20）は胴部外面を縦位のハケメで調整する。色調は黄橙色又は黄褐色を呈し、ともに二次焼成を受けている。

甕B（21）　いわゆる長胴甕であるが、口縁部の小片である。口縁部をヨコナデし、胴部内面にはハケメがみられる。浅黄橙色を呈し胎土には砂粒を含む。

須恵器

杯A（22）　高台を有しない杯で、底部と体部の境が明瞭で、体部は直線的に外傾する。底部外面はロクロケズリ、体部と内面はロクロナデする。色調は灰色を呈する。

杯B（23）　高台を有する杯で、口径約15cm、器高約3cmである。高台は低く雑に貼りつけており、体部はやや外反気味に開く。底部外面はヘラ切り未調整、体部はロクロナデで、ロクロ回転は時計廻りである。内面底部は乱ナデを施す。

土製品

土錘（24・25）　最大径1.6cm、孔径0.4cm、土師質で、灰オリ--ブ色または明黄褐色を呈する。

⑦　ＳＢ23出土の土器

土師器

椀（26～28）　口径11～12cm前後、器高3～4cmで、口縁部ヨコナデ、体部外面は未調整である。（26・28）は粘土紐つなぎ痕がみられる。色調は淡黄色又は黄橙色で、（28）の底部外面には「諸人」の墨書がみられる。

杯（29）　口縁部はヨコナデで、底部はヘラケズリと思われる。橙色を呈する。

Ⅲ（30）　口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリである。橙色を呈する。

甕AⅠ（31）　口径13cm前後で、口縁部ヨコナデ、体部は外面が縦位のハケメで、内面にも横位のハケメ調整が残る。色調は浅黄橙色を呈する。

甕AⅡ（32）　口径16cm前後で、口縁部はヨコナデ、体部は外面が縦位のハケメ、内面が横位のハケメである。色調は黄橙色を呈する。外面には煤が付着し、口縁付近は二次焼成を受けて赤褐色となっている。

甕B（33）　長胴甕で、口径は26cm前後と思われる。口縁部はヨコナデ、胴部は外面が縦位のハケメ、内面は横位のハケメである。色調は黄色である。

須恵器

蓋（34）　口径16cm前後で、青灰色を呈し、外面には自然釉がみられる。

⑧　ＳＢ24出土の遺物

土師器

甕B（35）　焼土出土の小破片であるが、推定口径22cmの長胴甕と思われる。口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ調整を施す。明黄褐色を呈する。

須恵器

杯B（36）　推定高台径約9cmで、底部外面は、ロクロケズリである。灰色を呈する。

石製品

砥石（37）　全長約15cm、幅約5cm、厚さ約2cmで、緑色片岩製である。四面とも使用痕が認められる。

⑨　ＳＢ26出土の遺物

土師器

甕AⅡ（38）　推定口径15cmで、口縁部ヨコナデ、胴部は内外面とも細かいハケメ調整を施す。色調は淡褐色である。

⑩　ＳＢ27出土の遺物

土師器

杯（39・40）　推定口径15cm前後で、（40）には内面に放射状暗文がみられる。色調は赤褐色または橙である。

甕AⅡ（41・42）　推定口径16cm前後で、口縁部ヨコナデで、.（42）の胴部は内外面ともハケメ調整である。色調は淡黄白色または灰褐色で、胎土には砂粒を含む。（41・42）とも煤が付着し、（41）は二次焼成により器面は剥離し赤橙色に変色する。

⑪　ＳＡ12出土の遺物

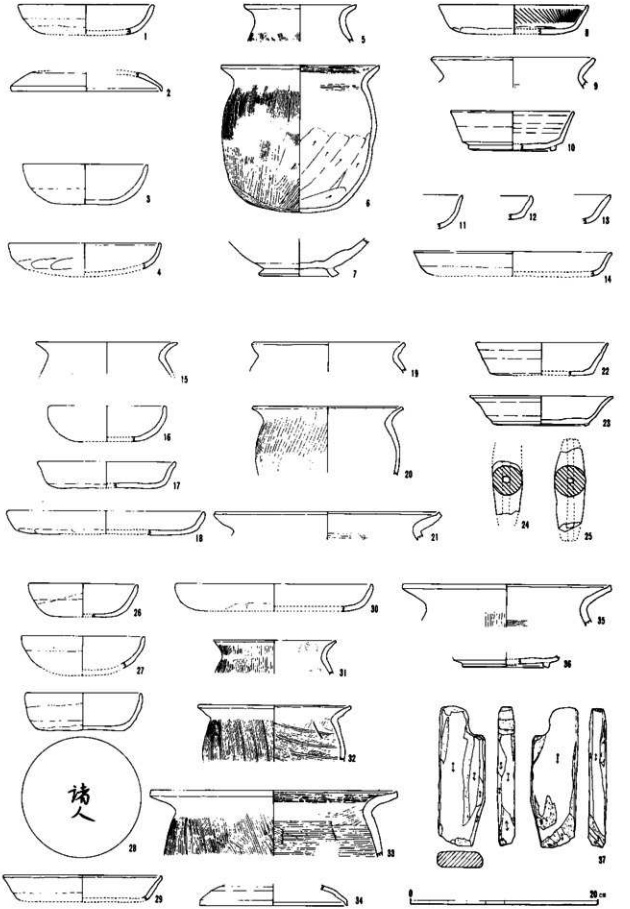
土師器

Ⅲ（43）　推定口径は20cm前後で、口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリである。色調は明赤褐色である。

⑫　ＳＡ19出土の遺物

土師器

甕AⅡ（44）　推定口径約16cmで、口縁部ヨコナデ、胴部は内外面ともハケメ調整である。色調は淡



第70図　出土遺物実測図（1：4、ただし24・25は1：2）

赤褐色である。

⑬　ＳＫ10出土の遺物

土師器

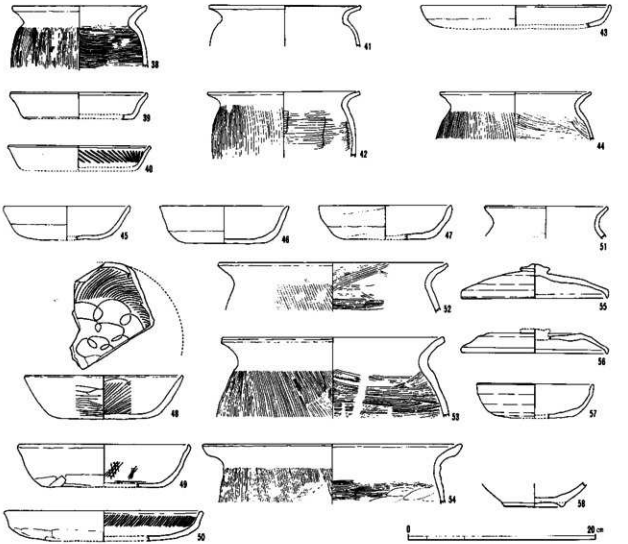
椀（45～47）口径13～14cm、器高3.6～4.0cmで、口縁部はヨコナデ、底部外面は未調整である。（47）には粘土紐つなぎ痕がみられる。色調は橙色または浅黄橙色をしており、（45）は二次焼成を受けて赤橙色に変色している。

杯（48・49）口径17～18cm、器高4.5cm前後である。（48）は口縁部ヨコナデ、体部はミガキ調整で内面は体部に放射状暗文、口縁部と底部に螺旋暗文がみられる。色調は赤褐色で胎土は密である。（49）は口縁部ヨコナデ、底部外面はヘラケズリで、内面は体部に斜格子状暗文、底部に螺旋暗文が見られるがいずれも不明瞭である。

皿（50）　口径21cm前後、器高３cm余で、口縁部ヨコナデ、底部外面はヘラケズリである。内面体部には放射状暗文がみられるが、底部については器面が磨耗しており暗文の有無は不明である。色調は橙色である。

甕ＡＩ（51）　口径13cm前後、口縁部ヨコナデ、胴部外面にはわずかにハケメが残る。灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

甕Ｂ（52～54）　口径24～27cmのいわゆる長胴甕で口縁部ヨコナデ、胴部は内外面ともハケメ調整であるが、（54）の内面にはヘラケズリが見られる。色調は橙色または浅黄橙色である。



第71図　出土遺物実測図（１：４）

須恵器

蓋（55・56）　口径15～16cmでつまみを有し、口縁部の返りのないもので、ロクロ回転は（55）が時計回り、（56）が逆時計回りである。灰白色または青灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。ともに外面には自然釉がみられる。

杯A（57）　推定口径約12cm、器高3.7cm、体部は内弯して立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。体部から口縁部はヨコナデ、底部外面は未調整である。色調は灰色で、砂粒を含む。

⑭　ＳＤ２出土の遺物

山茶椀（58）　高台径5.6cmで、逆台形の低い高台が付く。底部には糸切り痕を残す。色調は灰色で胎土には砂粒を含む。

２、遺物包含層等出土の遺物

①　縄文時代

石器

スクレイパー（59）　三角形状を呈するもので、長さ6.6cm、幅3.3cm、厚0.6cmである。材質はサヌカイトである。

土器

縄文土器（60～64）　（60）は外面には隆帯を貼りつけた区画文があり、区画内に平行斜沈線を施こす。淡褐色を呈し、胎土には砂粒を多量に含む。外面には煤が付着する。

（61）は外面は条痕とケズリ、内面は条痕である。色調は橙色または灰褐色で、胎土には金雲母と砂粒を含む。

（62）は底部は平底で、調整は底部は乱ナデ、体部はユビオサエとナデである。体部外面に長さ４cm以上の沈線がみられる。淡橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。外面には煤が付着する。

（63）と（64）は同一個体の可能性がある。口縁部は小波状で、端部を面取りする。外面は横方向の沈線で区画し、その間を無節の縄文と横方向のミガキである。色調は褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

②　古墳時代

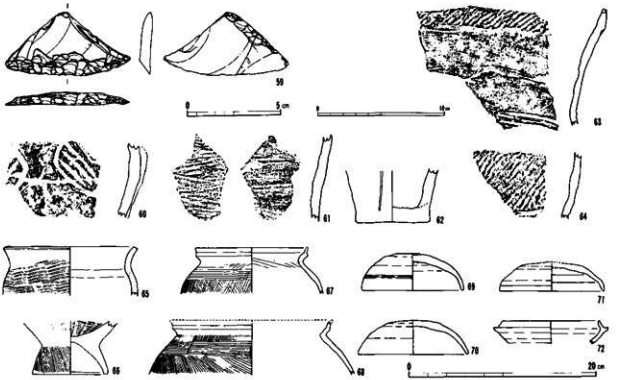
土師器

甕C（65）　推定口径13cmで、口縁部ヨコナデ、胴部外面はタタキである。色調はにぶい橙色で、胎土には砂粒を含む。外面には煤が付着する。

甕D（66）　台部の破片である。内外面ともハケメ調整する。赤褐色を呈し、砂粒を含む。

甕E（67・68）　Ｓ字状口縁甕で、推定口径は（67）が約12cm、（68）は約19cmである。

須恵器



第72図　出土遺物実測図・拓影（１：４、ただし59は１：２、60～64は１：３）

壷（69～71）　口径10～12cm、器高3～4cm、天井部はヘラ切り未調整である。（69）の体部には沈線がみられる。色調は青黒色または青灰色で、胎土には砂粒を含む。

杯C（72）　口径約10cmで、立ち上がりは低く内傾する。色調は暗青灰色を呈する。

③　奈良時代

土師器

小椀（73）　SB13. 14. 17の上面で出土した。口径8.6cm、器高2.5cm、口縁部はヨコナデ、底部外面は未調整で粘土紐のつなぎ痕がみられる。色調は淡黄色で砂粒を含む。

椀（74～84）　口径11～14cm、器高4cm前後である。体部は内弯するが、口縁端部は（74）のみ外反する。口縁部はヨコナデ、底部は未調整である。（74・75・77）は橙色または黄橙色で、胎土は比較的精良であるが、（76・78～84）は淡黄色で、粗製である。

杯（85～92）　（85～91）は口径15～16cm、器高3～3.5cm、（92）は口径18cm前後、器高4.4cmで、口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリである。（90）には底部と口縁部に螺旋暗文が、（91）には底部に螺旋暗文、体部に放射状暗文がみられる。色調は橙色または赤褐色を呈し、胎土は比較的精良である。（89）には底部に墨書が見られる。

皿（93～96）　口径20cm前後、器高2.6cm前後、口縁部ヨコナデで、底部外面はヘラケズリである。（93）には螺旋暗文がみられる。（95）にも暗文がわずかに残っているが図示できない。色調は橙色または赤褐色である。

台付皿（97）　台部のみの破片で、橙色を呈する。台部内面に墨書「諸」がみられる。

甕F（98・99）　胴部が大きく球状に広がるもので、推定口径は20cm前後である。胴部は内外面ともハケメ調整が見られる。

甕AⅡ（101）　口径21cm前後、胴部は内外面ともハケメ調整であるが、内面下半はヘラケズリである。

甕B（100）　口径25cm前後、胴部は内外面ともハケメ調整である。

甑（102）　口径25cm前後で、外面は縦位のハケメ、内面は横位のハケメを施す。

須恵器

壷（103・104）　口径は16～17cmで、つまみがつくものであろう。天井部はロクロケズリで、ロクロ回転は（104）は時計廻り、（103）は不明である。色調は灰色で、胎土には砂粒を含む。

杯B（105・106）　高台径約5cmである。底部外面は（105）はヘラ切り後ナデ、（106）はロクロケズリである。ともに色調は灰色で、胎土は細砂粒を含む。

杯A（107・108）　（107）は推定口径12cm、器高4cm、底部未調整で、青灰色を呈し、胎土は砂粒を含む。（108）は小片であるが、体部が大きく外傾している。灰白色を呈し、砂粒を含む。

坩堝（109）　SK10の上面で出土したもので、推定口径16cm、器壁は約2cmである。体部は球状であるが、注ぎ口については破片のため不明である。体部外面は縦にナデている。色調は外面黄灰色、内面灰白色である。口縁部内面には鉄滓が付着する。

④　平安時代以降

土師器

小皿（110）　推定口径約10cm、器高2cm、口縁部はヨコナデ、底部外面は未調整である。

杯（11）　口径15cm前後、器高2.8cm、器壁は薄い。口縁部ヨコナデ、底部外面は未調整である。

黒色土器

椀（112）　口縁部小片のため、口径は推定である。外面の口縁部と内面を黒色にするA類である。

陶器

灰釉陶器椀（113・114）　ともに高台部分の小片である。高台の断面形は（113）が三日月形、（114）が三角形を呈する。（113）は内外面とも体部に施釉がみられるが、（114）は釉がみられない。

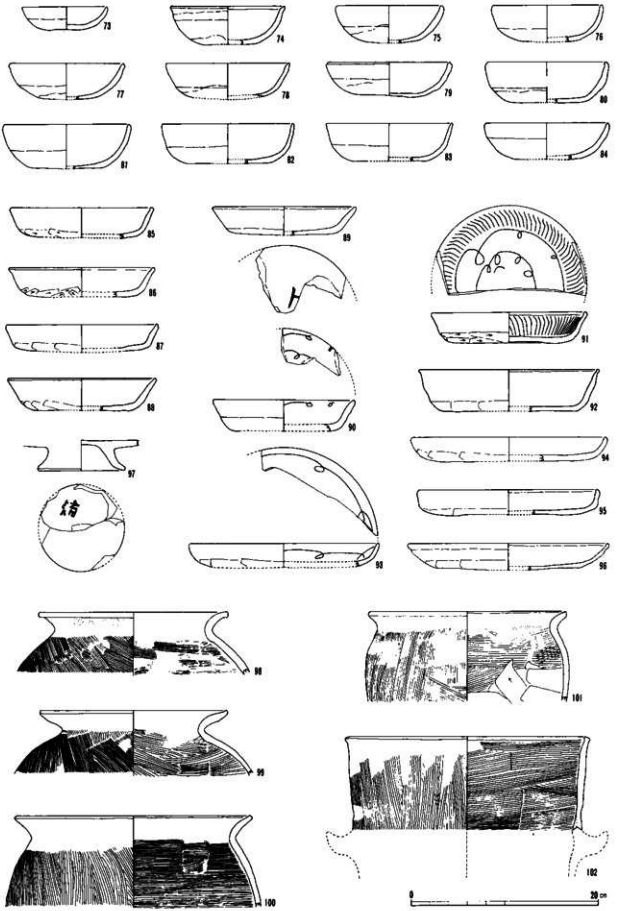
山茶椀（115・116）　高台径は8cm前後で、高台の貼りつけ方は雑である。

山皿（117・118）　口径8cm、底径約4cm、器高1.6cmである。底部に糸切り痕がみられる。

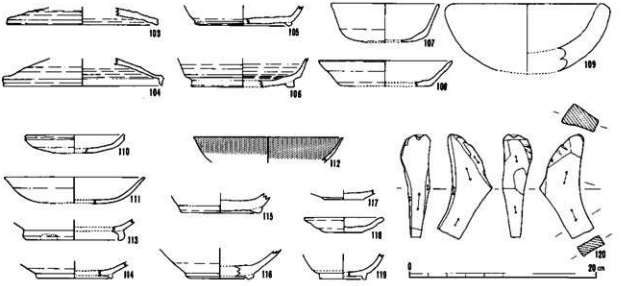
天目茶椀（119）　推定高台は5cmで、高台は断面四角形にケズリ出される。内面と外面体部には暗褐色の鉄釉が施される。

⑤　石製品

砥石（120）　全長11cm、最大幅4.5cmである。材質は砂岩である。各面ともよく使い込まれている。



第73図　出土遺物実測図（1：3）



第74図　出土遺物実測図（1：4）

5．結　　語

(1)　住居跡群について

榎長遺跡では、住居跡は発掘区の南部に集中しており、竪穴住居12棟、掘立柱建物4棟が重複あるいは近接して検出された。

当遺跡における竪穴住居は①規模は大きいものでＳＢ24の4.0m×3.3m、小さいものでＳＢ22の2.7m×2.2mである。②周溝を伴うものは、ＳＢ15・16・17・24・30の5棟である。③長軸方向はN16～68°Wである。④殆どの竪穴住居が北東辺にカマドと思われる焼土を持つ。

各竪穴住居とも出土遺物が少なく、時期差を決定することは難しいが、切り合いによる新旧関係は

ＳＢ15→ＳＢ13、ＳＢ24→ＳＢ22である。

ＳＢ17　　ＳＢ30→ＳＢ23

竪穴住居の何棟かは、長軸方向が揃っており、〔Ａ〕ＳＢ15・16・30・31（N39°～40°W）、〔Ｂ〕ＳＢ13・24（N23～24°W）、〔Ｃ〕ＳＢ20・22・23（N32°～34°W）にわかれる。一方、ＳＢ17（N16°W）、ＳＢ18（N44°W）、ＳＢ14（N68°W）のように他の竪穴住居とは方向が揃わないものもみられる。全ての竪穴住居が長軸方向を西に振るのは地形的な制約から来るものと思われる。さて、これらのうち方向が揃っている〔Ａ～Ｃ〕の切り合いによる新旧関係はＡ→Ｂ→Ｃとなる。〔Ａ〕及び〔Ｂ〕の時期では周溝を伴うものと伴わないものがみられるが、〔Ｃ〕の時期になると周溝を伴わなくなり、規模もやや小さくなる傾向がみられる。カマドと思われる焼土に関してはすべての時期に伴う。

掘立柱建物群は竪穴住居群の廃絶後に成立したもので、ＳＢ26.27.28.29の4棟からなる。棟方向はN42°～43°WおよびそれにほぼＳ直交するN50°～52°Eである。柵列ＳＡ12、ＳＡ19もそれぞれN51°E、N43°Wと方向を揃えている。掘立柱建物は重複しているところから、二時期以上あったと考えられるが、切り合いにより新旧関係がわかるものは、ＳＢ28→ＳＢ27だけである。

さて竪穴住居および掘立柱建物の時期であるが、概ね奈良時代におさまると思われるものの掘立柱建物の最終時期はあるいは平安時代初頭まで下る可能性も考えられる。

(2)　墨書土器について

ＳＢ23出土の土師器椀（28）の底部には「諸人」の墨書が、包含層出土の土師器台付皿（97）の台部には「諸」の墨書がみられる。また土師器杯（89）の外底部にも墨書がみられる。ところで古代飯高氏には「飯高宿禰諸高」「飯高公諸丸」といった「諸」のつく人名がみられる。[9] 墨書「諸人」「諸」をもって飯高氏にかかわる人名であるとは即断できないが、一つの可能性として考えてもよいであろう。

〔註〕

① 松阪市史編さん委員会『松阪市史　第二巻　史料篇　考古』松阪市　1978
・なお定井遺跡の範囲については、昭和63年度県営圃場整備事業に伴って行われた分布調査により、遺物の散布範囲がさらに北方および南西方向に広がることが確認されている。

② 『三重県埋蔵文化財年報19』三重県教育委員会　1989

③ 竹内理三他『日本古代人名辞典１』吉川弘文館　1958
『續日本紀　巻第三十二　巻第三十四　巻第三十五』　續日本紀　後編　新訂増補国史体系〈普及版〉吉川弘文館　1990

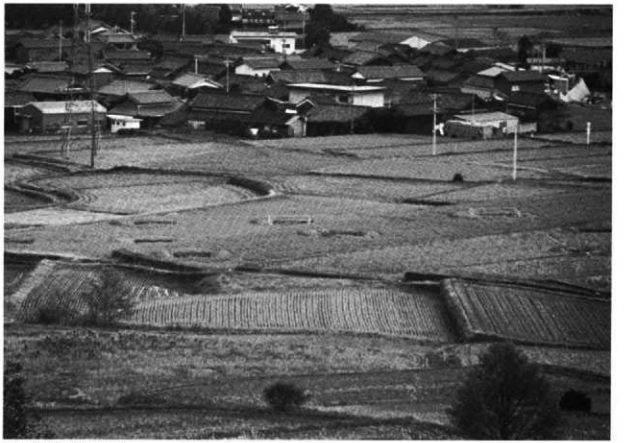
図版番号	器種	形態	整理番号
1	土師器	椀	20−0080
2	須恵器	蓋	20−0081
3	土師器	椀	20−0076
4	土師器	杯	20−0105
5	土師器	甕	20−0078
6	土師器	甕	20−0077
7	須恵器	壺	20−0098
8	土師器	杯	20−0017
9	土師器	甕	20−0072
10	須恵器	杯	20−0018
11	土師器	椀	20−0083
12	土師器	杯	20−0082
13	土師器	皿	20−0084
14	土師器	皿	20−0085
15	土師器	甕	20−0071
16	土師器	椀	20−0052
17	土師器	杯	20−0021
18	土師器	皿	20−0020
19	土師器	甕	20−0068
20	土師器	甕	20−0051
21	土師器	甕	20−0067
22	須恵器	杯	20−0023
23	須恵器	杯	20−0019
24	土製品	土錘	20−0053
25	土製品	土錘	20−0022
26	土師器	椀	20−0032
27	土師器	椀	20−0047
28	土師器	椀	20−0011
29	土師器	杯	20−0045
30	土師器	皿	20−0048
31	土師器	甕	20−0042
32	土師器	甕	20−0033
33	土師器	甕	20−0041
34	土師器	甕	20−0043
35	土師器	甕	20−0075
36	須恵器	杯	20−0074
37	石製品	砥石	20−0054
38	土師器	甕	20−0100
39	土師器	杯	20−0097
40	土師器	杯	20−0112

図版番号	器種	形態	整理番号
41	土師器	甕	20−0096
42	土師器	甕	20−0108
43	土師器	皿	20−0106
44	土師器	甕	20−0110
45	土師器	椀	20−0029
46	土師器	椀	20−0030
47	土師器	椀	20−0103
48	土師器	杯	20−0009
49	土師器	杯	20−0025
50	土師器	皿	20−0028
51	土師器	甕	20−0104
52	土師器	甕	20−0049
53	土師器	甕	20−0027
54	土師器	甕	20−0050
55	須恵器	蓋	20−0026
56	須恵器	蓋	20−0031
57	須恵器	杯	20−0024
58	陶器	山茶椀	20−0099
59	石器	スクレーパー	20−0233
60	縄文土器		20−0230
61	縄文土器		20−0232
62	縄文土器		20−0231
63	縄文土器		20−0228
64	縄文土器		20−0229
65	土師器	甕	20−0221
66	土師器	甕	20−0218
67	土師器	甕	20−0216
68	土師器	甕	20−0217
69	須恵器	蓋	20−0002
70	須恵器	蓋	20−0006
71	須恵器	蓋	20−0163
72	須恵器	杯	20−0178
73	土師器	小椀	20−0090
74	土師器	椀	20−0197
75	土師器	椀	20−0198
76	土師器	椀	20−0003
77	土師器	椀	20−0199
78	土師器	椀	20−0200
79	土師器	椀	20−0129
80	土師器	椀	20−0132

図版番号	器種	形態	整理番号
81	土師器	椀	20−0005
82	土師器	椀	20−0007
83	土師器	椀	20−0131
84	土師器	椀	20−0133
85	土師器	杯	20−0208
86	土師器	杯	20−0004
87	土師器	杯	20−0206
88	土師器	杯	20−0001
89	土師器	杯	20−0010
90	土師器	杯	20−0207
91	土師器	杯	20−0015
92	土師器	杯	20−0014
93	土師器	皿	20−0126
94	土師器	皿	20−0012
95	土師器	皿	20−0040
96	土師器	皿	20−0013
97	土師器	台付皿	20−0016
98	土師器	甕	20−0220
99	土師器	甕	20−0219
100	土師器	甕	20−0224
101	土師器	甕	20−0222
102	土師器	甑	20−0223
103	須恵器	蓋	20−0154
104	須恵器	蓋	20−0092
105	須恵器	杯	20−0168
106	須恵器	杯	20−0170
107	須恵器	杯	20−0034
108	須恵器	杯	20−0058
109	坩堝		20−0227
110	土師器	小皿	20−0205
111	土師器	杯	20−0203
112	黒色土器	椀	20−0140
113	陶器	灰釉 椀	20−0142
114	陶器	灰釉 椀	20−0143
115	陶器	山茶椀	20−0114
116	陶器	山茶椀	20−0149
117	陶器	山皿	20−0150
118	陶器	山皿	20−0113
119	陶器	天目茶椀	20−0146
120	石製品	砥石	20−0151

第25表　出土遺物整理番号対照表

調査前遠景（東上空から）



調査前近景（西から）

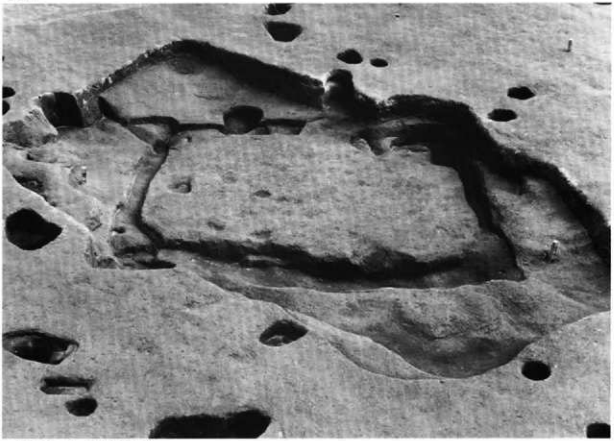
PL2

発掘区全景（北から）

発掘区南西部（北西から）

住居跡群（南西から）

ＳＢ13～18（南西から）

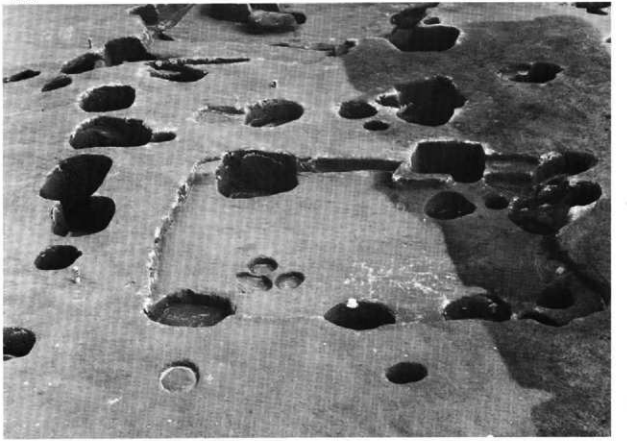


SB13・14・17（西から）

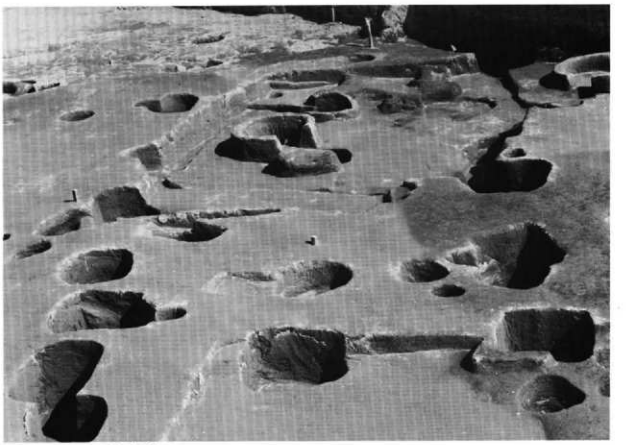
SB15・16・18・20・28（南東から）

SB15・16・18・20・28（北西から）

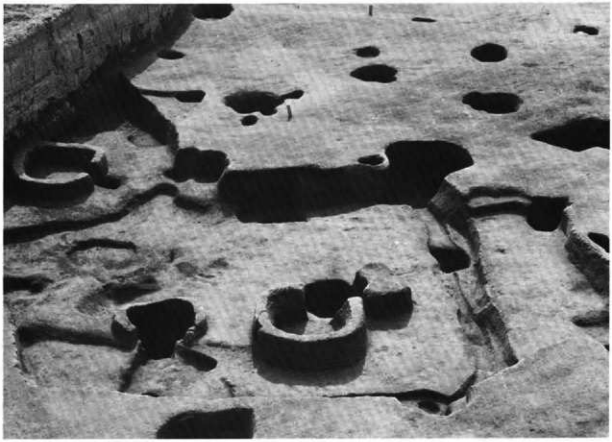
SB18～20・22～24・26～28（南西から）



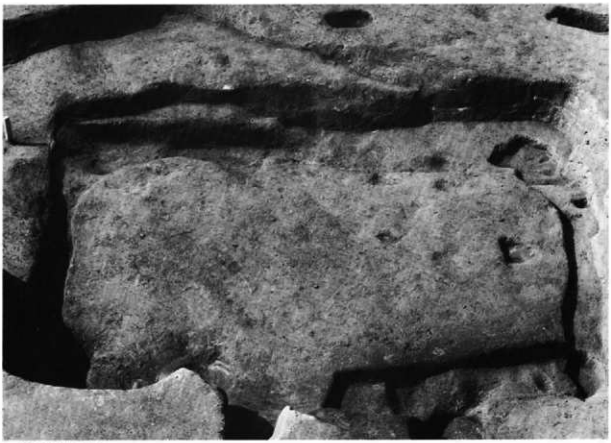
SB20・27（南西から）



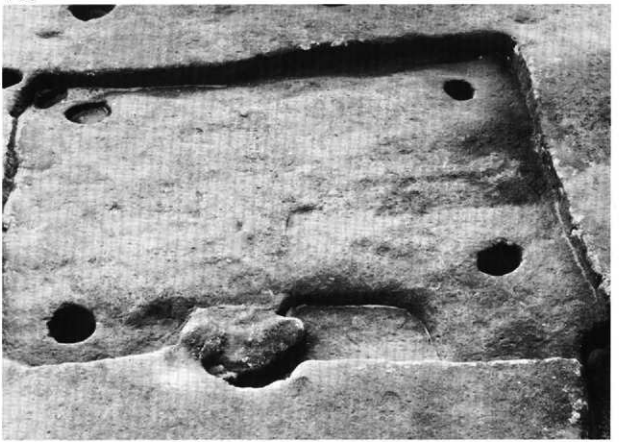
SB27・22・24（南西から）



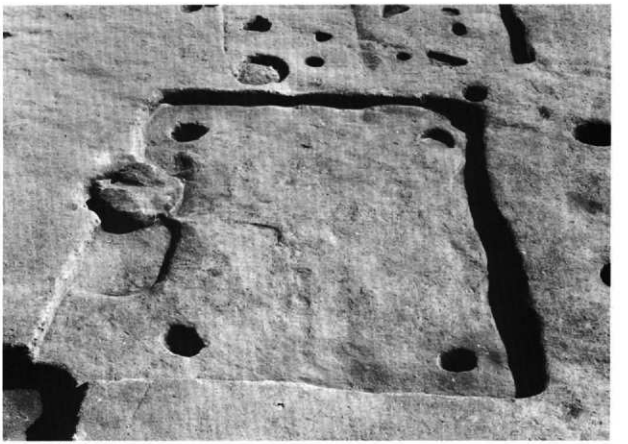
SB22～24・31（北から）



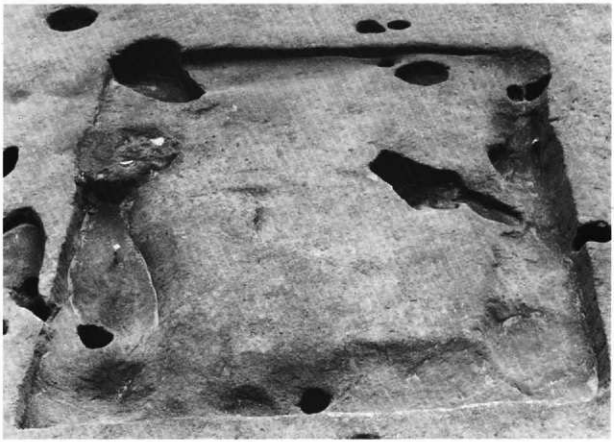
SB17（西から）



SB15（北東から）



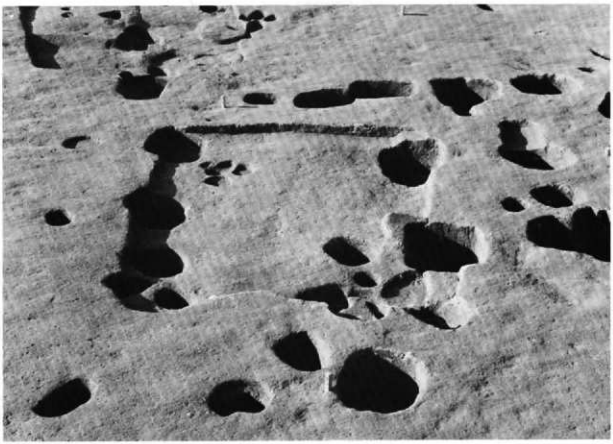
SB15（北西から）



SB16（北西から）

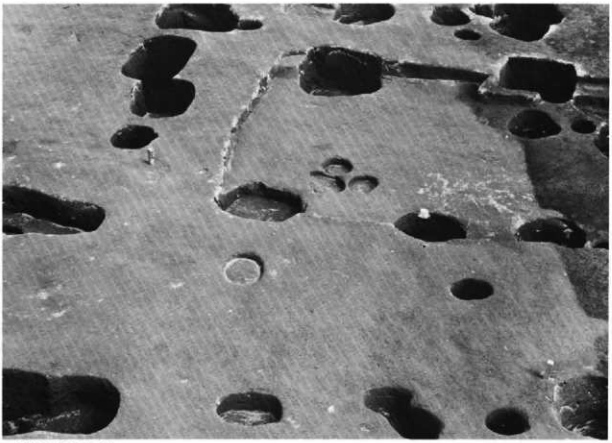
SB16（北東から）

SB18（北東から）



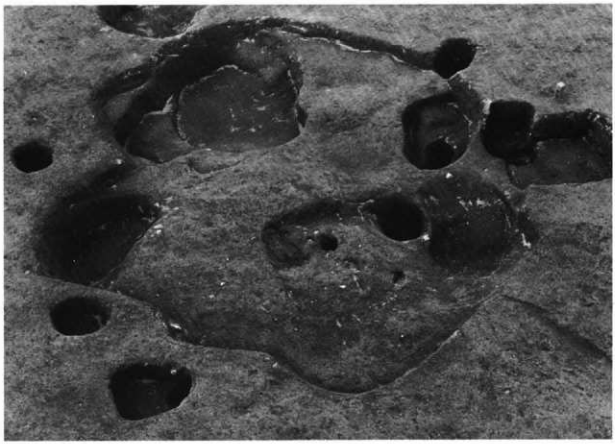
SB20（南西から）

SB26（北西から）



SB28（南西から）

SB29（北西から）



SK10（南東から）

3

10

28

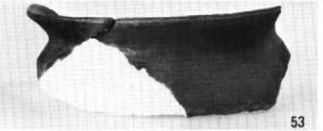
6

23

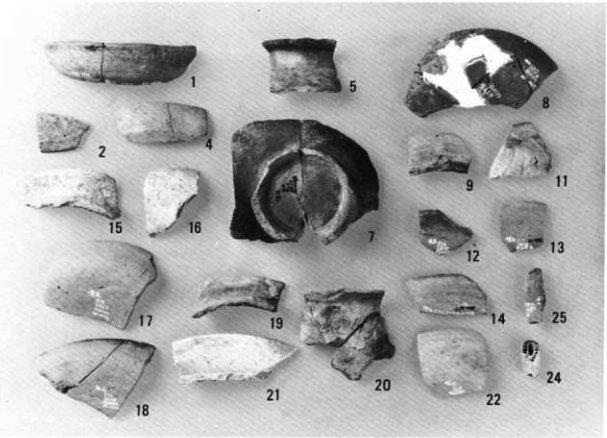
26

45

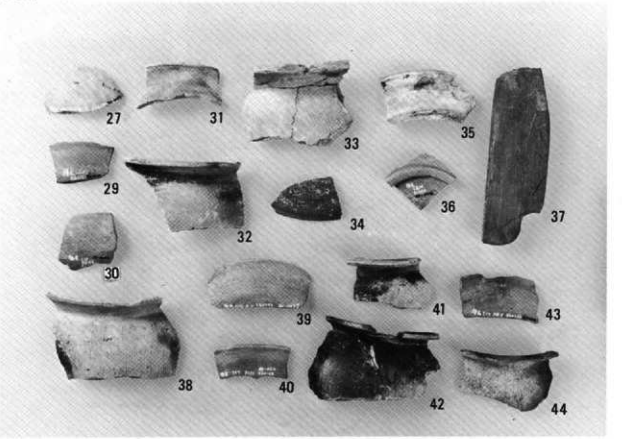
清人
28

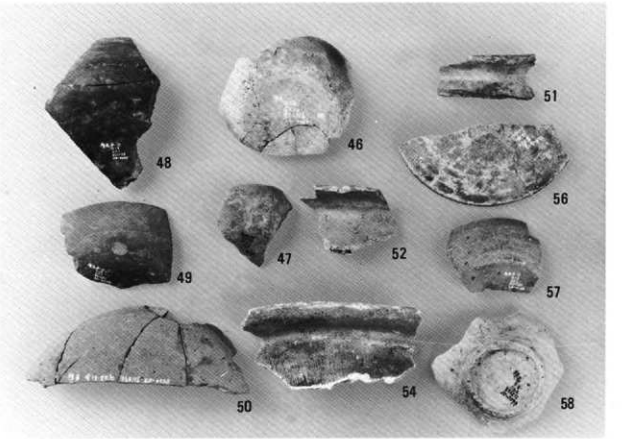

53

55

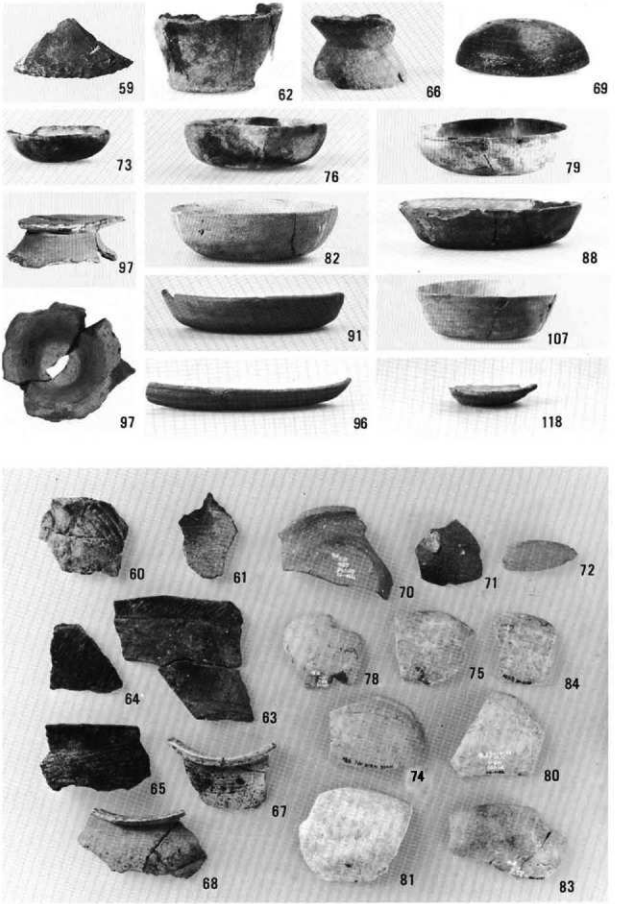

1
5
8
2
4
9
11
15
16
7
12
13
17
19
14
25
18
21
20
22
24

出土遺物（1：3）

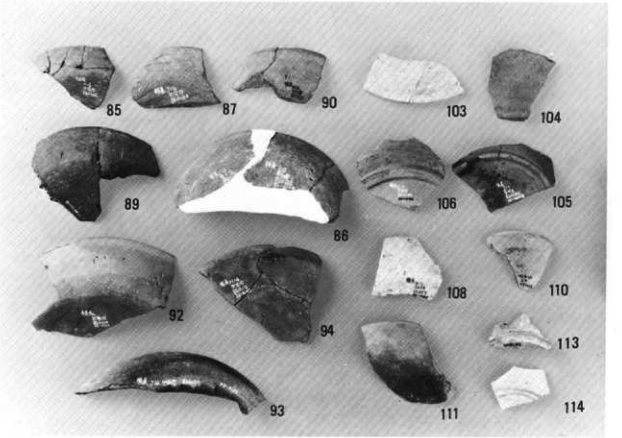

27
31
33
35
29
32
34
36
37
30
39
41
43
38
40
42
44

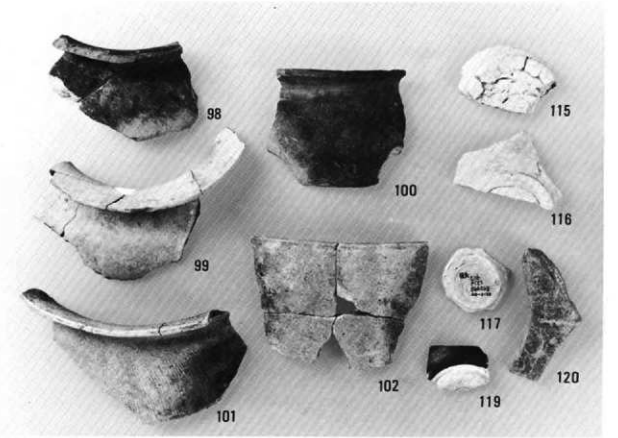

48
46
51
56
49
47
52
57
50
54
58

出土遺物（1：3）


59
62
66
69
73
76
79
97
82
88
91
107
97
96
118
60
61
70
71
72
64
63
78
75
84
65
67
74
80
68
81
83

出土遺物（1：3）


85
87
90
103
104
89
86
106
105
92
94
108
110
113
93
111
114


98
115
100
116
99
117
120
102
119
101

出土遺物（1：3）

第 1 次 調 査

松阪市小野町　平（ひら）田（た）遺跡　(15)

松阪市の北端部に位置する小野町の西方には、標高60～80mの低丘陵地帯を開析する小谷に水田がひらかれている。この中の南西から北東方向へ細長く延びる丘陵上に本遺跡は立地しており、大部分が桑畑として利用されており、山茶椀等の土器片が散布していた。[1] 現在、遺跡の周辺は圃場整備事業が実施され、原地形は大幅に改変されてしまった。

1986（昭和61）年2月18日から同月24日まで、第一次調査として道路計画路線内に4m×4mの試掘坑を18カ所設定し調査した結果、ほとんどの試掘坑で耕作土の下から岩盤が検出された。つまり、遺跡の立地していた丘陵面が削平され、その土砂が谷地形のところへ埋められて整地がなされたものと考えられる。

結局、遺構は全く検出されず、遺物も山茶椀、土師器、陶器片が微量出土しただけであった。

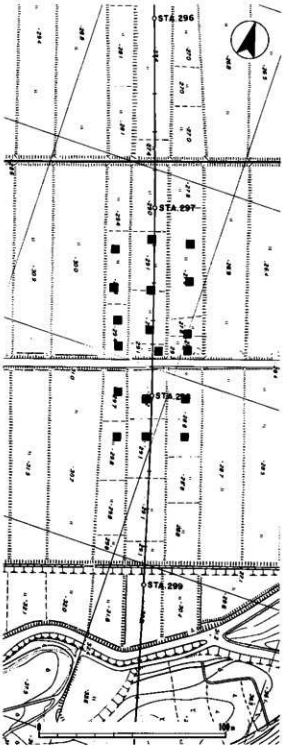
今回の調査地は遺跡全体の3分の1の区域であったが、事業予定地内に限れば遺跡は完全に破壊されたものと考えられ、本調査には至らなかった。

（田村　陽一）

第75図　遺跡地形図（1：5,000）

〔註　参考文献〕

① 松阪市史編さん委員会『松阪市史第二巻史料編考古』松阪市 1978による。なお、遺跡名は小野中広遺跡となっている。



第76図　発掘区位置図（1：2,000）

遺跡遠景（女牛谷古墳群より）

遺跡近景（南から、正面の丘陵は女牛谷古墳群）

松阪市西野町　さんざい林遺跡　(23)

堀坂山東麓から阪内川左岸にかけて、標高60～100mの丘陵地帯が広がるが、本遺跡は松阪市西野町山口の集落の南東方、上狭間池の南側を東西に延びる尾根上に位置する。行政的には松阪市西野町字さんざい林に属する。

標高約100m余の丘陵頂部には高位段丘のわずかな平坦地が点在している。このうち、標高106.3mの三角点のすぐ北で、昭和41年ごろブルドーザを使って蜜柑園を造成した際に、赤色土中よりサヌカイト製の大型掻器（長径12cm、幅5cm、厚1.3cm）が出土している。[1]

道路計画路線内で尾根の西および北斜面に7カ所、頂部平坦面の4カ所に4m×4mの試掘坑を設定し、1985（昭和60）年10月25日から26日まで第一次調査を実施した。西および南斜面は原地形がかなり改変されている。これは蜜柑園を造成する際に、重機を使用して開墾したためである。

調査の結果、薄い表土の下は岩盤の箇所が多く、また、土層も攪乱を受けており、遺構は検出されなかった。また出土遺物も微量であったため本調査には至らなかった。

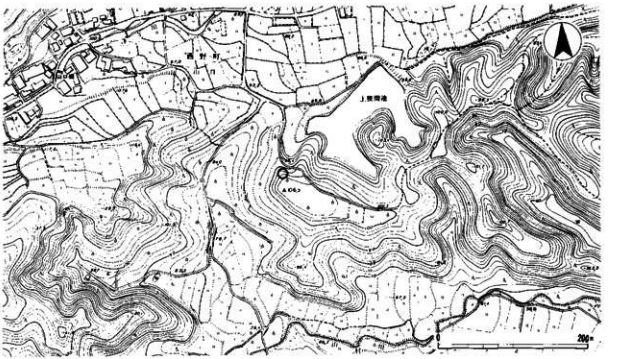
出土遺物にはチャート剥片、サヌカイト剥片、中世土師器片、陶器片があり、すべて頂部平坦地の試掘坑から出土したものである。

図示したサヌカイト製の剥片は第78図中の×印の地点（山頂の蜜柑園への道路上）で表面採集したものである。側面に加工を施した素材から剥ぎとった剥片で、6.3cm×7.0cm、厚さ1.1cmである。表面は風化が進んでいる。

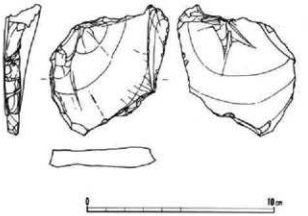
（田村　陽一）

〔註　参考文献〕

① 奥　義次　「さんざい林遺跡」『松阪市史』第二巻　1978

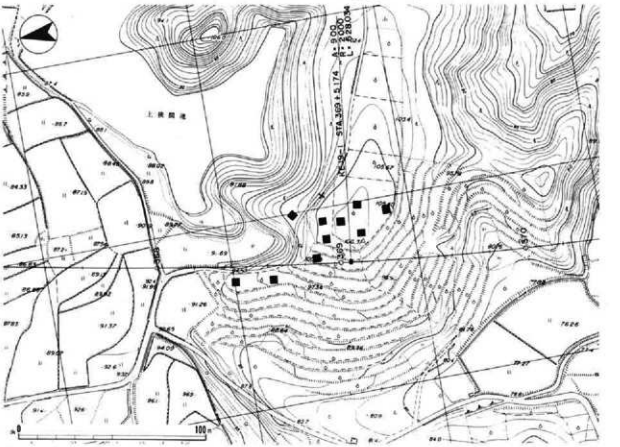


第77図　遺跡地形図（1：5,000）



第79図　出土遺物実測図（1：2）

出土遺物（1：2）



第78図　発掘区位置図（1：2,000）

遺跡遠景（西から）

遺跡遠景（北西から）

PL 2

遺跡近景（北端部、南東から）

調査風景

付　　編

堀坂川・岩内川流域平野の地形環境

立命館大学文学部地理学専攻・非常勤講師
青　木　哲　哉

1．はじめに

沖積平野は、人間の主要な生活舞台であり、その古地理は過去およそ2万年間刻々と変化してきた。人間は、変遷する古地理に対応して、生活場所を選定し、居住や生産活動を行ってきた。しかしながら、古地理の変遷は平野全域において一様でなく、沖積平野は同じ古地理を示すいくつかの地域（地形域）に分けられる。それぞれの地形域では、各時代を通して違った地形環境がみられ、これに影響されてきた人間生活も各地形域ごとに異なっていたと考えられる。

本稿では、堀坂川と岩内川流域に広がる沖積平野の各地形域について、古地理ならびに地形環境の変遷を明らかにしてみたい。地形環境の考察にあたっては、まず20,000分の1および10,000の1空中写真の判読などによって地形を分類し、つぎに各遺跡の発掘地域における地質断面の観察と既存のボーリング資料の整理を行い、各地形域にみられる堆積物を検討した。このようにして得られた成果に、土器編年に基づく年代資料を考慮して、地形環境の変遷を考察した。

2．各地形域における地形環境

堀坂川および岩内川流域の沖積平野は、扇状地Ⅰ地域、扇状地Ⅱ地域および三角州地域に分けられる（第1図）。以下に、これらの各地形域における地形と堆積物の特徴、ならびに地形環境について述べる。

(1) 扇状地Ⅰ地域

この扇状地地域は、調査対象地域の西側にみられる山地の麓に発達している。ここには、山地から堀坂川と岩内川をはじめとする複数の小規模な河川が流れ出しており、各河川に沿って形成されている扇状地Ⅰは複合扇状地となっている。その上面は、平均して50‰と急傾斜であり、下流へいくに従って除々に傾斜が緩くなる。この地形は、200～300mの長さと100～150mの幅をもつ微高地（埋没微高地）からなっており、1～2m程度の微起伏に富んでいる。こうした扇状地Ⅰは、河川に沿って比高3～5mの崖を有し、段化している。

扇頂付近の微高地（埋没微高地）上に立地する藪ノ下遺跡の地質断面、ないしは既存のボーリング資料（第2図）を検討すると、このような扇状地Ⅰ地域の堆積物は、おおよそ6層に分けられる。すなわち、下位より巨礫（径256mm以上）を主体とする褐灰色の砂礫層、大礫（径256～64mm）～中礫（径64～4mm）からなる褐灰色の砂礫層、黄褐色の砂（径2～1/16mm）質シルト（1/16～1/256mm）層、中礫によって構成される褐灰色の砂礫層、黄褐色のシルト質砂層および耕土である。N値[6]は、砂質シルト層とシルト質砂層で8、砂礫層において8～37であり、比較的緩い。これら各層のうち、最下位に認められる砂礫層が最も厚く、地表下およそ3m以深に5m以上の厚さで堆積している。これに対して、他の各層は層厚50cm以下である。こうした堆積物は、その層相からみて河成のものと考えられる。

藪ノ下遺跡では、これらの各層から3時期の遺物が、遺構を伴って検出されている。すなわち、黄褐色を呈する砂質シルト層の下部からは主に縄文時代後期の土器片が、同層の上部からは弥生時代前期～中期のそれが、および耕土からは平安時代末～鎌倉時代のものが認められるのである[6]。

以上の事柄から古地理ならびに地形環境を推定すると、扇状地Ⅰ地域においては、まず縄文時代後期までに砂礫が活発に搬出され、扇状地が発達していった。藪ノ下遺跡が位置する扇頂付近においては、この時期巨礫や大礫が大量に堆積し、微高地が形成された。ついで、縄文時代後期頃から遅くとも平安時代末にかけて、一時的な洪水が間欠的におこり、砂

礫やシルト質砂などが次々と堆積していった。しかしながら、微高地上におけるこの時期の堆積物は、縄文時代後期以前と比べて細粒であるとともに薄く、またこれらの堆積物を運搬してきた洪水は、一時的かつ間欠的に発生したと推定される。そのため、縄文時代後期から平安時代末までにおいて、微高地上は比較的長時間にわたって激しい洪水がおこらず安定していたと考えられる。

薮ノ下遺跡においては、平安時代末～鎌倉時代以降の洪水堆積物が認められない。これは、平安時代以後扇状地に洪水が及ばなくなったためと考えられ、扇状地が弥生時代後期から平安時代にかけてのある時期に段化したことを示している。このように、扇状地は主として縄文時代後期以前に発達した。しかし、微高地上ではそれ以降比較的静穏な環境がつづき、扇状地が段化した後、扇状地上は安定していたのである。

(2) 扇状地II地域

この地域は、扇状地I地域の下流側およびその崖下に分布している。ここに広がる扇状地IIは、扇状地Iより緩く、およそ13.8‰の傾斜で下流へ高度を下げる。この扇状地には微高地（埋没微高地）がみられ、これらは長さおよび幅において扇状地Iとほぼ同じ規模であるものの、比高は1m前後とやや小さい。伊勢寺遺跡や杉垣内遺跡をはじめとする遺跡の発掘調査で得られたデータによると、扇状地II地域にみられる堆積物は、下位のものから褐灰色の砂礫層、黄褐色の砂質シルト層、褐灰色の砂質シルト層、褐灰色のシルト質砂層および耕土に大きく分けられる。黄褐色の砂質シルト層と褐灰色の砂質シルト層との間には、黒ボクが挟まれることがある。これらの堆積物の中で、最下位にみられる砂礫層は、扇状地Iを構成する下位の砂礫層に連続する。この層の上面は起伏に富み、そこには埋没微高地が認められる。砂礫層より上位の各層は、これらの埋没微高地上で薄く、微高地間において厚く堆積しており、現地表面の起伏は、砂礫層堆積当時のものより緩やかになっている。

伊勢寺遺跡においては、黄褐色砂質シルト層の上位に分布する黒ボクを切って、シルトの混じった褐灰色の砂層が堆積している。この砂層の下底面は、幅100m以上にわたって扇状地より1～2m低く、これは扇状地が下方浸食された結果であると考えられる。この面と扇状地との間には崖が認められ、これは河川に沿ってつくられた扇状地I地域の崖に連続すると推定される。これらの地形は、砂および扇状地II地域の堆積物上部にみられる褐灰色の砂質シルト層およびシルト質砂層に埋積されている。

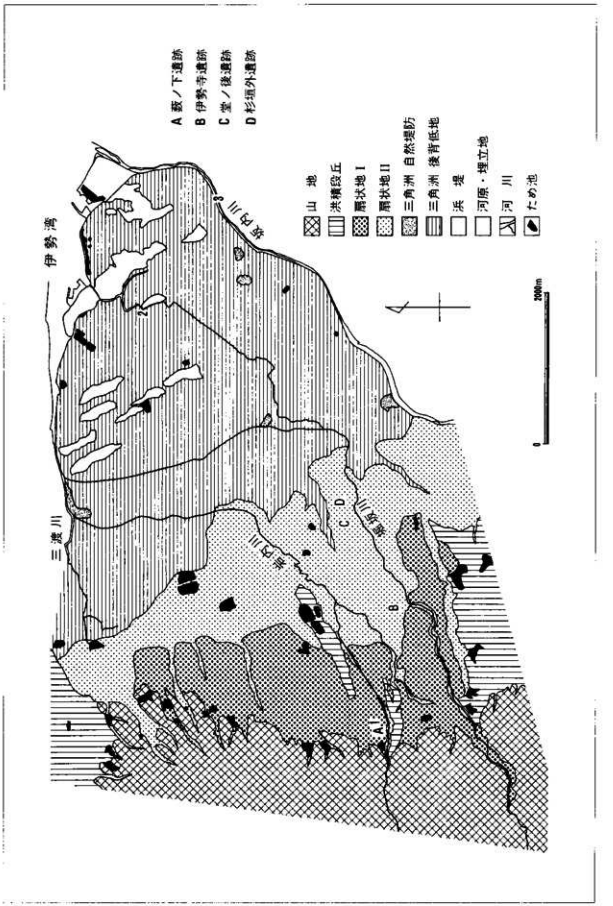
以上の各層のうち、堂ノ後遺跡では黄褐色砂質シルト層の上面から縄文時代後期頃の土器片が出土している。[3] また、扇状地II地域に立地する各遺跡においては、褐灰色の砂質シルト層に奈良～平安時代を主体とする時期の遺物が認められ、杉垣内遺跡では同層の下部に古墳時代前期の土器片が包含されている。[4]

このような扇状地II地域の地形環境について考察すると、縄文時代後期までに砂礫が堆積し、扇状地が発達するとともに、その上面に微高地が形成された。そして、これらを砂質シルトが被覆した後、扇状地は下刻され段化するに至った。この段化期は、扇状地I地域における考察結果に扇状地II地域での発掘データを加えて判断すると、先述した時期よりさらに限定され、弥生時代後期頃であると推定される。扇状地が段化して以降、ここは洪水の危険性がほとんどなく、特に微高地上は人間の居住に適していたと考えられる。この状況は、少なくとも平安時代頃までつづいた。

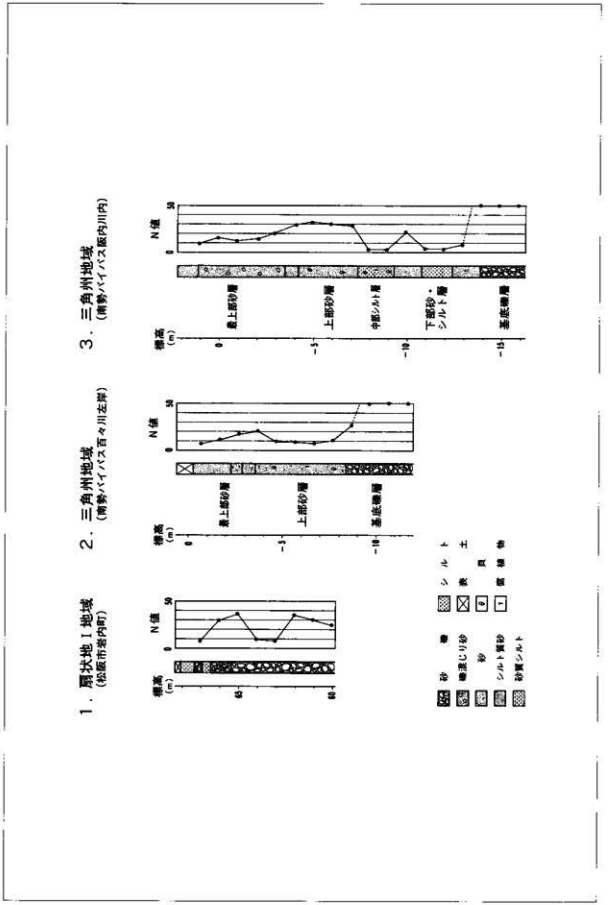
しかし、扇状地の段化後その崖下で河川の氾濫が繰り返され、ここは砂によって次第に堆積されていった。その結果、鎌倉時代以降のある時期には扇状地上に洪水がおよぶようになり、扇状地上の微高地が砂質シルトやシルト質砂の堆積によって埋没するに至った。以上のように扇状地II地域では、縄文時代後期以前に扇状地Iからつづく扇状地が形成された後、弥生時代後期頃にこれが段化した。この時期以降少なくとも平安時代にかけて、段化した扇状地上は比較的安定していた。しかし、その後ここに洪水がおよぶようになり、環境は悪化したのである。

(3) 三角州地域

この地域は、扇状地IIの下流側すなわち臨海部に認められる。ここに広がる三角州は、およそ3.2‰の傾斜しかなく、極めて低平である。こうした三角州


A 萩ノ下遺跡
B 伊勢寺遺跡
C 堂ノ後遺跡
D 杉垣外遺跡
山 地
洪積段丘
扇状地 I
扇状地 II
三角洲 自然堤防
三角洲 後背低地
浜 堤
河原・埋立地
河 川
ため池
伊勢湾
三渡川
糸戸川
0
2000m

第1図 地形分類図


1．扇状地Ⅰ地域
(松阪市嬉内町)
2．三角州地域
(南勢バイパス百々川左岸)
3．三角州地域
(南勢バイパス阪内川内)
標高
(m)
N値
0
50
-5
-10
-15
表土部砂層
上部砂層
基底礫層
中部シルト層
下部砂・
シルト層
砂
礫
礫混じり砂
砂
シルト質砂
砂質シルト
シルト
粘
土
貝
腐植物

第2図 地質柱状図

には、自然堤防や砂堆といった微高地がみられる。なかでも、砂堆は後背低地より1～1.5m高く、現海岸線に沿って4列認められる。これらのうち、内陸から1列目の砂堆上には弥生時代前期、2列目には弥生時代後期、および3列目には中世の遺跡が立地している。[10]

三角州地域の地下構造について、既存のボーリング資料を用いて分析すると、沖積層の下位にはN値50以上の非常によく締まった砂礫層が認められる（第2図）。これは、わが国の沖積平野においてみられる沖積層基底礫層[11]に対比できるものである。この層の上面には、調査地域の東南端にあたる坂内川の現流路に沿って埋没谷が形成されており、谷底の深度は坂内川の現河口より約1.5km上流地点で、現海面下およそ14mに達している。一方、この谷より西北側の三角州地域では、沖積層基底礫層の上面が現海面下8.6～6.6mに位置し、比較的平坦な埋没段丘面をなしている。このような埋没地形の上に沖積層が堆積している。

三角州地域の沖積層は、下位より下部砂・シルト層、中部シルト層、上部砂層および最上部砂層に細分される（第2図）。下部砂・シルト層は、砂とシルトの互層であり、0～20のN値を示す。これに対して、中部シルト層には貝殻および腐植物が混入しており、N値が3前後である。これらの層は、坂内川の現流路に沿う埋没谷中にのみ認められる。この上位にみられる上部砂層は、部分的にシルトを含む細砂（径1/4～1/8mm）からなり、貝殻が混入している。また、最上部砂層はシルトや中礫、細礫（径4～2mm）がところどころでみられ、淘汰が比較的悪い。この2層は、N値が7～32で、埋没段丘面上を含む三角州地域全域で認められる。

次に、これまでの事柄に基づいて、三角州地域の古地理ならびに地形環境の変遷を考察する。わが国の沖積平野において、沖積層の基底に認められる埋没谷は、最も海面が低下したおよそ20,000年前に形成されたと考えられている。調査地域においても、この頃に坂内川が沖積層基底礫層を下刻して、谷がつくられた。その後海面は上昇に転じ、この谷に海が侵入する直前に、古坂内川によって運搬されてきた砂やシルトが谷中に堆積した。谷に海進がはじまると、その海底にはシルトが沈積した。谷中がシルトによって埋積された後も、さらに海面上昇はつづき、そのため海域が埋没段丘面上に広がるとともに、海岸線は後退していった。これは、一般に縄文海進と呼ばれるもので、その頂期は6,000～5,000年前とされている。

この頃から海域に向って砂が搬出され、三角州が発達していった。海岸線は徐々に前進し、これにともなって最も内陸の砂堆が弥生時代前期以前に、2列目が弥生時代後期までに、また3列目のそれが中世以前につぎつぎと形成された。以上のように三角州地域は、およそ20,000年前以降陸地から海域になり、さらに陸化するという過程をたどった。この古地理変遷の中で、約20,000年前に形成された段丘面上は、その後海中に没するまで洪水の危険性がほとんどなく、また完新世後期に発達した砂堆上も、それぞれの形成後において比較的安定していた。三角州地域においては、少なくともこれらの地形が人間の居住に適していたと考えられるのである。

3. おわりに

本稿では、細坂川と岩内川流域の沖積平野にみられる扇状地Ⅰ地域、扇状地Ⅱ地域および三角州地域において、それぞれ古地理ならびに地形環境を考察した。その結果、各地域で地形環境の変遷が異なっていることが明らかになった。

すなわち、扇状地Ⅰ地域においては、扇状地が縄文時代後期までに発達した後、これは弥生時代後期頃に陸化し、扇状地上が安定した。これに対して、扇状地Ⅱ地域では少なくとも奈良時代まで扇状地Ⅰ地域と同様の過程をたどったものの、この時期以降ここに洪水がおよぶようになった。また、三角州地域では陸地→海域→陸地と古地理が変遷し、約20,000年前から海中に没するまでの段丘面上、および完新世後期に形成された砂堆上において、洪水の危険性がほとんどなかったと考えられるのである。

注

1）N値とは、63.5kgのハンマ・・を75cmの高さから落として、サンプラーを地中に30cm貫入させるのに要する打撃回数をいう。

2）筆者は、鹿ノ下遺跡の発掘調査に参加しており、本稿に掲載した土器の年代については、調査時に発掘担当者からご教示いただいたものである。

3）堂ノ後遺跡から検出された土器に関しては、その分布状況や年代を発掘担当者にご教示いただいたほか、三重県教育委員会

『三重県埋蔵文化財年報17』、1987年、P42を参照した。

4）伊勢寺遺跡と杉垣内遺跡についても、筆者は発掘調査に参加しており、本稿における土器の年代は各遺跡の発掘担当者にご教示いただいたものである。

5）三重県教育委員会『鈴神遺跡発掘調査報告書』、1986年、P3に掲載されている遺跡位置図および遺跡地名表から判断した。

6）井関弘太郎「神積層基底礫層について」、地学雑誌84－5、1975年、pp247～264

松阪市西郊の地質と岩石

三重県立津西高等学校
磯　部　　克

1．概要

本地域は三重県のほぼ中央に位置し、伊勢平野の平部で、北は一志郡嬉野町薬王寺から、南は松阪市岡山町に至る南北約24km、東西約21kmの範囲である。本地域の南部には堀坂川が東西に流れ、さらに南には、阪内川の中流域が含まれる。

周辺一帯は扇状地・段丘・山地があり、山地は、標高700m余である。扇状地及び段丘面は、標高30～100m位で、集落や田畑となっている。

本地域における地質の特徴は、西部の山地を領家帯が占め、花崗岩、花崗片麻岩、花崗閃緑岩等で構成されていることである。又、近畿自動車道の通る大阿坂町岩倉付近から北部は一志層群が分布し、貝化石を中心とした多くの動物化石が産する事である。

2．地質

本地域に分布する地質は図1に、又、近畿自動車道に沿うX—Y断面図は図2に示した。

(1)沖積層（A1）

新生代第四紀新世は、大河内町から曲(すがの)を結ぶ線より東部及び阪内川中流域に分布し、主として水田として利用されている。厚さ2～数mで、未固結の土・砂・礫から成っている。

(2)更新世堆積層・扇状地堆積物と低位段丘層(Fa)

西部の山地から流出した土砂は、山麓周辺に堆積層を形成した。現在、圃場整備がなされ、川や池周辺の露頭はブロックやセメントで塞がれ、直接観察することはほとんどできない。したがって、ボーリングのデータに頼らざるを得ない。それによると、上層部は山麓において層厚最大10m程度と考えられ、シルト・砂の中に礫が挟在し、下部には礫岩は見られない。

一方、伊勢寺町北村では、地表から18mまで固結シルトで、その下は固結シルトと砂との互層（幅2～3m）となり、深度30mまでは確認されている。丹生寺町松尾小学校では、基盤岩の深度12mまで砂礫層が堆積している。

(3)奄芸層群

○岩内口層（Msa）

鳥戸北方、岩内の丘陵東端に小規模に露出する。砂、シルトで構成され、植物の破片を含む岩層を岩内口層と呼ぶ。下位の鳥戸層とは整合である。

○鳥戸層（Cga）

この露頭は、五輪峠の新道工事中（P．点）で見られる（図3）。表土（約1m）の下約2mの間には礫層があり、その下数m間は直

地質時代			地層名		記号	地質構成及び特徴
新生代	第四紀	完新世	沖積層		A1	未固結の礫・砂・粘土 主として河川沿いに分布
		更新世	扇状地堆積層 低位段丘層		Fa	未固結の礫・砂・粘土 砂礫層を主体とし、粘土層は少ない。礫間はよく締っている。T_1層は花崗岩のクサレ礫を含む。
			高位段丘層		T_1	
	第三紀	鮮新世	奄芸層群	泥岩・砂岩互層	Msa	固結した泥・砂の細互層 薬岩を介在する。
				礫岩	Cga	φ4～64m/mのチャート礫を主体 固結度はやや悪い。
		中新世	一志層群	砂岩	Ssi	固結した砂・花崗岩質砂を主体。
				泥岩・砂岩細互層	Msi	固結した泥・砂の細互層。 火山ガラス質凝灰岩を介在する。
				泥岩	Mdi	固結した泥、部分的に貝化石を含む。
中生代	領家変成岩類		花崗岩・閃緑岩・花崗片麻岩		Gr	花崗岩質岩石、新鮮なものは硬質であるが、表層はマサ土化が進む。
					Gn	

表　松阪市西部地域層準表

径30cmのクサリ礫からなり、全体に赤褐色を呈する。この地層の下には一志層群の砂・泥岩層（Ssi）、さらにその下に泥岩層（Mdi）が堆積している。

(4)一志層群

○松尾層（Ssi・Msi）

丹生寺西方の丘陵で、鳥戸断層の両側に沿って分布する砂岩・泥岩互層を松尾層と呼ぶ。松尾層のある北部、嬉野サービスエリア付近は、青灰色でやや固結した泥岩・砂岩互層（Msi）で形成され、走向・傾斜はN35°W、40°NEである（図4）。本層では化石はほとんど見られない。

松阪市大阿坂町岩倉の固結した白色凝灰質砂岩・泥岩層（Mdi）からは、工事中に多数・多種類の動物化石と少量の植物化石が出土した（この件については化石の項で述べる）。

この地層と南部の片麻岩とは逆断層で接している。岩倉地区の自動車道のボーリングデータでは、深度3.6mまでは礫まじりの粘土で、含まれる礫は風化され軟質となっている。それ以下は、7mまでは風化され、軟質化したシルト岩となっているが、7m以下ではやや硬質となって9mまで続くが、調査はそれまでとなっている。

○櫛田層（Mdi）

木村一朗（1968）によって定義された松阪市南東方の山添を模式地とする砂岩層を櫛田層と呼ぶ。本地域では堀坂川上流の岡山町西部に分布する。上部4～5m幅で、30cm大の礫を含む層の下部に、灰白色凝灰質砂岩層が分布する。走向・傾斜は、N30°W、25°NEである。この地点では化石はほとんど見られない。恒石幸正は、松尾層下半分を櫛田層に対比し、上半部を松尾層とした。確かに北部の嬉野サービスエリア予定地の露頭と堀坂川河床とでは、固結度と粒度に若干の差が認められる（図6）。

(5)領家帯

○君ヶ野花崗閃緑岩帯

一志郡美杉村君ヶ野を模式地とする花崗閃緑岩である。本地域では、松阪市小阿坂町山見で北側の片麻岩と逆断層で接していて、南は国道166号線付近まで分布している。

等粒状組織・完晶質で表面は茶褐色であるが、新鮮な部分では淡白色をした中粒の花崗岩である。鏡下では石英が著しい波動消光を示さない。一方、石英の中に斜長石をとり込んだポイキリチック構造やミルメカイト構造が見られる。有色鉱物では黒雲母が大半で、角閃石は認められない。ジルコンや珪線石が少量認められる。全体にやや黒雲母が一定方向に並んだいわゆる片麻状構造も認められるが、この岩石は中粒花崗岩である。したがって領家帯に属するといえども、場所によってはほとんど変成してない岩石も存在する事を示すものである。荒木慶雄・北村治郎はこの岩石を含む地帯を花崗岩と報告しているが、領家帯研究グループは君ヶ野花崗閃緑岩体としている。

3．岩石各論

(1)頁岩　（図7）P_2地点

表面は黒色で一部白色脈状、又、直径数mmの塊状をなす鉱物を含む。やや片理の原形を残すが、もろくなっていることから、奄芸層群と領家帯との境界をなす断層の存在を思わせる。走向・傾斜N5°E、35～40SEの岩層をなす。

鏡下では石英が粉砕され、空洞部が生じている。これはプレパラート製作中、圧砕作用によって生じた粘土が溶食したためと思われる。ところどころに不透明部分があるが、これは鉄鉱物である。

(2)黒雲母片麻岩（図8）P_3地点

横滝寺参道の途中にその露頭があり、黒色である。黒雲母がある一定方向に並んでいることから片麻岩と分かる。花崗岩帯中に小塊、脈状を生じている。

鏡下では、黒雲母・角閃石・波動消光を示す石英及び斜長石がある。副成分鉱物では、長柱状の燐灰石を生じている。

(3)凝灰質砂岩（図9）P_4地点

一志層群の櫛田層を形成する砂岩で、灰白色細粒である。本調査期間中、堀坂川河床工事で、河床に新鮮な露頭が見られた。

鏡下では、かなり鉄鉱物が目につく。肉眼で白色と見られる部分は、白雲母である。黒雲母は折れ曲って見られ、その他斜長石・石英・少量のガラス片等で構成されている。

(4)花崗岩（図10）P_5地点

場所は堀坂橋上流で、茶褐色・中粒完晶質の花崗岩である。鏡下では、黒雲母、やや波動消光を示す

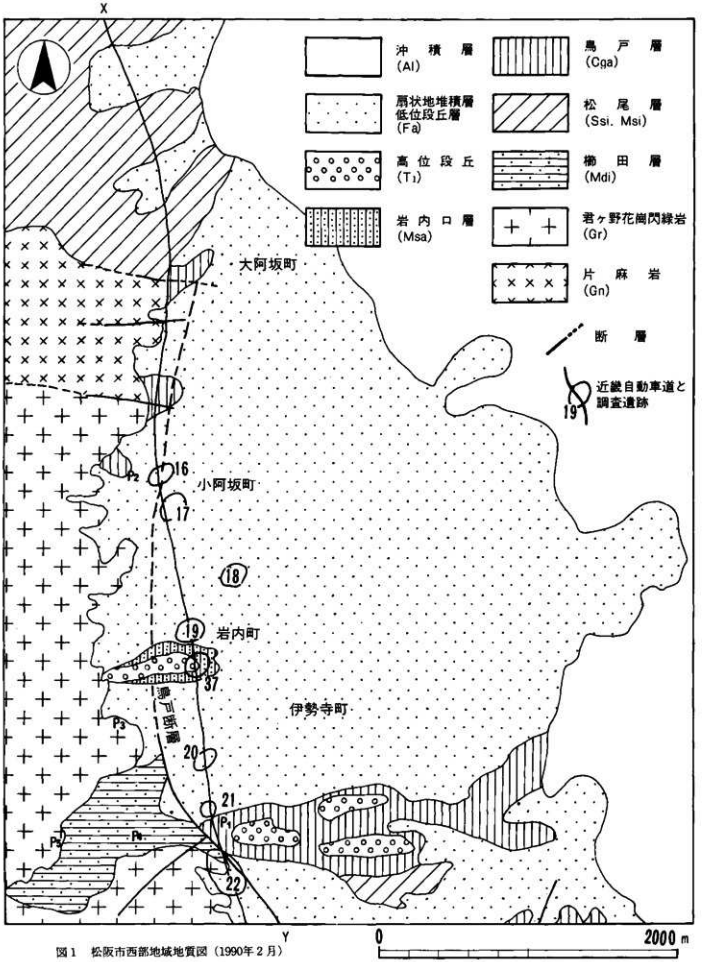


図1　松阪市西部地域地質図（1990年2月）

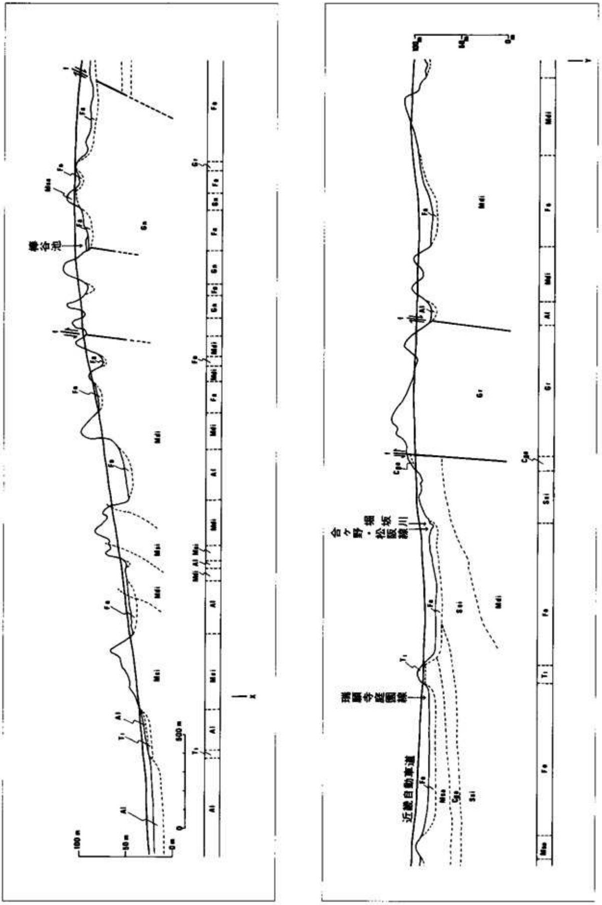


図２　近畿自動車道に沿う地質断面図（日本道路公団作成、一部筆者改変）

石英があり、この石英で大部分が構成されていることが観察される。斜長石は少なく、副成分鉱物として燐灰石が少量含まれる。有色鉱物はない。

4．化石

松阪市大阿坂町岩倉の松尾層から工事中、多量、かつ多種にわたって産出した。この件については、南平秀生、横原正之両者による「松阪市大阿坂町岩倉の海生動物化石についての調査報告」に詳しく述べられている。それによると、二枚貝類33種、ツノガイ類3種、巻貝類32種、頭足類1種、貝類以外の化石として、ウニ・エイ・サメ・カニ・ヒトデ・コケムシ・魚の骨等14種・生痕化石、陸生植物化石6種である。特に注目すべき化石は、ギンエビスガイ・ミノオームガイ・ヒタケオビガイであろう。又、サメの歯も総計60個体以上が採取された。又岡市岡本町の宅地造成地の櫛田層からも、二枚貝やフナクイムシの生痕化石が採取された（図11）。

〔註　参考文献〕

1．三重県鉱業会（1964）三重県地質鉱産図
2．帰石幸正（1970）三重県松阪市及びその周辺地域の地質構造　地震研究所報　Vol.48.P645～667
3．北村治郎・荒木慶雄（1977）松阪市の地質　松阪市史（自然編）第1巻　松阪市
4．今井敏夫（1983）近畿自動車道伊勢及び松阪一勢和地区第二次土質調査、日本道路公団名古屋建設局
5．高木秀雄（1985）紀伊半島東部粥見地域における領家帯の圧砕岩類　地質雑91－9、P637－651
6．磯部　克（1986）三重県地質図集　三重県高等学校理科研究会地学部会
7．横原正之・南平秀生（1989）松阪市大阿坂町岩倉産の海生動物化石についての調査報告

図3．　クサリ礫を含む鳥戸層―松阪市岡山町五輪峠新道（1990年1月2日撮影）

図4．松尾層、慈野サービスエリア造成地(90.1.2)

図5．逆断層による破砕帯―大阿坂町岩倉(90.1.2)

図6．櫛田層―松阪市岡山町堀坂川河床(90.1.2)

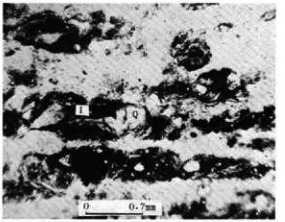


図7．頁岩、松阪市小阿坂町P_2地点（No.798）安奄芸層群鳥戸層と領家帯との境界に生じた断層による熱変質で黒色となった岩石、I：鉄鉱物、Q：石英、オープンニコル

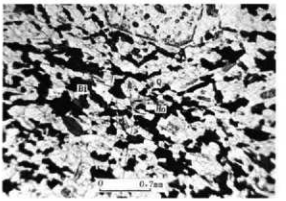


図8．黒雲母片麻岩、松阪市伊勢寺町横滝寺参道、P_3地点（No.802）Bi：黒雲母、Q：石英、Ho：角閃石　その他に斜長石で構成される。副成分鉱物として燐灰石がある。オープンニコル

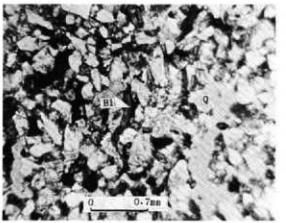


図9．凝灰質砂岩、松阪市岡山町堀坂川阿床P_4地点（No.803）、一志層群櫛田層、白く見える部分は、石英（Q）火山ガラス、白雲母である。その他折れ曲った黒雲母（Bi）がある。オープンニコル

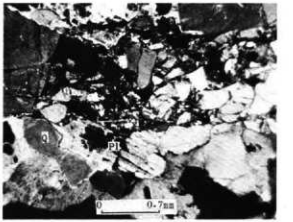


図10．花崗岩、堀坂川上流の堀坂橋付近P_5地点（No.804）、Q：石英、pl：斜長石、その他に黒雲母、燐灰石が含まれる。クロスニコルで撮影。

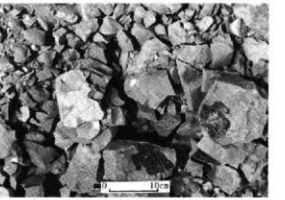


図11．植物化石と貝化石、松阪市大阿坂町岩倉、ここでは、多種、多量の動植物化石が採れた。中でもギンエビスガイ・ミノオームガイ・ヒタケオビガイサメの歯（60個体）が注目される。

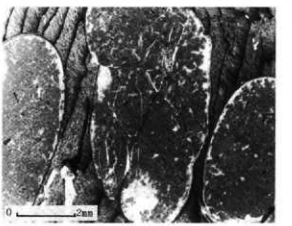


図12．ムナクイムシの生痕化石断面図（No.807）大阿坂町岩倉、樹木を食べた跡を残す写真である。楕円形の部分が食べた跡で、粘土が充填されている。又、その外側に、樹木の構造が残っていることの分る珍しい写真である。

平成2(1990)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告87-3

近畿自動車道（久居～勢和）

埋蔵文化財発掘調査報告

―― 第2分冊1 ――

1990(平成2)年3月31日

編集　三重県教育委員会
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　オリエンタル印刷株式会社